

なか の じょう い せき ぐん  
中之条遺跡群

みや うえ い せき  
宮上遺跡 I · II · III · IV



2001. 3

坂城町教育委員会

中之条遺跡群

宮上遺跡 I・II・III・IV



2001. 3

坂城町教育委員会

## 序 章

### ～過去からのメッセージ見つけたよ!!!～

平成3年から平成10年まで、断続的に坂城中学校の改築事業が行われました。工事によって大切な遺跡が壊されてしまうため、坂城町教育委員会では発掘調査を実施しました。その結果がこの報告書に書かれていますが、この章で簡単に宮上遺跡の発掘調査結果をまとめてみました。

#### ☆☆遺跡や遺物って何だろう!!

遺跡とは昔の人が住んだりした跡が残っている場所をいいます。遺跡の種類にはムラの跡（集落址）、墓（古墳時代の豪族などの墓は古墳といいます。）、田んぼの跡（水田址）などがあります。それらの遺跡から発見される土器、石器、金属器など昔の人が使ったものを遺物といいます。遺跡や遺物は当時の生活を知るために欠かせないものです。

#### ☆☆宮上遺跡ってどこ？

宮上という名前は現在の坂城中学校周辺の字の名前です。この宮上地籍に位置する遺跡ということで、宮上遺跡と名づけられています。宮上遺跡からは住居の跡などが、見つかっているため集落遺跡といえます。当時生活していた人たちは、この場所を何と呼んでいたかはわかりませんが、私たちは他の遺跡と区別するために、字名をつけ宮上遺跡と呼んでいます。

#### ☆☆発掘調査ってどうやってするの？

遺跡は地下に埋まっているために、地面の上からはどうなっているかわかりません。遺跡の調査にあたっては、発掘調査という方法で当時の様子を調べます。発掘調査の手順は、簡単にいうと次のとおりです。

- ① バックホーによって、遺跡が埋蔵されているところまで、表面の土を取り除きます。（遺跡が見つかる面より上の土を取り除きます。）
- ② 住居などがあるかどうか土の色調などの違いに注意しながら地面を削ります。（遺跡が見つかる面で行う。）
- ③ 探した住居の跡などを当時の姿（埋まる前の姿）に



バックホーで表面の土を取り除いてるところ



住居の跡を掘り下げているところ

なるように、掘り下げます。

- ④ 掘りあがったら、写真や図面などに記録を残します。
- ⑤ 他の遺構を同じように掘り、記録に残します。

## ☆☆弥生時代の住居

宮上遺跡に初めて人が住み着いたのは、弥生時代からと思われます。現在の体育館建設場所の発掘調査では、4棟の住居の跡が見つかりました。ちょうど邪馬台国の女王卑弥呼の活躍した頃と思われます。当時の住居は竪穴式住居といって、地面に穴を掘った檜円形のような住居で、炉といわれる煮炊きをする施設を持つものでした。(今回の調査を行った場所からは、4棟しか見つかりませんでしたが、他の場所にはまだこの頃の住居の跡が埋まっている可能性があります)しかし、その後の弥生時代の終わりごろの住居が見つかっていませんので、集落はその後途絶えてしまったようです。人々はどこへ移り住んでしまったのでしょうか。

## ☆☆古墳時代

	時 期	坂城町のできごと
旧石器	後 期	保地遺跡に人が現れる。
縄文	草創期 早 期 前 期 中 期 後 期 晚 期	込山C遺跡にムラができる。 保地遺跡にムラができる。
弥生	前 期 中 期 後 期	宮上遺跡に人が住み始める。 塚田遺跡にムラができる。
古墳	前 期 中 期 後 期	東平に古墳が造られる。 青木下遺跡で大きな祭りが行われる。 宮上遺跡に人が再び住み着く。
奈良		寺浦・上町・東裏遺跡にムラができる。
平安		土井ノ入窯跡で瓦が焼かれる。 込山に寺が造られる。(込山廃寺) 北日名に経筒を埋納する。(北日名経塚)

古墳時代の後期頃(聖徳太子が活躍した頃)、人々は再び戻ってきて竪穴式住居をつくって住み着きました。発掘調査をした場所の中では、この時期の住居が全部で15棟見つかりました。当時の住居の中には、カマドと呼ばれる煮炊きをする施設があり、カマドで使われた土器も見つかっています。見つかった土器の中には当時の鍋や碗にあたるものが多くありました。土器の種類では土師器や須恵器という焼き物が多く見つかっています。

## ☆☆奈良時代・平安時代

奈良や京都に都が築かれたこの時代、東国にあたる地方では、都の生活とははるかにかけ離れた生活が、送られていました。都では人々の住まいは竪穴の住居ではなく、平地の住居が出現していますが、宮上遺跡では相変わらず古墳時代の住居と同じで、カマドを持つ竪穴式住居でした。

宮上遺跡では、古墳時代からのムラが継続していたと考えて良いと思われます。この同時代では19棟の住居が見つかりました。その他として当時の倉庫として利用された掘立柱建物址と呼ばれる建物も数多く存在していました。

## ☆☆出土遺物

発掘調査の結果として、土器が多く見つかります。このことは、かなりの歳月を経ても土器は腐らないという特質の結果からです。逆に発掘調査では見つからないけれども、当時使われていたもの、当時の様子を語るもの

は多くあったと思われています。それらはすでに述べましたが、残念なことに長い歳月の間に腐ってしまうため、通常の発掘調査では見つからないことが多いです。例えば腐ってしまうものとして、竪穴住居址の柱や屋根、当時の食べ物、衣服などがあげられ、多くの種類や量があったはずです。

発掘調査の結果、見つかった土器をよく見ると、文様やかたちなどが違っているのがわかると思います。これらの違いなどから縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器などに分類されています。土師器とは弥生土器の系譜上にある素焼きの土器で、約800°Cの低温で焼かれたものといわれています。色調は赤褐色をしています。須恵器は古墳時代に大陸から伝わってきた窯を使って焼かれた焼き物で、約1,000°C以上の温度で焼かれているため、灰色をしているものが多いといえます。これらの特徴から判断して、宮上遺跡で見つかった土器は、弥生時代から平安時代のものといえます。その中のほとんどは住居が多く造られた古墳時代から平安時代の頃のものといえます。



古墳時代の土器



奈良・平安時代の土器

### ☆☆これってな～に？

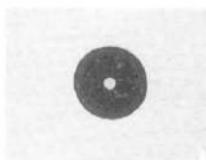
珍しい形をした円筒形土製品と呼ばれるものが発掘調査によって見つかりました。この土製品は、竪穴式住居のカマドから多く見つかっていることから、カマドを造るために使われたものと思われます。しかし、この土製品は、初めからカマド用に造られたのか、何か別の物として使われていたものを再利用したものなのか、まだよくわかつていません。坂城町内では宮上遺跡を中心とした中之条遺跡群内からいくつか出土していますが、長野県内を見るとどの遺跡からでも見つかるものではなく、長野市、更埴市の遺跡から少し見つかっているくらいで、非常に珍しいものなのです。県外を見ると山梨県や東京都、栃木県などからも見つかり、遠くは青森県でも見つかっています。当時、このような地域とどのような関係（交流関係など）があったのかよくわからないのですが、今後の研究が楽しみな土製品といえます。

### ☆☆石製紡錘車

当時の生活を語るものとして石で造られた紡錘車があります。これは糸を紡ぐための道具です。P229という小さい柱穴から出土したものは蛇紋岩と思われる石を加工して造っています。重さは129.9グラムです。



宮上遺跡出土の円筒形土製品



石製紡錘車

# 序

坂城町教育委員会教育長 大橋 幸文

宮上遺跡は、坂城中学校の所在地である。坂城中学校は、平成3年（1991）から平成10年（1998）にかけて全面改築された。本書は改築に先立って実施された宮上遺跡発掘調査の報告書である。

発掘調査は、森嶋稔先生を調査団長に開始された。森嶋先生は、平成8年（1996）6月に急逝されたが、宮上遺跡の最初の調査報告書である「中之条遺跡群宮上遺跡Ⅱ」は、森嶋先生の指導のもとに平成5年（1993）3月に刊行された。報告書のあとがきで、森嶋先生は、「宮上遺跡は、かつて未調査のまま中学校が建築されてしまった。時代が文化財に対する認識を欠いていたからである。今日はせめてもの処置として緊急発掘調査による記録保存が義務づけられている。その結果、坂城中学校敷地内である宮上遺跡は、古墳時代末期から奈良・平安時代に及ぶ集落遺跡であることが判明した。坂城町の中学生はその古代の集落遺跡の上で、毎日勉学しているのである。その歴史の重みを、人々の足音と共に肌で感じてほしいと願わざにはおれない。」と述べている。

この森嶋先生のあつい思いをこれからも坂城中学校に学ぶすべての生徒に伝えたいと思う。この報告書がその一助となるべく、中学生にも理解され、考古学への関心を深めてもらうために「序章～過去からのメッセージ見つけたよ!!～」がおかれた。

序章で明らかのように宮上遺跡は、弥生・古墳・奈良・平安時代に及ぶ集落遺跡であり、その規模からして坂城の中心とも考えられそうな重要な遺跡である。それにもかかわらず、発掘調査は、数回にわたって実施されたが、いずれも工事着工までの短期間に余儀なくなされた。しかし調査にあたられた皆様の熱意と努力によって報告書にみるような成果を上げてもらうことができた。改めてその労苦に感謝申し上げたい。

宮上遺跡の上に立地している坂城中学校は、昭和35年（1960）旧中之条・坂城・村上の三中学校を統合し開校された。30余年の歳月を経て全面改築された今の坂城中学校は、38億円余の巨費が投げられている。平成13年（2001）3月の卒業式までの卒業生は、10,667人すでに1万人を越えた。

この報告書は、坂城中学校の足下の大地に埋もれている先人の営みを語り、悠久の歴史の重みに思いを寄せるよすがとなってくれるものと思う。

平成13年3月

## 例　　言

1 本書は、長野県埴科郡坂城町における坂城町立坂城中学校改築事業に伴って実施された埋蔵文化財発掘調査の報告書である。発掘調査は下記の4年次において実施され、本書が最終的な本報告となる。

2 発掘調査は、坂城町教育委員会が実施した。

3 発掘調査所在地

　長野県埴科郡坂城町大字中之条921-1他

4 発掘調査期間と調査面積

宮上遺跡 I	現地調査	平成3年8月20日～8月31日	952m <sup>2</sup>
宮上遺跡 II	現地調査	平成4年6月2日～9月4日	2,460m <sup>2</sup>
宮上遺跡 III	現地調査	平成7年6月19日～12月15日	2,597m <sup>2</sup>
宮上遺跡 IV	現地調査	平成9年4月21日～7月2日	706m <sup>2</sup>
	現地調査	平成9年9月25日～10月2日	69m <sup>2</sup>
			合計6,784m <sup>2</sup>

整理作業は、他遺跡の発掘調査等の諸事情により、断続的に実施した。

5 本書の執筆・編集は、塙入秀敏調査指導者の指導の下、助川が行い荻野がこれを補助した。

6 本書の作成にあたり助川のほか齋藤、荻野、天田、塙田が主な作業を行った。

7 本書及び調査に関する資料は、坂城町教育委員会の責任下において保管されている。

8 本調査及び本書作成にあたって、下記の方や機関からご配意を得た。記して感謝の意を表したい。(敬称略、50音順)

青木一男、青木正洋、赤松 茂、今福利恵、飯島哲也、上原 学、白田武正、尾見智志、川上 元、

児玉卓文、小林真寿、小山岳夫、坂本美夫、佐藤信之、坂井美嗣、新谷和孝、須藤隆司、瀬田正明、

竹原 学、堤 隆、直井雅尚、西山克己、羽毛田卓也、林 幸彦、福島邦男、三石宗一、翠川泰弘、

宮下健司、矢口忠良、矢島宏雄、和根崎 剛、(社)更埴地域シルバー人材センター、長野市埋蔵文化財

センター、松本市教育委員会、山梨県立考古学博物館、山梨県埋蔵文化財センター

なお、坂城中学校からは、埋蔵文化財の重要性についてご理解いただき、格段のご配慮をいただいた。

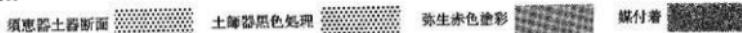
## 凡　　例

- 1 遺構の略号は、下記のとおりである。  
H→堅穴住居址 D→土坑址 F→掘立柱建物址 P→ピット M→溝状遺構
- 2 遺構名は時代別ではなく、発掘調査時においての命名順である。
- 3 掘図の縮尺は、下記を基本としたが、縮尺の異なるものもあるため、各図ごとに縮尺を明記した。  
堅穴住居址・掘立柱建物址・土坑址・溝状遺構→1/80 カマド→1/40  
遺構配置図→1/800 土器→1/4
- 4 掘図中におけるスクリーントーンは、下記を示す。

### 1) 遺構



### 2) 遺物



- 5 遺物の掲図中の表記のしかたは、第1図1は、簡易的に1-1とした。
- 6 上層及び土器の胎土の色調は、『新版 標準土色帖』の表記に基づいて記載した。
- 7 土器の観察表は本文の後に掲載し、法量は、口径・底径・器高の順に記載し、一は不明、( ) が残存値、< >が推定値、( ) がない場合は、完存値を示している。単位はcmである。

## 目 次

### 序章・序・例言・凡例

第Ⅰ章 発掘調査の経緯	1
第1節 発掘調査に至る動機と経緯	1
第2節 調査の構成	2
第3節 調査日誌	3
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 坂城町の歴史的環境	4
第3節 周辺遺跡の概要	8
第Ⅲ章 調査の概要	12
第1節 調査の方法	12
第2節 基本層序	12
第Ⅳ章 調査の結果	14
第1節 弥生時代の遺構・遺物	14
1 竪穴住居址	14
2 その他の遺物	19
第2節 古墳時代後期の遺構・遺物	19
1 竪穴住居址	19
2 七坑址	44
3 溝状遺構	46
第3節 奈良・平安時代の遺構・遺物	48
1 竪穴住居址	48
第4節 掘立柱建物址	74
第5節 土坑址	85
第6節 溝状遺構	89
第7節 ピット及び遺構外等の出土遺物	91
第8節 試掘調査出土遺物	91
第Ⅴ章 総括	95
第1節 宮上遺跡の出土土器と遺構について	95
第2節 円筒形土製品から見えること	97
第3節 煙の付着した須恵器高台付坏について	101
出土遺物観察表	
写真図版	
あとがき	
報告書抄録	

# 第Ⅰ章 発掘調査の経緯

## 第1節 発掘調査に至る動機と経緯

中之条遺跡群は、坂城町中之条に所在し、標高408~458mを測る御堂川によって形成された扇状地の扇央部に位置する。平成元年度に作成された『坂城町遺跡分布図』によると、绳文~平安時代の複合遺跡とされている。隣接する北浦遺跡では昭和48年の学校給食センター建設工事に伴って、竪穴住居址が2棟検出され、集落址であることが判明しており、周辺に該期の集落址が展開していることは十分予想されていた。

平成3年度、坂城町教育委員会学校教育課が行う坂城中学校改築事業が計画され、遺跡の破壊が余儀なくされることとなり、長野県教育委員会文化課、地元研究者の森崎稔氏、坂城町教育委員会学校教育課、社会教育課の4者による保護協議が行われた。対象地はかつての中学校建設によって、削平を受けていた事もあり、遺跡がどのような状況か不明であったため、遺跡状況を把握するための試掘調査が必要であると判断され、同年7月に試掘調査が行われた。調査の結果、建設予定地は一部破壊を受けてはいたけれども、集落址であることが判明した。再度の保護協議の結果、校舎建設に係る事前発掘調査が必要になった。計画では建設のための工事着手が迫っていたため、急速緊急に発掘調査を行うこととなった。調査体制は、平成6年度の発掘調査までは森崎稔氏を調査団長とする調査団組織で行っていたが、平成7年度から調査の主体は坂城町教育委員会直営となった。

本遺跡は遺跡分布図では中之条遺跡群と総称されていたが、平成3年度の調査結果から遺跡名を新しく宮上遺跡と命名した。なお建設工事は、平成3・4・8・10年度に着手する計画であったため、発掘調査も平成3・4・7・9年度といった4年次にわたって実施された。遺跡については平成3年度に実施された部分を宮上遺跡Iとし、4年度実施が宮上遺跡II、7年度実施が宮上遺跡III、9年度実施が宮上遺跡IVとした。整理作業については他の遺跡の発掘調査が優先されたため、他遺跡の発掘調査の間をぬいながらの断続的なものであった。



第1図 宮上遺跡位置図 (1 : 25,000)

## 第2節 調査の構成

### 発掘調査体制

団長（指導者）森嶋 稔（日本考古学協会会員、千曲川水系古代文化研究所主幹、平成8年6月16日逝去）  
調査指導者 塩入 秀敏（上田女子短期大学教授、日本考古学協会会員、平成9年4月～）  
担当者 助川 朋広（坂城町教育委員会学芸員）  
調査補助員 小平 光一（坂城町教育委員会学芸員、平成4年～9年）  
調査協力者 郡山雅友、小宮山愛子、春原かずい、寺沢政枝、中村久子、萩野れい子、菱田よしえ、官尾美代子（以上、町臨時職員）  
青木 清、浅井重登、朝倉三郎、阿野道生、五十嵐信男、飯島みね子、石井和美、伊藤 篤、池田輝昭、池田てる子、上野かず江、窪田盛次、栗林初恵、小林さよ子、小林久寛、小宮山昭吾、塙入孝次、島谷 久、清水よ志、諏訪孝雄、高橋幸世、竹内清志、竹内 達、竹鼻茂、竹前夏代、達家みきえ、田中 勲、玉井三夫、塙田智子、塙田良子、富山義昭、中島勘三、中島金子、中島千津子、中村さつき、中村正成、中村光栄、中村容民、西沢茂五郎、西沢光代、西沢善人、日向正義、古畑真一、松本よし子、山崎貞子、山城嘉雄、柳沢歎夫、柳沢良子、横江豊子、矢島岩太郎（以上、更埴地域シルバー人材センター）  
長谷川和幸、渡辺照夫（以上、当時高校生）

### 整理調査体制

調査指導者 塩入 秀敏（前 出）  
調査担当者 助川 朋広（前 出）  
調査主任 斎藤 達也（坂城町教育委員会学芸員）  
調査補助員 朝倉妙子、天田澄子、大谷恵子、片桐はまよ、久保田和江、小宮山秀子、西東千佳子、坂巻ケン子、佐藤昭子、塙野入早苗、鈴木洋子、春原かずい、関 亨、塙田さゆり、中村久子、中村優子、萩野れい子、官尾美代子、宮川千栄子、宮島珠子（以上、町臨時職員）  
調査協力者 朝倉美栄子、石井和美、伊藤篤、上野かず江、白井かね、大柴はつい、小島光子、小林さよ子、小林澄江、小林 巴、達家みきえ、塙田智子、中島千津子、羽毛田とし子、丸橋智子、三井重子、山崎貞子、山辺ケサエ、宮入梅子（以上、更埴地域シルバー人材センター）

### （事務局）

教育長 烏田 雅男（平成5年6月退任）、西沢 民雄（平成5年7月～平成9年6月）  
大橋 幸文（平成9年7月～）  
教育次長 宮原 健一（平成11年7月～、生涯学習課長兼務）  
社会教育課長 塙野入 猛（平成3年～平成9年3月）  
生涯学習課長 赤池 利博（平成9年4月～平成11年6月）  
社会教育係長 宮下 和久（平成3年～平成4年3月31日）  
文化財係長 山崎 政弘（平成4年4月～平成7年3月）、小宮山久春（平成7年4月～平成8年3月）  
青木 昌也（平成8年4月～平成9年3月）、池田美智康（平成9年4月～平成12年3月）

池田 弥惣（平成12年4月～）  
社会教育係 竹内 剛、竹内 穎夫、助川 朋広、北沢 明（平成3年）  
文化財係 助川 朋広（平成4年4月～）、小平 光一（平成4年4月～平成9年）  
斎藤 達也（平成11年4月～）

### 第3節 調査日誌

#### （平成3年度 現地調査）

8月20日 G・H地区の表土剥ぎを開始する。  
8月24日 H地区の遺構検出を開始する。  
8月25日 H地区D1・2の調査を開始する。

8月26日 G地区の自然流路検出を開始する。  
8月27日 G地区の自然流路掘り下げを実施する。  
8月30日 本日をもって、現地調査を終了する。

#### （平成4年度 現地調査）

6月2日 A地区の表土剥ぎを行う。  
6月9日 調査開始式を行う。  
6月15日 大まかな遺構の検出作業を実施する。  
6月26日 住居址の検出作業を実施する。  
7月17日 H1号住居址の掘り下げを開始する。

7月31日 A区埋め戻し開始する。  
8月10日 H8・9号住居址の掘り下げ作業を実施する。  
8月18日 H12・13号住居址の掘り下げ作業を実施する。  
8月28日 H16号住居址の調査を開始する。  
9月4日 本日をもって、現地調査を終了する。

9月25・26日に行われた坂城中学校文化祭（大峰祭）に出土遺物の展示を行い、生徒及び職員、保護者への公開をした。

#### （平成7年度 現地調査）

6月19日 C地区の表土剥ぎを開始する。  
6月22日 C地区の検出作業を開始する。  
6月29日 H18号住居址調査を開始する。  
7月11日 H17・18・19号住居址調査。  
8月10日 C地区航空写真の撮影を行う。  
8月11日 C地区的調査を終了する。  
8月17日 D地区的表土剥ぎを開始する。  
8月23日 検出面が深く土量が多いため、重機の台数を増し表土剥ぎを継続する。

8月30日 協力者を加え検出作業を開始する。  
9月1日 弥生時代の住居址があることが判明する。  
9月27日 ほぼ遺構の検出が終了する。  
9月29日 H23・25・27号住居址掘り下げを実施する。  
10月4日 F4号掘立柱建物の調査を開始する。  
10月13日 Y1号住居址の掘り下げを開始する。  
11月7日 H27・29号住居址の掘り下げを開始する。  
12月15日 本日D地区的航空写真撮影を行う。機材搬出し、本日をもって現地調査を終了する。

11月12日に現地説明会を行い、発掘調査の成果を公開した。

#### （平成9年度 現地調査）

4月21日 E地区的表土剥ぎを開始する。  
4月28日 E地区的遺構調査開始する。  
6月30日 E地区的調査を終了する。

9月24日 F地区的表土剥ぎを開始する。  
9月25日 F地区的調査を開始する。  
10月2日 本日をもって、現地調査を終了する。

## 第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

### 第1節 地理的環境

坂城町は、北信濃と東信濃の接觸点にあたり、善光寺平を構成する更埴地方の最南端に位置している。坂城町は、県の東部から北流する千曲川によって右岸地域と左岸地域とに分断されている。この千曲川は、坂城広谷と呼ばれる冲積地を形成し、町の中央部を流れ、戸倉町、上山田町の冲積地へと続いている。

坂城町の地形を見ると、南では、両岩鼻が千曲川断層面の岩壁となり、東では、太郎山、鏡台山などの山稜が、上田市、真田町、更埴市の市町村界となっている。北では五里ヶ峰から葛尾山、横吹きと自在山の岩壁がネック状となり、屏風のように連なっている。西では、大林山を主峰とする山稜が連続し、上田、上山田との市町村界となって、一地域を構成している。

地理的構造は、右岸地域と左岸地域では様相が異なり、左岸地域の村上地区は千曲川断層面の切り立った岩壁と小さな沢や岩錐による複合扇状地と千曲川沿いの冲積地に構成されている。千曲川右岸に位置する坂城・中之条・南条地区は摺り鉢状の盆地形をなす千曲川の独立した空間で、広谷状をなし、西南する広い斜面と、いくつかの小河川や沢によって形成された複合扇状地と千曲川沿いの冲積地となっている。また、坂城町は隣接する上田市域と同様に、中央高原型の内陸盆地性の気候で、年間を通じて降水量が最も少ない地域である。

宮上遺跡は、坂城町の千曲川右岸に位置する中之条地区に所在し、御堂川によって形成された標高440mを測る扇状地の扇央部付近の堆積斜面に位置している。遺跡の西側には、近世の官道であった北国街道によって形成・発達した集落域が存在している。この地域は現在でも宅地化が進んでいる地域である。

### 第2節 坂城町の歴史的環境

坂城町の自然堤防や小河川によって形成された複合扇状地には、いくつもの遺跡が存在し、遺跡の性格も多種多様である。ここでは、坂城町の歴史的環境を時代ごとに概観することにしたい。

縄文時代の遺跡では、発掘調査例が少なく詳細に欠けるところが多い。『坂城町誌』では込山B遺跡(30-1)から採集された押型文や諸穢系の土器が掲載されている。込山C遺跡(30-3、註1)からは、諸穢系の土器が出土し、当町で初めて該期の住居址が検出された。この込山C遺跡は、晩期の遮光器土偶の採集された込山D遺跡に隣接しており、これを統括する込山遺跡群は、今後の調査に期待される遺跡である。

南条地区の保地遺跡では、縄文時代の後期～晩期の土器が出土しており、晩期前半の一括遺物の出土によって注目を集めた遺跡である。(註2) この保地遺跡の隣接地で行われた発掘調査では、後期に所属すると思われる土壙が検出され、多数の頭蓋骨の二次埋葬が行われたことが看取された(註3)。また、一次調査同様に多量の晩期の土器の出土等重要な所見が得られている。

縄文時代同様に弥生時代の遺跡も発掘調査例が少ないのであるが、坂城地区の込山B・C遺跡から、中期の栗林式に所属する甕形土器が出土し(註4)、今後の調査に期待されている。後期後半の集落としては、南条地区的塙田遺跡II(1-5)があげられ、北陸系土器や樽式土器の出土もあった。また、多数の石包丁の出土があって、周辺に該期の水田址の存在が予想される遺跡もある。遺跡の立地は、千曲川の中洲あるいは自然堤防上の集落



古跡番号	道 路 名	種 別	時 代
1	南条通御跡 東夷通御	御道社	卯生~平安
-1	南条通御跡 東夷通御(延長)	御道社	卯生~平安
-2	南条通御跡 北一ノ通御(延長)	御道社	卯生~平安
-3	南条通御跡 中山通御(延長)	御道社	卯生~平安
-4	南条通御跡 田原通御	御道社	卯生~平安
-5	南条通御跡 田原口(延長)	御道社	卯生~平安
-6	南条通御跡 田原口(延長)	御道社	卯生~平安
-7	南条通御跡 遠賀通御(延長)	御道社	卯生~平安
-8	南条通御跡 遠賀通御(延長)	御道社	卯生~平安
2	今井西通御跡	御道社	卯生~平安
-1	今井西通御跡 今井東通御	御道社	卯生~平安
-2	今井西通御跡 今井東通御(全井戸跡)	御道社	卯生~平安
3	今井東通御跡(佐賀御道)	御道社	卯生~平安
-1	今井東通御跡(佐賀御道)	御道社	卯生~平安
-2	今井東通御跡 山全通御	御道社	卯生~平安
-3	今井東通御跡(南条小学校北側)	御道社	卯生~平安
4	豊ノ谷通御跡	古 塚	古 墓
5	日笠神通御跡	蛭 壁	中世
6	阿比尾通御跡	前 古 塚	卯生~平安
7	北山古墳	古 塚	(古墳)
8	北山古墳	古 塚	(古墳)
-1	北山古墳群 中山通御	古 塚	卯生~平安
-2	北山古墳群 上町通御	古 塚	卯生~平安
-3	北山古墳群 東河通御	古 塚	卯生~平安
-4	中之条通御跡 北浦通御	古 塚	卯生~平安
-5	中之条通御跡 宮上通御	古 塚	卯生~平安
9	中之条通御跡(第六川跡)	古 塚	(古墳)
10	日笠古墳群	古 塚	(古墳)
-1	日笠古墳群 入鹿度古村 向田古墳	古 塚	古 墓
-2	日笠古墳群 入鹿度古村 萩原古墳	古 塚	(古墳)
11	人林通御跡	前 古 塚	平安
12	野川古墳群 上野古墳	古 塚	(古墳)
13	野川古墳群 野川古墳	古 塚	中世~近世
14	野川古墳群 山口古墳	古 塚	(古墳)
15	山通御跡	前 古 塚	平安
16	御室川通御跡 山崎古村	古 塚	(古墳)
17	御室川通御跡 前山古村	古 塚	(古墳)
-1	御室川通御跡 前山古村	古 塚	(古墳)
-2	御室川通御跡 前山古村	古 塚	(古墳)
-3	御室川通御跡 前山古村	古 塚	(古墳)
-4	御室川通御跡 前山古村	古 塚	(古墳)
-5	御室川通御跡 前山古村	古 塚	(古墳)
-6	御室川通御跡 前山古村	古 塚	(古墳)
-7	御室川通御跡 前山古村	古 塚	(古墳)
-8	御室川通御跡 前山古村	古 塚	(古墳)
-9	御室川通御跡 前山古村	古 塚	(古墳)
-10	御室川通御跡 前山古村	古 塚	(古墳)
-11	御室川通御跡 前山古村	古 塚	(古墳)
-12	御室川通御跡 前山古村	古 塚	(古墳)
-13	御室川通御跡 前山古村	古 塚	(古墳)
-14	御室川通御跡 前山古村	古 塚	(古墳)
18	御室川通御跡 寺子古村 二郎古村	古 塚	(古墳)
19	御室川通御跡 山田古村	古 塚	(古墳)
20	自衛隊駐屯地(山田北側)	施 澄	卯生~平安
21	人原古墳	古 塚	(古墳)
22	人原古墳	古 塚	(古墳)
23	向ノ坂通御跡	御道社	卯生~平安
24	戌久通御跡	御道社	卯生~平安
25	人原通御跡	御道社	卯生~平安
27	金社通御跡(延長古跡)	古 塚	(古墳)
28	五丁村役場	蛭 壁	中世
29	院の原通御跡	宝 鋏	平安
30	山込通御跡	御道社	卯生~平安
-1	山込通御跡 站山古通御(水上)	御道社	卯生~平安
-2	山込通御跡 站山古通御(陸上)	御道社	卯生~平安
-3	山込通御跡 山口古通御(山口)	御道社	卯生~平安
-4	山込通御跡 山口古通御(延長)	御道社	卯生~平安
-5	山込通御跡 山口古通御(立野)	御道社	卯生~平安
31	日名沢通御跡	御道社	卯生~平安
-1	日名沢通御跡 日名沢通	御道社	卯生~平安
-2	日名沢通御跡 先山通御	御道社	卯生~平安
32	土井ノ入葉跡	宝 鋏	卯生~平安
33	牛平通御跡	前 古 塚	平安
34	城外御跡	寶 鋏	平安
35	平沢通御跡	御道社	卯生~平安
36	千代通御跡(手入通御)	御道社	卯生~平安
-1	千代通御跡 千代口通御	御道社	卯生~平安
-2	和平通御跡 平和口通御	御道社	卯生~平安
-3	和平通御跡 平和口通御	御道社	卯生~平安
37	金比羅山古墳	吉 墓	古墳(後期)
38	村上通御跡	城跡	中世
39	風の原通御跡	御道社	卯生~平安
40	風の原通御跡	宝 鋏	平安
41	白日名古通御跡	吉 墓	古墳(後期)
-1	白日名古通御跡(白日名古通)	吉 墓	古墳(後期)
42	梅ノ木通御跡	御道社	卯生(後期)
43	裏山古墳	寶 鋏	平安
44	越前通御跡	城跡	中世
45	出浜古墳群 出浜支谷5号墳	古 墓	古墳(後期)
-1	出浜古墳群 出浜支谷5号墳	古 墓	古墳(後期)
-2	出浜古墳群 出浜支谷7号墳	古 墓	古墳(後期)
-3	出浜古墳群 出浜支谷9号墳	古 墓	古墳(後期)
-4	出浜古墳群 出浜支谷49号墳	古 墓	古墳(後期)
-5	出浜古墳群 出浜支谷59号墳	古 墓	古墳(後期)
-6	出浜古墳群 直瀬1号古墳	古 墓	古墳(後期)
-7	出浜古墳群 直瀬2号古墳	古 墓	古墳(後期)
46	鳥道跡	墓地	卯生~平安
47	鶴丸山城跡	吉 墓	古墳(後期)
-1	鶴丸山城跡 小野天皇1号塚(御殿社古墳)	吉 墓	古墳(後期)
-2	鶴丸山城跡 小野天皇2号塚	吉 墓	古墳(後期)
-3	鶴丸山城跡 小野天皇3号塚(ヤッカ古墳)	吉 墓	古墳(後期)
-4	鶴丸山城跡 小野天皇4号塚	吉 墓	古墳(後期)
48	小野天皇塚	墓地	卯生~平安
49	鶴丸山城跡 桂林支群	古 墓	古墳(後期)
50	鶴丸山城跡 桂林支群	古 墓	古墳(後期)
51	民謡歌跡	城跡	中世
52	三木通御跡	城跡	中世
53	御殿社跡	御道社	卯生~平安
54	鶴丸山古墳	墓地	中世
55	栗原ノ原古墳	蛭 壁	中世
56	栗原ノ原古墳	御道社	御道跡
57	芝之原通御跡	御道社	卯生~平安
58	南日古通御跡	墓地	卯生~平安
59	葛原御跡(御殿跡)	城跡	中世
60	御殿跡	御道社	卯生~平安
61	鶴丸山古墳	墓地	中世
62	御所御跡	御道社	卯生~平安
63	御所大通御跡	城跡	中世
64	御平御跡	宝 鋏	平安
65	中之石古墳跡	御道跡	卯生~平安
66	経洋館跡	吉 墓	古墳(後期)
67	御殿跡	御道跡	中世
68	板宿跡	宝 鋏	平安
69	板宿跡	宝 鋏	平安
70	鹿の岡御跡(若叶寺古跡)	御道跡	卯生~中世
71	口御所御跡	城跡	近世
72	金城通御跡	城跡	中世
73	金ノ子御跡	御道社	中世
74	御殿跡	御道社	中世
75	御見方御跡(御見所跡)	御道跡	近世
76	御宿跡	御道社	平安
77	出浜御跡	城跡	中世
78	上五味呂多永水田社	墓地	平安~近世
79	自衛隊駐屯地	墓地	西文~平安
80	御殿跡	御道社	中世
81	御所御跡	御道社	中世
82	小野次家跡	家 障	卯生~平安
83	御所御跡	吉 墓	古墳(後期)
-1	鶴丸山城跡 五枝支村1号塚	吉 墓	古墳(後期)
-2	鶴丸山城跡 五枝支村3号塚	吉 墓	古墳(後期)
84	御殿跡	墓地	卯生~平安
85	御所古通御跡	墓地	西文~平安
86	望天跡	望天跡	卯生~平安
87	自賀御跡(御見所跡)	御道跡	近世
88	自マングル桂園跡	御道跡	近世
89	上平御跡(御見所跡)	御道跡	近世
90	横櫛北園御跡	御道跡	近世

址といえる。

古墳時代の遺跡としては、近年の発掘調査によって古墳や集落址等が徐々に明らかになりつつある。古墳としては、当町では後期古墳が大半を占めるわけではあるが、近年の発掘調査結果から中期に位置づけられるものとして中之条地区の仮称東平1・2号墳が注目されている（註5）。多数を占める後期古墳の中では、中之条地区的御堂川古墳群前山支群（17）、南条地区的谷川古墳群（10）、村上地区的出浦沢古墳群（45）福沢古墳群などがあげられる。福沢古墳群に統括される御厨社古墳（47-1）は、石室の規模が千曲川流域で最大といわれている。これらの古墳分布は、「坂城町遺跡分布図」から河川沿いに立地していること、坂城地区には古墳が少ないとなどが看取される。

集落址では、本遺跡を総括する中之条遺跡群内に多数検出されていることが、近年の発掘調査の結果判明してきている。（註6）他地域では南条地区で、東裏遺跡（1-1）に集落址が検出されている。この東裏遺跡と隣接する青木下遺跡（1-8）は、祭祀的な性格の遺跡であって、環状に配列された土器群の検出は全国に例を見ない遺構として、注目された遺跡である。（註7）

奈良時代の集落址としてはあまり例がないが、本遺跡や周辺の遺跡内での検出がある。中之条地区的上町遺跡IV（8-2）からは、奈良二彩（三彩）の薬壺の蓋が出土しており、注目されるものである。（註8）生産遺跡としては、坂城地区的土井ノ入窯跡（32）があげられ、南面する斜面や西南する斜面において須恵器生産が、操業されていたと考えられている。

平安時代の遺跡では、9世紀初頭の寺院址と考えられている坂城地区的込山廃寺（54）、土井ノ入窯跡（32）の瓦窯があげられる。土井ノ入窯跡で生産された瓦は、先述の込山廃寺、上田市の信濃国分寺・尼寺や更埴市正法廃寺の補修用の差し瓦として使用されたことが明らかとなっている。他に宗教的な遺跡として、11世紀末に位置づけられる坂城地区的北日名経塚（40）があり、銅鏡製の経筒、和鏡、白磁輪花小皿などが出土している。現在これらの遺物は、東京国立博物館に保管されている。集落址としては、南条地区的東裏遺跡（1-1）や、本遺跡、上町遺跡、寺浦遺跡などの周辺遺跡に散見される。

中世では、嘉保1（1094）年信濃国更級郡に配流された源盛清が始祖と考えられている、村上氏が国人領主として成長し、戦国時代には武将村上義清が活躍している。この村上義清は唯一武田信玄を二度打ち破った武将といわれている。その村上氏の居城が葛尾山頂に位置する葛尾城跡（44）で、その下方に位置する現在満泉寺の所在する一帯が、村上氏館跡（38）である。葛尾城は、天文22（1553）年に武田信玄の攻略により落城したと伝えられ、現存していない。満泉寺は、天正10（1582）年村上義清の子である景国により、村上氏の先祖代々の菩提寺として建立されたと伝えられている。

昭和52・53年に発掘調査された中之条地区的開創製鉄遺跡（53）は、長野県内最初の製鉄遺跡の学術調査と歴史づけられるものであった。発掘調査の結果、製鉄炉址2基が検出され、炉内の木炭の放射性炭素年代測定結果及び出土遺物を参考にした結果、16世紀頃の戦国時代末期と位置づけられた。戦国時代末期の風潮として、鉄の自給生産の必要性が認められ、この結果当時は、鉄生産が行われたのではないかと示唆されている。

近世では北国街道（90）の制定により、坂木宿が宿駅として発展した。元和8（1622）年坂木・中之条村は幕府の直轄地である天領となり、重要な場所と位置づけられた。当初は坂木陣屋が置かれていたが、宝暦9（1759）年に中野陣屋に移り、安永8（1779）年中之条に陣屋が設置されたとされている。現在中之条陣屋や坂木陣屋については、建物等が残存せず、中之条陣屋については井戸が現存しているのみである。これらの詳細については、発掘調査も実施されていない状況のため、不明なところが多い。

以上簡単ではあるが、中之条地区的遺跡と歴史についてふれたわけであるが、古墳時代以降本遺跡周辺は、集

落が展開し、重要な位置を占めてきた状況が見てとれる。

#### 註

- 1 平成12年度発掘調査を実施。現在整理中。
- 2 1966 関 孝・『考古学雑誌』第51巻第3号「長野県埴科郡保地遺跡発掘調査概報」
- 3 平成11年度発掘調査を実施。現在整理中。
- 4 平成11年度込山B遺跡発掘調査を実施。現在整理中。平成12年度込山C遺跡Ⅱの調査で出土。
- 5 東平1・2号墳は、上信越自動車道路の建設に伴い、(財)長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われた。当時周知の御堂川古墳群東平支群1・2号墳と異なる可能性があったため、発掘調査報告書では、仮称東平1・2号墳として報告された。今後詳細な現地踏査を実施し、遺跡の名称を検討し、確定する必要がある。
- 6 第3節参照。
- 7 平成8年度発掘調査実施。現在整理中。
- 1997 助川 朋広『祭祀考古』第8号「長野県埴科郡板城町青木下遺跡Ⅱの祭祀遺構」
- 8 平成11年度発掘調査を実施。現在未整理。

### 第3節 周辺遺跡の概要

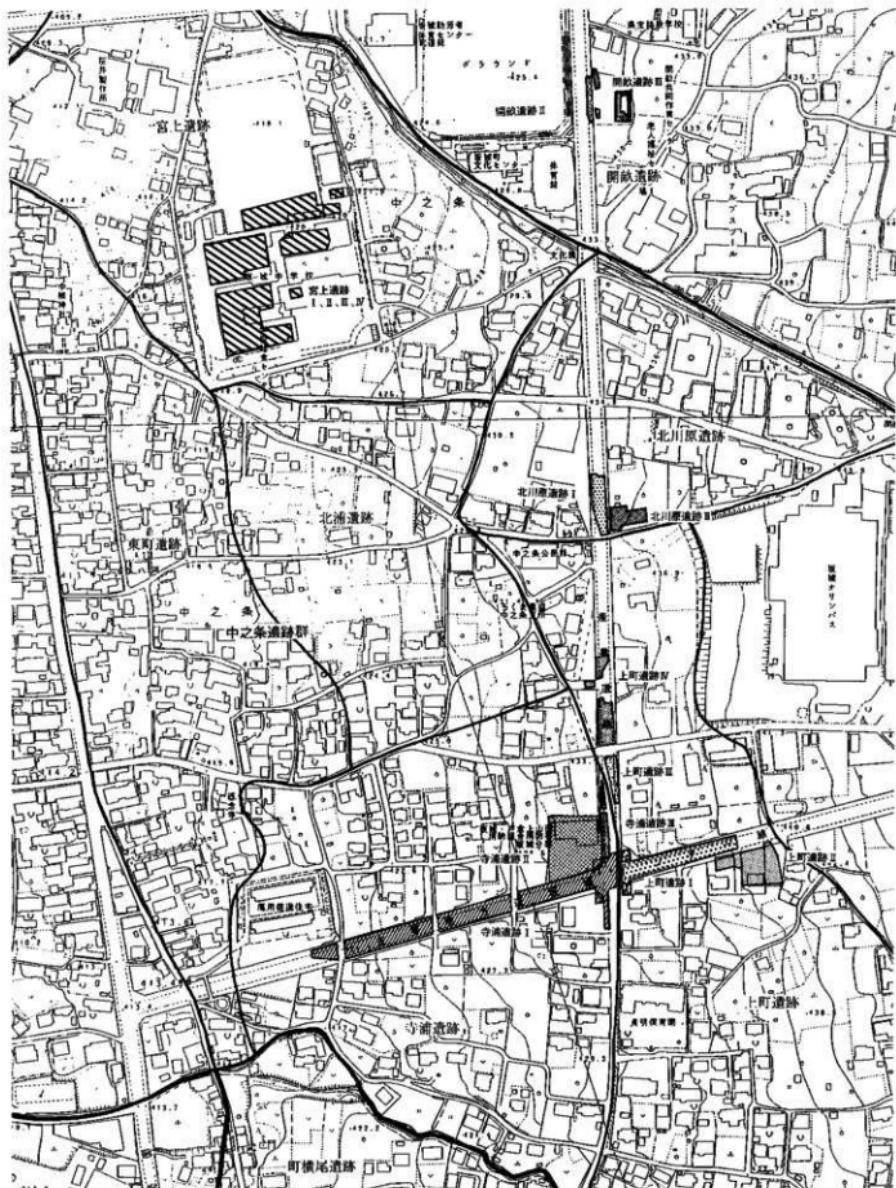
宮上遺跡は先述のとおり、千曲川右岸の中之条地区に位置する遺跡である。中之条地区は、北は砥沢が坂城地区との境界となり、南は沢地形（前沢）が南条との境界となっている。近年中之条地区においては、発掘調査が集中して実施されたこともあり、徐々に概要が判明してきた地域である。ここでは宮上遺跡を中心とした周辺の遺跡概要について、ふれることとしたい。

縄文時代では、御堂川扇状地の扇頂部付近の豊饒堂遺跡（20）が存在し、黒曜石製の石鏃や剥片などが採集されているが、遺構については、耕作等によって破壊されてしまっている可能性が高いのか現在検出されていない状況である。

弥生時代としては、寺浦遺跡（8-1）H12号住居址が後期の住居址とされている以外は、当遺跡で4棟検出されているにすぎない状況で、今後の発掘調査に委ねられている。

古墳としては上信越自動車道に伴って、平成4年に発掘調査された仮称東平1・2号墳（註1）と、平成5年に調査された砥沢古墳（66）があげられる。これらの古墳は、坂城町において唯一中期に位置づけられる古墳である。東平2号墳は出土遺物に恵まれ、その結果5世紀第2四半期前半に位置づけられた。調査の結果、1号墳がやや遅れる5世紀第2四半期後半とされている。また、御堂川沿いには御堂川古墳群前山支群（17）が所在し、後期古墳と考えられている。集落址としては、宮上遺跡を統括する中之条遺跡群内には、寺浦遺跡（8-1）、上町遺跡（8-2）、東町遺跡（8-3）、北浦遺跡（8-4）北川原遺跡（8-6）が所在しており、古墳時代後期を主体とする集落址であることが明らかになっている。寺浦遺跡・寺浦遺跡Ⅱなどの発掘調査では、大型の掘立柱建物址を主体とする後期の集落址が検出された。また、本遺跡で出土している円筒形土製品の出土を見ると、本遺跡群内の北浦遺跡・寺浦遺跡Ⅱ・北川原遺跡Ⅱからも出土しており、同一の性格をもつ集落址とも考えられる。

奈良時代の集落址としては、寺浦・上町遺跡などがあげられる。これも本遺跡群を中心として該期の遺跡が存在していることが確認されている。本時代の遺物で特筆できるものとして上町遺跡Ⅳから奈良二彩（三彩）の



第3図 周辺跡跡分布図 (1:4000)

葉壺の蓋が、住居址覆土から出土している（註2）。その他詳細は定かではないが、本遺跡や寺浦遺跡Ⅱの出土遺物の須恵器に生焼けや須んだものが散見されるため、周辺に須恵器の窯跡が存在している可能性も考えられる。

平安時代では、本遺跡や、寺浦遺跡Ⅰ・Ⅱ、上町遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅳなどから集落址が検出されており、同時代でも本遺跡群内に集落の展開が見られている。また、寺浦遺跡Ⅷ号住居址からは縁釉陶器の塊が出土している。

中世の遺跡としては、昭和52・53年発掘調査が実施された開斂製鉄遺跡がある。御堂川扇状地の山脚部である竜田山の山麓に立地している。調査の結果、製鉄炉址が2基検出され、堅形の炉であることが判明した。稼業年代は、出土木炭の放射性炭素年代測定を実施した結果、第1号製鉄炉址は16～17世紀頃、第2号製鉄炉址は19～20世紀頃といった結論が得られた。第2号製鉄炉址は擾乱を受けており、測定した木炭は混入したものである可能性が高く、出土遺物からの検討によって、第1・2号製鉄炉址共に、16世紀頃の中世末の所産と比定された。

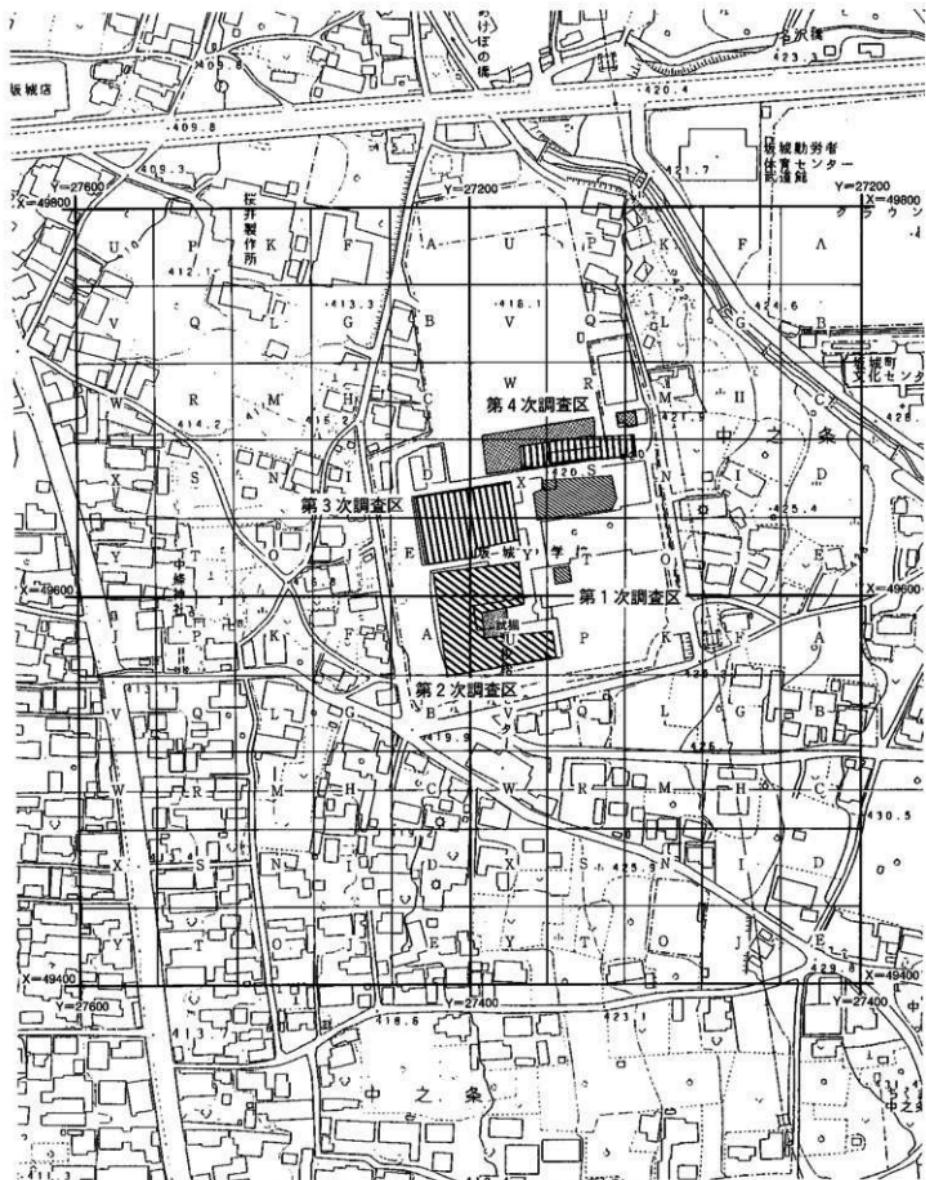
以上周辺で実施された発掘調査の概要から、中之条地区の遺跡の特徴を概観したわけであるが、中之条地区的遺跡は、古墳時代後期以降になってから爆発的に集落が形成されたことが看取される。また、奈良二彩の出土などからも一般的な集落とは考えられない状況が確認できるなど、古代においても重要な地域であったといえる。

## 註

- 1 東平1・2号墳は、上信越自動車道の建設に伴い、(財)長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われた。当時周知の御堂川古墳群東半支群1・2号墳と異なる可能性があったため、発掘調査報告書では、仮称東平1・2号墳として報告された。今後詳細な現地踏査を実施し、遺跡の名称を検討する必要がある。
- 2 未報告資料。都市計画街路事業によって、平成11年度発掘調査を実施。鑑定を行っていないため、二彩であるのか三彩であるのか不明な状態である。

## 引用・参考文献

- 関 孝一 1966 「長野県埴科郡坂城町遺跡発掘調査概報」『考古学雑誌』第51巻第3号
- 坂城町教育委員会 1978 「開斂製鉄遺跡 一第1次調査報告一」
- 坂城町教育委員会 1979 「開斂製鉄遺跡 一第2次調査報告一」
- 森崎 稔 ほか 1981 『坂城町誌 中巻 歴史編(一)』 坂城町誌刊行会
- 坂城町教育委員会 1993 『中之条遺跡群 宮上遺跡Ⅱ』 概報
- 坂城町教育委員会 1995 『南条遺跡群 塚山遺跡Ⅱ』
- 坂城町教育委員会 1996 『豊鎌堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡』
- 坂城町教育委員会 1996 『中之条遺跡群 寺浦遺跡Ⅱ』
- 助川 朋広 1997 「長野県埴科郡坂城町青木下遺跡Ⅱの祭祀遺構」『祭祀考古』第8号
- 若林 車 1999 「第9章 東平古墳群」「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書21」
- (財)長野県埋蔵文化財センター



第4図 宮上遺跡発掘調査区及びグリッド設定図 (1:2500)

## 第Ⅲ章 調査の概要

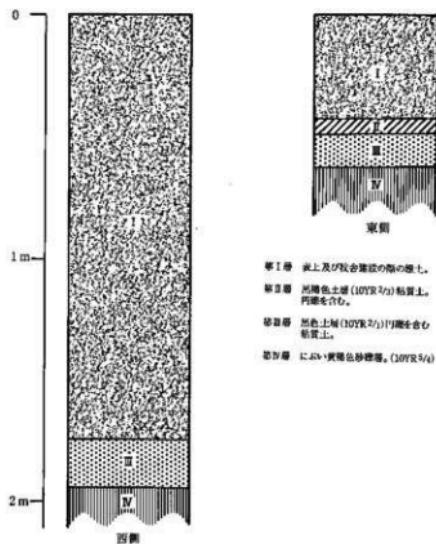
### 第1節 調査の方法

本遺跡の調査には、調査区の遺構・遺物の正確な位置を記録でき、なお周辺に存在する遺構・遺物の調査にも整合できるように、WGS系国家座標の座標軸を基にグリッドを組んだ。グリッドは、200m×200mの大グリッドを設け区画を行い、その中を40m×40mに25等分した中グリッドを設定（第4図）し、北東端より、「A・B・C・…・Y」区とアルファベットの大文字で命名した。本調査区では、M・N・R・S・T・W・X・Y、D・E・P・U、A区が相当する。また、その中グリッドを4m×4mのグリッドで100区画に分割し、南北列を北から算用数字で「1・2・3・…・10」、東西列を東から五十音順で「あ・い・う・…・こ」とした。各グリッドの北東交点を小グリッドとして、遺物の取り上げや遺構図の作成の基準とした。発掘調査における遺構の実測は、1/20を基本として簡易造り方実測及び、平板測量を行った。

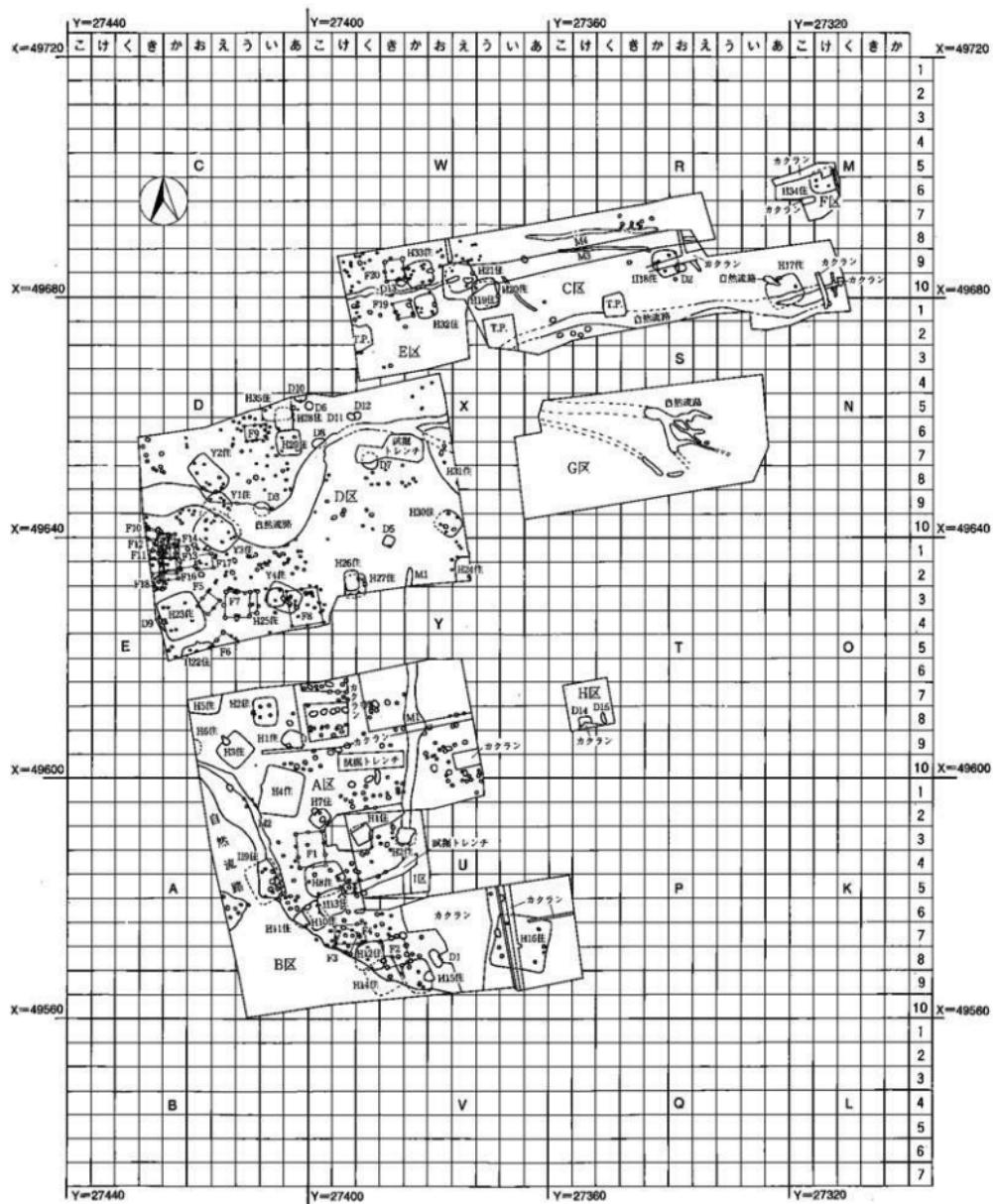
### 第2節 基本層序

宮上遺跡の調査区内は先述したわけであるが、昭和35年に当時の坂城中学校が建設された時に、削平や盛土などによって造成された経緯があつて、今回の発掘調査区の基本土層は大きく2つおり観察された。坂城中学校の敷地内での状況を見ると、東から西への傾斜地であったため、東側は大きく削平され、西側については掘削よりも盛土が多くなされている状況であった。これらを具体的に示したのが基本層序模式図である。

第I層は表土及び学校建設時の埋土である。第II層は黒褐色を呈する土層、第III層は黒色砾層である。第IV層は、ぶい黄褐色を呈する粘質土で、砾を多く含んでいた。先述のとおり、東側を深く削平した後、西側を盛土して整地を行ったため、西側調査区の検出面までが深く、東側が浅くなっていた。第I層は東側では20~30cm、西側では1~3mという状況であった。第II・III層が遺物の包含層と考えられたが、発掘調査に当たり、期間的なことや遺物量も少なかったことなどを勘案して、遺構の検出はIV層上面を行った。



第5図 基本層序模式図



第5図 宮上遺跡遺構配置図（1:800）

## 第Ⅳ章 調査の結果

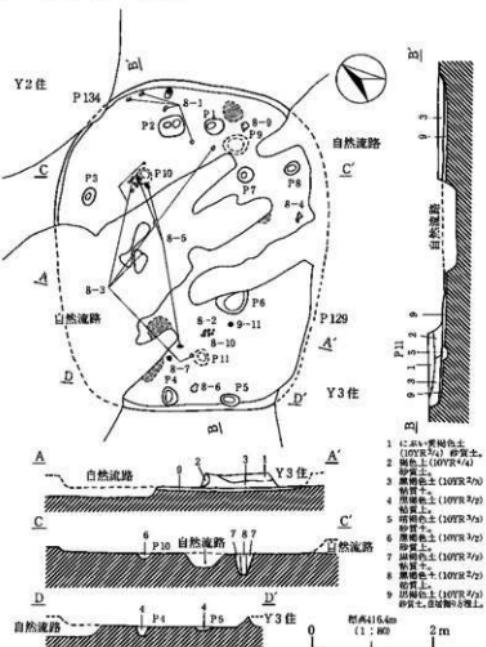
### 第1節 弥生時代の遺構・遺物

#### 1 竪穴住居址

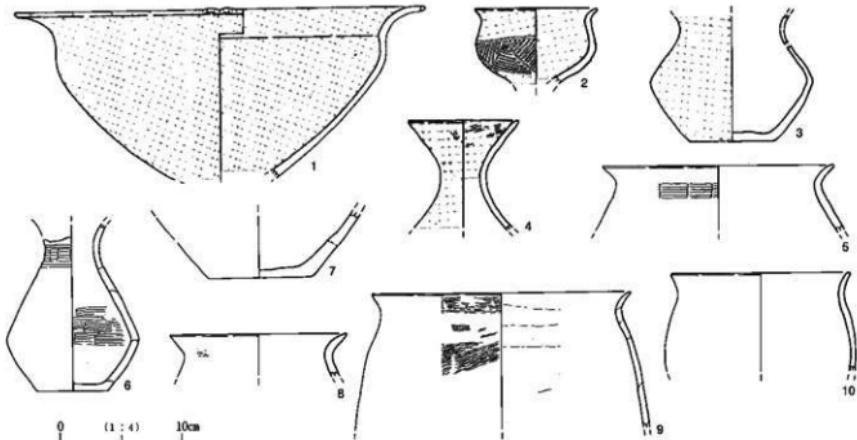
##### 1) Y1号住居址

###### 遺構（第7図）

検出位置 Dえ8・9・10グリッド、Dお8・9・10グリッド。重複関係 Y2・3号住居址に切られる。自然流路とP134に切られ、中央部と北西壁の一部を破壊されている。平面形態 長軸5.2m、短軸4.1mの隅丸方形を呈する。主軸方位はN-51°-Eを指す。壁残高は0~15cmを測る。覆土 3層に分かれ、1層がにぶい黄褐色土、2層が褐色土、3層が黒褐色土であった。床面の状態 平坦な床面であったが、あまり堅固ではなかった。炉 焼土が4箇所検出されたが、炉と捉えられなかった。ピット 11基検出された。自然流路によって中央付近が破壊されていたため定かでないが、P6・7・10が主柱穴と思われた。P1は梢円形で深さ22cm



第7図 Y1号住居址実測図



第8図 Y1号住居址出土土器実測図

を測る。P2は楕円形でテラスを有し、深さ23cmを測る。P3は楕円形で深さ10cmを測る。P4は楕円形で深さ15cmを測る。P5は楕円形で深さ11cmを測る。P6は楕円形で深さ10cmを測る。P7は円形で深さ33cmを測る。P8は楕円形で深さ12cmを測る。P9は楕円形で深さ7cmを測る。P10は楕円形で深さ12cmを測る。P11は楕円形で深さ10cmを測る。北壁下のP1・2、南壁下のP4・5が入口施設の可能性が高い。遺物の出土状況 覆土中から壺・壺・高坏などが出土した。

#### 遺物（第8・9図）

本住居址から出土した土器では壺・壺・高坏などを図化した。

1は大型の錫状口縁の高坏、2は台付壺、3・4・6・7は壺である。4は内外面赤色塗彩が施された小型の壺、6は頸部に櫛書き康状文の等間隔止めが施されている。5・8~10は壺で、摩耗が著しく調整等が不明なものが多い。11は磨製石鎌である。

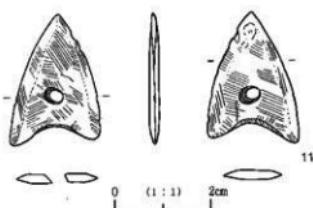
#### 時期 本住居址の所

属時期は、出土土器から見ると古い様相の土器が含まれているため弥生時代中期末と思われる。

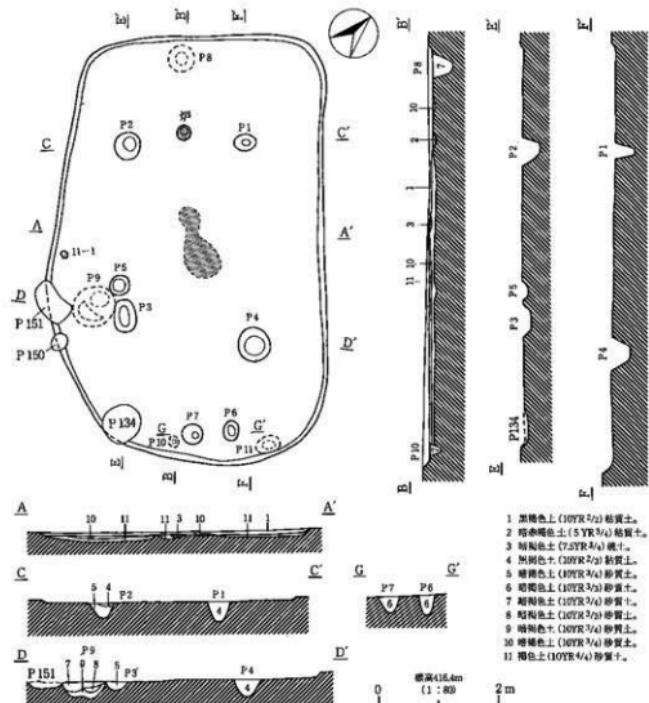
#### 2) Y2号住居址

##### 遺構（第10図）

検出位置 Dえ7・8、Dお7・8、Dか7・8グリッド。重複関係Y1号住居址に切られる。平面形態 長軸6.8m、短軸4.3mの不整な隅丸長方形を呈する。主軸方位はN-47°-Wを指す。壁残高は2~11cmを測る。覆土 黒褐色土に被覆されている。床面の状態 平坦な床面を呈しているが、あまり堅固な床面ではなかった。



第9図 Y1号住居址出土石器実測図



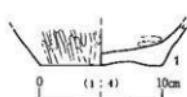
第10図 Y2号住居址実測図

**炉** P1とP2の主柱穴間中央に位置し、長軸25cm、短軸23cmの楕円形の地床炉であった。ピット 11基検出され、P1～P4が主柱穴と思われた。P1は楕円形で深さ33cmを測る。P2は楕円形で深さ25cmを測る。P3は楕円形で深さ15cmを測る。P4は楕円形で深さ32cmを測る。P5は楕円形で深さ7cmを測る。P6は楕円形で深さ34cmを測る。P7は円形で深さ30cmを測る。P8は円形で深さ27cmを測る。P9は楕円形でテラスを有し、深さ15cmを測る。P10は楕円形で深さ12cmを測る。P11は楕円形で深さ23cmを測る。北壁下のP6・

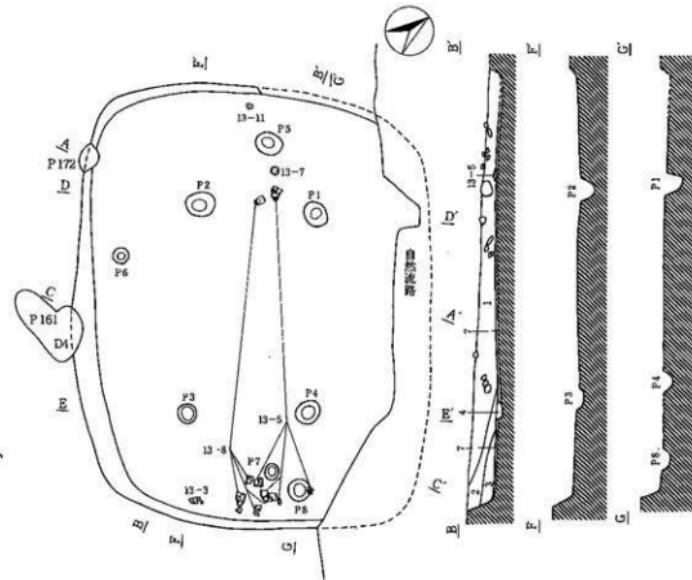
P7が入口施設と思われる。遺物の出土状況 覆土中から甕・壺などが少量出土した。

**遺物(第11図)** 本住居址で団化できたものは、外面壁方向のヘラミガキが施される壺の底部のみである。

**時期** 本住居址の所属時期は、出土遺物が少なく不明な要素が多いわけであるが、重複関係から考慮して弥生時代後期後半であろう。



第11図 Y2号住居址出土  
土器実測図

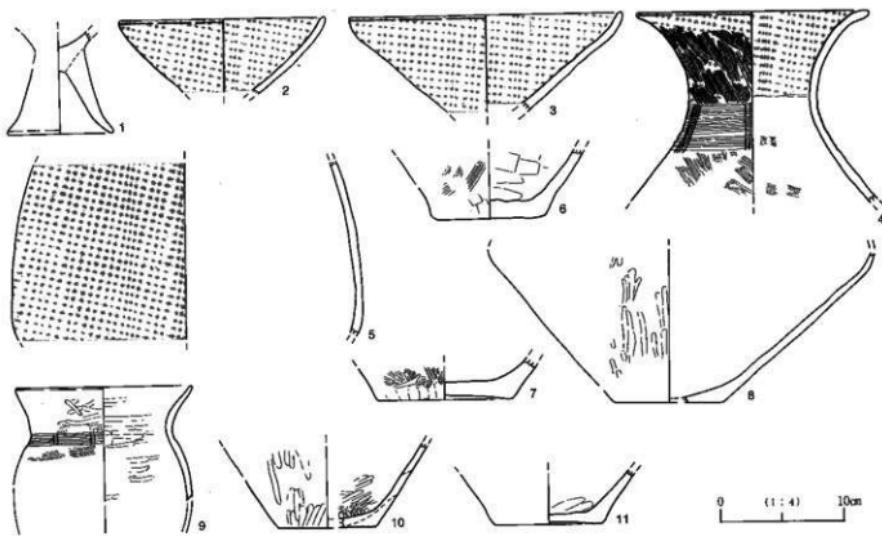


- 1 黒褐色土(10YR 3/2)砂質土。  
堆(1~5cm)多量含む。
- 2 暗褐色土(10YR 3/3)砂質土。  
堆(1~2cm)少量含む。
- 3 明褐色土(10YR 3/2)砂質土。
- 4 明褐色土(10YR 3/2)砂質土。
- 5 明褐色土(10YR 3/2)砂質土。
- 6 黄褐色土(10YR 4/4)砂質土。
- 7 黄褐色土(10YR 3/2)砂質土。
- 8 伝統織り方陶土。

標高415.7m  
(1:800)  
2 m

第12図 Y3号住居址実測図

**3) Y3号住居址**  
**遺構 (第12図)**  
検出位置 Dえ7・8、  
Dお10、Eえ1、Eえ1  
グリッド。重複関係  
自然流路に切られ、  
北壁、南壁、東壁の  
一部を破壊されてい  
た。Y1号住居址を切  
る。平面形態 長軸  
7m、短軸5.3?mの  
隅丸長方形を呈す



第13図 Y3号住居址出土土器実測図

る。主軸方位はN-58°-Wを指す。壁残高は11~42cmを測る。覆土 黒褐色土、暗褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦な床面を呈し、南東部が堅固な床面であった。炉 検出されなかった。ピット 8基検出され、P1~P4が主柱穴と思われた。P1は楕円形で深さ28cmを測る。P2は楕円形で深さ33cmを測る。P3は楕円形で深さ8cmを測る。P4は楕円形で深さ19cmを測る。P5は楕円形で深さ36cmを測る。P6は円形で深さ8cmを測る。P7は楕円形で深さ12cmを測る。P8は円形で深さ12cmを測る。遺物の出土状況 覆土中から壺・盞などが多量に出土した。

#### 遺物（第13図）

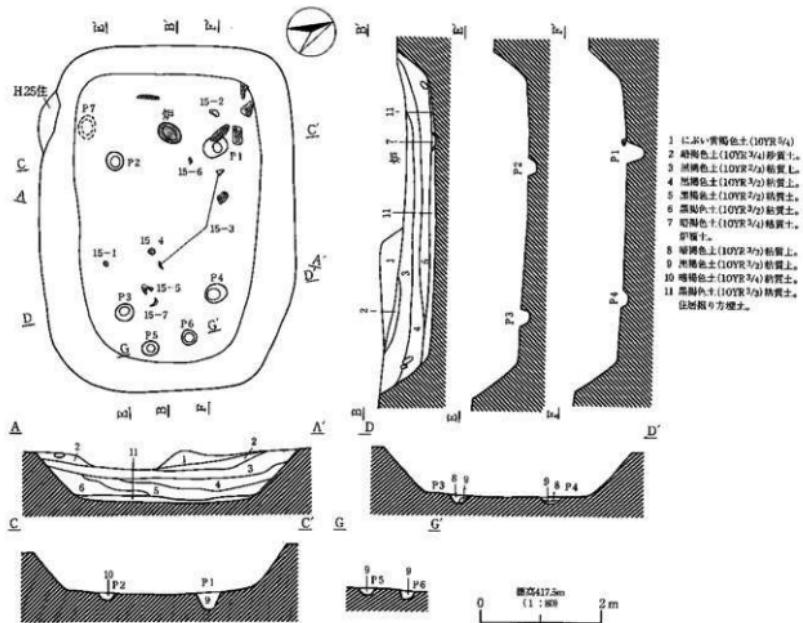
本住居址出土遺物は、1は小型の壺、2・3は内外面赤色塗彩が施された鉢と思われる。4~8は壺で、4には頸部に櫛描きT字文が施されている。9~11は壺で、9は頸部に櫛描き廉状文が施されている。他の遺物として今回図化できなかったが、頸部に鋸齒文の施された壺も出土している。

時期 本住居址の所属時期は、出土遺物から弥生時代後期後半と考えられる。

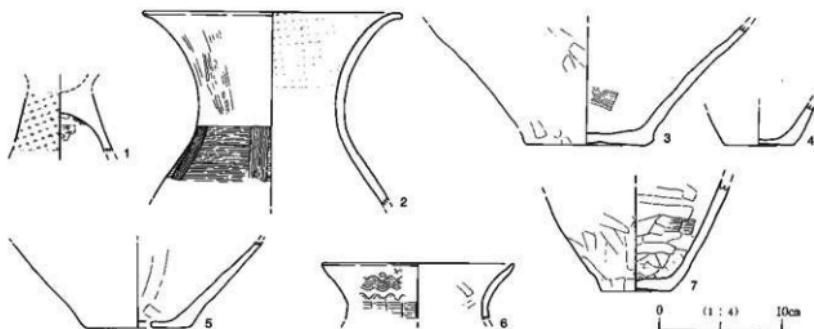
#### 4) Y4号住居址

##### 遺構（第14図）

検出位置 Eあ2・3・4、Eい2・3・4グリッド。重複関係 H25号住居址に切られ、西壁、南壁の一部を破壊されていた。平面形態 長軸4.7m、短軸2.8mの隅丸長方形を呈する。主軸方位はN-67°-Wを指す。壁残高は48~77cmを測る。覆土 にぶい黄褐色土、黒褐色土、暗褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦な床面を呈し、やや堅固な床面であった。炉 西側主柱穴間やや壁側に長軸42cm、短軸28cmの地床炉が検出された。ピット 7



第14図 Y4号住居址実測図



第15図 Y4号住居址出土土器実測図

基検出され、P1～P4が主柱穴と思われた。P1は楕円形で深さ28cmを測る。P2は楕円形で深さ14cmを測る。P3は円形で深さ16cmを測る。P4は楕円形で深さ11cmを測る。P5は円形で深さ10cm、P6は円形で深さ10cmを測る。共に壁下から検出され、入口の施設と思われる。P7は床面下より検出され、楕円形で深さ10cmを測る。遺物の出土状況 覆土中から甕・壺などが多量に出土した。

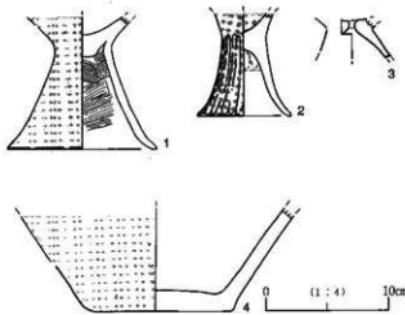
### 遺物（第15図）

1は外面赤色塗彩の施された高坏の脚部、2～4が壺である。2は頸部に櫛描きT字文が施された壺の口縁から肩部である。5は大型の瓶である。6は頸部に櫛描き波状文の施された壺、7は壺の底部である。

時期 本住居址の所属時期は、出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

### 2 その他の遺物（第16図）

遺構や遺構外の弥生時代の出土遺物をここで扱う。1はH2号住居址から出土した高坏の脚部で、外面赤色塗彩が施されている。2はH3号住居址から出土した高坏で内外面赤色塗彩が施されている。3は摩滅が多い高坏の坏部から脚部であるが、坏部内面からの穿孔がある。D3からの出土である。4は壺の底部で、外面に赤色塗彩が施されている。P7からの出土である。



第16図 その他の遺物実測図

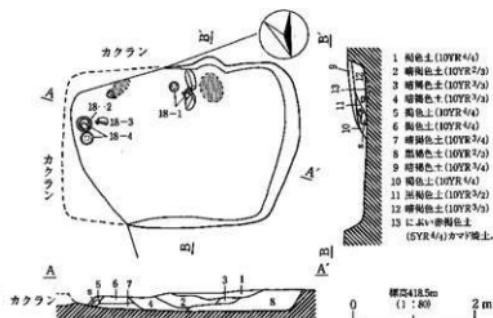
## 第2節 古墳時代後期の遺構・遺物

### 1 積穴住居址

#### 1) H1号住居址

##### 遺構（第17図）

検出位置 E-a9、E-i9グリッド。重複関係  
東壁、南・北壁の一部を攪乱される。平面形態 短軸2.4mの隅丸長方形を呈するものと思われる。主軸方位はN-18°-Eを指す。壁残高は27~36cmを測る。覆土 褐色土、暗褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦では



第17図 H1号住居址実測図



第18図 H1号住居址出土土器実測図

あるが、堅固な床面ではなかった。カマド 2基検出され、南壁やや西よりに位置するものが移築後のカマド、東壁やや南よりのカマドが移築前のカマドと思われた。南壁のカマドは、袖部構築に石を利用したものである。焼土の堆積状況から比較的利用度が少なかった状況が看取された。東カマドは、火床面のみが検出される遺存状態の悪いものであった。ピット 検出されなかった。遺物の出土状況 覆土中やカマド周辺から甕や壺が出土したが、量的には少なかった。カマドの東側、東壁付近の床面上から18-4 の甕が出土した。

#### 遺物（第18図）

本住居址の出土遺物で図示できたものとして、土師器の高壺と甕がある。1は脚部に丁寧な継位のヘラミガキが施され、2は継位のヘラケズリが施されている高壺である。3は口縁から胴上半の球胴甕で、丁寧なヘラミガキが施されている。4は3同様丁寧なヘラミガキが施されている甕である。

時期 本住居址の所属時期は、古墳時代後期（7世紀後半）と思われる。

#### 2) H2号住居址

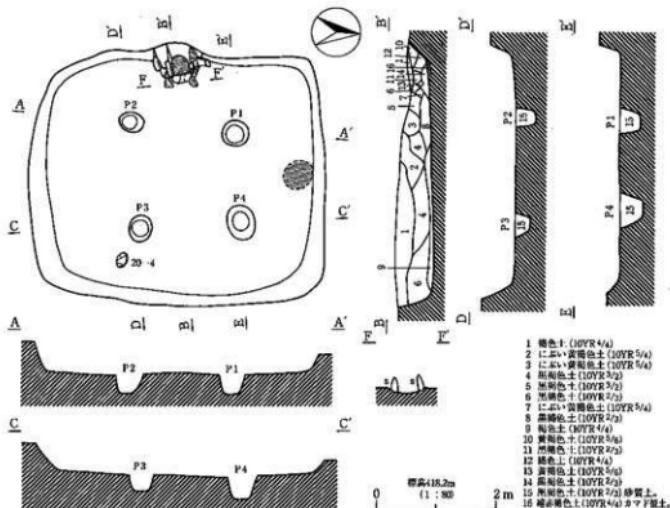
##### 遺構（第19図）

検出位置 E1-7・8、E2-7・8グリッド。

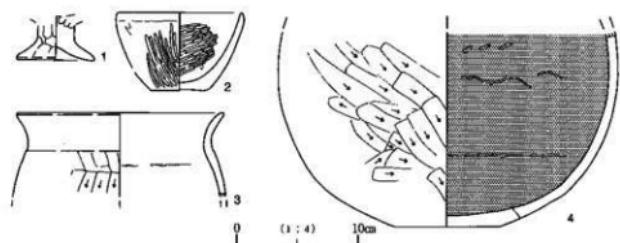
重複関係 なし。平面形態 長軸4.3m、短軸3.8mの隅丸方形を呈する。主軸方位はN-4°-Wを指す。壁残高は27~57cmを測る。覆土

褐色土、にぶい黄褐色土、暗褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦ではあるが、堅固な床面ではなかった。カマド

西壁中央付近と北壁中央付近の2基検出された。当初北側にあったものが西壁側に移築されたものと思われた。西カマドは袖部に石を構築材として利用し、粘土で覆われた残りの良いものであった。



第19図 H2号住居址実測図



第20図 H2号住居址出土土器実測図

北カマドは火床面のみで遺存状態は悪い状態であった。西壁カマドを軸とした主軸方位は、N-100°-Wを指す。ピット4基検出され、P1~4が主柱穴と思われる。P1は円形で深さ30cmを測る。P2は楕円形で深さ32cmを測る。P3は楕円形で深さ26cmを測る。P4は楕円形で深さ37cmを測る。遺物の出土状況 覆土中から土器器の壊・壊などが出土しているが、量的には出土遺物は少なかった。

#### 遺物（第20図）

本住居址で図示できたのは土器器の鉢、壺、球胴壺がある。1は器台の脚部と思われ、脚部にヘラケズリが施されている。2は鉢で内外面に丁寧なヘラミガキが施されている。3は壺で、外面に縦位のヘラケズリが施されている。4は球胴壺で縦位のヘラケズリが施されている。

時期 本住居址の所属時期は、古墳時代後期後半（7世紀）と思われる。

### 3) H3号住居址

#### 遺構（第21図）

検出位置 Eう9・10、Eえ9・10

グリッド。重複関係 なし。平面

形態 長軸4.7m、短軸4.44mの方  
形を呈する。主軸方位はN-41°

-Wを指す。壁残高は30~54cmを  
測る。覆土 暗褐色土に被覆され

ていた。東南部分に暗褐色焼土層  
の堆積が見られ、本址は焼失家屋  
と思われた。床面の状態 平坦で

中央部が堅固な床面であった。カ  
マド 西壁中央付近で検出され、

天井部は崩落していたが遺存状  
況は良好であった。袖部の構築材

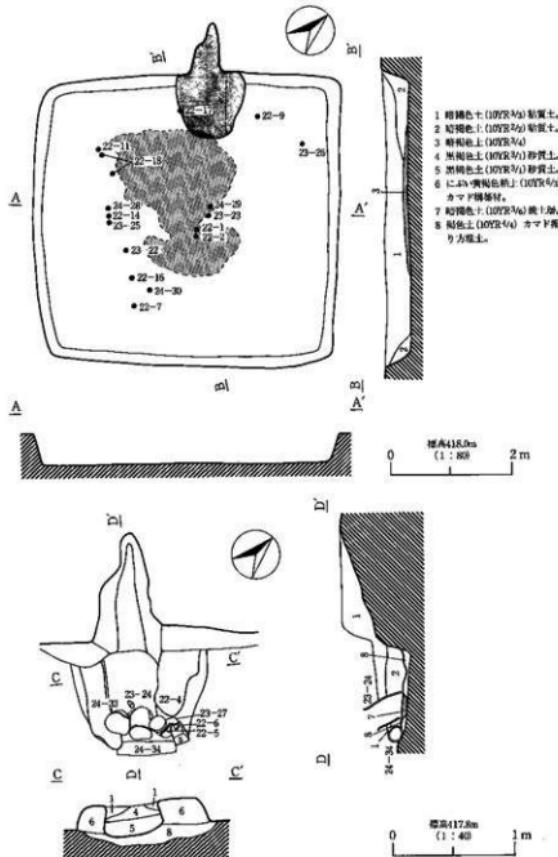
には石を配し、にぶい黄褐色粘土  
で覆われていた。左右袖部の先端

には24-33、23-27の土器器の長  
胴壺を補強材として使用し、その

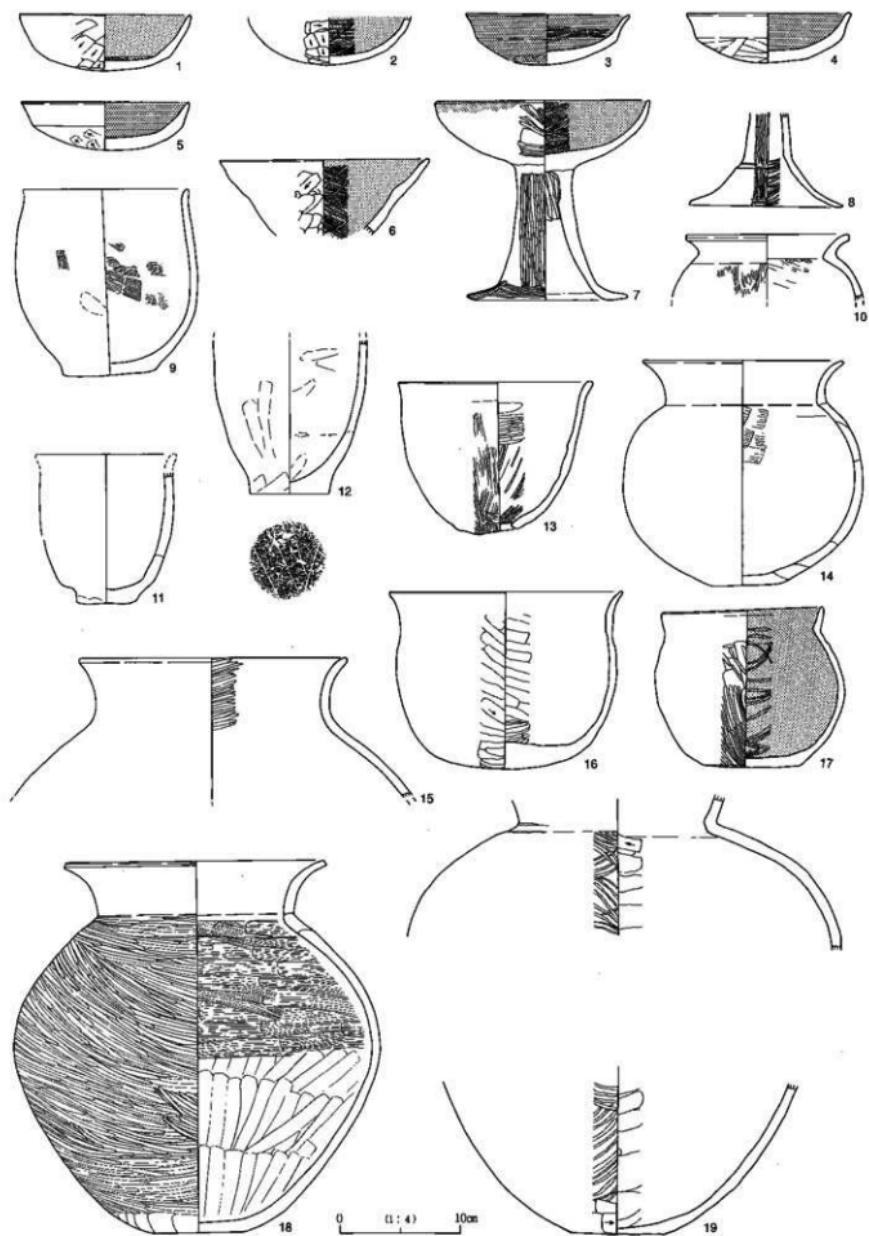
中央に23-24の土器器壺が、立位  
で出土した。24-34の土器質の円  
筒形土製品が火床部の手前床面上

に横位で出土し、カマドの構築材  
として使用されていたものが、

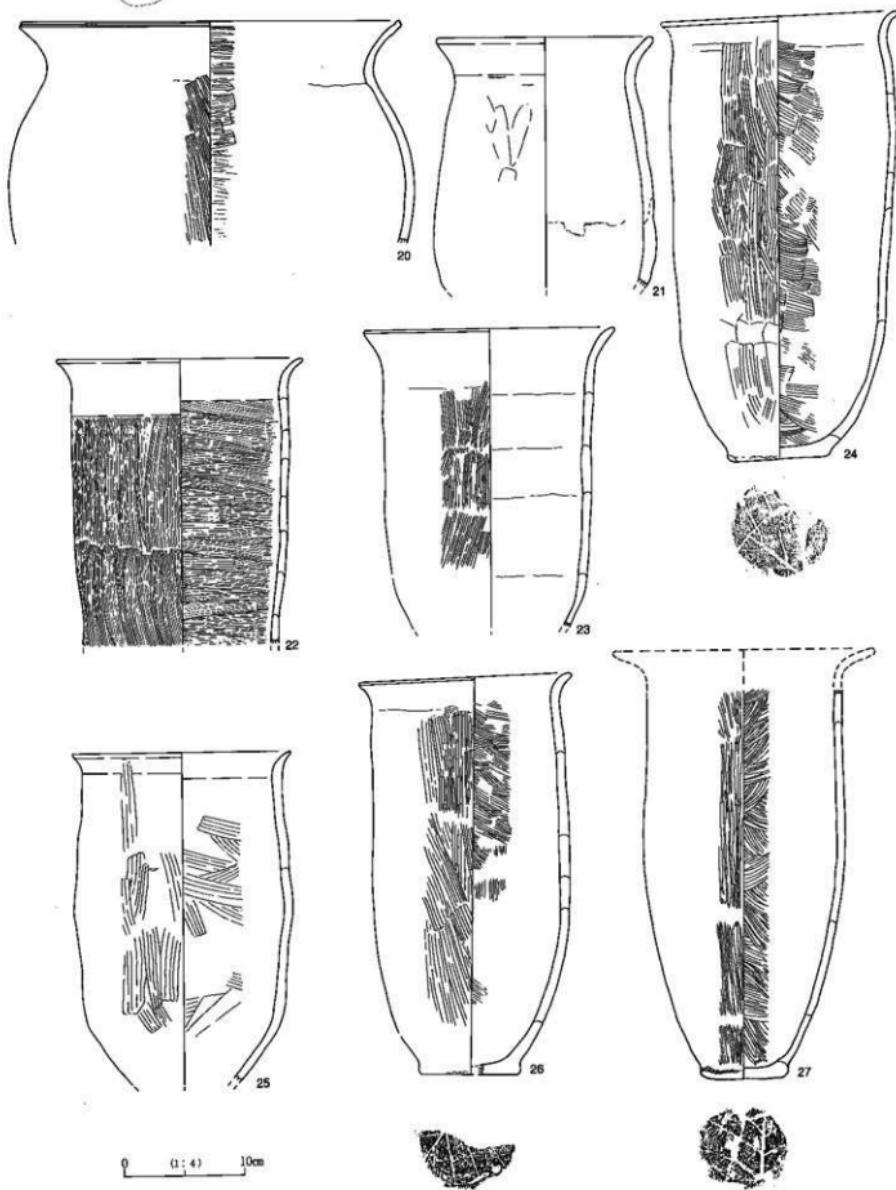
カマド廃絶後に落下したのではないかと推察された。また、本カ  
マドでは、支脚石が直立してい  
た。



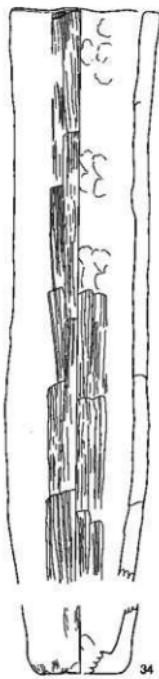
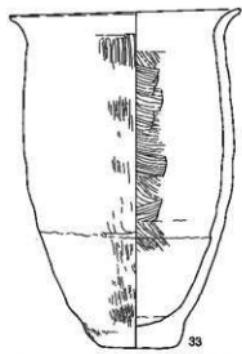
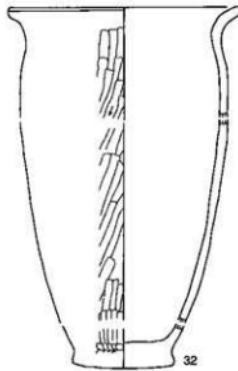
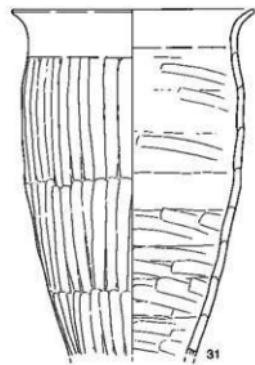
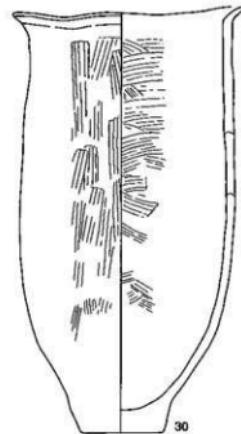
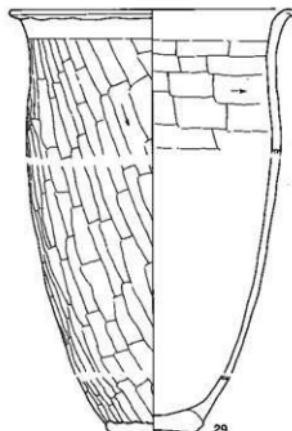
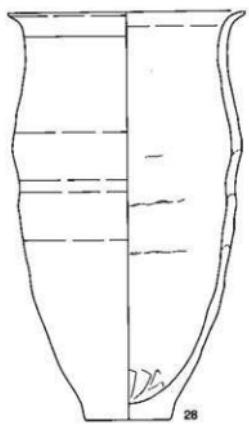
第21図 H3号住居址・カマド実測図



第22図 H3号住居址出土土器実測図



第23図 H3号住居址出土土器実測図



0 (1:4) 10cm

第24図 H3号住居址出土土器実測図

カマドを軸とした主軸方位は、N-47°-Wを指す。ピット 検出されなかった。遺物の出土状況 覆土中から多量の土師器の壺・甕などの出土、東南部付近の焼土層中や床面上、カマド内外から完形に近い土師器甕などがまとまって出土した。本址は、焼失住居址と見られ、使用状態での土器を含んでいると考えられた。本住居址の出土遺物は、本遺跡の中では出土量の多い状況であった。

#### 遺物（第22・23・24図）

本住居址からは弥生土器、土師器、須恵器が出土した。弥生時代に所属すると思われる高坏については第16図に掲載した。本址の出土土器を見ると土師器の量が圧倒的に多く、なかでも甕が主体を占めている傾向が看取された。また、器種的にもバラエティが見られる。

1～6は半球形を呈する内面に黒色処理が施された土師器の壺である。1は内面の底部と胴部の境目に段が看取される。2は口縁部が欠損しているため正確な器形を知り得ないが、口縁部が内弯するものと思われる。4・5は須恵器の模倣壺で、胴部中位から外反する器形を呈している。外面にはヘラケズリが施されているが、内面は摩耗しているため、ヘラミガキが看取されない。6は底部が欠損しているため、正確な器形を知り得ないが、内面の胴部中位に弱い稜を有するものである。7・8は土師器の高坏で、壺部内面にはヘラミガキが施され、黒色処理が施されている。脚部外面には縦位のヘラミガキが施されている。8は他の土器と比べると白い胎土である。9・11・12は土師器の小型の甕である。13は小型の単孔の土師器の甕で、内外面にハケメ調整が施されている。径は2.5cmを測り、胎土に雲母粒子が含まれている。14は胴部が球状を呈する甕で、色調は浅黄色を呈している。16・17は土師器鉢である。16には外面ヘラケズリが施され、17には外面縦位にヘラミガキが施されている。15・18～20は土師器の大型で、胴部球形の器形を呈する甕である。18は外面に丁寧なヘラミガキが施され、内面上位に横位のハケメ調整、その下方には縦位のヘラナデが施されている。19は外面にヘラミガキ、内面にヘラケズリ調整が施されている。20は外面にハケメ調整が施され、頸部以下の内面には横位のハケメ調整が施される。21～33は土師器の長胴甕である。22～27、30・33は外面に縦位のハケメ調整が施されるものである。22・24・25・26・27・30は内面にもハケメ調整が施されている。29・31・32は外面にヘラケズリの施された土師器の甕である。また、24・26・27の底部には木葉痕が観察できる。28はナデ調整の施される土師器甕である。これらの長胴甕の胎土をみると、雲母粒子が多く含まれているのが特徴である。34はカマド火床面の手前から出土した土師質の円筒形土製品である。当遺跡内において多く出土し、本遺跡を特徴づける遺物といえる。形態的には円筒形を呈していることが本遺物の特徴である。調整を見ると内外面に縦位のハケ調整が施されるもので、内面には指頭痕が観察される。本土製品は底部が確認できるものである。土師器と同様な焼き物であるが、土師器と比べると焼成は劣っている。

時期 本住居址の所属時期は、出土遺物から古墳時代後期後半～古墳時代末（7世紀中葉～7世紀後半）と思われる。

#### 4) H7号住居址

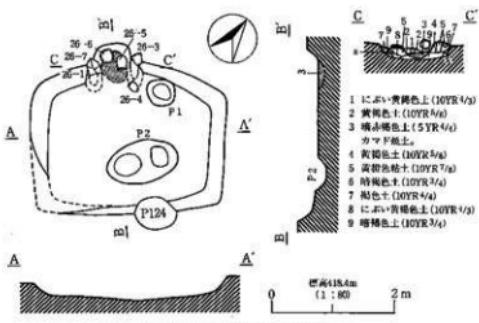
遺構 (第25図)

検出位置 Uc2、Uc3グリッド。重複関係  
P124に切られ、住居址の床面の一部を破壊される。平面形態 長軸2.6m、短軸1.9mの不整形方形を呈する。主軸方位はN-53°-Eを指す。壁残高は18~28cmを測る。覆土 暗褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦であったが、あまり堅固な状態ではなかった。カマド 北壁中央付近で検出され、左右両袖部を粘土で構築するカマドで、比較的遺存状態は良好であった。カマドを軸とした主軸方位は、N-29°-Wを指す。ピット 2基検出され、P1は梢円形で深さ10cmを測る。P2は梢円形でテラスを有し、深さ15cmを測る。遺物の出土状況 遺物量は少なかったが、カマド内およびその周辺からの出土があった。

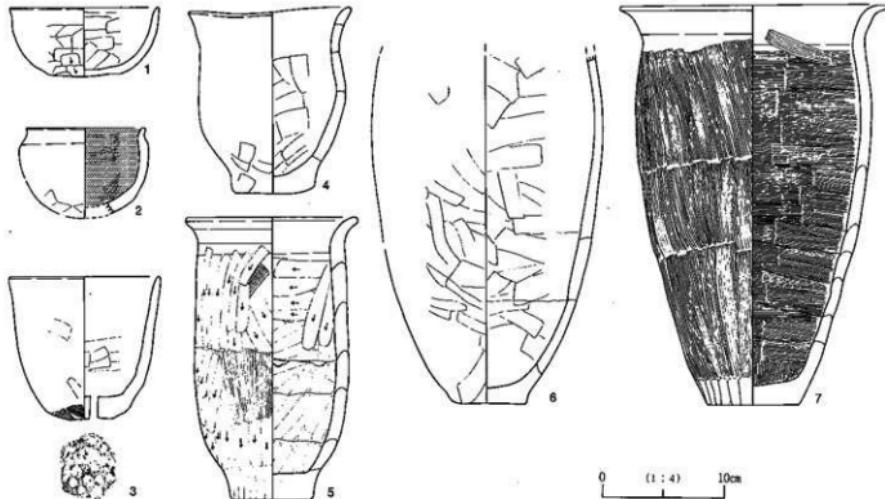
遺物 (第26図)

本住居址で図示できたものは土師器のみで、壺・甕・瓶などがある。1は完形の土師器壺で、外面ヘラケズリが施されている。2は外面ヘラナデの施された短頸甕である。3は中型の多孔の土師器瓶である。4は小型の甕である。5は外面ヘラケズリ、ハケメ調整が施される甕である。6・7は長胴甕である。6は内外面はヘラケズリ調整が施されている。7は内外面ハケメ調整が施されている。

時期 本住居址の所属時期は、古墳時代後期後半~奈良時代初頭（7世紀末~8世紀初頭）と思われる。



第25図 H7号住居址実測図



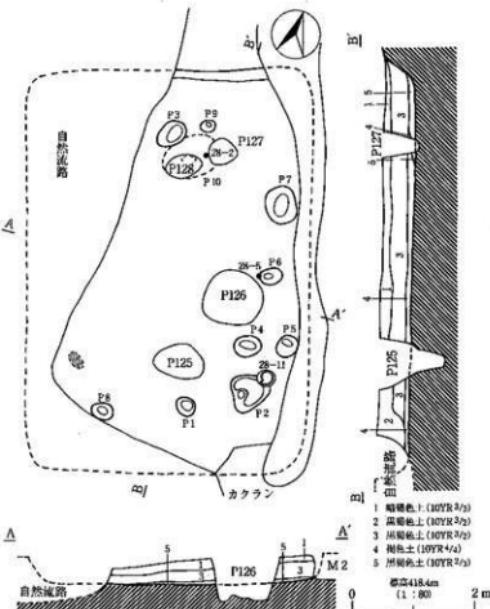
第26図 H7号住居址出土土器実測図

## 5) H9号住居址

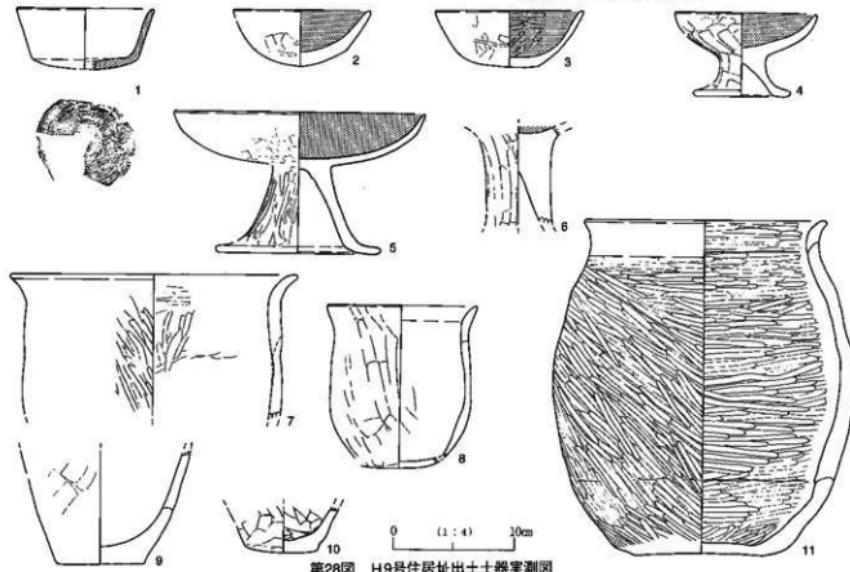
遺構（第27図）

検出位置 Aあ5、Aい4・5グリッド。重複関係 M2、自然流路に切られ、北壁・南壁の一部、西壁が破壊されていた。平面形態 不明。壁残高は32cmを測る。覆土 暗褐色土、黒褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦ではあったがあまり堅固な床面ではなかった。カマド 住居址の北壁中央部付近や西壁にカマドが存在した可能性があるが、重複関係により破壊されてしまったと思われる。ピット 10基検出されたが、主柱穴は捉えられなかった。形態についてはP2が不整形であるが、それ以外は梢円形を呈していた。深さはP1が12cm、P2が16cm、P3は26cm、P4は37cm、P5は25cm、P6は15cm、P7は27cm、P8は13cm、P9は14cmを測る。P10は床下から検出されたピットである。

遺物の出土状況 覆土中から土師器や須恵器の壺・甕などが出土している。



第27図 H9号住居址実測図

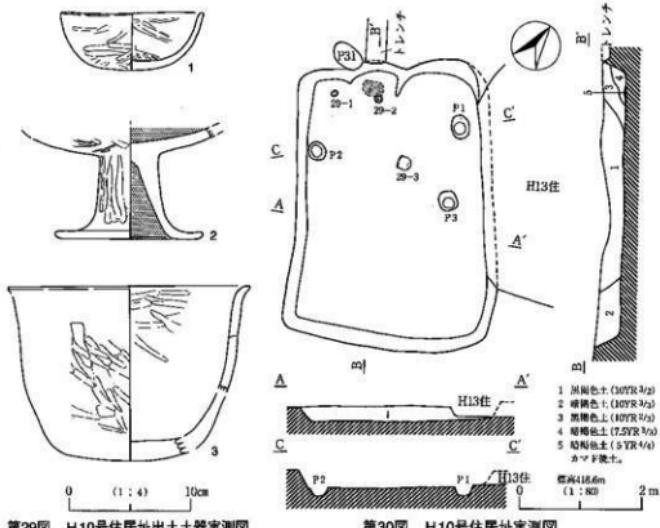


第28図 H9号住居址出土土器実測図

## 遺物 (第28図)

1は須恵器壺、2・3は土師器の壺で内面黒色処理が施されている。4～6は土師器の高壺である。7～11は土師器壺で、7は長胴壺の口縁から胴部である。8は小型の壺で、外側ヘラケズリが施されている。11は内外面ヘラミガキの施された壺である。

時期 本住居址の所属時期は、古墳時代後半～奈良時代初頭（7世紀後半～8世紀初頭）と思われる。



第29図 H10号住居址出土土器実測図

第30図 H10号住居址実測図

## 6) H10号住居址

### 遺構 (第30図)

検出位置 Uあ6、Uこ6・7グリッド。重複関係 H13号住居址に切られるため、東壁の一部を破壊されていた。H11号住居址を切る。平面形態 長軸4.15m、短軸2.85mの不整方形を呈する。主軸方位はN-37°-Eを指す。壁残高は17～46cmを測る。覆土 黒褐色土、暗褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦であったが、あまり堅固な状態ではなかった。カマド 北壁中央付近で検出され、遺存状態は悪い。カマドを軸とした主軸方位は、N-31°-Wを指す。ピット 3基検出され、すべて梢円形を呈する。P1は深さ9cm、P2は深さ14cm、P3は深さ12cmを測る。遺物の出土状況 覆土中からの出土で、遺物量は多くはなかった。

### 遺物 (第29図)

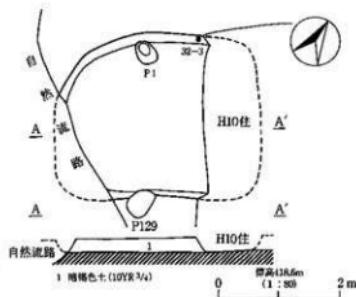
本住居址で図示できたものは3点で、1は土師器壺、2は内面黒色処理の施された土師器高壺、3は内外面にヘラミガキの施された大型の鉢である。

時期 本住居址の所属時期は、古墳時代後期後半～奈良時代初頭（7世紀末～8世紀初頭）と思われる。

## 7) H11号住居址

### 遺構 (第31図)

検出位置 Aあ6・7、Uこ6・7グリッド。重複関係 H10号住居址、自然流路に切られる。平面形態 隅丸方形を呈するものと思われる。壁残高は13～38cmを測る。覆土 暗褐色土に被覆されてい



第31図 H11号住居址実測図

た。床面の状態 平坦ではあったがあまり堅固な床面ではなかった。カマド不明。ピット 1基検出され、楕円形で深さ21cmを測る。遺物の出土状況覆土中から土師器の壺・甕などが出しているが、遺物量は極めて少なかつた。

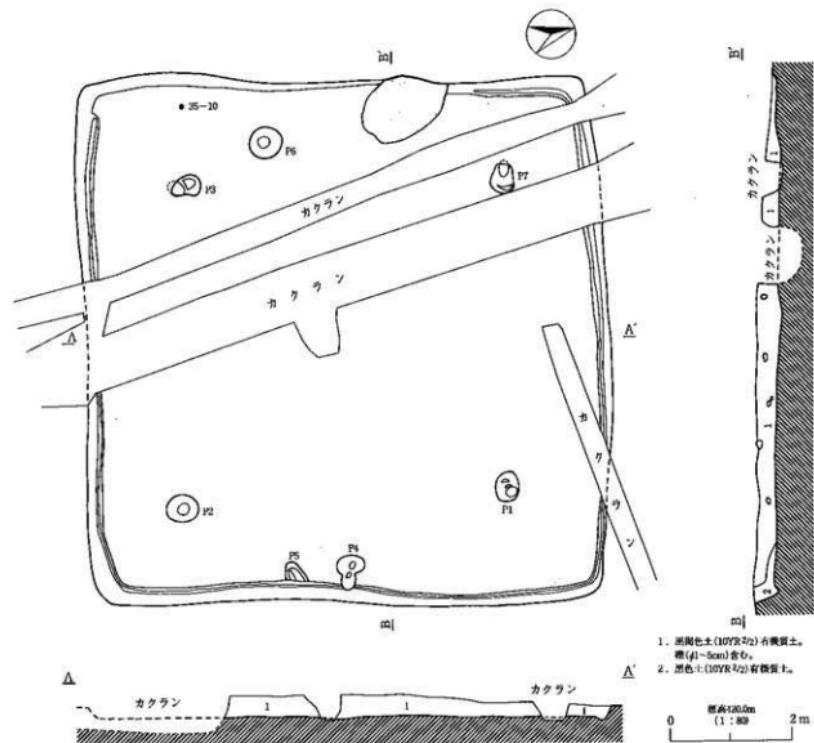
#### 遺物（第32図）

本住居址からは3点図示した。1は内面黒色処理が施される土師器壺、2は壺部内面黒色処理の施された土師高壺、3は小型の甕である。

時期 本住居址の所属時期は、出土遺物が極めて少ないわけであるが、出土遺物や重複関係から古墳時代後期（7世紀後半）と位置づけたい。



第32図 H11号住居址出土土器実測図



第33図 H16号住居址実測図

### 8) H16号住居址

遺構 (第33・34図)

検出位置 Uあ6・7・

8・9、Uい6・7・8・9、

Uう6・7・8・9グリッ

ド。重複関係 なし。

旧校舎によって搅乱さ

れていたため、北・南

壁の一部及び床面の

部を破壊されていた。

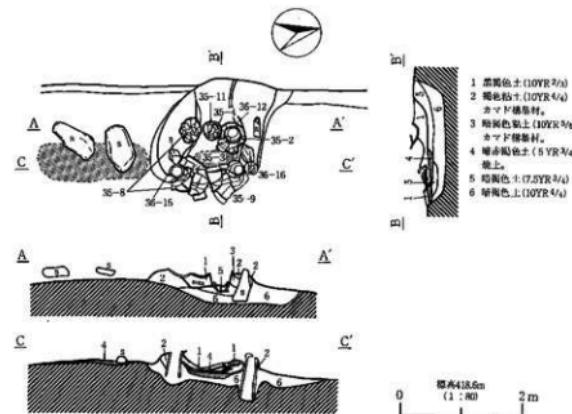
平面形態 長軸8.74m、

短軸8.6mの方形を呈

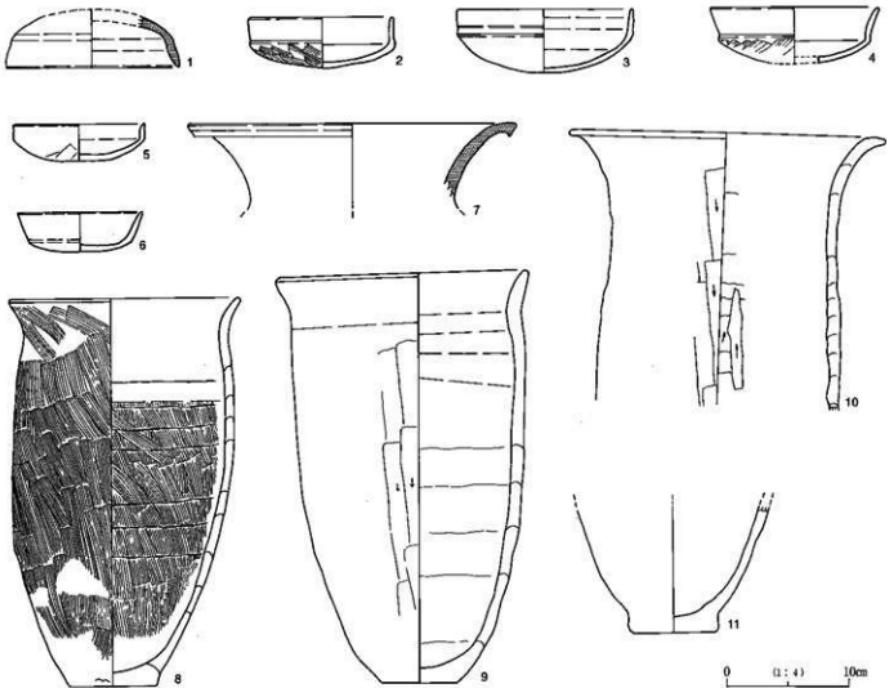
する大型の住居址であ

る。主軸方位はN—

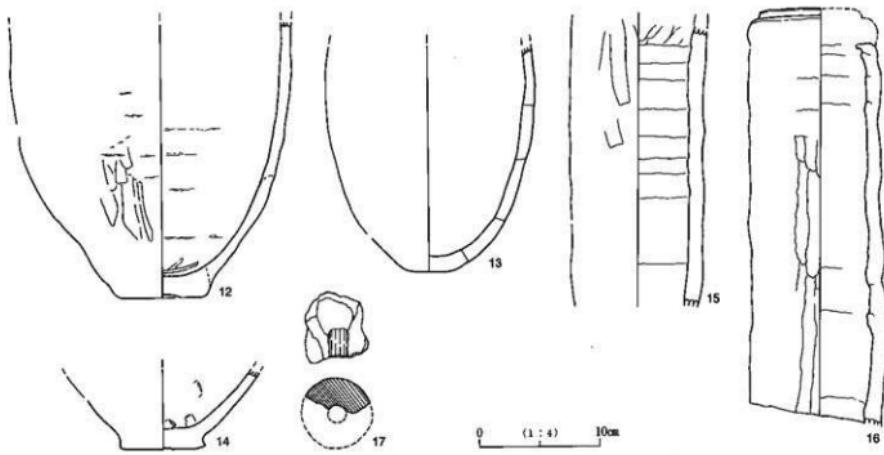
81°—Wを指す。壁残高



第34図 H16号住居址カマド実測図



第35図 H16号住居址出土土器実測図



第36図 H16号住居址出土遺物実測図

は10~28cmを測る。覆土 黒褐色土、黒色土に被覆されていた。床面の状態 平坦であったが、堅固な状態ではなかった。カマド南側の壁面下以外に周溝が検出された。溝幅7~18cm、深さ2~5cmを測り、断面U字状を呈していた。カマド 西壁中央付近で検出され、左右両袖部には礫を使用し、粘土で覆う手法であった。また、両袖の先端には円筒形土製品(36-15・16)が立位に芯材として使用されていた。右袖では36-16が逆位に埋設されていた。また、カマド内からは、土師器の壺や坏などが多く出土した。本カマドの遺存状態は非常に良好であった。カマドを軸とした主軸方位は、N-76°-Wを指す。ピット 7基検出され、P1~P3、P7が主柱穴と思われる。P1は梢円形でテラスを有し、深さ45cmを測る。P2は梢円形でテラスを有し、深さ43cmを測る。P3は梢円形でテラスを有し、下場がオーバーハンプする。深さ47cmを測る。P4は不整形で2基のピットが連結されたような形態で、深さ17cmを測る。P5は不整形で深さ5cmを測る。P4・5が東壁下床面で並んで検出されているため、入口等の施設を想定できるかも知れない。P6は円形で深さ47cmを測る。P7は梢円形でテラスを有し、下場がオーバーハンプする。深さ26cmを測る。遺物の出土状況 比較的出土遺物の少ない住居址ではあったが、カマド内部や周辺からの出土量が多かった。36-17の破口や鉄滓の細片がカマドの北東から出土した。

#### 遺物 (第35・36図)

本住居址出土遺物で図示できたものは、土師器の壺・甕、円筒形土製品、須恵器の蓋などである。1は須恵器の蓋である。2~5は灰白色を呈する土師器の壺である。3は有段口縁の須恵器壺蓋の模倣壺である。6は土師器壺である。7は須恵器の甕の口縁部である。8~14は土師器の甕で、8は内外面縦位にハケメ調整の施された長胴甕、9・10は外面縦位にヘラケズリの施された長胴甕である。15・16は土師質の焼成の悪い円筒形土製品で、カマド構築材として使用されたものである。外面に縦位のヘラケズリと内面に巻き上げ痕が残っている。16については底部とも思われる。17は土師質の輪の破口である。

時期 本住居址の所属時期は、古墳時代後期前半~後期後半（6世紀末~7世紀前半）と思われる。

### 9) H17号住居址

遺構（第37図）

検出位置 M c10、R a10、R i1

N c1、R a1グリッド。

重複関係 自然流路  
によって切られる。

平面形態 長軸 5.6

m、短軸 4.6mの隅丸

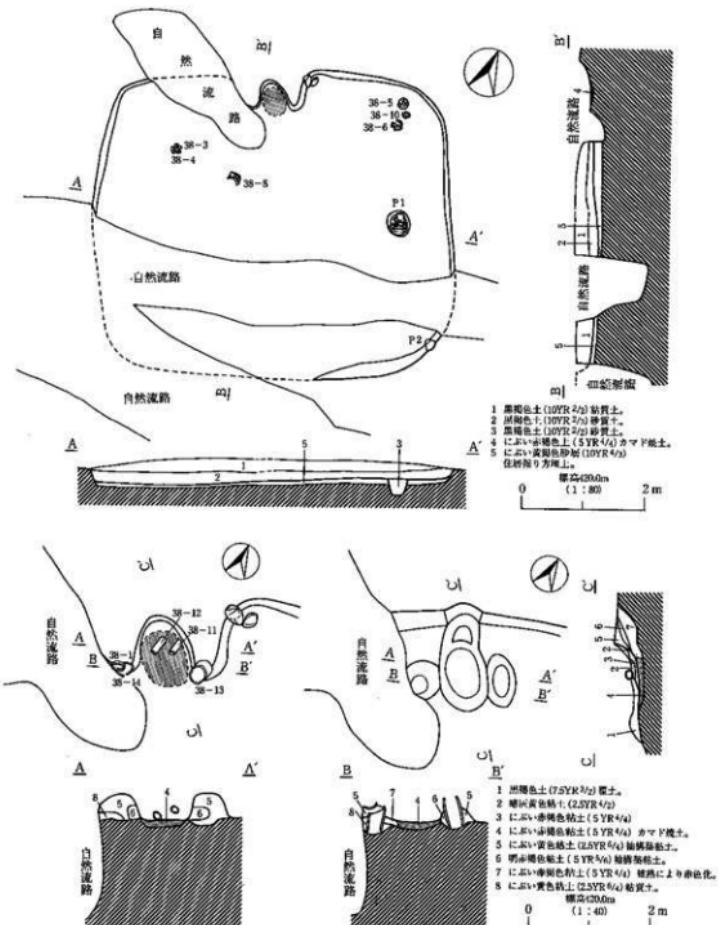
方形を呈するものと  
思われる。主軸方位  
は N-63°-E を指す。  
壁残高は 10~35  
cm を測る。覆土 黒  
褐色土、にぶい黄褐色土  
に被覆されてい  
た。床面の状態 平  
坦で軟弱な床面で  
あった。カマド 北  
壁中央付近で検出さ  
れ、円筒形土製品を  
左右両袖先端部に芯  
材として使用し、粘  
土で覆うといった構  
築方法であった。火

床面上から、カマド  
の支脚として使用さ  
れたと考えられる 38  
-11・12が横位で出  
土した。出土状況か  
ら考慮して 2 連式  
のカマドを想定で  
きるかもしれない。

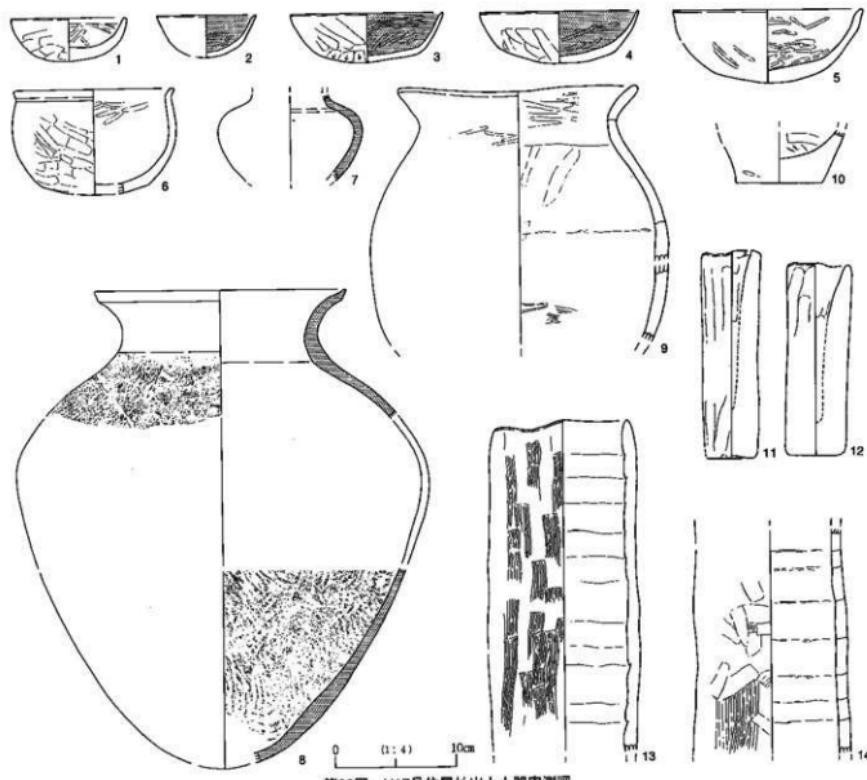
カマドの遺存状態は良好であった。カマドを軸とした主軸方位は、N-63°-E を指す。ビット 2 基検出され、P1 は礫を伴うもので、梢円形で深さ 19cm を測る。P2 は住居址の南東隅に見られたビットである。遺物の出土状況 土師器壺・壺や須恵器壺・壺などがあり、覆土中やカマド周辺からの出土が多かった。

遺物（第38図）

本住居址出土遺物で図示できたものは、土師器の壺・壺、円筒形土製品、須恵器の壺などである。1~5 は土



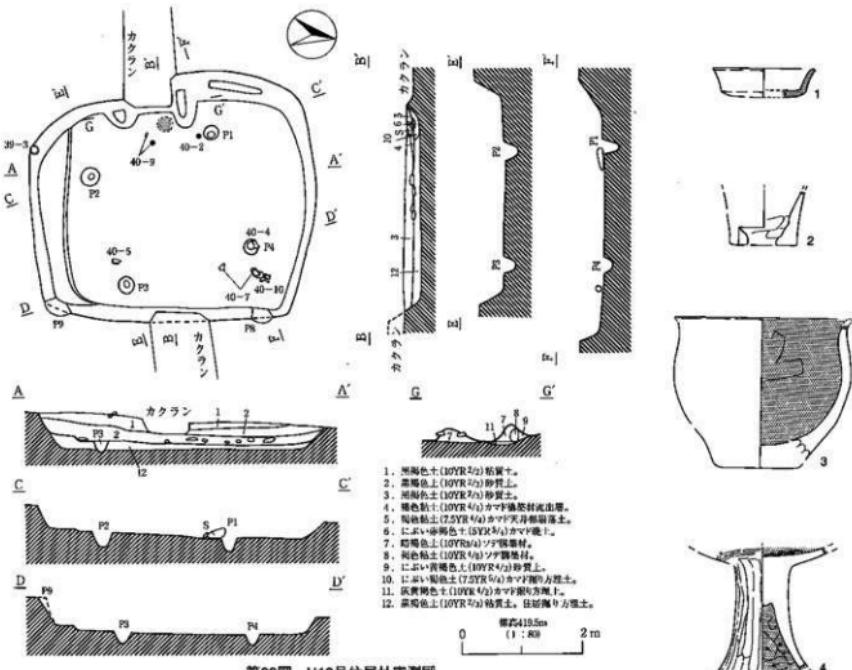
第37図 H17号住居址カマド実測図



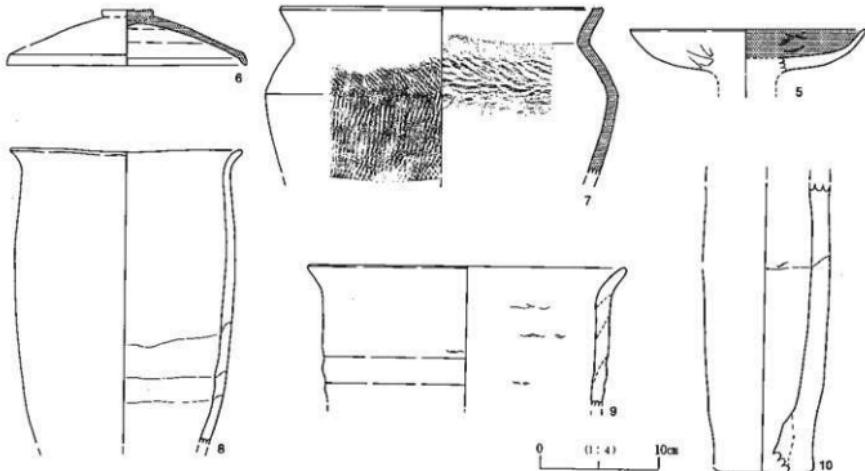
第38図 H17号住居址出土土器実測図

師器坏で、内面ヘラミガキ、外面ヘラケズリが施されている。2～4の内面には黒色処理が施されている。6は外面ヘラケズリの施された鉢、7は須恵器の小型壺の胴部から底部と思われる。8は須恵器壺で外面にはタタキ目調整が施され、内面には當て具痕が観察される。本遺物は、混入遺物と考えられる。9は土師器の球崩壺である。11・12はカマド焼土上から出土した土師質の土製支脚である。胎土には石英粒子が多く混入している。13・14はカマド袖部構築材として使用された土師質の円筒形土製品である。外面にハケメ調整が施されて、内面に輪積み痕が観察される。

時期 本住居址の所属時期は、出土遺物から古墳時代後期後半～後期末（7世紀前半～7世紀後半）と思われる。



第39図 H18号住居址実測図



第40図 H18号住居址出土土器実測図

## 10) H18号住居址

### 遺構（第39図）

**検出位置** Rお9・10、Rか9・10グリッド。重複関係 P8・9に切られる。D2号土坑址を切る。平面形態 長軸4.3m、短軸3.2mの隅丸方形を呈する。主軸方位はN-12°-Wを指す。壁残高は16~53cmを測る。覆土 黒褐色土に被覆されていた。西壁にはテラス状の平坦面が見られた。床面の状態 平坦ではあるが軟弱な床面であった。

**カマド** 西壁中央付近で検出されたが、煙道部が攪乱されているため良好な遺存状態とは言い得ない。左右両袖は粘土で構築され、火床部が残っていた。カマドを軸とした主軸方位は、N-106°-Wを指す。ピット 4基検出された。住居址の主軸方位とズレが生じるわけではあるが、P1~P4が生柱穴と思われる。P1は梢円形で深さ29cmを測る。P2は円形で深さ16cmを測る。P3は梢円形で深さ15cmを測る。P4は梢円形で深さ14cmを測る。遺物の出土状況 覆土中や床面上から出土遺物があったが、あまり多い状態ではなかった。土師器壺・坏や須恵器壺・蓋などの出土があった。

### 遺物（第40図）

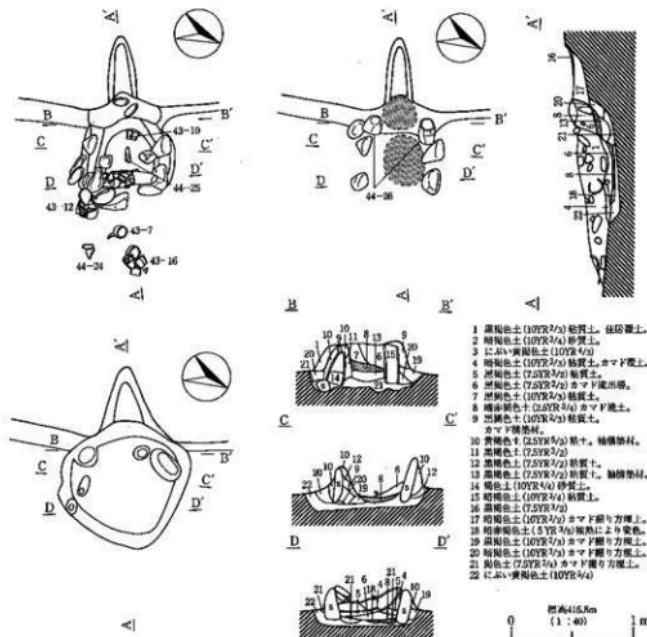
本住居址出土遺物で図示できたものは20点である。1は須恵器の小型の壺である。2は土師質の土製品で、底部に穿孔がある。円筒形土製品より細く精巧なつくりである。3は口縁の端部が欠損している土師器の壺である。4・5は土師器の高壺である。外面ヘラケズリが施され、壺部内面には黒色処理が施される。6は須恵器の蓋で、環状のつまみがつき、

外面天井部には回転

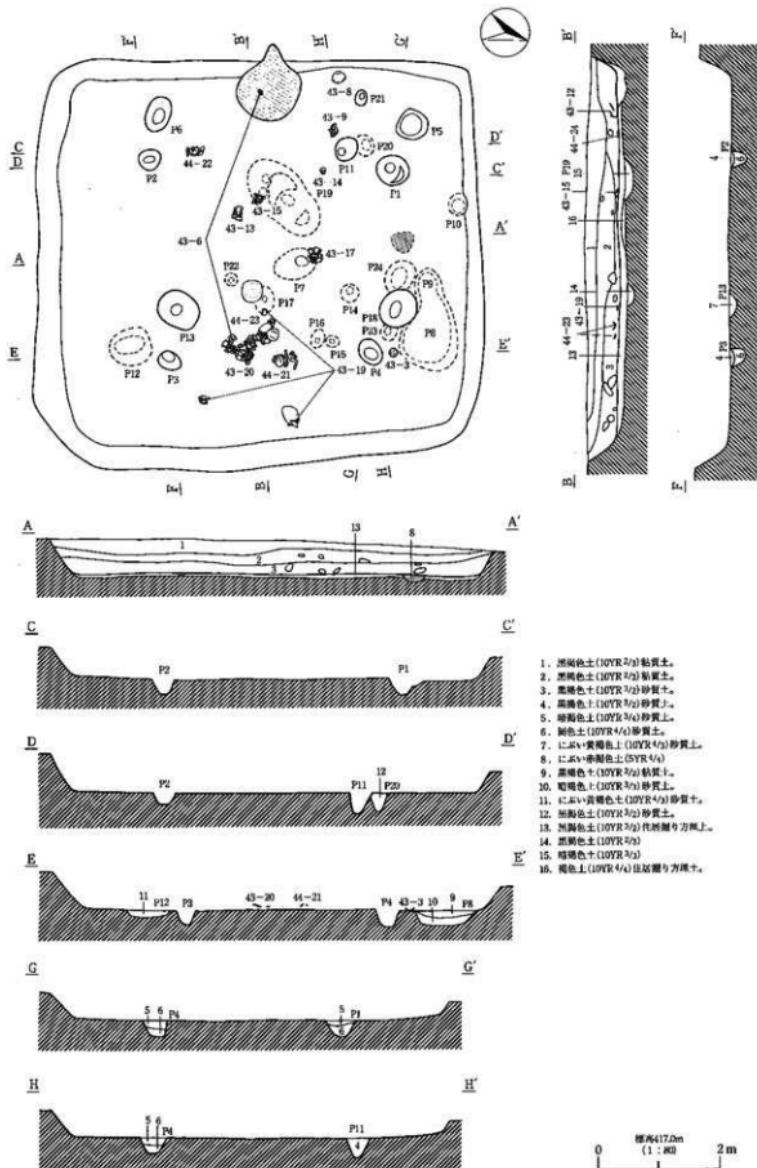
ヘラケズリが施されている。焼成はあまり良いとはいえない。7は外面平行タタキ目の残る須恵器壺である。8・9は土師器長胴壺で、ナデ調整が施されている。

10は土師質の円筒形土製品と思われるが、当遺跡で多く出土しているものと比較すると形態は細く、造り自体も良いものといえる。

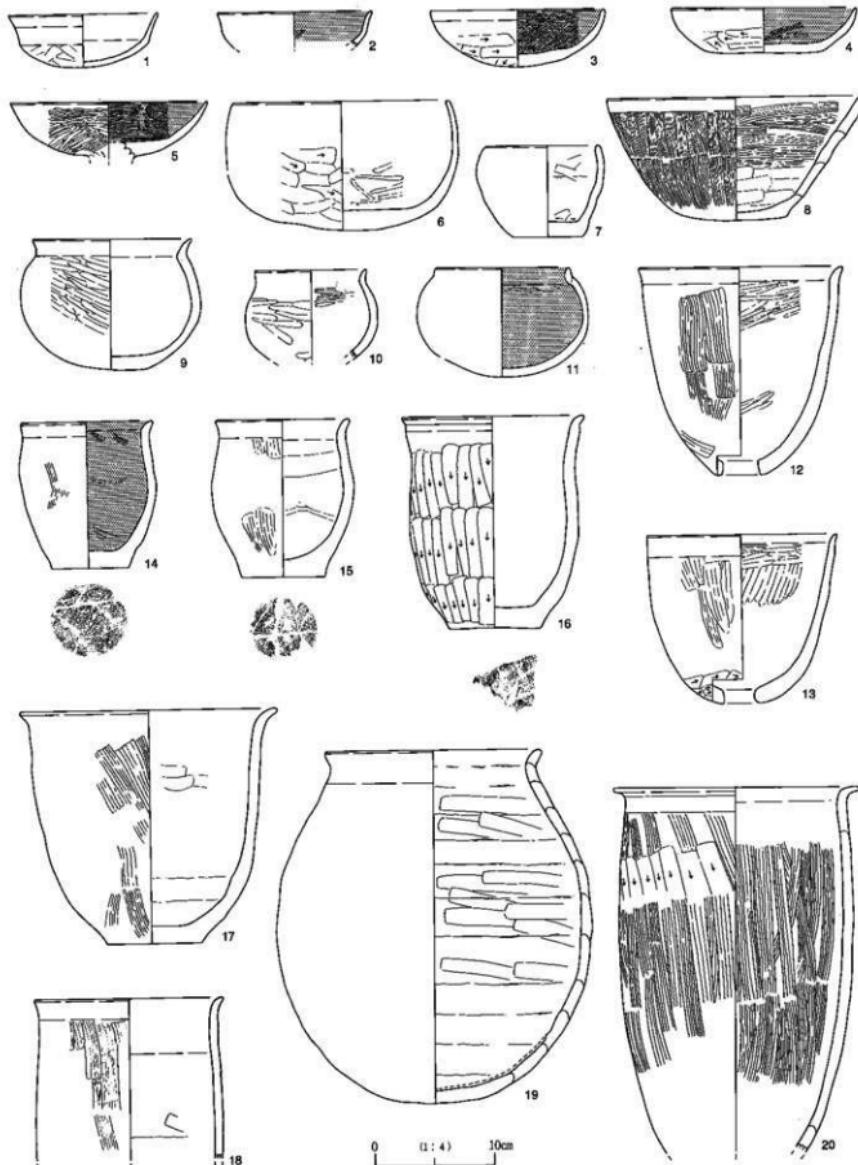
**時期** 本住居址の所属時期は、出土遺物から古墳時代後期後半～奈良時代の前半（7世紀前半～8世紀前半）と思われる。



第41図 H23号住居址カマド実測図



第42図 H23号住居址実測図



第43图 H23号住居址出土土器实测图

## 11) H23号住居址

### 遺構（第41・42図）

検出位置 Eお3・4・5、Eか3・4・5、Eき3・4・5グリッド。重複関係 D10号土坑址を切る。平面形態 長軸 6.6m、短軸 5.93mの隅丸方形を呈する。主軸方位はN-24°-Wを指す。壁残高は17~61cmを測る。覆土 黒褐色土に被覆されていた。床面付近には焼土層が検出され、覆土にも焼土が混入しており、焼失を受けた住居址とも考えられる。床面の状態 平坦ではあるが軟弱な床面であった。カマド 西壁中央付近で検出され、礫と円筒形土製品を左右両袖に芯材として使用し、粘土で覆うといった構築方法であった。焚き口付近では、カマド天井部に使用されていたと思われる円筒形土製品が、崩落したと考えられる状態で出土した。カマドは先述のとおり遺存状態は良好であったといえる。カマドを軸とした主軸方位は、N-114°-Wを指す。ピット 22基検出され、P2~P4、P11が主柱穴と思われ、P6・13・18・21についても主柱穴のように見えるため、改築等が行われた結果とも考えられようか。P1は円形でテラスを有し、深さ12cmを測る。P2は楕円形で深さ20cmを測る。P3は楕円形で深さ23cmを測り、下場がオーバーハングする。P4は楕円形で深さ29cmを測る。P5は住居址の北西隅に見られ、楕円形を呈し深さ17cmを測る。P6は楕円形を呈し深さ30cmを測る。P7は楕円形を呈し、深さ15cmを測る。P8は楕円形を呈し、深さ8cmを測る。P9は楕円形を呈し、深さ9cmを測る。P10は北壁下にて検出され、楕円形を呈し深さ7cmを測る。P11は楕円形を呈し深さ20cmを測る。P12は楕円形を呈し深さ11cmを測る。P13は楕円形を呈し深さ20cmを測る。P14は楕円形を呈し深さ6cmを測る。P15は楕円形を呈し、深さ8cmを測る。P16は楕円形を呈し、深さ12cmを測る。P17は楕円形を呈し深さ26cmを測る。P18は楕円形を呈し深さ25cmを測る。P19は楕円形でテラスを有し、深さ34cmを測る。P20は楕円形を呈し深さ24cmを測る。P21は楕円形を呈し、深さ14cmを測る。P22は楕円形を呈し、深さ11cmを測る。P23は楕円形を呈し、深さ8cmを測る。

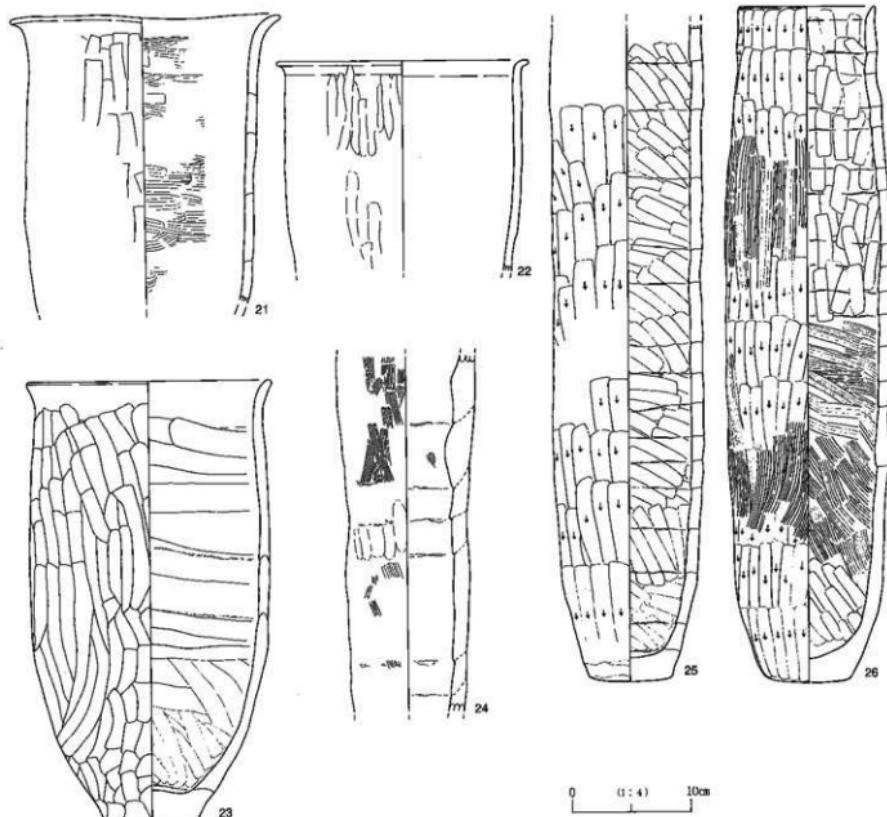
遺物の出土状況 本住居址からは覆土中や床面上から多量に土器が出土した。混入遺物と見られる赤色塗彩された弥生時代の高壺脚部、土師器壺・坏や須恵器壺・蓋などの出土も見られた。カマド周辺から多くの出土遺物が確認された。

### 遺物（第43・44図）

本住居址出土遺物で図示できたものは、土師器の壺・壺、円筒形土製品などで、種別的に見てもバラエティが見られる。

1~4は土師器壺で1は須恵器蓋の模倣壺と思われる。2~4は内面黒色処理の施された壺である。5は土師器高壺の壺部である。内外面には丁寧なヘラミガキが施され、内面には黒色処理が施されている。6~8は土師器の鉢である。6は大型で口縁部が内湾し、7は焼成が悪く、8は内外面ハケメ調整の施された鉢である。9~11は土師器の短頸壺である。11のみ内面に黒色処理が施される。12・13は土師器の瓶で、外面ハケメ調整が施され、内面にはヘラミガキが施される。共に単孔である。14~17は小型の土師器壺である。14~16の底部には木葉痕が残っている。18~23は土師器の壺である。18は縦位にハケメ調整の施された壺、19は胴部球状の壺である。20~23は土師器の長胴壺である。ハケメ調整のされる20とナデあるいはヘラケズリ調整の施される21~23がある。24~26はカマドから出土した土師質の円筒形土製品である。25は口縁部が欠損しているが26には口縁部が残存している。底部には木葉痕が観察されない。外面ハケメ調整の施される24と外側ヘラケズリの施される25、ヘラケズリとハケメ調整の施される26がある。すべての円筒形土製品に共通していることは内面に輪積み痕が看取されることである。26はカマドの左右両袖の構築材として使用されていたものが接合したものである。このことから完形の円筒形土製品を半剖にしてカマドの構築材として使用したことがわかる。

時期 本住居址の所属時期は、出土遺物から古墳時代後期後半~後期末（7世紀前半~7世紀後半）と思われる。

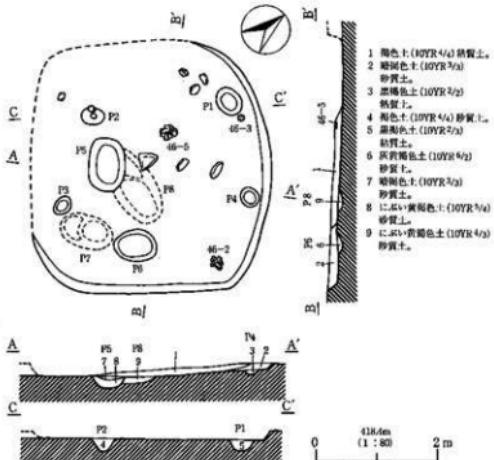


第44図 H23号住居址出土土器実測図

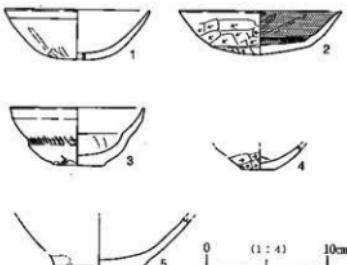
## 12) H30号住居址

遺構（第45図）

検出位置 Xえ10、Xお9・10、Yお1 グリッド。重複関係 なし。平面形態 長軸3.98m、短軸3.77mの隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位はN-50°-Wを指す。西壁と南壁の一部は壁面が確認できなかった。壁残高は0~15cmを測る。覆土 褐色土、暗褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦ではあるが軟弱な床面であった。カマド 検出されなかった。ピット 8基検出された。P1は楕円形で深さ16cmを測る。P2は楕円形で深さ20cmを測る。P3は楕円形で深さ15cmを測る。P4は楕円形で深さ8cmを測る。P5は楕円形を呈し深さ20cmを測る。P6は楕円形を呈し深さ11cmを測る。P7は楕円形でテラスを有し、深さ17cmを測る。P8は楕円形でテラスを有し、深さ14cmを測る。P7・8は住居址掘り方より検出されたピットである。遺物の出土状況 本住居址からの出土遺物は少なく、遺物も非常に散漫な状態であった。本住居址はカマドが検出されず、明確な床面が確認されなかつたこと、主柱穴がはっきりしない点などを考慮すると、住居として造られている途中で何かの原因により、建設



第45図 H30号住居址実測図



第46図 H30号住居址出土土器実測図

が中止されてしまったか、あるいはもともと住居址という使われかたではなく、他の施設として利用された可能性も高いが、今回は住居址として扱った。

#### 遺物（第46図）

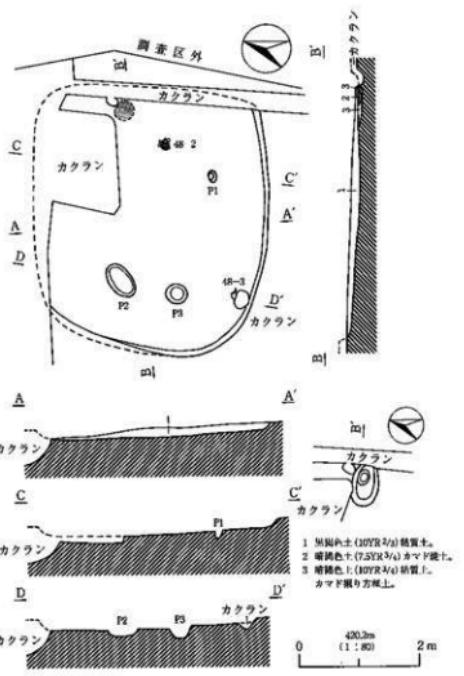
本住居址出土遺物で図示できたものは、土師器の壺・甕のみであった。1は土師器の壺である。2は内面に黒色処理の施された土師器壺、3は外面中位にヘラ状工具による刻みが見られる小型の鉢であり、器形的な面から見た場合、古墳時代前期の小型鉢に類似している。しかし、非常に胎土が粗く、焼成も悪いことから粗製の土器と見られ、該期の壺の形態変化の一つではないかと思われるものである。4は土師器の小型の甕の底部と思われる。5は大甕の甕の底部である。

**時期** 本住居址は先述したとおり住居址というには疑問があるが、住居址として扱った。所属時期は、明確に伴う出土遺物が少ないのであるが、これらから考慮した結果、古墳時代後期～後期末（7世紀前半～7世紀後半）と考えたい。

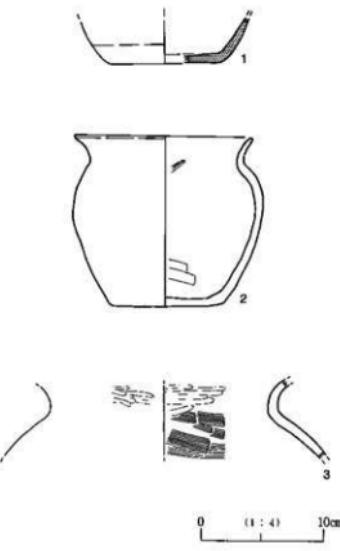
#### 13) H34号住居址

##### 遺構（第47図）

**検出位置** Mけ5・6、Mこ5・6グリッド。重複関係なし。平面形態 北壁と東壁、西壁の一部が擾乱されているため不明であるが、隅丸方形を呈するものと思われる。壁残高は4～8cmを測る。覆土 本址は調査区内最東部に所在し、発掘調査前はブルーがあった場所にあたり、ブルー建設時に削平されてしまっていた。遺構検出を行った際には、すでに覆土が浅い状態となっていた。住居址の覆土は暗褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦ではあるが軟弱な床面であった。カマド 遺存状態は極めて悪く住居址の東側付近から焼土が検出され、この焼土の検出をもって、東壁の中央や北側よりに存在したカマドが、擾乱されてしまったのではないかと推察された。ピット 住居址の西側に並んだ状態で3基検出された。P1は楕円形で深さ14cmを測る。P2は楕円形で深



第47図 H34号住居址実測図



第48図 H34号住居址出土土器実測図

さ5cmを測る。P3は円形で深さ17cmを測る。遺物の出土状況 先述のとおり本住居址は削平を多く受けていた場所にあたるため、覆土の層厚は極めて薄く、出土遺物は非常に散漫な状態であった。

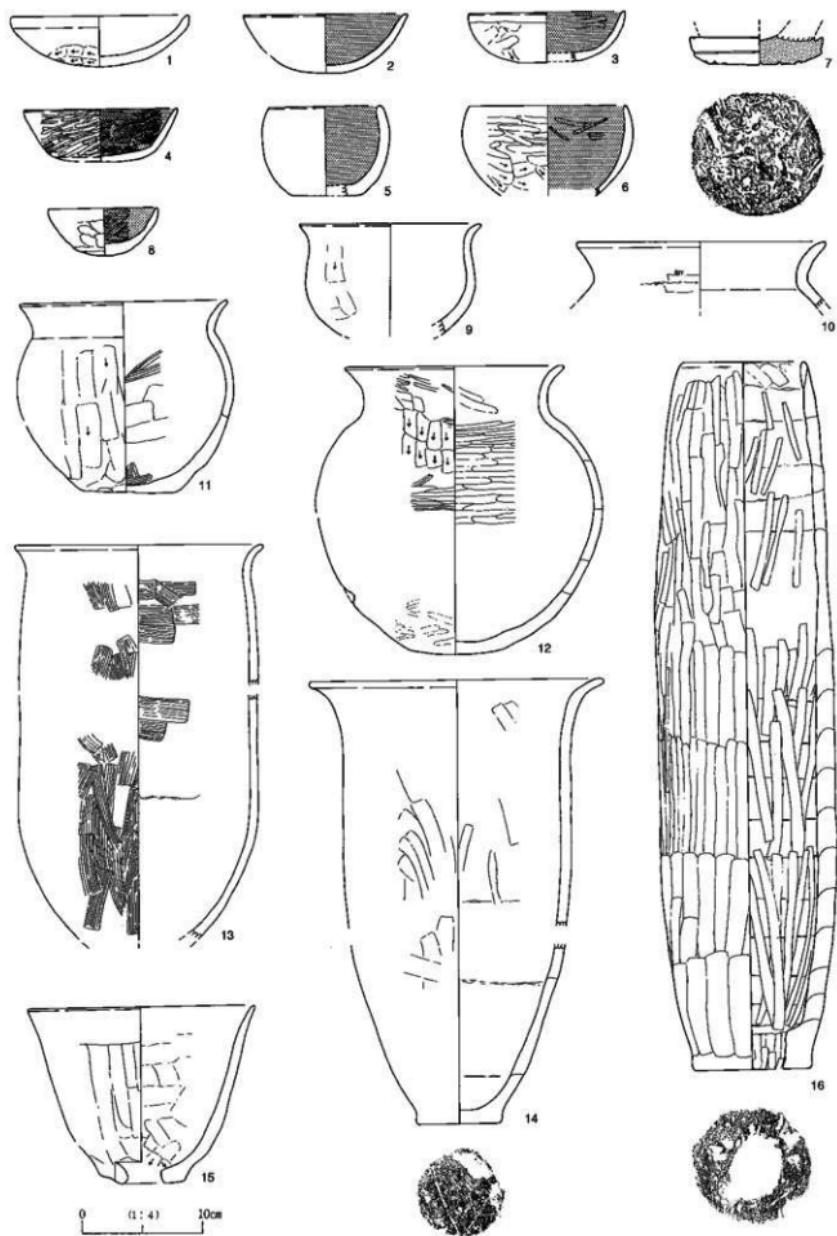
#### 遺物（第48図）

本住居址出土遺物で図示できたものは、3点のみであった。1は底部切り離し後ナデ調整の施された須恵器の壊、2はナデ調整の施された焼成の悪い土師器壊、3は胴部が球形を呈するものと思われ、口縁部の外反度が強いと考えられる土師器の壊である。内面にはハケメ調整が観察される。

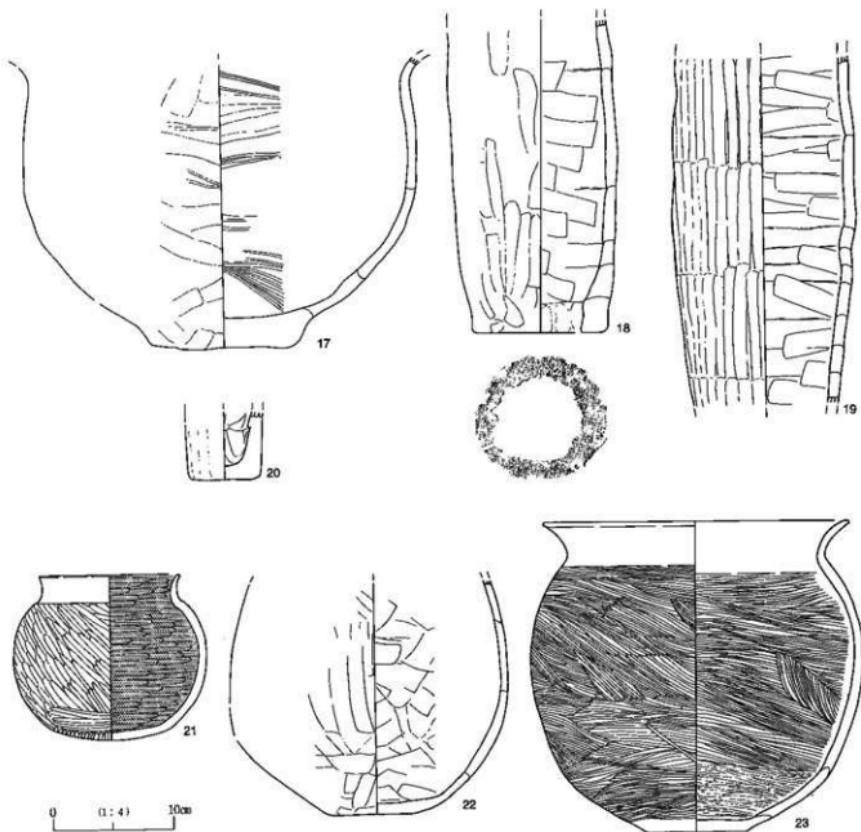
時期 本住居址の所属時期は、出土遺物が少ないわけではあるが、古墳時代後期～奈良時代初頭（7世紀前半～8世紀前半）と思われようか。

#### 14) 他の住居址出土遺物（第49・50図）

ここでは本書に掲載できなかった住居址出土の遺物を取り上げた。1～4は土師器壊である。1・2は体部が半球状を呈している壊で、1は特に浅い形状を呈する。2～4は内面黒色処理の施されたもので、2については摩耗がひどく調整が観察できない状態である。外面の調整は3がヘラケズリ調整、4はヘラミガキ調整が施され、内面にはヘラミガキ調整が施されている。5は内面黒色処理の施された土師器の鉢形の土器である。6は内面に黒色処理、外面にはヘラケズリの施された鉢である。7は須恵器の壢り鉢の底部である。底部外面に棒状工具に



第49图 H4号住居址出土土器实测图



第50図 H4・6号住居址出土土器実測図

より刺突が多く見られる。8は土師器坏の小型品で、内面黒色処理が施されている。9は口縁端部が外反する鉢で、外面にはヘラケズリが施されている。10~12は土師器の甕である。10は口縁から頸部が残存する球胴甕と思われるものである。11は外面継位にヘラケズリ、内面にはヘラケズリやハケメ調整の施される小型の甕、12は胴部が球状を呈している甕で、内面には横位のヘラミガキが施され、外面には継位のヘラケズリが施されている。13~14は土師器長胴甕である。13は内外面にハケメ調整が施され、胴部下方に最大径がある器形を呈している。14には継方向のヘラ状工具によるナデ調整が施され、底部外面に木葉痕が観察される。15は単孔の土師器の瓶である。17は土師器の球胴甕で、色調はぶい黄褐色を呈している。外面には横位のヘラ状工具によるナデ調整が施されている。16・18・19はカマドから出土した土師質の円筒形土製品である。胎土に雲母や長石の粒子を含んでいる。外面には継位のヘラケズリが施され、内面に輪積み痕が残っている。16・18は底部外面に木葉痕が観察されるが、焼成前に底部中央部を穿孔しているため底部が欠損された状態である。20は円筒形を呈する土師質の土製品であるが、16・18・19の円筒形土製品と比較して、大きさ、胎土、焼成等が異なっている。これらを考慮した結果、

カマドに使用された円筒形土製品と別に扱った方がよいと思われる。以上はH4号住居址からの出土遺物である。21は土師器の小型の壺で、内外面に丁寧なヘラミガキが施されている。外面は左から右へ、内面は横位のヘラミガキが観察できる。22は土師器の壺である。内外面にヘラ状工具によるナデ調整が施されている。焼成はあまり良い状態ではない。23は土師器の壺で、胴部が球状を呈している。内外面に丁寧なヘラミガキが左から右下がりに施されている。以上H6号住居址からの出土である。

## 2 土坑址

### 1) D1号土坑址

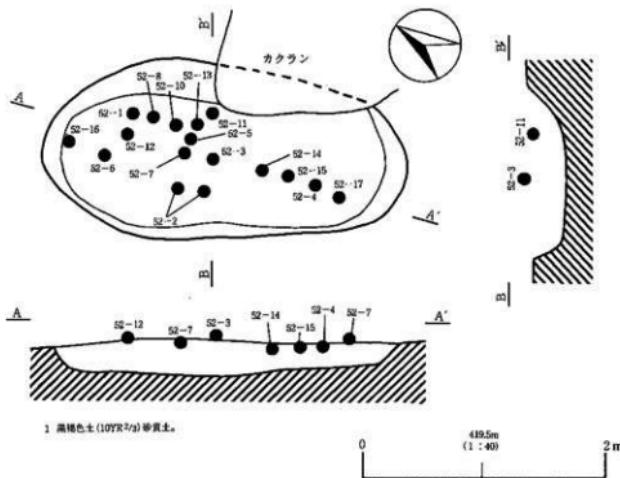
造構 (第51図)

検出位置 Uお8、Uか8  
グリッド。重複関係 なし。  
平面形態 長軸3m、短軸  
1.4mの長楕円形を呈する。  
主軸方位はN-31°-Wを  
指す。東壁の一部が攪乱さ  
れ、壁残高は15~29cmを測  
る。覆土 黒褐色土に被覆  
されていた。底面の状態は、  
概ね平坦であり、断面形態  
は皿状を呈す。遺物の出土  
状況 検出レベルにおいて  
非常に多くの土器が重  
なっており、通常の土坑址  
からの出土状態とは異な  
り、土坑埋没時に集中的に廻棄されたものと思われた。土器の出土状況は土坑址の上面に多く集積し、覆土中か  
らの出土は少ないといった状態であった。

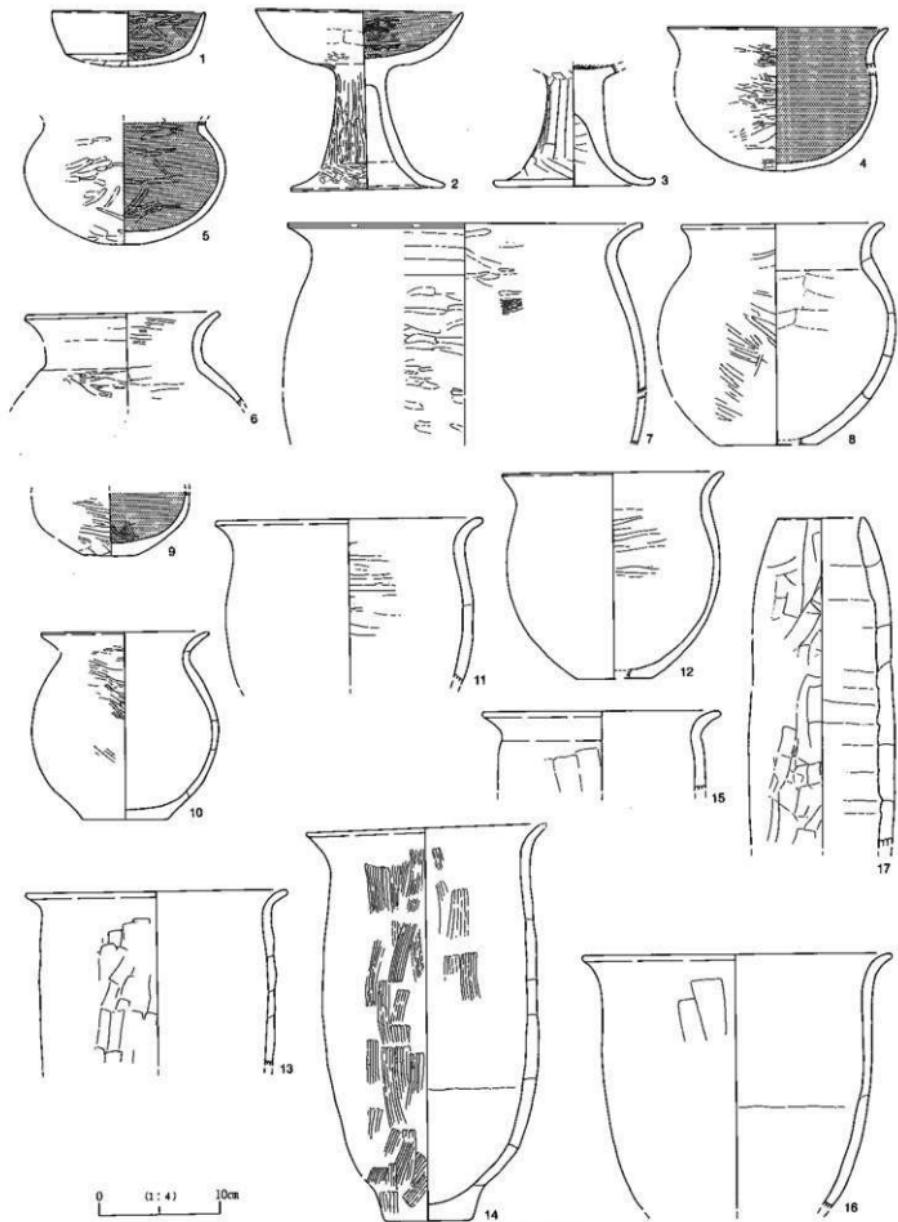
遺物 (第52図)

本土坑址の出土遺物は多く、図示できたものには土師器の壺、高壺、甕、円筒形土製品がある。1は外面底部に縱方向のヘラケズリ、内面にヘラミガキと黒色処理が施される土師器壺である。2・3は内面黒色処理の施される該期の典型的な土師器高壺である。2は脚部外面に丁寧な縦位のヘラミガキ調整が施され、3は縦位のヘラケズリが施される。4・5は小型の鉢と思われるものである。外面に横方向のヘラミガキが施され、内面には黒色処理が施されている。9も同様な器形を呈するものと思われる。6~8・10~12は土師器の甕である。7は大型の球胴甕で、横方向のヘラミガキが施されている。13~15は土師器の長胴甕である。13は外面ヘラケズリ調整、14は外面ハケメ調整が施され、15は外面ヘラケズリ調整が施されている。16は外面ヘラナデが施され、胴部がやや膨らんだ器形を呈している土師器甕である。17は土師質の円筒形土製品で、外面にヘラケズリ調整が施され、内面に輪積み痕が残るものである。焼成は悪い状態である。

時期 本土坑址の所属時期は、出土遺物から古墳時代後期~古墳時代末（7世紀前半~8世紀初頭）と思われる。



第51図 D1号土坑址実測図



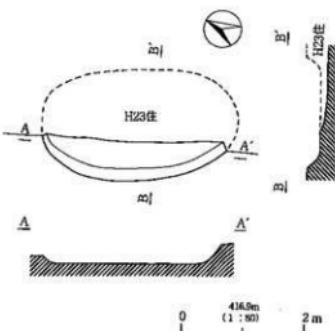
第52图 D1号土坑量出土器实物图

## 2) D 9号土坑址

遺構 (第53図)

検出位置 Eか4、Eき4グリッド。重複関係 H23号住居址に切られる。平面形態 重複関係により大部分を破壊されているため、長軸、短軸及び主軸方位を知り得ないが、長椭円形を呈するものと思われる。検出された中での深さは10~30cmを測る。覆土 黒褐色土に被覆されていた。底面の状態は、概ね平坦と思われる。断面形態は皿状を呈すものと思われる。遺物の出土状況 出土遺物は少なく、図示できるものはなかった。

時期 本土坑址の所属時期を断定できる出土遺物がないが、H23号住居址に切られることから古墳時代後期以前と考えられる。



第53図 D 9号土坑址実測図

## 3 溝状遺構

### 1) M 1号溝状遺構

遺構 (第117図)

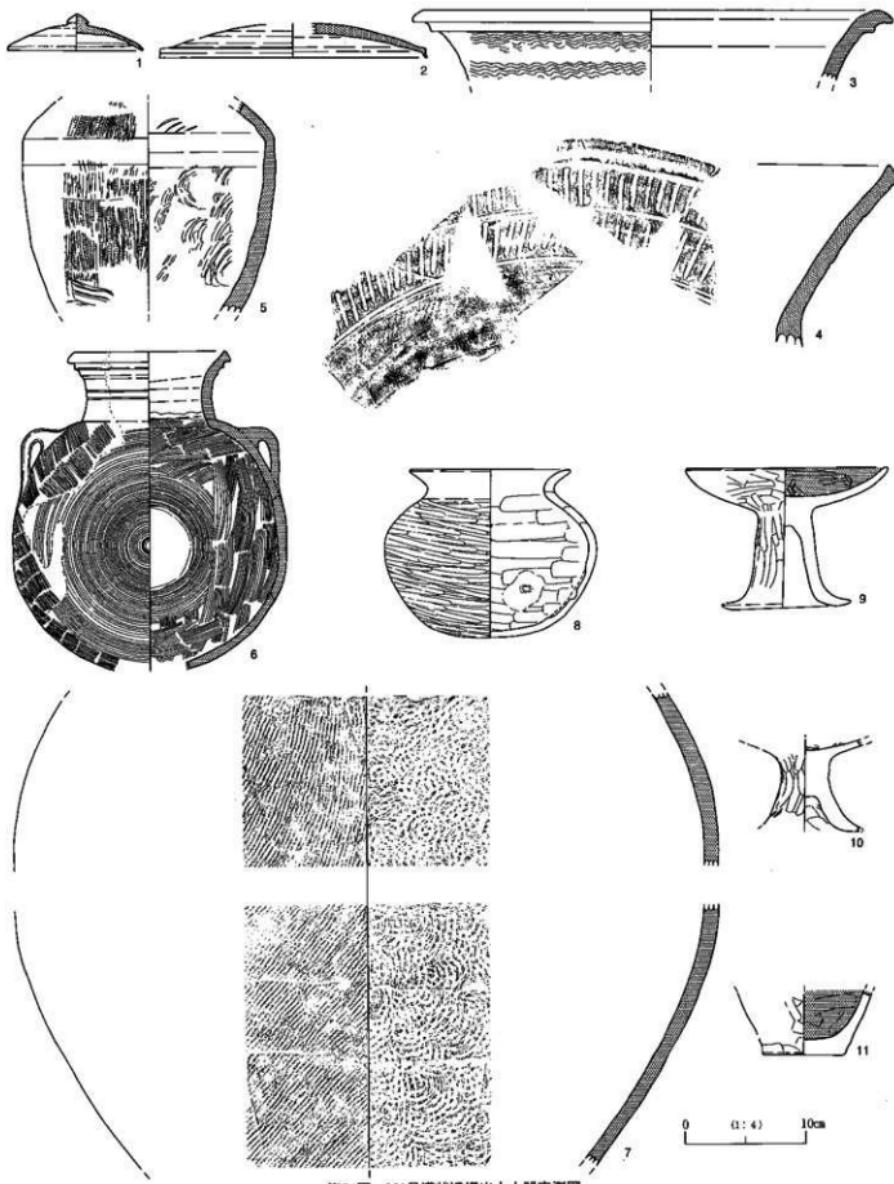
検出位置 Yか2・6・7・8・9・10、Yき7・8、Uか1・2グリッド。重複関係 試掘調査区（I区）のH2号住居址に切られる。宮上遺跡IIの調査区（B区）、宮上遺跡IIIの調査区（D区）において検出された。形状 宮上遺跡IIの調査区（A区）内では24.6m、宮上遺跡IIIの調査区（D区）では2.7mで、試掘調査区（I区）では13.6m検出された。未調査区を含めて54.2mの長さを推定できる。しかしながら、宮上遺跡IIの調査区であるB区では搅乱や昭和35年建設された当時の坂城中学校の工事等による削平を受けたことから溝状遺構の続きは検出されなかった。また、同様に宮上遺跡IIIの調査区（D区）で途切れてしまった。

検出状況は、宮上遺跡IIIの調査区（D区）において幅1.2~3.5m、深さ7~24cmを測る。覆土は黒褐色の粘質土であった。断面形状はU字状を呈していた。検出状況では北側が浅く南側が深い状態で検出されたが、底面レベルを見ると南側が高く、北側が若干低いため北から南に流れていることが予想できるが砂層の堆積は確認されなかった。

遺物 (第54図)

本址出土遺物で図示できたものには須恵器蓋、壺などや土師器の高杯などがある。1は焼成の良い小型の須恵器の蓋で、宝珠形のつまみを有し、内面にかえりがあるものである。2は須恵器の蓋でつまみ部が欠損している。3・4は大型の須恵器の壺の口縁部で、3の外面には櫛状工具による波状文が施されている。4の口縁外面にはヘラ状工具による2段の区画がなされ、その区画内を縦方向に平行沈線によって充填されている。5は須恵器の壺の胴部と思われる。外面には平行タタキ目、内面には円形の当て具痕が残っている。6は口縁部は太く直しながら外反する器形を呈する提瓶と思われるものである。7は大型の須恵器の大壺の胴部で、外面には平行タタキ目調整が施され、内面には当て具痕が多く残っている。8は土師器の壺である。外面にはヘラミガキが施され、内面はヘラ状工具による横方向のナデ調整が施されている。胴部上半に最大径がある器形を呈している。9・10は土師器の高杯である。9はほぼ完形で、杯部内面は黒色処理が施されている。外面は、ヘラ状工具によるナデ調整、脚部は縦位のヘラケズリが施されている。10は脚部のみで外面には、ヘラケズリが施されている。11は土師器の壺の底部である。外面ヘラ状工具によるナデ調整が施されている。

時期 本址の所属時期は、出土遺物から古墳時代後期～古墳時代末（7世紀前半～8世紀初頭）と思われる。



第54図 M1号清状遺構出土土器実測図

### 第3節 奈良・平安時代の遺構・遺物

#### 1 竪穴住居址

##### 1) H 5号住居址

遺構（第55図）

検出位置 Eえ7・8、Eお7・8グリッド。

重複関係 なし。平面形態 調査区域外に南壁・東壁が続くため詳細は確かではないが、方形を呈するものと思われる。

全容を知り得ないため、長軸、短軸及び主軸方位は不明である。検出された中の壁残高は68~77cmを測る。覆土 黒褐色土に被覆されていた。壁面の立ち上がりは緩やかに立ち上がる。床面の状態 平坦ではあったが軟弱な床面であった。カマド 調査区域外に位置するものと考えられるが、北壁か西壁側に位置するものと予想される。ピット

検出されなかった。遺物の出土状況

覆土中から多量に須恵器壺・甕などが出土した。

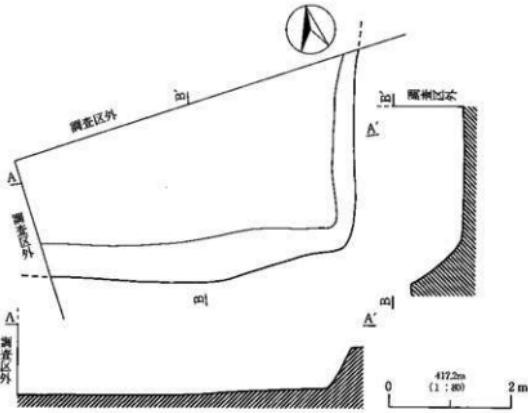
遺物（第56図）

本住居址出土遺物で図示できたものには、圧倒的に須恵器が多いといえる。

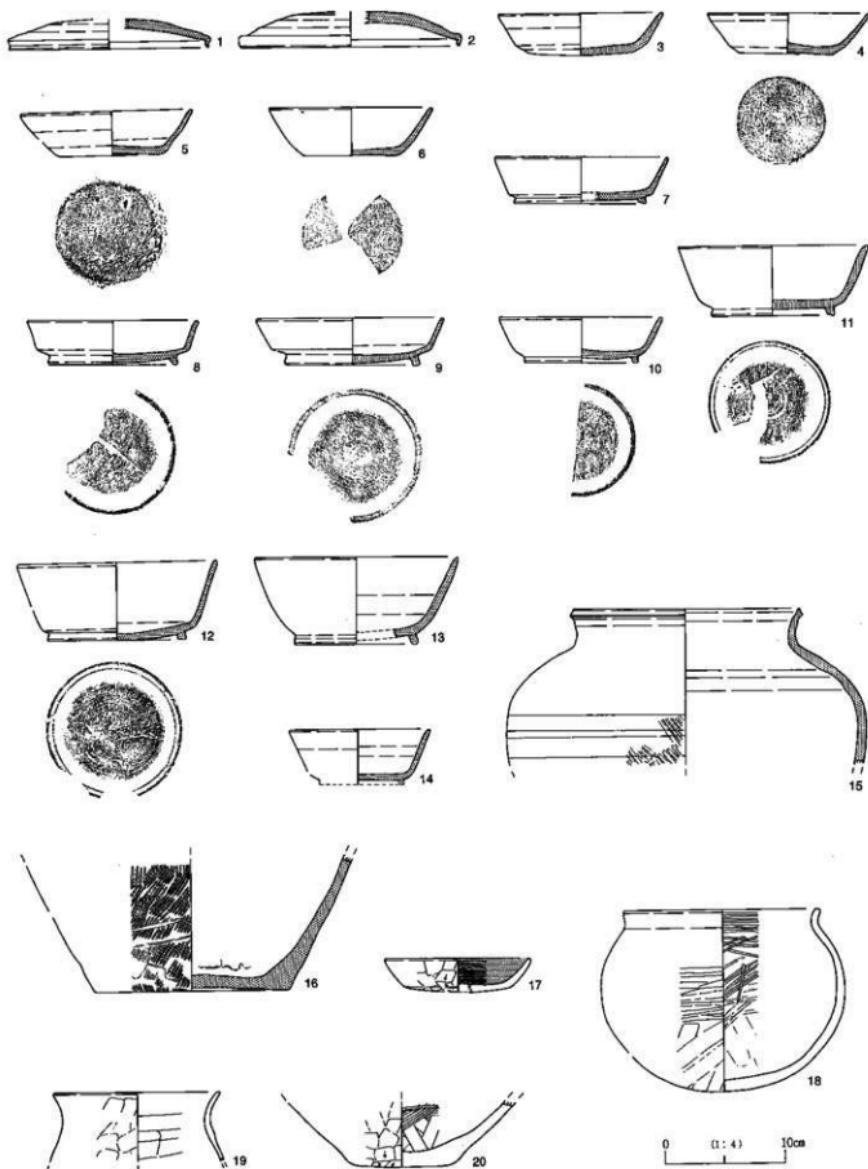
1・2は須恵器壺で、共につまみ部分が欠損している。折り返し部は垂直で、天井部に回転ヘラケズリが全体的に施されている。3~6は須恵器壺である。3の底部には手持ちヘラケズリの痕跡がある。4~6の底部には回転糸切り痕が残っている。7~14は須恵器の高台付壺である。底部の切り離し技法は、回転ヘラキリである。14については底部回転ヘラキリがナデ消された状態である。形態的に見て10のような箱形の浅いタイプと11~13のような深いタイプの2者に大まかに分類できる。

15は須恵器の甕で、胴部上位に最大径を持つ器形を呈し、外面には平行タタキ目調整が施されている。16は須恵器甕の底部で平底を呈し、外面に平行タタキ目調整が施されている。17は土師器壺で、内面に丁寧なヘラミガキと黒色処理が施され、外面にはヘラケズリ調整が施されている。18は土師器壺で、丸底の器形を呈し、内外面にはヘラミガキが施されている。19は土師器の甕で、外面はヘラケズリ調整、内面はヘラ状工具によるナデ調整が施されている。20は土師器甕の底部である。外面ヘラケズリ調整が施され、内面にはハケメ調整とヘラ状工具によるナデ調整が施されている。

時期 本住居址の所属時期は、出土遺物から奈良時代前半~中葉（8世紀前半~中葉）と思われる。



第55図 H5号住居址実測図



第56圖 H5號住居址出土土器實測圖

## 2) H8号住居址

遺構（第57図）

検出位置 Aあ4・5、

U144・5、Uこ4・5、

グリッド。重複関係

H13号住居址に切られ、南壁の一部を破壊されている。

平面形態 長軸5.76m、

短軸5.24mの隅丸方形を呈する。主軸方位はN-76°-Eを指す。

壁残高は34~54cmを測る。覆土

4層に分けられ、4層の黒褐色が壁体の

一次堆積土と思われる

が、その堆積後に

2・3層の黒褐色土

がレンズ状に堆積した

状況が確認された。

床面の状態 平坦ではあるが軟弱な床面

であった。住居址の

中央付近に焼土の痕跡が検出された。

カマド 東壁中央付近

で検出され、左右両袖には縦木芯材とし

て立たせて組み、そ

れらを粘土で覆うと

いった構築方法であ

った。焚き口付近からは若干の出土遺物があった。

カマドを軸とした主軸方位は、N-72°-Eを指す。

ピット11基検出され、P1~P4が主柱穴と思われる。

P1は南壁の下に位置し、円形で深さ59cmを測る。

P2は横円形でテラスを有し、深さ52cmを測る。

P3は不整形でテラスを2段有し、深さ30cmを測る。

P4はP1同様に南壁下に位置し、楕円形で深さ45cmを測る。

P5は西壁の中央付近に位置し、楕円形で深さ11cmを測る。

主柱穴の一部とも考

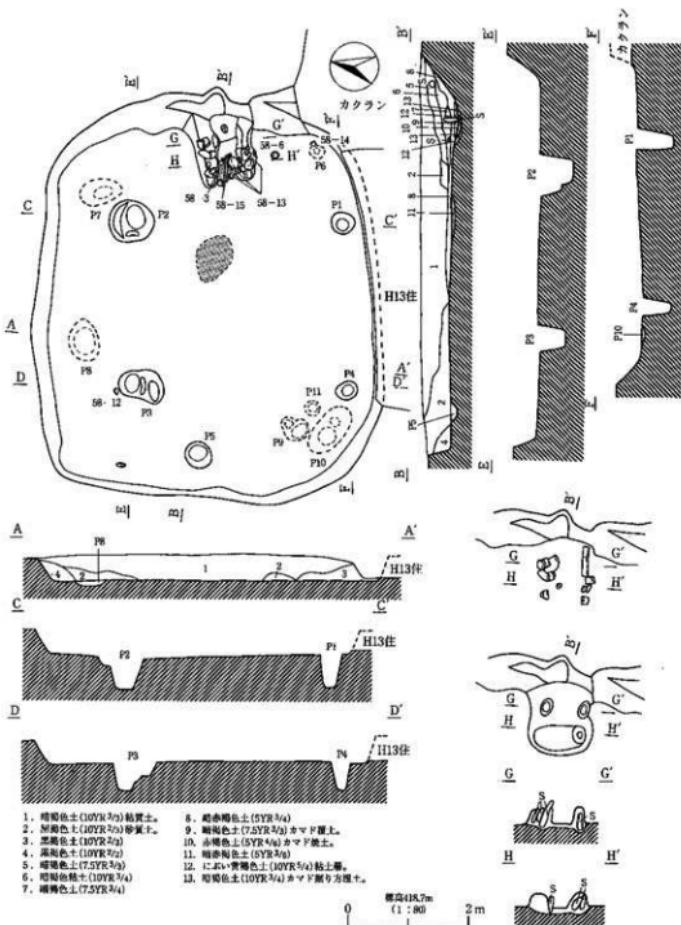
えられようか。

P6~P11は住居址の床面下において検出されたピットである。

P6は小型のピットであり、深さ46cmを測る。

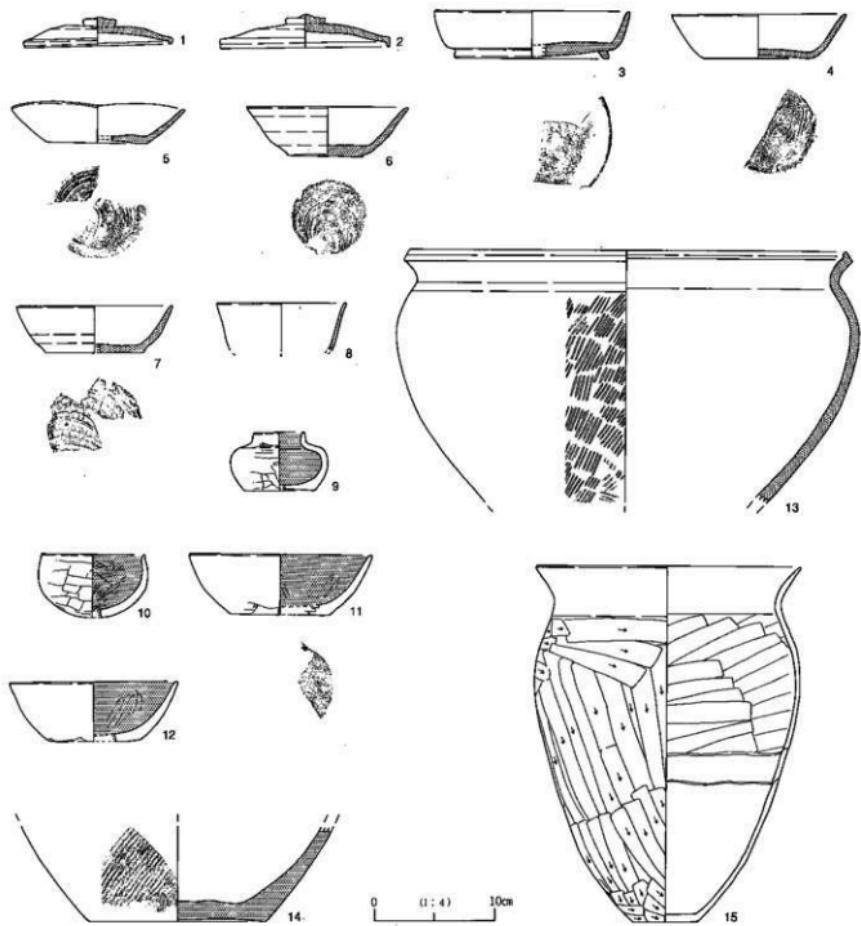
P10は不整形でテラスを有し、深さ60cmを測る。

遺物の出土状況 本住居址からは覆土中やカマド周



第57図 H8号住居址実測図

った。焚き口付近からは若干の出土遺物があった。カマドを軸とした主軸方位は、N-72°-Eを指す。ピット11基検出され、P1~P4が主柱穴と思われる。P1は南壁の下に位置し、円形で深さ59cmを測る。P2は横円形でテラスを有し、深さ52cmを測る。P3は不整形でテラスを2段有し、深さ30cmを測る。P4はP1同様に南壁下に位置し、楕円形で深さ45cmを測る。P5は西壁の中央付近に位置し、楕円形で深さ11cmを測る。主柱穴の一部とも考えられようか。P6~P11は住居址の床面下において検出されたピットである。P6は小型のピットであり、深さ46cmを測る。P10は不整形でテラスを有し、深さ60cmを測る。遺物の出土状況 本住居址からは覆土中やカマド周



第58図 H8号住居址出土土器実測図

辺からやや多くの土器が出土した。土師器の甕・壺、須恵器の壺などの出土であった。

#### 遺物（第58図）

本住居址の出土遺物では、土師器の壺・甕、須恵器の蓋、高台付壺などがあり、若干の時期差が出土遺物から観察されるが、これらは混入遺物として扱った。1・2は須恵器の蓋で擬宝珠つまみをもち、折り返し部の形態が垂直である。3は箱形の須恵器高台付壺で、底部回転糸切り未調整である。4～8は須恵器の壺である。4・5・6は底部回転糸切り未調整である。7は静止糸切り未調整で、灰白色を呈している。9は土師器の小型甕で、

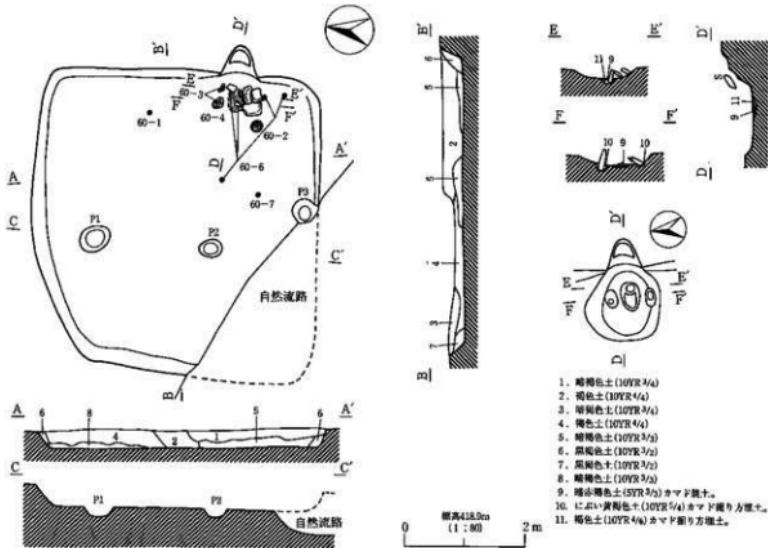
内面黒色処理の施されるものである。10は土師器の坏で内面黒色処理、外面ヘラケズリが施されている。これら2点は、流れ混みによる混入遺物と考えられる。11・12は土師器の黒色土器で、11は底部回転糸切り未調整である。13は外面に平行タキ目調整の施された須恵器の広口の壺である。14は壺の底部で外面には平行タキ目調整が施され、平底を呈している。突帯付四耳壺かと思われる。15は土師器壺で、いわゆる武藏型の壺である。口頭部の形態が「く」の字状を呈し、外面にはヘラ状工具によるヘラケズリが施されている。最大径は胴部の上位に見られる。

時期 本住居址の所属時期は、出土遺物から奈良時代末～平安時代前半（8世紀後半～9世紀前半）と思われる。

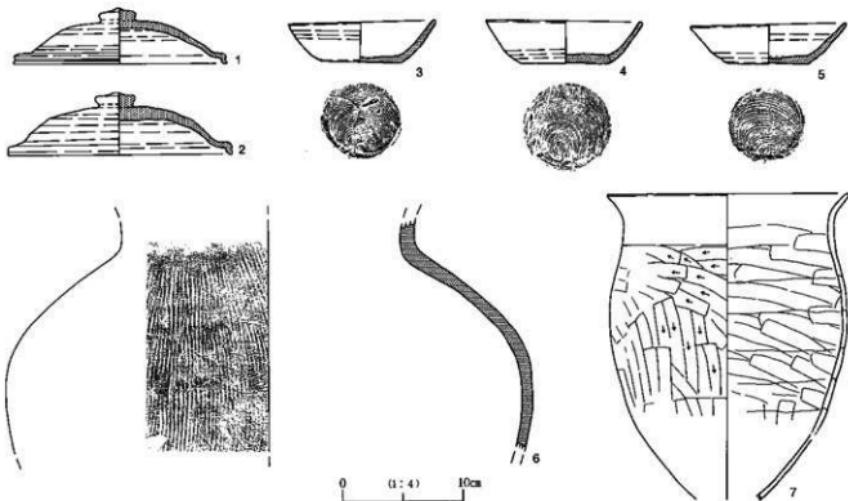
### 3) H12号住居址

遺構（第59図）

検出位置 Uき7・8、Uく7・8、Uけ7・8グリッド。重複関係 自然流路に切られ、住居址の南壁と西壁の一部を破壊されていた。平面形態 長軸4.6m、短軸4.35mの不整形は隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位はN-85°-Eを指す。壁残高は26～41cmを測る。覆土 8層に分けられ、暗褐色土、褐色土、黒褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦ではあるが堅固な床面ではなかった。カマド 東壁中央やや南よりから検出された。カマドの構築には砾を抽石として使用されていた。遺存状態は、あまり良好ではなかった。ピット 3基検出された。P1は楕円形で深さ14cmを測る。P2は楕円形で深さ9cmを測る。P3は自然流路に一部破壊されてはいるが、楕円形で深さ10cmを測る。主柱穴はP1、P3とも考えられる。遺物の出土状況 本住居址の遺物はカマドやその周辺、覆土中や床面上から出土であった。



第59図 H12号住居址実測図



第60図 H12号住居址出土土器実測図

#### 遺物（第60図）

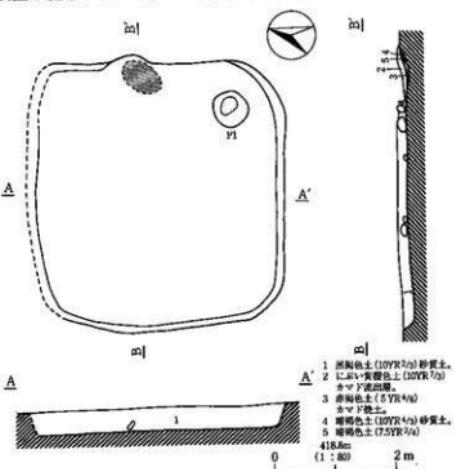
本住居址出土遺物で図示できたものは、須恵器の蓋・壺・甕、土師器の甕のみであった。1・2は須恵器の蓋で擬宝珠つまみを有し、外面天井部に回転ヘラケズリ調整が施されている。2の外面に火燐が観察され、折り返し部は垂直な形態を呈している。3～5は須恵器の壺である。底部の調整は回転糸切り未調整である。6は須恵器の大甕で、胴部中位で肩が張る器形を呈している。外面には平行タタキ目調整が施されている。7は土師器の甕で、いわゆる武藏型の甕である。口頭部がゆるやかな「コ」の字状を呈し、胴部中位に最大径がある器形を呈している。調整を見ると、外面にはヘラケズリが施され、内面はヘラ状工具によるヘラナデ調整が施されている。

時期 本住居址の所属時期は、出土遺物から奈良時代末～平安時代前半（8世紀末～9世紀前半）と思われる。

#### 4) H13号住居址

##### 遺構（第61図）

検出位置 U145・6、U25・6グリッド。重複関係



第61図 H13号住居址実測図

H8・10号住居址を切る。平面形態 長軸4.17m、短軸3.93mの隅丸方形を呈し、主軸方位はN-73°-Eを指す。壁残高は0~40cmを測る。覆土にいぶい黄褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦ではあるが堅固な状態ではなかった。カマド 東壁中央やや北よりから検出された。カマドの構築には礫を補石として使用されていたが、遺存状態はあまり良好な状態ではなかった。ピット 1基検出されただけであるため、主柱穴については不明な点が多い。P1は梢円形で深さ14cmを測る。遺物の出土状況 本住居址の遺物は非常に少なく、散漫な状態であった。

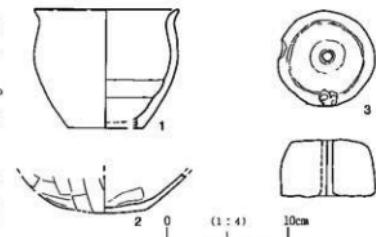
#### 遺物（第62図）

本住居址出土遺物で図示できたものは、土師器の壺、紡錘車である。1は土師器の小型の壺で、摩耗が著しい状態であるが、ロクロ整形されたものと思われる。2は土師器の壺の底部で、いわゆる武藏型の壺である。外面にはヘラケズリ調整が施されている。3は土師質の大型の紡錘車で重量は325gを測る。表面はナデ調整が施される。時期 本住居址の所属時期は、出土遺物が少ないわけではあるが、重複関係を考慮した結果から平安時代前半（9世紀前半）以降と考えたい。

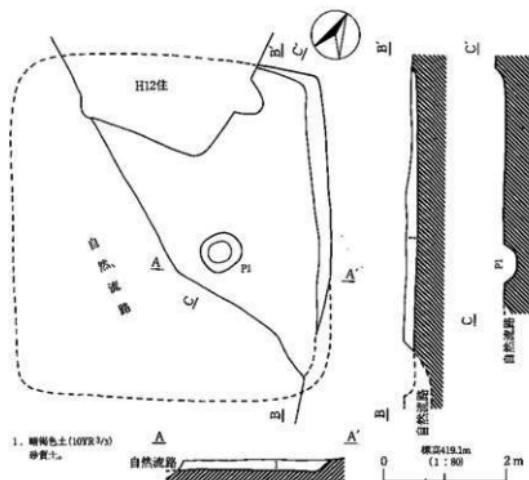
#### 5) H14号住居址

##### 遺構（第63図）

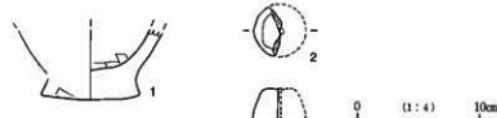
検出位置 Uき8・9、Uく8・9グリッド。重複関係 H12号住居址と自然流路に切られ、住居址の北側、西側、南側の床面の一部と壁面が破壊されており、残存していたのは住居址の中央部から東側の一部分のみに過ぎなかった。平面形態 平面形態は、重複関係により破壊されているところが多いため、推定ではあるが隅丸方形を呈するものと思われる。壁残高は東壁で17~33cmを測る。同様に重複構造に破壊されたため、長軸、短軸及び主軸方位が不明であった。覆土 暗褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦ではあるがあまり堅固な床面ではなかった。カマド 検出されなかった。重複関係を考慮した結果、北壁あるいは、西壁の中央付近に所在したものが破壊されてしまったため、検出されなかつたと思われた。ピット 1基検出され、



第62図 H13号住居址出土土器実測図



第63図 H14号住居址実測図



第64図 H14号住居址出土土器実測図

主柱穴については不明である。P1は楕円形を呈し深さ20cmを測る。**遺物の出土状況** 本住居址はH12号住居址や自然流路に住居址の半分以上を破壊されているため、調査遺構の面積自体が少なく、出土遺物は少なかった。その中で出土したほとんどの土器は覆土中からの出土であった。

#### 遺物（第64図）

本住居址の出土遺物で図示できたものは2点のみである。1は土師器の壺の底部である。内外面にヘラケズリが施されている。2は土師質の紡錘車である。色調は灰白色を呈し、約半分のみの残存ではあったが大筋の情報は知り得ることができた。他の土器は図示できなかったが、これらの土器について若干触れると、出土遺物において土師器の壺が占める比重が高いようであった。器種的には長胴壺や球胴壺が主体を占めていた。

**時期** 明確な本住居址の所属時期を知り得る遺物がなかったため、詳細は不明であったが、出土遺物や重複関係から奈良時代の初頭（8世紀初頭）と考えたい。

#### 6) H15号住居址

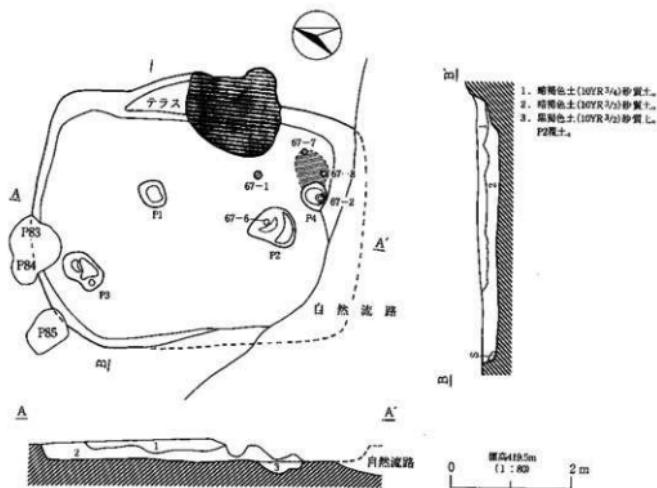
##### 遺構（第65・66図）

**検出位置** Uお8・9、Uか8・9、Uき8・9グリッド。重複関係 P83・84・85と自然流路に切られ、住居址の南壁の一部と西壁を破壊されていた。平面形態 短軸約3.5mの隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位はN-19°-Wを指す。壁残高は0~52cmを測る。覆土 2層に分層され、色調は暗褐色土を呈していた。床面の状態平坦ではあるがあまり堅固な床面ではなかった。カマド 東壁中央付近から検出された。カマドの構築には多数の礫を軸石として使用し、左右両袖に「ハ」の字状に配した後、褐色の粘土で覆うという手法をとっていた。火床面には礫が直立したままの状態で検出され、支脚として使用されたものと思われた。カマドを軸とした主軸方位はN-87°-Eを指す。遺存状態は、良好な状態であった。また、カマドの北側には焼土が検出され、粘土の残骸も見られたことから、当初のカマドは検出されたカマドの北側に存在し、何らかの理由により移設されたことも推察される。ピット 4基検出され、P1・2が主柱穴と思われる。P1は楕円形で深さ10cmを測る。P2は楕円形でテラスを有し、深さ22cmを測る。P3は楕円形でテラスを有し、深さ39cmを測る。P4は南壁下に位置し、深さ10cmを測る。本ピットの底面に第67図3の須恵器坏が正位に、第67図6の土師器の黒色土器が逆位に合わさった状態で出土した。**遺物の出土状況** 本住居址の出土遺物は南東コーナー付近やカマド周辺からの出土が多かった。

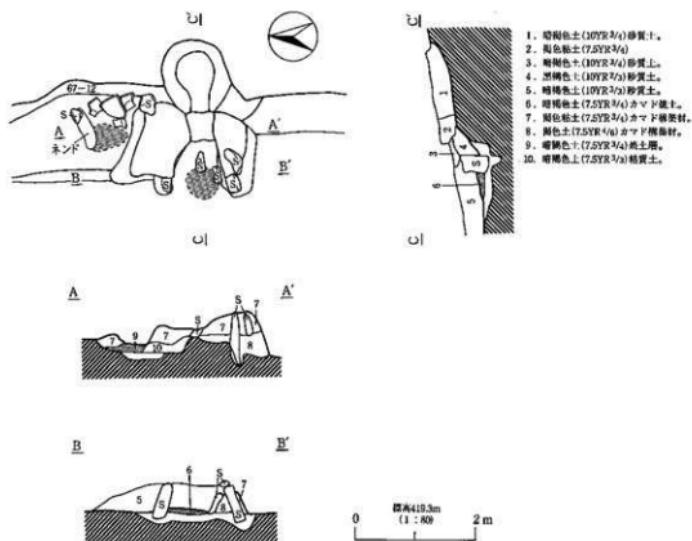
##### 遺物（第67図）

本住居址出土遺物の須恵器の坏・壺、土師器の壺などを図示した。1~5は須恵器の坏である。底部の調整を見ると1は静止糸切り未調整、2~5は回転糸切り未調整である。6は土師器の黒色土器で、内面にはヘラミガキが施される。底部にはヘラ状工具によるナデ調整が施されている。7・8は須恵器高台付坏で回転糸切りの後、ヘラナデ調整が施されている。8はやや底径が大きいものである。9は土師器の小型壺で、外面には継位のヘラケズリ調整が施されている。10は土師器の壺の口縁から胴部、11は土師器の壺の底部である。共にいわゆる武藏型の壺で、10の外面には左方向へのヘラケズリが施され、11には右方向へのヘラケズリが施されている。12は須恵器の壺で、肩の張った広口の器形を呈し、外面には平行タタキ目調整が施されている。

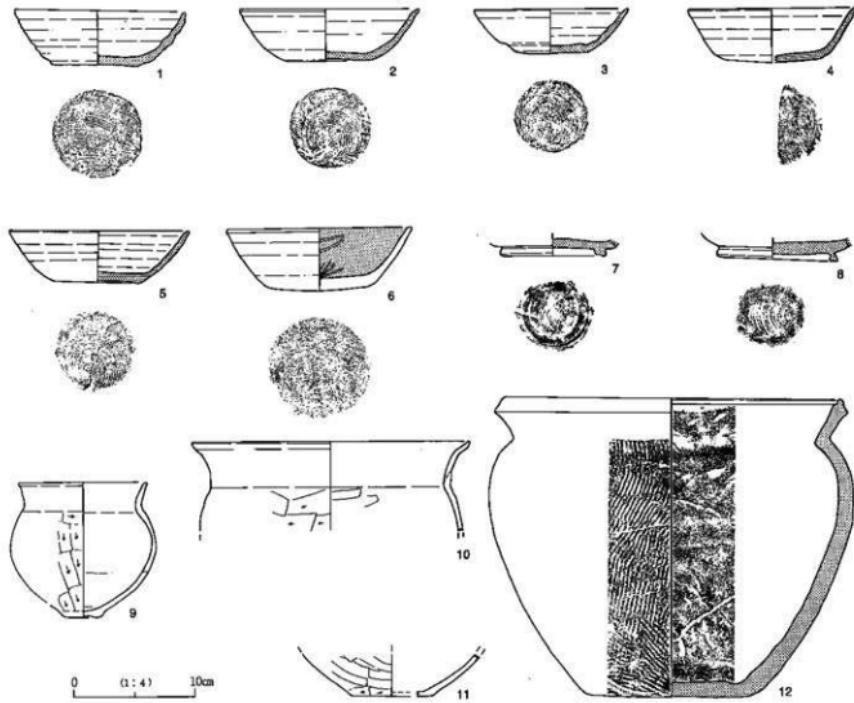
**時期** 本住居址の所属時期は、出土遺物から奈良時代末（8世紀後半～末）と思われる。



第65図 H15号住居址実測図



第66図 H15号住居址カマド実測図



第67図 H15号住居址出土土器実測図

### 7) H19号住居址

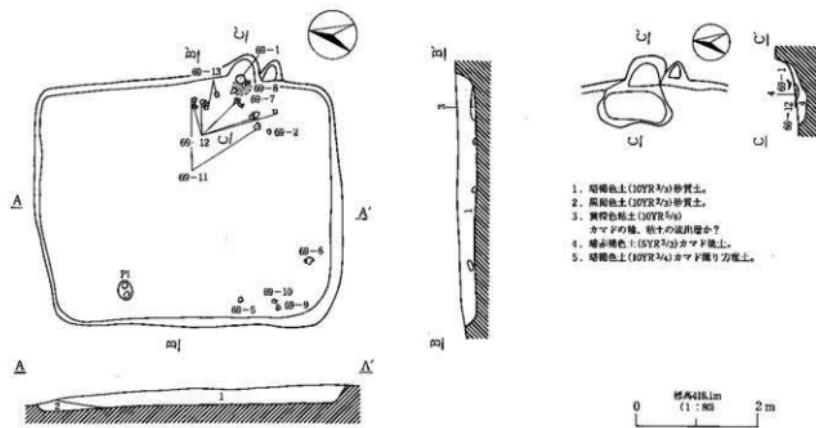
#### 遺構 (第68図)

**検出位置** Wう10、Wえ10、Xう1、Xえ1グリッド。重複関係 H20・21号住居址を切る。平面形態 長軸4.7m、短軸約3.8mの方形を呈する。主軸方位はN-11°-Wを指す。壁残高は2~41cmを測る。覆土 2層に分層され、暗褐色土と黒褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦ではあるがあまり堅固な床面ではなかった。カマド 東壁中央やや南側から2基検出され、当初南側のカマドを使用していたと思われるが、何らかの理由により、北側に移設されたものと思われた。カマド周辺には礫が集中しており、カマド袖の構築に使用された可能性があるが詳細は不明である。本址のカマドは火床面が検出された以外は、遺存状態は悪い状態であった。北側に所在する移設されたと思われる新しいカマドを軸とした主軸方位は、N-104°-Eを指す。ピット 検出されなかった。

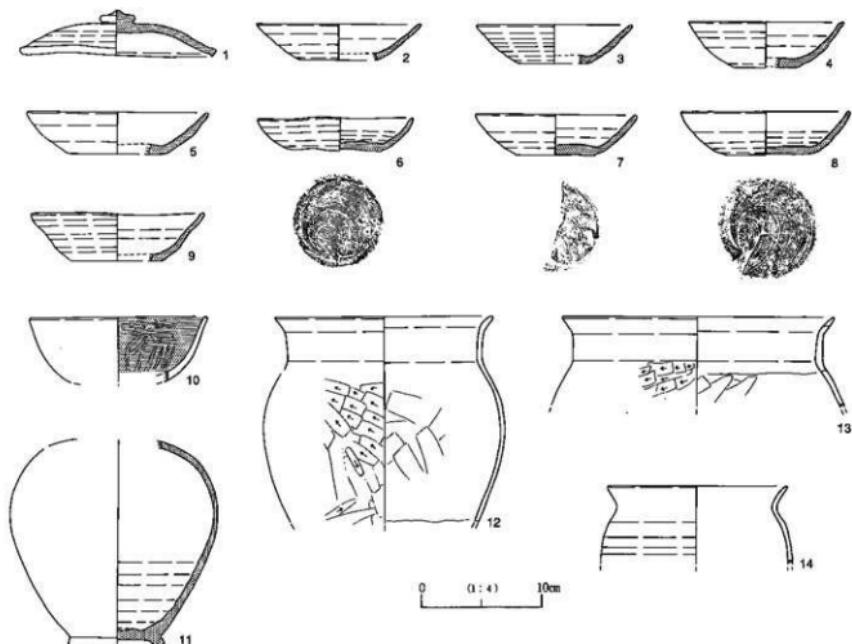
**遺物の出土状況** 本住居址の出土遺物は南東コーナー付近やカマド周辺からの出土が多かった。

#### 遺物 (第69図)

本住居址の出土遺物では須恵器の蓋・坏・長頸壺、土師器の壺などを図示した。1は器形に歪みが観察された須恵器の蓋で、擬宝珠つまみを有し、天井部外面に回転ヘラケズリ調整が施されている。2~9は須恵器の坏で、すべての坏底部の調整は回転糸切り未調整である。10は土師器の黒色土器で、ロクロ成形され、内面にはヘラミガ



第68図 H19号住居址実測図



第69図 H19号住居址出土土器実測図

きが施される。11は須恵器の長頸壺の体部から底部である。一部体部に自然釉が付着している。12・13は土師器の壺で、いわゆる武藏型の壺である。口頭部が「コ」の字状を呈し、胴部はヘラケズリが施されている。14はロクロ整形された土師器壺である。

**時期** 本住居址の所属時期は、出土遺物や重複関係から平安時代前半（9世紀前半）と思われる。

#### 8) H20号住居址

**遺構** (第70図)

**検出位置** Wい10、Wう10、Xい1、Xう1グリッド。

**重複関係** H19号住居址に西壁・東壁・北壁・南壁

の一部を破壊される。平面形態 H19号住居址にほとんどの部分が破壊されているため、長軸、短軸、住居址の形態及び主軸方位は不明である。壁残高は住居址の東壁部分で0~28cmを測る。覆土 黒褐色土に被覆されていた。床面の状態 検出された部分の状況では、平坦ではあったが堅固な床面ではなかった。カマド H19号住居址に破壊されていると思われ、カマドは検出されなかった。重複関係を考慮すると、北壁あるいは西壁に位置していた可能性は高いといえる。ピット 検出されなかった。遺物の出土状況 本住居址は残存部が少ないため、出土遺物は僅かであった。出土遺物には須恵器の壺などが見られた。

**時期** 本住居址の所属時期は、明確に時期を確定できる出土遺物がないが、重複関係から奈良時代～平安時代前半と考えられる。

#### 9) H21号住居址

**遺構** (第71図)

**検出位置** Wえ9・10、

Wお9・10グリッド。

**重複関係** H19号住

居址に南壁の一部を

破壊されていた。

平面形態 長軸4.46m、

短軸約4.44mの隅丸

方形を呈するものと

思われる。主軸方位

はN-23°-Eを指す。

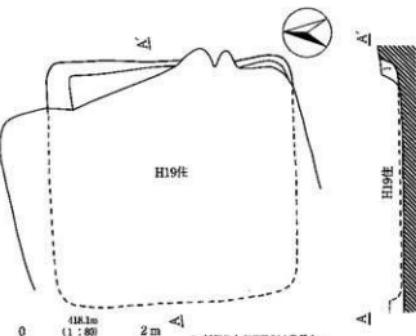
壁残高は6~25

cmを測る。覆土 2

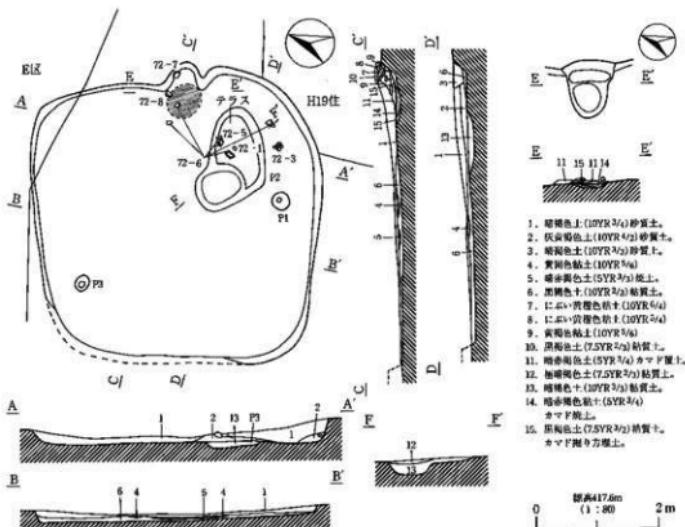
層に分層され、色調

は暗褐色土を呈して

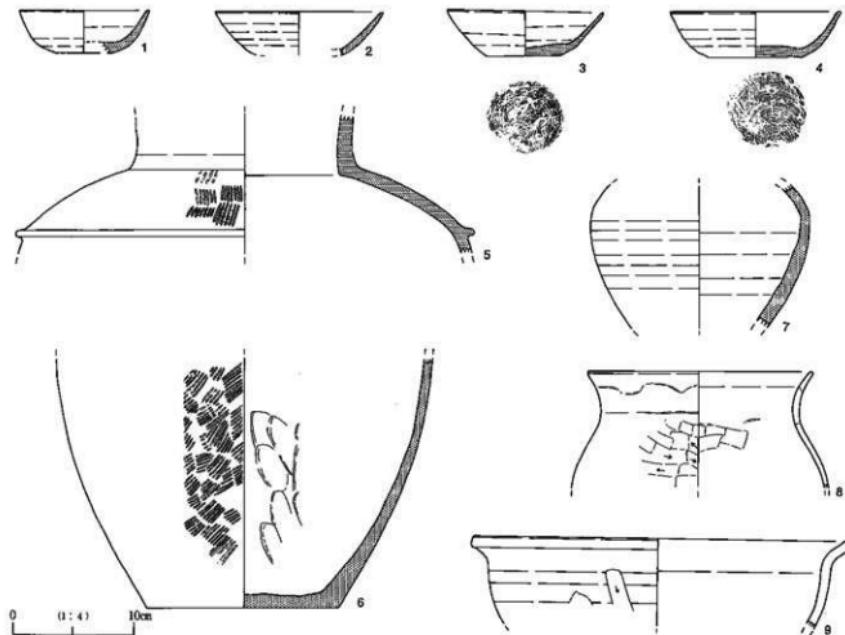
いた。床面の状態



第70図 H20号住居址実測図



第71図 H21号住居址実測図



第72図 H21号住居址出土土器実測図

平坦ではあるがあまり堅固な床面ではなかった。カマド 東壁中央付近から検出された。火床面は検出されたが遺存状態は悪い状態であった。カマドを軸とした主軸方位はN-23°-Eを指す。ピット 3基検出され、主柱穴は明確に捉えられなかった。P1は円形で深さ13cmを測る。P2は稍円形で深さ9cmを測る。P3は大型で土坑といった方がよいかもしれないがピットとして扱った。不整形でテラスを有し、深さ24cmを測る。遺物の出土状況 本住居址の出土遺物はカマド周辺や覆土中からの出土が多かった。

#### 遺物（第72図）

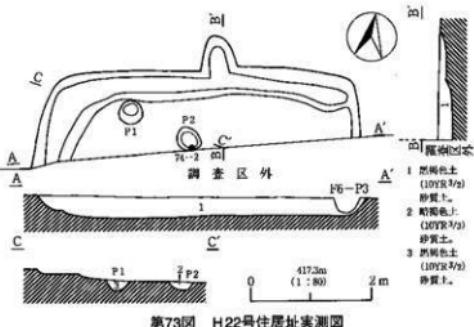
本住居址出土遺物では須恵器の壺、土師器の壺・鍋などを図示した。1～4は須恵器の壺である。1は口径が小さい壺である。3・4は底部回転糸切り未調整の壺である。5は須恵器壺で、肩が張る器形を呈し、突帯が巡らされていると考えられることから大型の突帯付の四耳壺とも思われる。外面は平行タタキ目調整が施され、内面には指頭痕が観察される。6は須恵器の壺の底部から胴部である。5と同一個体とも考えられる。外面には平行タタキ目調整が施されている。内面には、指頭痕が観察できる。7は須恵器の長頸壺の胴部である。8は土師器の壺で、いわゆる武藏型の壺である。頸部の形態が緩やかな「コ」の字状を呈し、外面にはヘラケズリが施され、内面にはヘラ状工具によるヘラナデ調整が施されている。9は土師器の鍋である。胴部上半にヘラケズリが施されている。

時期 本住居址の所属時期は、出土遺物や重複関係から奈良時代末（8世紀末）と思われる。

## 10) H22号住居址

遺構（第73図）

検出位置 Eえ5、Eお5、Eか5グリッド。重複関係 F6号掘立柱建物址に切られる。平面形態 東壁・西壁が調査区域外に続いているため詳細は不明なところが多いが、方形を呈するものと思われる。壁残高は10~14cmを測る。覆土 黒褐色土に被覆されていた。北壁下と西壁下に3~20cmのテラスが検出された。床面の状態 概ね平坦ではあるが堅固な状態ではなかった。カマド 検出されなかったが、調査



第73図 H22号住居址実測図



第74図 H22号住居址出土土器実測図

区域外に存在する可能性が高く、西壁側か東壁側に存在することが予想される。

ピット 2基検出されたが、住居址の全容が把握できる状態でないため、主柱穴ははっきりしていない。P1は円形で深さ23cmを測る。P2は梢円形で深さ13cmを測る。遺物の出土状況 本住居址の出土遺物量は住居址の検出面積が少ないため、覆土中から少量出土したのみである。

遺物（第74図）

本住居址出土遺物で図示できたのは、須恵器の壺と高台付壺の2点のみである。1は須恵器の高台付壺の底部のみである。底部調整は回転ヘラケズリ未調整である。2は須恵器の大壺の胴部である。外面には平行タタキ目調整が施され、内面には指頭痕が残っている。時期 本住居址の所属時期は、出土遺物が少ないと明確な時期は不明であるが、あえていうならば出土遺物から奈良時代と考えられよう。

## 11) H24号住居址

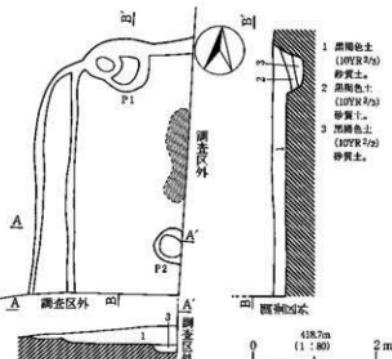
遺構（第75図）

検出位置 Yえ1・2グリッド。重複関係 なし。平面形態 北壁・西壁の一部が調査区域外に続いている。また南壁が調査区域外のため、長軸、短軸、主軸方位が不明である。平面形態は、全容を知り得ないが隅丸方形を呈するものと思われる。壁残高は15~17cmを測る。覆土 黒褐色土に被覆されていた。西壁側に幅約40cmのテラス面を有する。床面の状態 平坦ではあるがあまり堅固な状態ではなかった。カマド 検出されなかったが、東側の住居址の床面上に焼土の検出が見られたことから東・北壁にカマドが所在するものと思われた。ピット 2基検出されたが、主柱穴は捉えられなかった。P1は梢円形でテラスを有し、深さ34cmを測る。P2は調査区域外に延

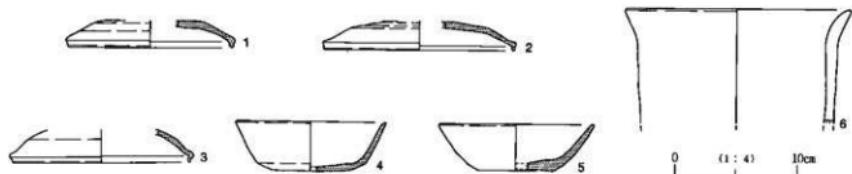
げるため詳細は不明であるが、楕円形を呈するものと思われる。深さは15cmを測る。遺物の出土状況 住居址は一部分のみの検出であること、カマドの検出もなかったため出土遺物が少なかった。これらの遺物の出土は、覆土中からの出土が多かった。

#### 遺物（第76図）

本住居址出土遺物では須恵器の壺、土師器の壺などを図示した。1～3は須恵器の蓋である。1・2は天井部は回転ヘラケズリ調整が施され、口縁端部の折り返し部がまっすぐなものである。3は天井部に回転ヘラケズリ調整が施され、折り返し部が内側に屈曲するものである。4・5は須恵器の壺である。4はヘラ状工具による底部切り離しが



第75図 H24号住居址実測図



第76図 H24号住居址出土土器実測図

なされたと思われる壺である。6は土師器の壺で、外面ナデ調整が施されたものと思われる。

時期 本住居址の所属時期は、出土遺物から奈良時代前半～後半（8世紀前半～後半）と思われる。

#### 12) H25号住居址

##### 遺構（第77・78図）

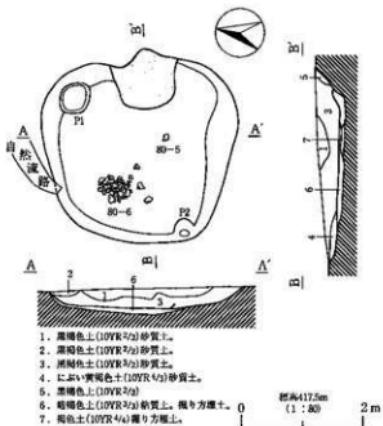
検出位置 Eあ3、Eい3グリッド。重複関係 Y4号住居址を切る。自然流路に切られ、北壁の一部を破壊されていた。平面形態 長軸2.5m、短軸2.4mの開丸方形を呈するものと思われる。主軸方位はN-78°-Eを指す。壁残高は10~34cmを測る。覆土 4層に分層され、黒褐色土、にぶい暗褐色土に被覆されていた。4層のにぶい暗褐色土は壁体の崩落土と思われる。床面の状態 平坦ではあるがあまり堅固な床面ではなかった。カマドは東壁中央付近に位置し、遺存状態は良好な状態であった。カマドの構築には、礫を左右両袖に構築材として使用し、粘質土で覆うといった手法を取っていた。カマドを軸とした主軸方位はN-72°-Eを指す。ピット 2基検出された。P1は北東コーナーに位置し、楕円形で深さ7cmを測る。P2は南西コーナーに位置し、楕円形で深さ9cmを測る。遺物の出土状況 本住居址の出土遺物は須恵器壺、土師器壺・鍋があり、ほとんどが覆土中からの出土であった。

##### 遺物（第79・80図）

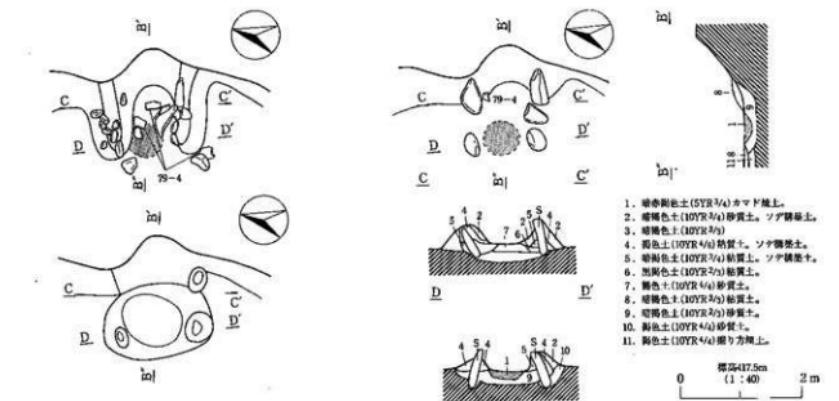
本住居址出土遺物のうち須恵器の壺・壺、土師器の壺などを図示した。1は須恵器の壺である。天井部に回転ヘラケズリが施され、口縁端部の折り返し部が垂直な状態である。2は須恵器壺で口縁から体部にかけて直線的

な器形を呈している。3は土師器の黒色土器で、口クロ成形され、内面に黑色処理が施されている。底部の調整は手持ちヘラケズリである。4は土師器の鍋である。頸部が「く」の字状に外反し、底部は平底を呈する器形と思われる。外面には縦位のヘラケズリの後、横位へのヘラケズリ調整が施されている。5は須恵器壺の底部と思われる。平底を呈し、外面には平行タタキ目調整が施されている。6は須恵器の大型の甕である。有段の口縁がラッパ状に開き、肩が張る器形で、胸部上半に最大径を有する。外面は胴部には平行タタキ目調整が施され、内面には指痕が観察される。内外面の頸部にはハケメ調整が施されている。

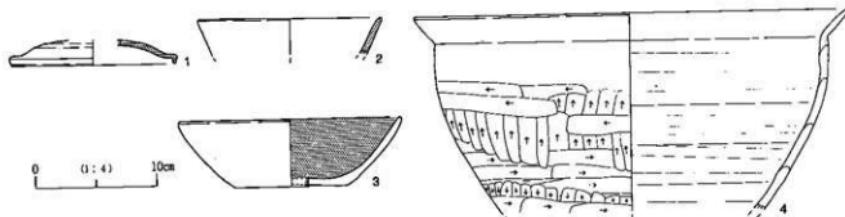
時期 本住居址の所属時期は、出土遺物から平安時代前半（9世紀後半）と思われる。



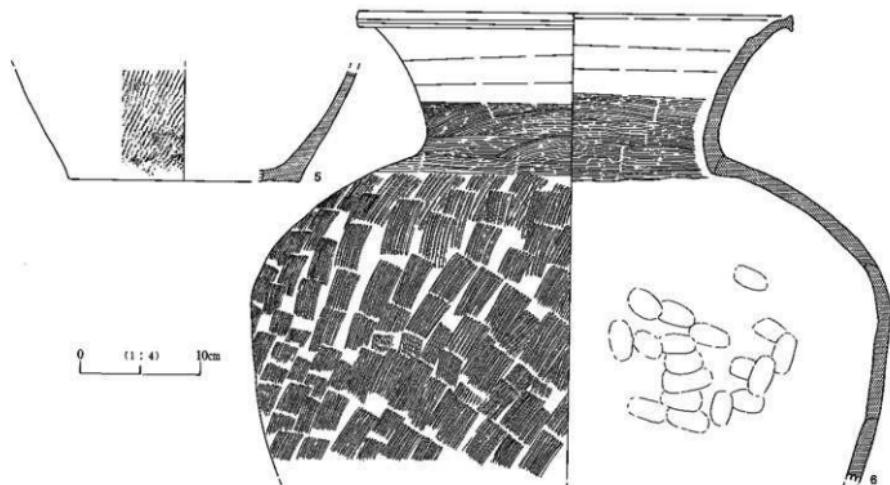
第77図 H25号住居址実測図



第78図 H25号住居址カマド実測図



第79図 H25号住居址出土土器実測図



第80図 H25号住居址出土土器実測図

### 13) H26号住居址

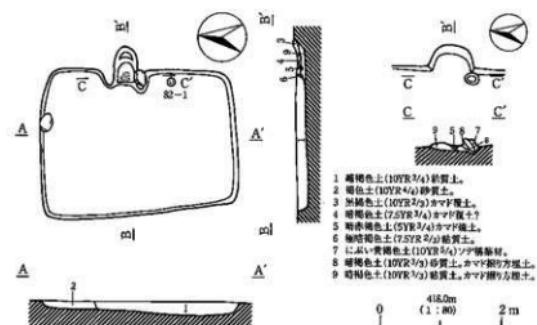
#### 遺構 (第81図)

検出位置 Yく2・3、Yけ2・3グリッド。重複関係 H27号住居址を切る。平面形態 長軸3.08m、短軸2.24mの方形を呈する。主軸方位はN-7°-Wを指す。壁残高は4~16cmを測る。覆土 2層に分層され、暗褐色土と褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦ではあるがあまり堅固な床面ではなかった。カマド 東壁中央付近から検出され、右袖部には礫と粘土で袖を構築していた。本址のカマドは火床面が検出された以外は、遺存状態は悪い状態であった。カマドを軸とした主軸方位はN-84°-Eを指す。ピット 検出されなかった。遺物の出土状況 本住居址の出土遺物は少なかった。出土遺物には土師器の壺等があり、覆土中から出土している。

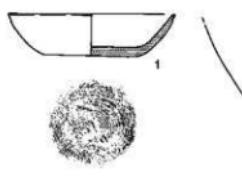
#### 遺物 (第81図)

本住居址の出土遺物の中で、図示できたものは須恵器の壺と土師器の壺の2点のみである。1は須恵器の壺で、底部の調整は回転糸切り未調整である。2は土師器の壺で、いわゆる武藏型の壺の底部から胴部である。外側にはハラケズリが施されている。

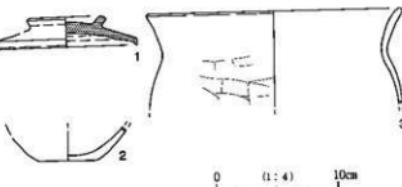
時期 本住居址の所属時期は、出土遺物が少ないため詳細を知り得ないが、重複関係もとにした結果、平安時代（9世紀前半以降）といえようか。



第81図 H26号住居址実測図



第82図 H26号住居址出土土器実測図



第83図 H27号住居址出土土器実測図

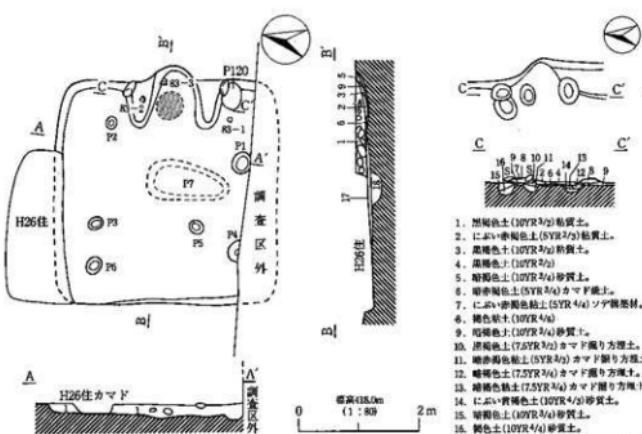
#### 14) H27号住居址

##### 遺構（第84図）

**検出位置** Yく2・3、Yけ2・3グリッド。重複関係 H26号住居址に切られ、北壁の一部が破壊されている。平面形態 南壁や東壁、西壁の一部が、調査区域外に続くため詳細は不明であるが、長軸3.4mの方形を呈する住居址と思われる。推定された主軸方位はN-80°-Wを指す。壁残高は13~20cmを測る。覆土 黒褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦ではあるがあまり堅固な床面ではなかった。カマド 調査区域外に住居址が続いたため詳細を欠くが、東壁中央付近に位置するものと思われる。袖部は粘土で構築されていた。火床面の西側に礫が集中していた。本址のカマドは概ね遺存状態は良いといえよう。カマドを軸とした主軸方位はN-84°-Eを指す。ピット 7基検出され、P1、P4、P6が主柱穴と思われる。他の1基はH26号住居址と重複関係があることから破壊されてしまった可能性が高いと思われる。P1は楕円形で深さ6cmを測る。P2はカマドの北側に位置し、楕円形で深さ9cmを測る。P3は楕円形で深さ4cmを測る。P4は一部調査区域外に続いたため詳細は不明であるが、楕円形を呈するものと思われる。深さは6cmを測る。P5は楕円形で深さ6cmを測る。P6は楕円形で深さ8cmを測る。P7は住居址の床下から検出されたもので、長楕円形を呈している。遺物の出土状況 出土遺物は多くはない、土器では土師器、須恵器壺等が覆土上から出土している。

##### 遺物（第83図）

本住居址の出土遺物では図示できたものは3点のみであった。1は須恵器の蓋で、大型の環状のつまみがつけられているものである。2は土師器の小型壺の底部で、いわゆる武藏型の壺である。外面にはハラケズリ調整が施されている。3は土師器の壺で、2と同様に武藏型の壺の口縁～胴部である。頸部は「く」の



第84図 H27号住居址実測図

字状の器形を呈している。外面にはヘラケズリ調整が施されている。

**時期** 本住居址の所属時期は、出土遺物が少なく明確にできないわけであるが、出土遺物や重複関係から平安時代前半（8世紀後半～9世紀前半）と思われる。

### 15) H28号住居址

遺構（第85図）

**検出位置** Dあ5・6、Dい5・6グリッド。重複関係 H29・35号住居址を切る。平面形態 北側のプランが重複関係により把握できなかつたため、一部推定しているが、長軸3.62m、短軸約2.82mの隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位はN-5°-Eを指す。壁残高は4～13cmを測る。本住居址は、上述したわけであるが、北壁側が切り合っていたこともある、明確なプランを捉えられなかつた。覆土 2層に分層され、暗褐色土と黒褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦ではあるがあまり堅固な床面ではなかつた。カマド 住居址北側に楕円形の焼土址が検出されたこと

より、位置的な面から本米カマドが存在していたであろうと推察した。よって、火床面のみの残存であると考えた。ピット 3基検出され、主柱穴については不明な点が多い。P1は長楕円形で深さ27cmを測る。P2は楕円形で深さ16cmを測る。P3は南西コーナーに位置し、楕円形で深さ6cmを測る。遺物の出土状況 本住居址の出土遺物は極めて少なく、須恵器の壺片が数点出土したに過ぎない。

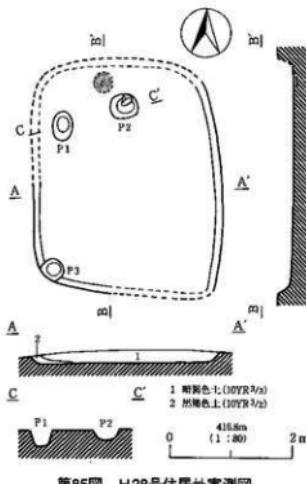
遺物 上述のとおり本住居址出土遺物は少なく、図示できる遺物はなかつた。

**時期** 本住居址の所属時期は、出土遺物が少なく不明であるが、重複関係から平安時代前半（9世紀前半）以降と思われる。

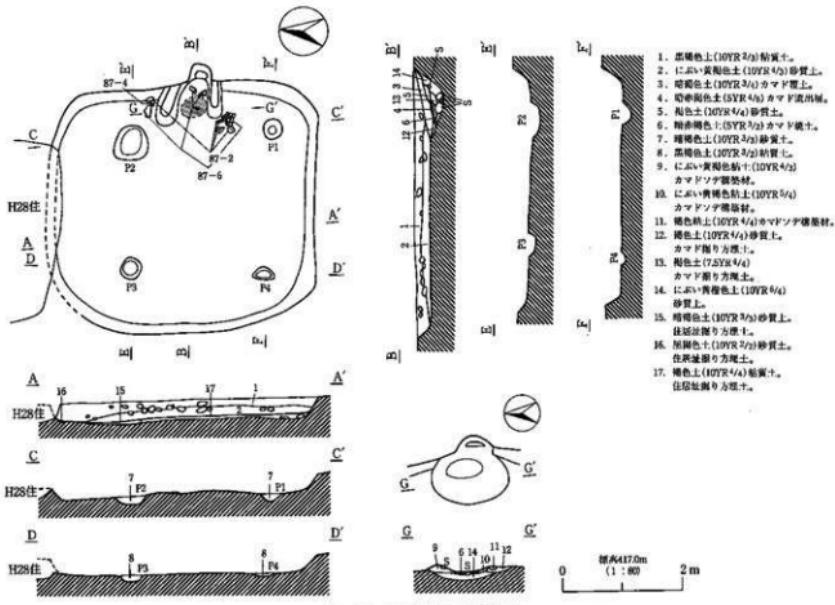
### 16) H29号住居址

遺構（第86図）

**検出位置** Dあ6・7、Dい6・7グリッド。重複関係 H28号住居址に切られ、北壁の一部を破壊されている。平面形態 北壁の一部が破壊されているため推定になるが、長軸4.07m、短軸3.66mの隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位はN-5°-Wを指す。壁残高は14～34cmを測る。覆土 黒褐色土とぶい黄褐色土に被覆され、覆土中には地山に含まれる角亜羅を多く含んでいた。床面の状態 平坦ではあるがあまり堅固な床面ではなかつた。カマド 住居址東壁中央付近に位置し、袖部には礫と粘土を構築材として使用していた。本址のカマドは概ね遺存状態は良い状態であった。カマドを軸とした主軸方位はN-90°-Eを指す。ピット 4基検出され、P1～P4が配置から見ると主柱穴と思われた。P1は円形で深さ13cmを測る。P2は楕円形で深さ13cmを測る。P3は楕円形で深さ12cmを測る。P4は不整形を呈し、深さは5cmを測る。遺物の出土状況 本住居址の出土遺物量はあまり多くはなく、土師器壺・壺、須恵器壺・壺がカマドや覆土中から出土した。



第85図 H28号住居址実測図

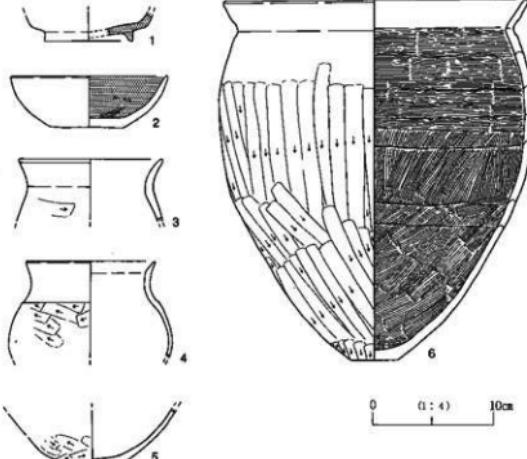


第86図 H29号住居址実測図

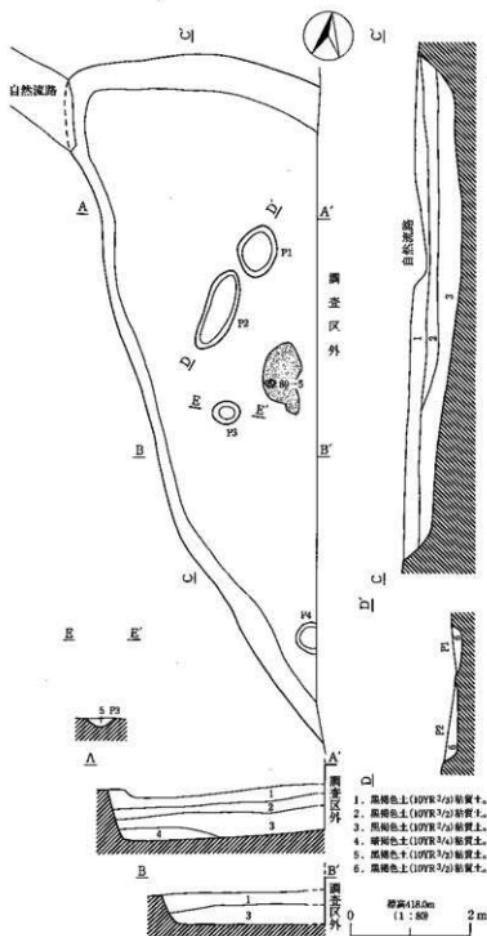
#### 遺物（第87図）

本住居址の出土遺物では図示できたものは須恵器高台付壺、土師器の黒色土器、甕である。1は須恵器高台付壺である。2は土師器黒色土器で、摩滅しており調整が観察できない状態である。3～5は土師器の甕である。3・4は小型の武藏型の甕の口縁～胴部で、頸部の形態が「く」の字状を呈している。5は武藏型の甕の底部である。共に外面にヘラケズリ調整が施されている。6は土師器の砲弾型の壺で、外面縱方向のヘラケズリ調整、内面にはハケメ調整が施されている。

時期 本住居址の所属時期は、出土遺物や重複関係から平安時代前半（8世紀後半～9世紀前半）と思われる。



第87図 H29号住居址出土土器実測図

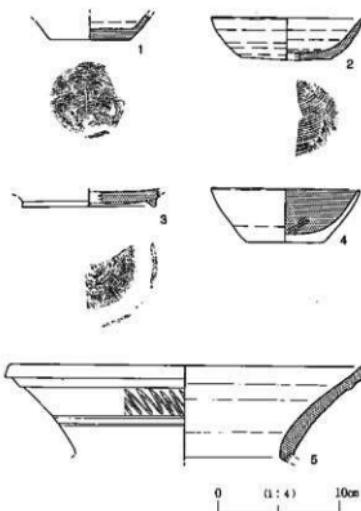


第88図 H31号住居址実測図

態ではなかった。カマド 検出されなかった。ピット 4基検出された。P1は楕円形で深さ19cmを測る。P2は長楕円形で深さ15cmを測る。P3は楕円形で深さ15cmを測る。P4は調査区域外に一部続くため、形態は正確には知り得なかつたが、楕円形を呈するものと思われる。遺物の出土状況 本住居址の出土遺物は少なかつた。須恵器の壺片が覆土中から出土している。

#### 遺物 (第89図)

出土遺物が少なかつたため、図示できたのは5点のみである。1・2は須恵器壺で、底部調整が回転糸切未調



第89図 H31号住居址出土土器実測図

#### 17) H31号住居址

##### 造構 (第88図)

検出位置 Xえ9、Xお6・7・8・9、Xか6・7グリッド。重複関係 自然流路に切れ、西壁の一部を破壊される。また、北壁等が調査区域外に続いている。平面形態 調査区域外に北壁や南壁が続いているため、長軸・短軸・主軸方位が不明である。壁残高は検出できたところで41~79cmを測る。本住居址は形態的にも住居址と異なる可能性が考えられるが、今回は住居址として扱った。覆土 4層に分層され、黒褐色土と暗褐色土に被覆されていた。床面の状態 緩やかな傾斜が見られ、北側や西側が窪む状況が看取された。堅固な状

整である。3は須恵器高台付坏で底部調整は、回転ヘラケズリ未調整である。覆土中からの出土である。4は土師器の黒色土器である。底部にヘラケズリが観察された。5は須恵器壺の口縁部である。外面ヘラ状工具による1条の波状文が施されている。

時期 本住居址の所属時期は明確な出土遺物がないといった状態ではあるが、平安時代（8世紀後半～9世紀後半）と思われる。

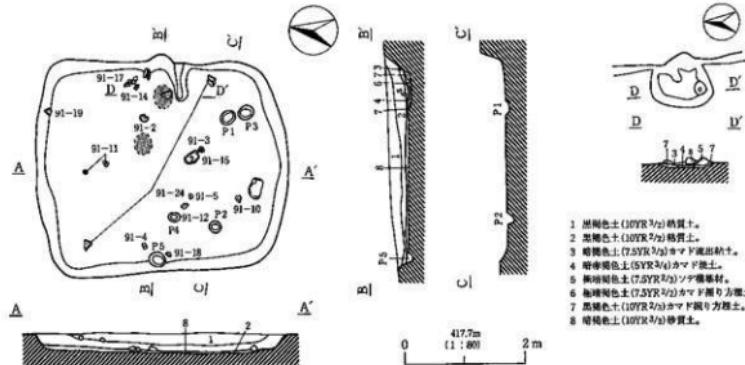
### 18) H32号住居址

#### 遺構（第90図）

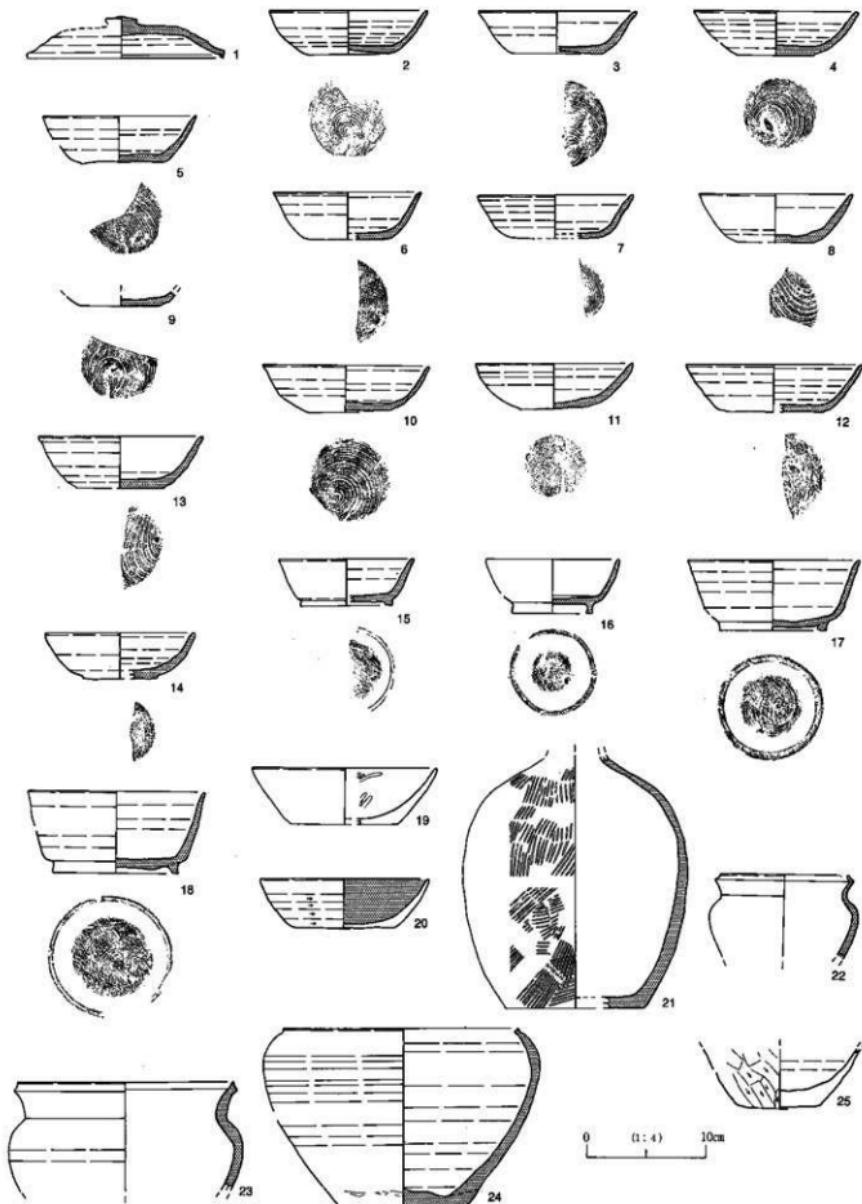
検出位置 Wお10、Wか10、Xお1、Xか1グリッド。重複関係なし。平面形態 長軸3.84m、短軸3.12mの方形を呈する。主軸方位はN-12°-Wを指す。壁残高は10-35cmを測る。覆土 黒褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦ではあるがあまり堅固な床面ではなかった。カマド 東壁中央付近に検出され、粘質土で左右両袖を構築されていた。概ね遺存状態は良いと思われた。カマドを軸とした主軸方位はN-80°-Eを指す。ピット 5基検出され、P1、P2が配置的に見て主柱穴の一部と思われたが、他に主柱穴を構成すると考えられるピットは検出されなかった。P1は楕円形で深さ5cmを測る。P2は円形で深さ9cmを測る。P3はP1の南側に隣接し、楕円形で深さ16cmを測る。P4は西壁側の中央に位置し、楕円形で深さ5cmを測る。P5は西壁中央下に位置し、楕円形で深さ10cmを測る。P4・5は住居址の入口に關係する施設とも考えられるが、詳細は不明である。遺物の出土状況 本住居址の出土遺物量は、本遺跡の他の住居址と比較した場合、非常に遺物量が豊富な住居址といえる。これらの出土土器では土師器坏・壺・須恵器坏・壺等があり、出土のあり方は主に覆土中やカマド、及びその周辺からの出土である。

#### 遺物（第91図）

本住居址の出土遺物量が多いということは先に触れたことであるが、出土遺物の中で図示できたものを見ると須恵器坏が圧倒的に多いといえる。1は須恵器の蓋で、擬宝珠つまみを有し、天井部上面に回転ヘラケズリ調整が施されるものである。口縁端部の折り返し部は垂直状を呈している。2～14は須恵器坏で、底部の調整はすべて回転糸切り未調整である。15～18は須恵器高台付坏である。15・16は底部の切り離しが回転糸切りである。17・18はやや大型で箱形の高台付坏であり、底部の切り離しは回転糸切りである。19はロクロ整形された土師器杯で



第90図 H32号住居址実測図



第91圖 H32号住居址出土土器実測図

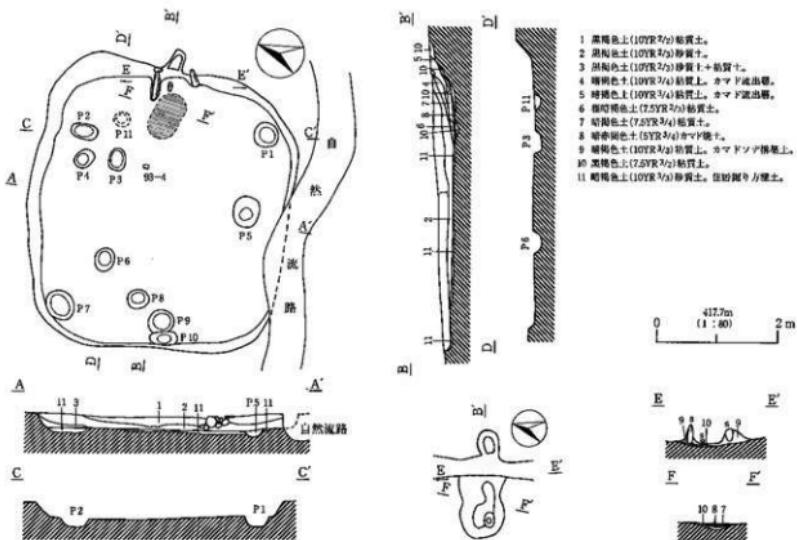
ある。20は土師器の黒色土器で、外面には回転ヘラケズリが施されている。21は口縁部と底部が欠損しているが、須恵器の瓶と思われるものである。外面には平行タタキ目調整が施されている。22は須恵器の鉢で口縁端部が内弯している。23は肩部が底部から直線的に開き、頸部は緩やかに外反する広口の鉢形の土器である。24は大型の須恵器鉢で、口縁端部が急激に外反する器形を呈する。25は土師器壺で、外面にヘラケズリが施されている。

時期 本住居址の所属時期は、出土遺物から平安時代前半（8世紀後半～9世紀前半）と思われる。

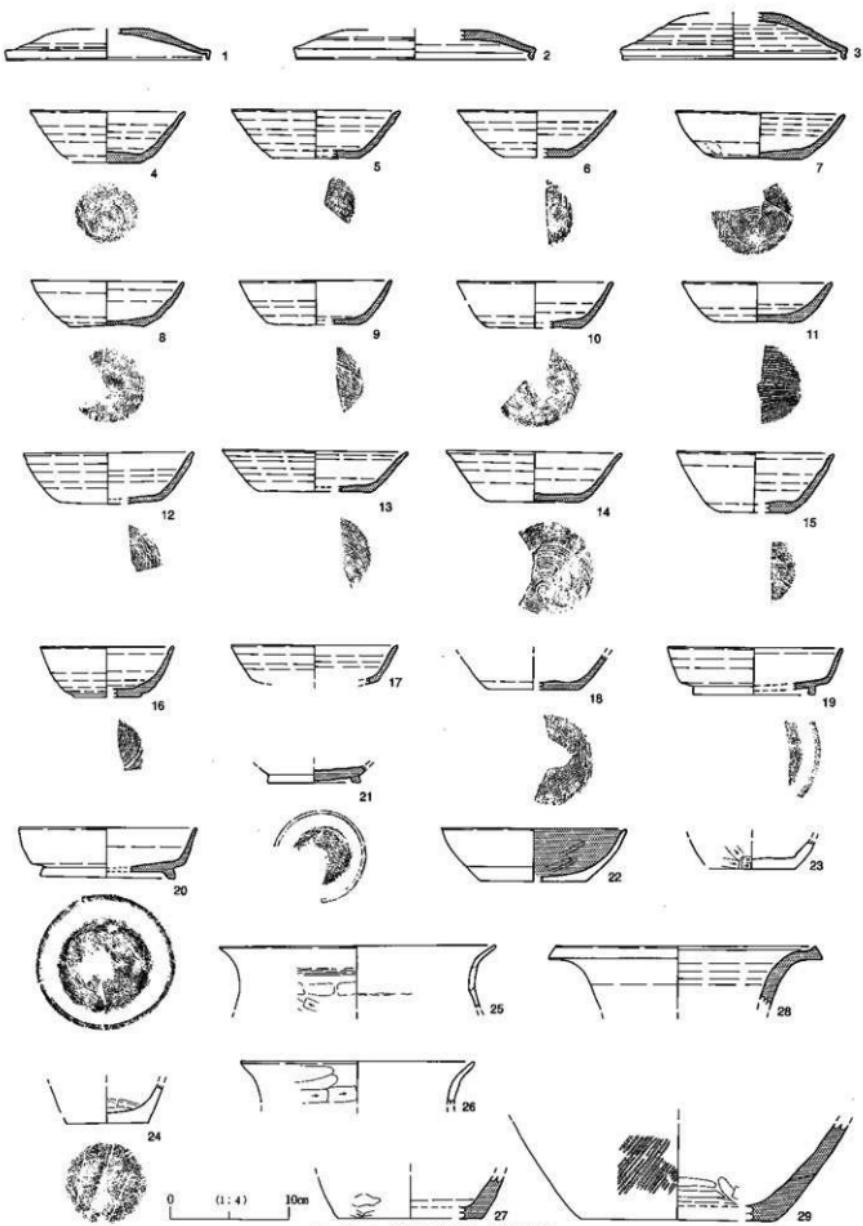
### 19) H33号住居址

遺構（第92図）

検出位置 Wお9・10、Wか9・10グリッド。重複関係 自然流路と重複関係にあり、南壁の一部が破壊されている。平面形態 長軸4.2m、短軸3.9mの隅丸方形を呈する。主軸方位はN-70°-Eを指す。壁残高は11~37cmを測る。覆土 黒褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦ではあるがあまり堅固な床面ではなかった。カマド 東壁中央付近にて検出され、疎を左右両側に一つ配し、粘質土で覆うといった手法のカマドであった。遺存状態は概ね良好であった。ピット 11基検出され、P1、P2が配置的に見て主柱穴の一部と思われたが、他のピットは配置に規則性が無く、主柱穴については明らかにできなかった。P1は円形で深さ20cmを測る。P2は楕円形で深さ13cmを測る。P3は楕円形で深さ10cmを測る。P4はP2の西側に位置し、楕円形で深さ13cmを測る。P5は南壁側の中央下に位置し、楕円形で深さ12cmを測る。P6は楕円形を呈し、深さ13cmを測る。P7は北西コーナーに位置し、楕円形で深さ21cmを測る。P8は住居址西壁側中央付近に位置し、楕円形で深さ10cmを測る。P9はP8同様に中央付近に位置し、P10と接していた。楕円形で深さ18cmを測る。P10は先述のとおりP9と接し、楕円形で深さ18cmを測る。P9・10は位置的な面から住居址の入口に関係する施設とも考えられたが、詳細は不明である。P11はP2



第92図 H33号住居址実測図



第93図 H33号住居址出土土器実測図

のカマド側に位置し、梢円形で深さ6cmを測る。遺物の出土状況 本住居址の出土遺物量は概ね多い方であった。土器では土師器壺や甕、須恵器壺や甕等があり、主に覆土中からの出土であった。

#### 遺物（第93図）

本住居址の出土遺物のうち図示できた土器では須恵器が多いといえる。1～3は須恵器の蓋である。1は口縁端部の折り返し部は垂直であり、2・3はやや内側に折れている。4～18は須恵器壺である。底部調整は9・11が静止糸切り未調整である。これらの底部調整については、回転糸切り未調整といえる。19～21は須恵器高台付壺である。19は底部外面に回転ヘラケズリが施されている。20については、底部回転糸切り後回転ヘラケズリ調整が施されている。また、底部内外面にはすす状のこびりつきが付着し、灯明具として使用された可能性を考えられる。詳細については第V章第3節で後述したい。21は底部回転ヘラキリ未調整で、中央部にヘラ記号と思われる痕跡が観察される。22は土師器の黒色土器である。23は土師器の壺で、外面ヘラケズリ調整が施されている。24～26は土師器甕である。24の底部外面には、木葉痕が観察できる。25・26はいわゆる武藏型の甕で、25について頭部「コ」の字状を呈している。27～29は須恵器の甕である。28は口縁がラッパ状に開くものである。29は外面に平行タタキ目調整が施されている。また、今回細片のため図示できなかったが、土師器の砲弾甕も出土している。

時期 本住居址の所属時期は、出土遺物から平安時代前半（8世紀後半～9世紀前半）と思われる。

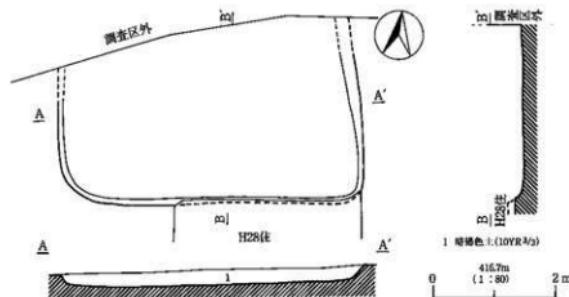
#### 20) H35号住居址

##### 遺構（第94図）

検出位置 Dあ5・6、Dい5・6グリッド。重複関係 H28号住居址と切り合い、南壁の一部を破壊されていた。また、北側が調査区域外となるため、東壁、西壁が調査区域外に続いている。平面形態 先述のとおり調査区域外に続いているため、詳細は不明であるが、隅丸方形を呈するものとも思われる。検出された中での東西長は、6.25mを測る。推定された主軸方位はN-8°-Eを指す。壁残高は3～16cmを測る。覆土 黒褐色土に被覆されていた。床面の状態 平坦ではあるがあまり堅固な床面ではなかった。カマド 検出されなかった。ピット 検出されなかった。遺物の出土状況 本住居址の出土遺物は非常に少ない状態で、それらはすべてが覆土中からの出土であった。

遺物 図示できる遺物は出土しなかった。土器には土師器の甕、壺や須恵器の壺、甕の出土遺物があった。

時期 本住居址の所属時期は、明確に断定できる出土遺物がないために不明な状態である。重複関係や若干の出土遺物を考慮した結果、奈良時代から平安時代前半（9世紀前半）といえよう。



第94図 H35号住居址実測図

## 第4節 挖立柱建物址

### 1) F1号掘立柱建物址

遺構（第95図）

検出位置 Uc3・4、

Aあ3・4グリッド。

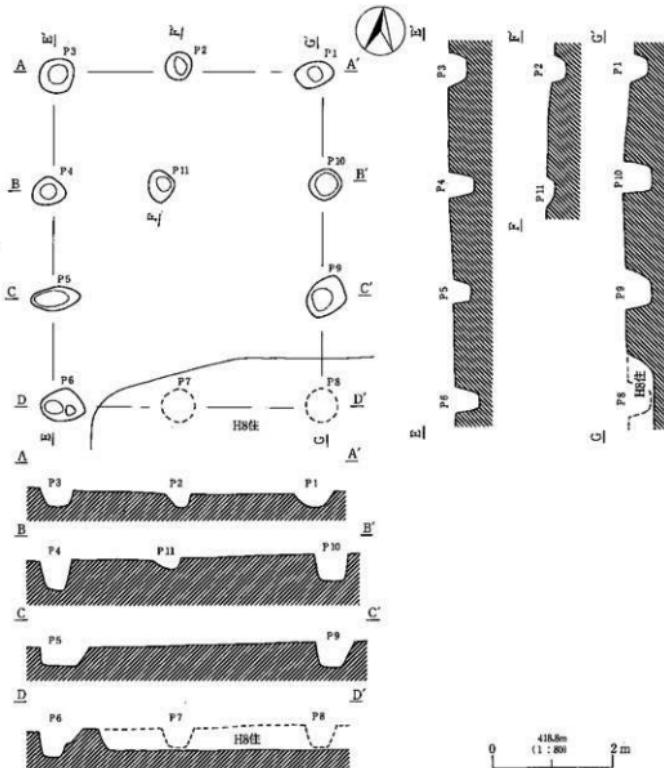
重複関係 H8号住居址と重複関係にあり、ピット2基は検出されなかったが、H8号住居址に破壊されたと考えられた。

平面形態 2間×3間の側柱式で規模は桁行5.56m、梁行4.28mの矩形のプランを呈する。主軸方位はN-5°-Wを指す。

覆土 粘質土に被覆されていた。ピットピットの掘り方は、楕円形を呈しているものが多い。P1は深さ32cm、P2は深さ24cm、P3は深さ31cm、P4は深さ50cm、P5は深さ30cm、P6はテラスを有し深さ41cm、P7は深さ42cm、P8は深さ44cm、P9は深さ16cmを測る。

遺物 遺物は出土しなかった。

時期 本建物址の所属時期は、出土遺物がないため明確にはできないが、H8号住居址との重複関係から奈良時代末～平安時代前半（8世紀後半～9世紀前半）以前と考えられる。



第95図 F1号掘立柱建物址実測図

## 2) F2号掘立柱建物址

遺構 (第96図)

検出位置 Uか7・8、Uき7・8、  
Uく7グリッド。重複関係

H12号住居址と重複関係にあり、P3が破壊されている。平面形態 1間×2間の側柱式で規模は桁行4.3m、梁行4mの矩形のプランを呈する。主軸方位はN-15°-Wを指す。覆土 粘質土に被覆されていた。ピット ピットの掘り方は楕円形を呈し、大きさには大小があった。P1はテラスを有し、深さ38cm、P2は深さ34cm、P3は深さ14cm、P4は深さ40cm、P5は深さ22cm、P6は深さ31cmを測る。

遺物 土師器の甕・坏の細片が出土地しているが、図示できたものは無い。

時期 本建物址の所属時期はH12号住居址との重複関係や出土遺物から、奈良時代末～平安時代前半（8世紀末～9世紀前半）以前と考えられる。

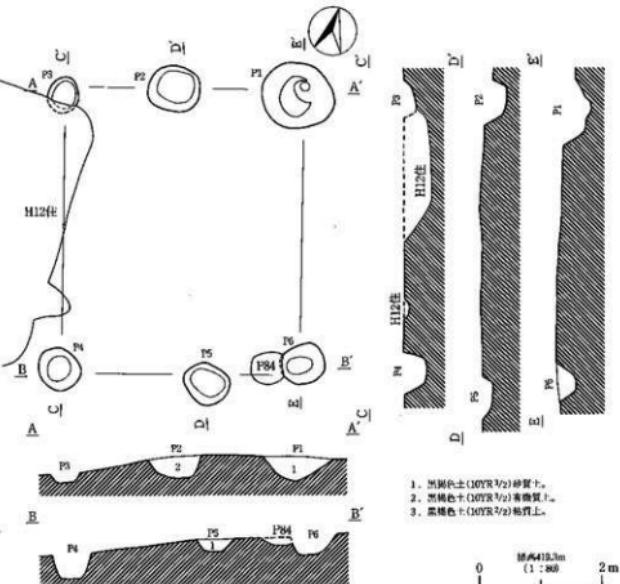
## 3) F3号掘立柱建物址

遺構 (第97図)

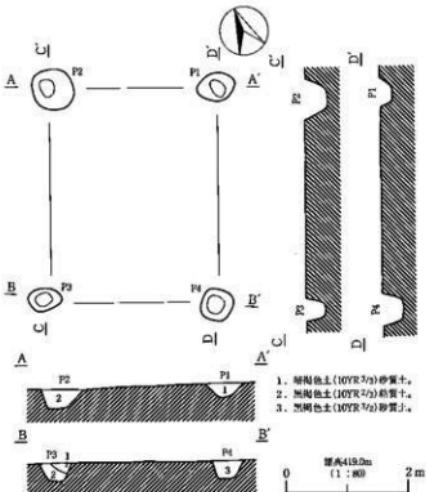
検出位置 Uく7、Uけ7・8グリッド。重複関係 F4号住居址と重複関係にあるが、ピットの切り合いが確認されなかったため、新旧関係は不明である。平面形態 1間×1間の側柱式で規模は桁行3.56～3.6m、梁行2.8mの矩形のプランを呈する。主軸方位はN-24°-Eを指す。覆土 粘質土に被覆されていた。ピット ピットの掘り方は楕円形を呈していた。P1は深さ23cm、P2は深さ37cm、P3は深さ32cm、P4は深さ33cmを測る。

遺物 遺物は出土しなかった。

時期 本建物址の所属時期は切り合い及び出土遺物がないため不明である。



第96図 F2号掘立柱建物址実測図



第97図 F3号掘立柱建物址実測図

#### 4) F4号掘立柱建物址

遺構 (第98図)

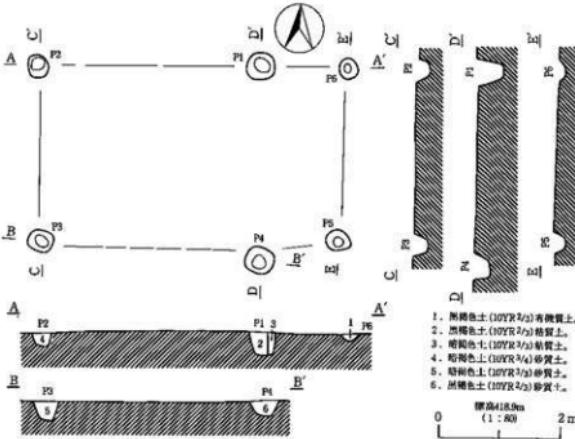
検出位置 UK 6・7、UKE 6・7グリッド。重複関係 F4号住居址と重複関係にあるが、ピットの切り合いが確認されなかったため、新旧関係は不明である。平面形態 1間×1間の側柱式でP5・6が庇になると思われる。規模は桁行3.6m、梁行2.96~3.28mの矩形のプランを呈する。主軸方位はN-86°-Eを指す。覆土黒褐色の粘質土、有機質土、砂質土に被覆されていた。

ピット ピットの掘り方は梢円形を呈する。P1は深さ42cm、

P2は深さ21cm、P3は深さ31cm、P4は深さ27cm、P5は深さ18cm、P6は深さ9cmを測る。

遺物 土師器の壺・甕の細片が出土しているが、図示できたものは無い。

時期 本建物址の所属時期は出土遺物及び切り合い関係がないため不明である。



第98図 F4号掘立柱建物址実測図

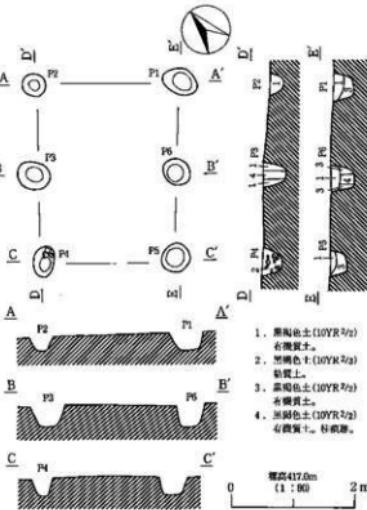
#### 5) F5号掘立柱建物址

遺構 (第99図)

検出位置 Eえ3・4、Eお3・4グリッド。重複関係 H23号住居址を切る。平面形態 1間×2間の側柱式で規模は桁行3m、梁行2.22~2.4mの矩形のプランを呈する。主軸方位はN-38°-Eを指す。覆土 黒褐色の粘質土や有機質土に被覆されていた。ピット ピットの掘り方は梢円形を呈していた。P1は深さ27cm、P2は深さ23cm、P3は深さ33cm、P4は深さ30cmを測る。P5は深さ29cm、P6は深さ37cmを測る。

遺物 土師器の甕が出土しているが図示できる遺物はなかった。

時期 本建物址の所属時期は、重複関係から古墳時代後期後半以降と思われる。



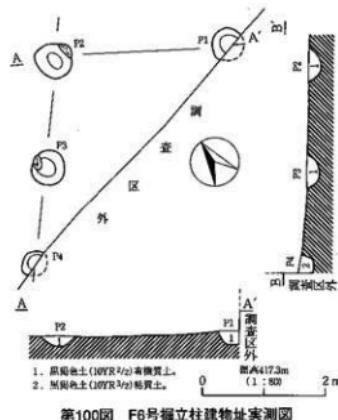
第99図 F5号掘立柱建物址実測図

## 6) F6号掘立柱建物址

遺構（第100図）

検出位置 Eう5、Eえ4・5、Eお5グリッド。重複関係 H22号住居址を一部破壊する。平面形態 一部のみの検出であるため、詳細は不明であるが、1間×2間以上の側柱式と思われる。調査区内での規模は桁行3.4m、梁行2.88mの矩形のプランを呈する。主軸方位は不明である。覆土 黒褐色の粘質土や有機質土に被覆されていた。ピット ピットの掘り方は梢円形を呈していた。P1は深さ22cm、P2は深さ12cm、P3は深さ18cm、P4は深さ15cmを測る。遺物 遺物は出土しなかった。

時期 本建物址の所属時期はH22号住居址より新しいと考えられるため、奈良時代以降と思われる。



第100図 F6号掘立柱建物址実測図

## 7) F7号掘立柱建物址

遺構（第101図）

検出位置 Eう3・4、E

う3・4、Eえ3・4グ

リッド。重複関係

なし。平面形態 2

間×2間の側柱式で

P9・10が庇になると

思われる。規模は桁

行4.2m、梁 行4.1～

4.2mの正方形のブ

ランを呈する。主軸

方位はN - 2° - E

を指す。覆土 黒褐

色の粘質土など被覆

されていた。ピット

ピットの掘り方は梢

円形を呈する。P1は

深さ33cm、P2は深さ

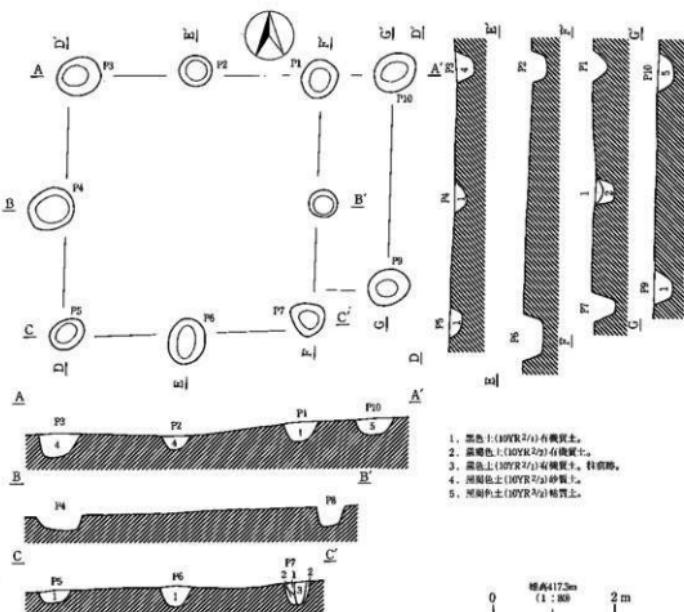
23cm、P3は深さ37cm、

P4は深さ23cm、P5は

深さ17cm、P6は深さ

33cmを測る。P7は深

さ37cm、P8は深さ32cm、P9は深さ27cm、P10は深さ27cmを測る。



第101図 F7号掘立柱建物址実測図

### 遺物 (第115図)

土師器の壺・甕や須恵器の壺が出土しており、須恵器の壺が図示できた。

時期 本建物址の所属時期は奈良時代以降と思われる。

### 8) F8号掘立柱建物址

#### 構造 (第102図)

検出位置 Yc2-3-4、Eあ3-4グリッド。重複関係 Y4号住居址を切る。

平面形態 西列のピットは検出されなかったけれど、2間×2間の側柱式を呈すものと思われる。規模は桁行5.6～5.88m、梁行4.84～5.06mの矩形のプランを呈する。主軸方位はN-

10°-Wを測る。覆土 にぶい黄褐色、黒褐色、暗褐色の粘質土、砂質土に被覆されていた。ピット ピットの掘り方は梢円形、円形を呈していた。P1は深さ15cm、P2は深さ17cm、P3は深さ17cm、P4は深さ21cm、P5は深さ18cm、P6は深さ28cm、P7は深さ13cm、P8は深さ33cmを測る。

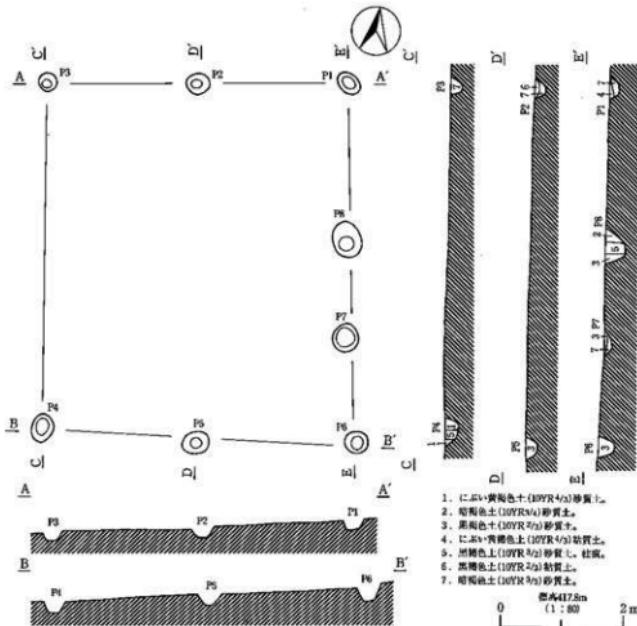
遺物 遺物は出土しなかった。

時期 本建物址の所属時期は出土遺物や重複関係がないことから不明である。

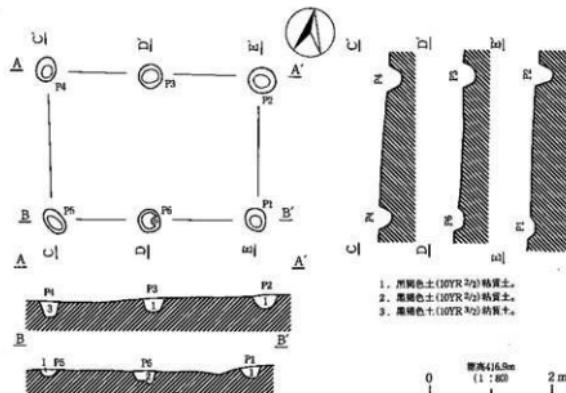
### 9) F9号掘立柱建物址

#### 構造 (第103図)

検出位置 Dv1-6・7、Dd6-7グリッド。重複関係 なし。平面形態 1間×2間の側柱式を呈するものと思われる。規模は桁行3.2～3.4m、梁行2.26～2.44mの矩形のプランを呈す



第102図 F8号掘立柱建物址実測図



第103図 F9号掘立柱建物址実測図

る。主軸方位はN-82°-Eを指す。覆土 黒褐色の粘質土に被覆されていた。ピット ピットの掘り方は梢円形や円形を呈する。P1は深さ20cm、P2は深さ23cm、P3は深さ21cm、P4は深さ29cm、P5は深さ10cm、P6は深さ20cmを測る。

遺物 土師器の甕が出土したが、図示できなかった。

時期 本建物址の所属時期は、時期の認められる出土遺物もないため不明である。

#### 10) F10号掘立柱建物址

遺構 (第104図)

検出位置 Dか10、Dき10、Eか1、Eき1グリッド。

重複関係 F11・12号掘立柱建物址を切る。F13・14・15・16号掘立柱建物址と重複関係にあるが、ピット同士の切り合いが確認できなかったため、新旧関係について不明である。平面形態 1間×2間以上の側柱式を呈すものと思われる。規模

は桁行3.6m、梁行3.2mの矩形のプランを呈するものと思われる。主軸方位はN-100°-Wを測る。覆土 黒褐色、暗褐色の砂質土、有機質土に被覆されていた。ピット ピットの掘り方は梢円形を呈していた。P1は深さ23cm、P2は深さ14cm、P3は深さ17cm、P4は深さ26cm、P5は深さ16cmを測る。

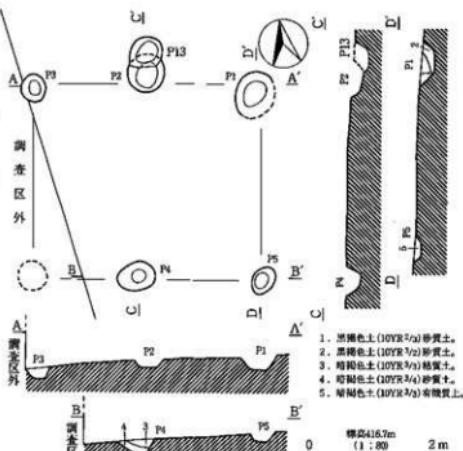
遺物 土師器の武藏型の甕が出土したが、細片のため図示できなかった。

時期 本建物址の所属時期は武藏型の甕の出土により、奈良～平安時代と思われる。

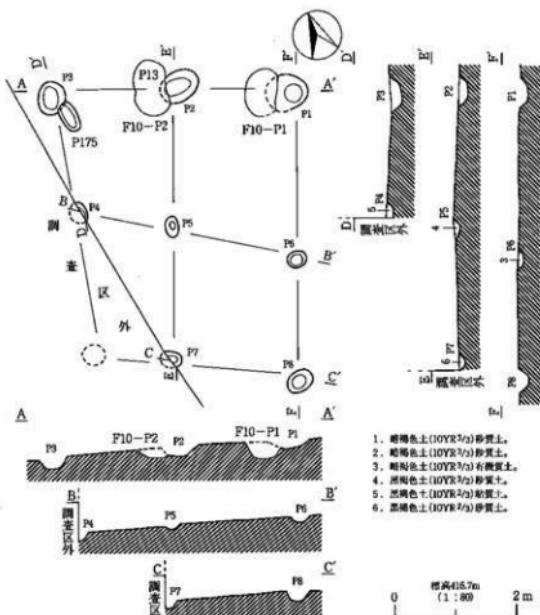
#### 11) F11号掘立柱建物址

遺構 (第105図)

検出位置 Dか10、Dき10、Eか1、Eき1・2グリッド。重複関係 F10号掘立柱建物址を切られる。F12・13・14・15・16号掘立柱建物址と重複関係にあるが、ピット同士の切り合いが確認できな



第104図 F10号掘立柱建物址実測図



第105図 F11号掘立柱建物址実測図

かったため、新旧関係については不明である。平面形態 西側が調査区外に伸びるため詳細は不明であるが、2間×2間の総柱式を呈するものと思われる。規模は桁行4.72m、梁行4mの矩形のプランを呈するものと思われる。主軸方位はN-23°-Eを測る。覆土 黒褐色、暗褐色の砂質土、有機質土、粘質土に被覆されていた。ピット ピットの掘り方は梢円形を呈していた。P1は深さ18cm、P2は深さ15cm、P3は深さ20cm、P4は深さ14cm、P5は深さ12cm、P6は深さ9cm、P7は深さ15cm、P8は深さ14cmを測る。

遺物 土師器の壺や須恵器の壺が出土したが、細片のため図示できなかった。

時期 本建物址の所属時期は出土遺物から奈良～平安時代と思われる。

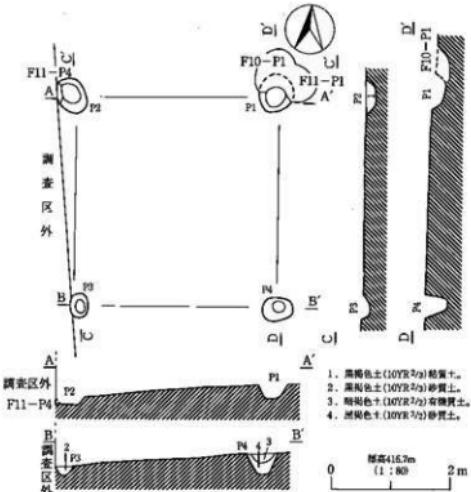
## 12) F12号掘立柱建物址

遺構 (第106図)

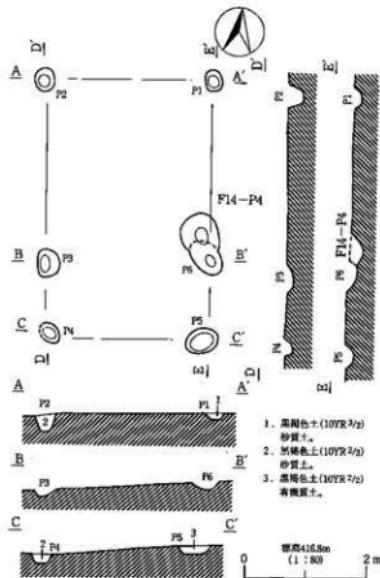
検出位置 Eか1、Eか1グリッド。重複関係 F10・11号掘立柱建物址に切られる。F13・14・15・16号掘立柱建物址と重複関係にあるが、ピット同士の切り合いが確認できなかつたため、新旧関係については不明である。平面形態 西側が調査区外に伸びるため詳細は不明であるが、1間×1間の側柱式を呈するものと思われる。規模は桁行3.4～3.44m、梁行3.28～3.42mの正方形のプランを呈するものと思われる。主軸方位はN-5°-Wを測る。覆土 黒褐色、暗褐色の砂質土、有機質土、粘質土に被覆されていた。ピット ピットの掘り方は梢円形を呈していた。P1は深さ22cm、P2は深さ10cm、P3は深さ14cm、P4は深さ37cmを測る。

遺物 土師器の壺が出土したが細片のため図示できなかった。

時期 本建物址の所属時期は出土遺物から古墳時代～平安時代と思われる。



第106図 F12号掘立柱建物址実測図



第107図 F13号掘立柱建物址実測図

### 13) F3号掘立柱建物址

遺構 (第107図)

検出位置 E1・2、Eき1グリッド。重複関係 F16号掘立柱建物址を切る。F10・11・12・15号掘立柱建物址と重複関係にあるが、ピット同士の切り合いが確認できなかったため、新旧関係については不明である。F14号掘立柱建物址とP6が重複関係にあったが、新旧関係については把握できなかった。平面形態 1間×2間の側柱式を呈するものと思われる。規模は桁行4.2m、梁行2.6～2.8mの矩形のプランを呈するものと思われる。主軸方位はN-7°-Wを測る。覆土 黒褐色の砂質土、有機質土に被覆されていた。ピット ピットの掘り方は梢円形を呈していた。P1は深さ9cm、P2は深さ27cm、P3は深さ11cm、P4は深さ13cm、P5は深さ13cm、P6は深さ12cmを測る。

遺物 土師器の壺が出土したが、細片のため図示できなかった。

時期 本建物址の所属時期は、出土遺物から古墳時代～平安時代と思われる。

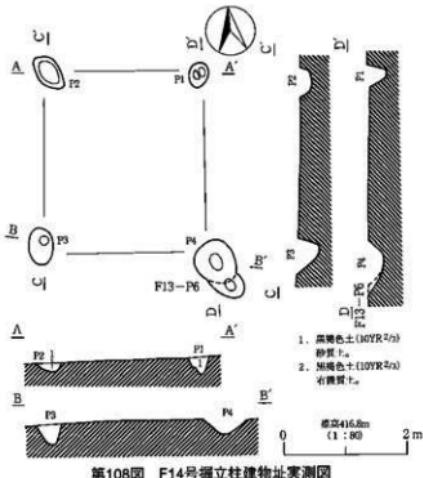
### 14) F14号掘立柱建物址

遺構 (第108図)

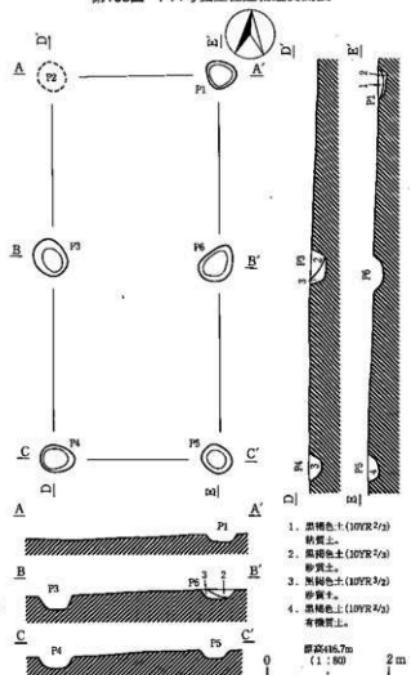
検出位置 Eか1・2、Eき1グリッド。重複関係 F10・11・12・15・16号掘立柱建物址と重複関係にあるが、ピット同士の切り合いが確認できなかったため、新旧関係については不明である。F13号掘立柱建物址とP4が重複関係にあったが、新旧関係については把握できなかった。平面形態 1間×1間の側柱式を呈するものと思われる。規模は桁行2.6～3.16m、梁行2.46～2.8mの矩形のプランを呈する。主軸方位はN-5°-Eを指す。覆土 黒褐色の砂質土、有機質土に被覆されていた。ピット ピットの掘り方は梢円形を呈する。P1はテラスを有し、深さ31cm、P2は深さ14cm、P3は深さ35cm、P4は深さ23cmを測る。

遺物 土師器の壺が出土しているが、図示できなかった。

時期 本建物址の所属時期は、出土遺物から古墳時代～平安時代と思われる。



第108図 F14号掘立柱建物址実測図



第109図 F15号掘立柱建物址実測図

## 15) F15号掘立柱建物址

遺構 (第109図)

検出位置 Dか10、Dき10、Eか1・2、Eき1・2グリッド。重複関係 F18号掘立柱建物址を切る。F10・11・12・13・14・16号掘立柱建物址と重複関係にあるが、ピット同士の切り合いが確認できなかったため、新旧関係については不明である。F14号掘立柱建物址とP6が重複関係にあったが、新旧関係については把握できなかった。平面形態 西側柱列の北側に、浅い柱穴が存在したものと考えP2を推定した。1間×2間の側柱式を呈するものと思われる。規模は桁行6.28m、梁行2.62mの矩形のプランを呈するものと思われる。主軸方位はN-4°-Wを測る。

P1は深さ13cm、P3は深さ21cm、P4は深さ20cm、P5は深さ15cm、P6は深さ15cmを測る。

遺物 土器器の甕が出土したが、細片のため図示できなかった。

時期 本建物址の所属時期は、出土遺物から古墳時代～平安時代と思われる。

## 16) F16号掘立柱建物址

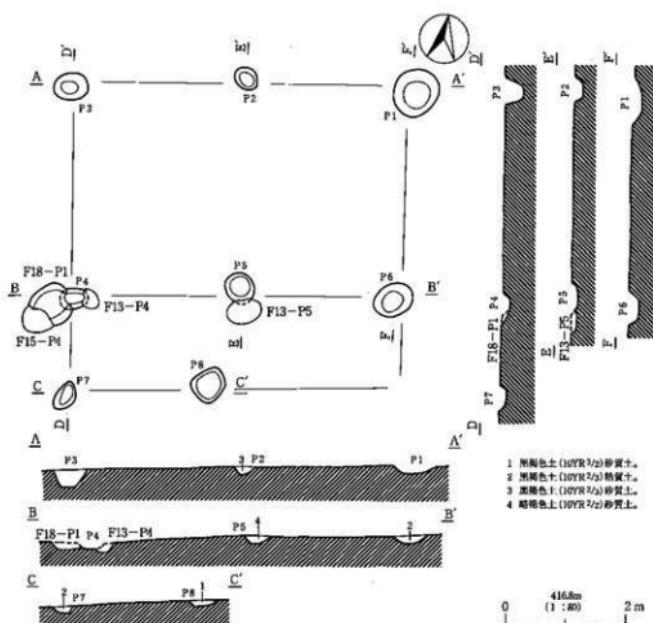
遺構 (第110図)

検出位置 Eお1・2、Eか1・2、Eき1・2グリッド。重複関係 F13号掘立柱建物址に切られる。F10・11・12・14・15・17号掘立柱建物址と重複関係にあるが、ピット同士の切り合いが確認できなかったため、新旧関係については不明である。

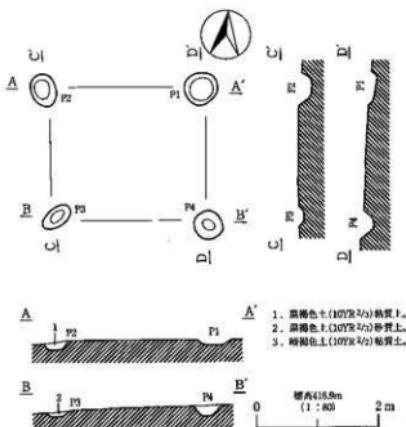
F18号掘立柱建物址と

P4が重複しているが、新旧関係は把握できなかった。平面形態 1間×2間の側柱式に底がつくものと思われる。

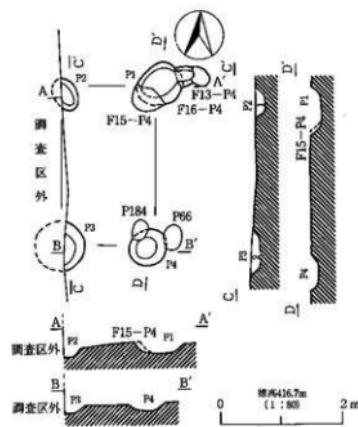
規模は桁行5.4～5.8m、梁行3.4mの矩形のプランを呈する。主軸方位はN-82°-Eをす。覆土 黒褐色、暗褐色の砂質土、粘質土に被覆されていた。ピット ピットの掘り方は梢円形を呈する。P1は深さ14cm、P2は深さ13cm、P3は深さ29cm、P4は深さ10cm、P5は深さ13cm、P6は深さ17cm、P7は深さ10cm、P8は深さ6cmを測る。



第110図 F16号掘立柱建物址実測図



第111図 F17号掘立柱建物址実測図



第112図 F18号掘立柱建物址実測図

**遺物** 出土遺物はなかった。

**時期** 本建物址の所属時期は、重複関係や出土遺物がないが古墳時代～平安時代と思われる。

### 17) F17号掘立柱建物址

**遺構** (第111図)

**検出位置** Eえ1・2、Eお1・2グリッド。重複関係 F16号掘立柱建物址と重複関係があるが、ピット同士の切り合いか確認できなかったため、新旧関係については不明である。平面形態 1間×1間の側柱式を呈するものと思われる。規模は桁行2.52～2.64m、梁行2.1～2.3mの矩形のプランを呈するものと思われる。主軸方位はN-7°-Wを測る。覆土 黒褐色・暗褐色土の砂質土、粘質土に被覆されていた。ピット ピットの掘り方は梢円形を呈していた。P1は深さ7cm、P2は深さ14cm、P3は深さ9cm、P4は深さ21cmを測る。

**遺物** 出土遺物はなかった。

**時期** 本建物址の所属時期は、出土遺物がなく不明である。

### 18) F18号掘立柱建物址

**遺構** (第112図)

**検出位置** Eか2・3、Eき2・3グリッド。重複関係 F15号掘立柱建物址に切られる。F16号掘立柱建物址とP1が重複関係にあったが、新旧関係については把握できなかった。西側が調査区域外となってしまうため、詳細は不明である。平面形態 1間×1間以上の側柱式と思われる。規模は東側列2.8mで、矩形のプランを呈するものと思われる。主軸方位はN-6°-Wを指すものと思われる。覆土 黒褐色・暗褐色土の砂質土、粘質土に被覆されていた。ピット ピットの掘り方は梢円形を呈する。P1は深さ16cm、P2は深さ14cm、P3は深さ16cm、P4は深さ12cmを測る。

**遺物** 土師器の壺が出土しているが、図示できるものはなかった。

**時期** 本建物址の所属時期は、出土遺物から古墳時代～平安時代と思われる。

### 19) F19号掘立柱建物址

遺構（第113図）

検出位置 Dう6・7、Dう6・7グリッド。重複関係なし。

平面形態 1間×1間の個柱式を呈すものと思われる。規模は桁行2.76～3m、梁行2.6～2.64mの矩形のプランを呈するものと思われる。主軸方位はN-72°-Wを測る。覆土 黒褐色・暗褐色土の砂質土、粘質土に被覆されていた。P1・3には柱痕跡が確認された。ピット ピットの掘り方は梢円形を呈する。P1は深さ35cm、P2は深さ29cm、P3は深さ22cm、P4は深さ15cmを測る。

遺物（第115図）

底部調整が回転糸切り未調整の摩耗した須恵器の壺が出土した。

時期 本建物址の所属時期は、出土遺物から奈良時代後半以降と思われる。

### 20) F20号掘立柱建物址

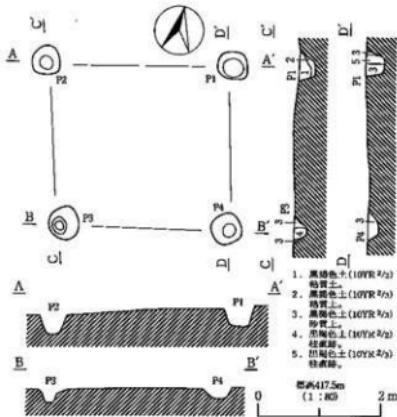
遺構（第114図）

検出位置 Wか9・10、Wき9・10グリッド。重複関係 P6がH33号住居址に切られ、一部立ち上がり部分が破壊されている。平面形態 1間×2間の個柱式と思われる。規模は桁行3.2～3.24m、梁行3.2mの正方形のプランを呈するものと思われる。主軸方位はN-8°-Wを指す。覆土 黒褐色・暗褐色土の砂質土、粘質土に被覆されていた。P4では柱痕跡が確認された。ピット ピットの掘り方は梢円形を呈していた。P1は深さ20cm、P2は深さ23cm、P3は深さ21cm、P4は深さ19cm、P5は深さ25cm、P6は深さ30cmを測る。

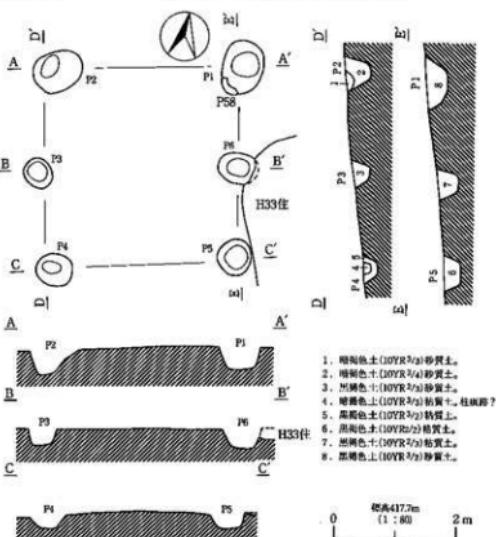
遺物（第115図）

底部の調整が回転糸切り未調整の須恵器の壺が出土した。

時期 本建物址の所属時期は、重複関係から平安時代前半（8世紀後半～9世紀前半）以前と思われる。



第113図 F19号掘立柱建物址実測図



第114図 F20号掘立柱建物址実測図



第115図 掘立柱建物址出土土器実測図

## 第5節 土坑址

### 1) D2号土坑址

遺構（第116図）

検出位置 Rえ9・10グリッド。

重複関係 H18号住居址に切られ、西側が破壊されている。平面形態 重複関係により破壊されているため定かではないが、楕円形を呈するものと思われる。底面は平坦で断面形態は皿状を呈する。主軸方位は不明である。覆土 粘質土に被覆されていた。

時期 本土坑址の所属時期については、出土遺物はなかったが、重複関係から古墳時代後期後半～奈良時代の前半（7世紀前半～8世紀前半）以前と思われる。

### 2) D3号土坑址

遺構（第116図）

検出位置 Dい9、Dう9グリッド。

重複関係 自然流路に切られ、南側が破壊されている。P136と切り合うようであったが、新旧関係が不明となってしまった。平面形態 重複関係により破壊されているため定かではないが、楕円形を呈するものと思われる。底面には凹凸が観察できた。主軸方位は不明である。覆土 粘質土に被覆されていた。

時期 出土遺物がなく本土坑址の所属時期については不明である。

### 3) D4号土坑址

遺構（第116図）

検出位置 Eえ1、Eお1グリッド。

重複関係 P161に切られている。平面形態 円形を呈し、テラスを有する。底面は平坦で断面形態は皿状を呈する。長軸88cm、短軸84cmを測り、主軸方位はN-8°-Eを指す。覆土 粘質土に被覆されていた。

時期 本土坑址の所属時期は、出土遺物がなく不明である。

### 4) D5号土坑址

遺構（第116図）

検出位置 Xき10、Yき1グリッド。

重複関係 なし。平面形態 方形を呈し、底面はやや平坦で断面形態は皿状を呈する。長軸1.8m、短軸1.75mを測り、主軸方位はN-16°-Eを指す。覆土 黒褐色の砂質土に被覆されていた。

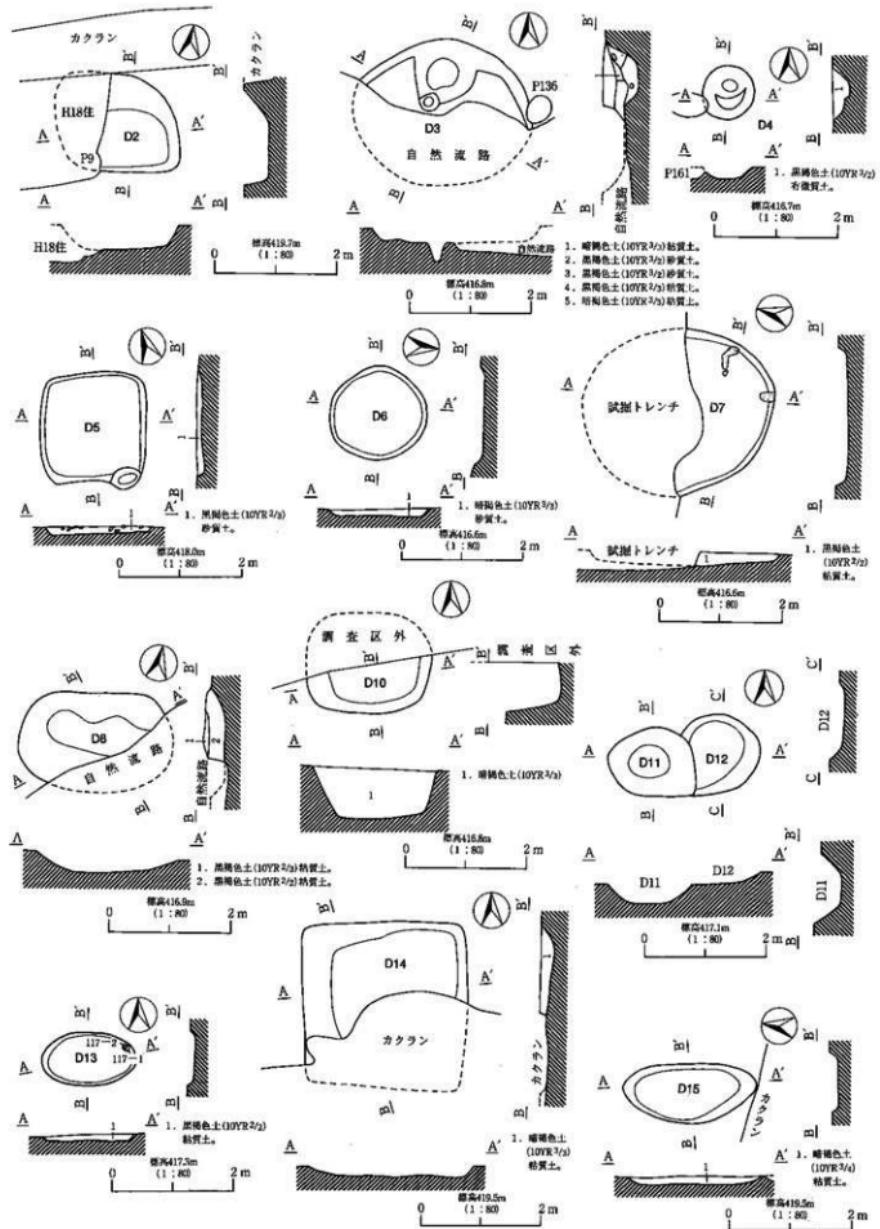
時期 出土遺物がなく本土坑址の所属時期については不明である。

### 5) D6号土坑址

遺構（第116図）

検出位置 Xこ5、Dあ5グリッド。

重複関係 なし。平面形態 楕円形を呈するものと思われる。底面は平坦で断面形態は皿状を呈する。長軸1.6m、



第116図 D2~D8・D10~D15号土坑址実測図

短軸1.55mを測り、主軸方位はN-9°-Eを指す。覆土 暗褐色の砂質土に被覆されていた。

時期 出土遺物がなく本土坑址の所属時期については不明である。

#### 6) D7号土坑址

遺構 (第116図)

検出位置 Xく7・8グリッド。

重複関係 試掘調査時の試掘トレッジによって破壊してしまったため、詳細に欠けるが切り合いはないものと思われる。平面形態 楕円形を呈するものと思われる。底面は平坦で断面形態は皿状を呈する。長軸と短軸の主軸方位は不明である。覆土 粘質土に被覆されていた。

時期 出土遺物がなく本土坑址の所属時期については不明である。

#### 7) D8号土坑址

遺構 (第116図)

検出位置 Xこ6・7グリッド。

重複関係 自然流路に切られ、南東側を破壊される。平面形態 楕円形を呈するものと思われる。底面は平坦で断面形態は皿状を呈する。長軸・短軸・主軸方位は不明である。覆土 黒褐色の粘質土に被覆されていた。

時期 本土坑址の所属時期は、出土遺物がなく不明である。

#### 8) D10号土坑址

遺構 (第116図)

検出位置 Dあ5グリッド。

重複関係 北側が調査区域外に続くため詳細は不明である。平面形態 楕円形を呈するものと思われる。覆土 暗褐色の粘質土に被覆されていた。

時期 出土遺物がなく本土坑址の所属時期については不明である。

#### 9) D11号土坑址

遺構 (第116図)

検出位置 Xく5、Xけ5グリッド。

重複関係 D12号土坑址と切り合うが、新旧関係については不明である。平面形態 楕円形を呈するものと思われる。底面は平坦で断面形態は鍋底状を呈する。長軸・短軸・主軸方位は不明である。覆土 粘質土に被覆されていた。

時期 出土遺物がなく本土坑址の所属時期については不明である。

#### 10) D12号土坑址

遺構 (第116図)

検出位置 Xく5、Xけ5グリッド。

重複関係 D11号土坑址と切り合うが、新旧関係については不明である。平面形態 楕円形を呈するものと思われる。底面は平坦で断面形態は皿状を呈する。長軸・短軸及び主軸方位は不明である。覆土 粘質土に被覆され

ていた。

時期 本土坑址の所属時期は、出土遺物がなく不明である。

### 11) D13号土坑址

遺構 (第116図)

検出位置 Wお10、Wか10グリッド。

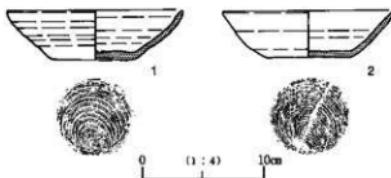
重複関係 なし。平面形態 長楕円形を呈し、底面は平坦で断面形態は皿状を呈する。長軸1.57m短軸0.9mを測り、主軸方位はN-90°-Eを指す。覆土 粘質土に被覆されていた。

遺物 (第117図)

本址からは須恵器の壺が出土し、2点が図示できた。1は底部調整が回転糸切り未調整の須恵器壺である。2は1と同様であるが、焼成が悪く、色調は明黄褐色を呈しているものである。

時期 出土遺物から平安時代（8世紀後半～9世紀前半）

と思われる。



第117図 D13号土坑址出土土器実測図

### 12) D4号土坑址

遺構 (第116図)

検出位置 Tけ8グリッド。

重複関係 なし。平面形態 搾乱に南側を破壊されるため、不明であるが方形を呈するものと思われる。底面は概ね平坦で、断面形態は皿状を呈する。長軸・短軸及び主軸方位は不明である。覆土 暗褐色の粘質土に被覆されていた。

時期 本土坑址の所属時期は、出土遺物がなく不明である。

### 15) D15号土坑址

遺構 (第116図)

検出位置 Tく8グリッド。

重複関係 なし。平面形態 長楕円形を呈し、底面は平坦で断面形態は皿状を呈する。長軸2.2m、短軸1mを測り、主軸方位はN-10°-Wを指す。覆土 暗褐色の粘質土に被覆されていた。

時期 本土坑址の所属時期は、出土遺物がなく不明である。

## 第6節 溝状遺構

### 1) M2号溝状遺構

遺構（第118図）

検出位置 Aい2・3・4・5、Aう2・3、Aお5、Eえ10、Eお10グリッド。重複関係 H4号住居址、H9号住居址を破壊する。形状 幅0.3～1.6m、深さ11～43cmを測る。覆土は明褐色の粘質土であった。断面形状はU字状を呈していた。検出状況では南側が浅く北側が深い状態で検出され、底面レベルから北に流れていることが予想できる。北側が調査区域外となるため、詳細は不明である。

時期 本址の所属時期は出土遺物がないが、重複関係から奈良時代以降と思われる。

### 2) M3号溝状遺構

遺構（第118図）

検出位置 Rか8・9、Rき8・9、Rく8・9、Rけ8・9、Rこ9グリッド。重複関係 なし。形状 幅0.3～0.6m、深さ5～18.5cm、検出長15.5mを測る。覆土は明褐色の粘質土であった。断面形状は皿状を呈していた。検出状況では南側が浅く南側が深い状態で検出され、底面レベルから東から西に流れていることが予想できる。

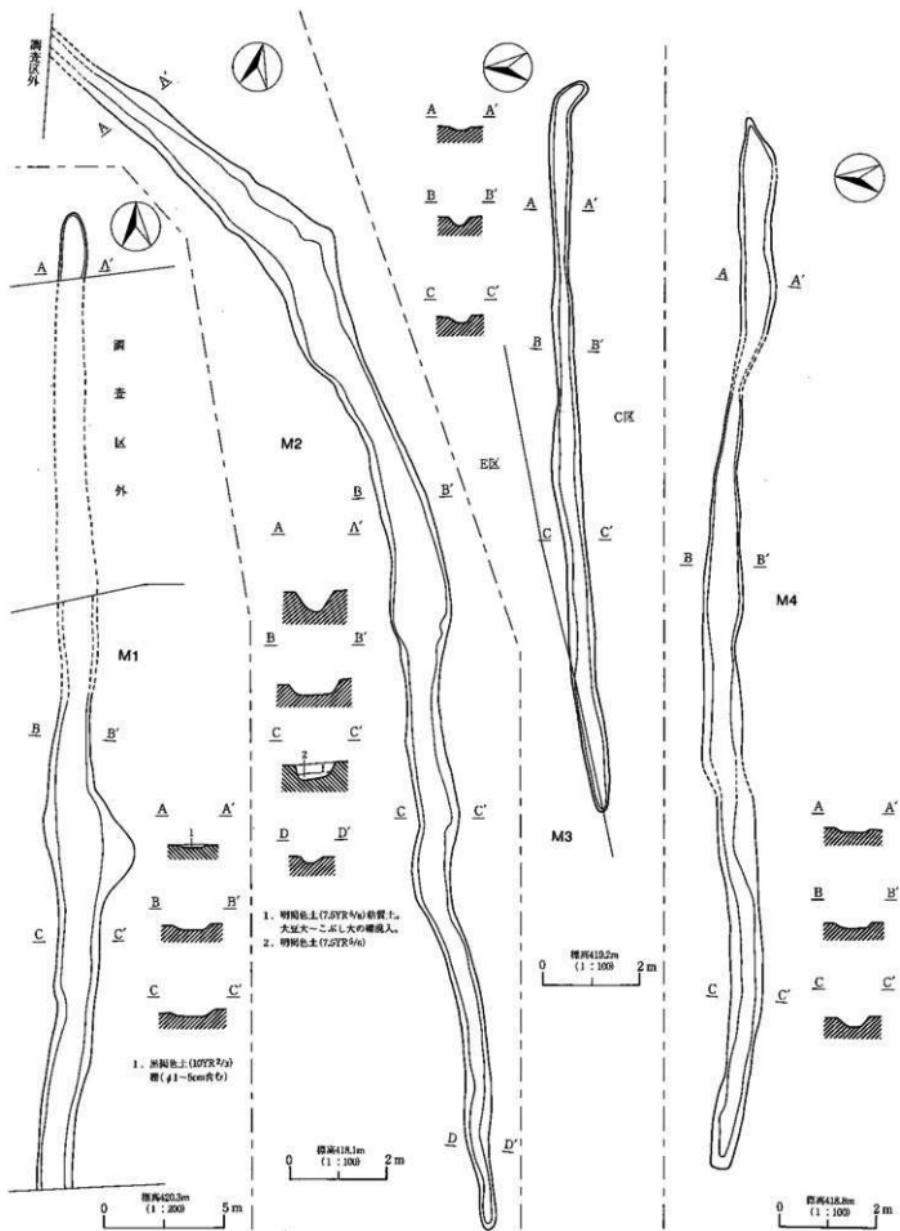
時期 本址の所属時期は出土遺物がないため不明である。

### 3) M4号溝状遺構

遺構（第118図）

検出位置 Rか8、Rき8、Rく8、Rけ8、Rこ8、Wあ8グリッド。重複関係 なし。形状 幅0.25～0.8m、深さ4～21.5cm、検出長21.6mを測る。覆土は明褐色の粘質土であった。断面形状は皿状を呈していた。検出状況では南側が浅く南側が深い状態で検出され、底面レベルから東から西に流れていることが予想できる。

時期 本址の所属時期は出土遺物がないため不明である。



第118図 M1~M4号溝状構造測定図

## 第7節 ピット及び遺構外等の出土遺物

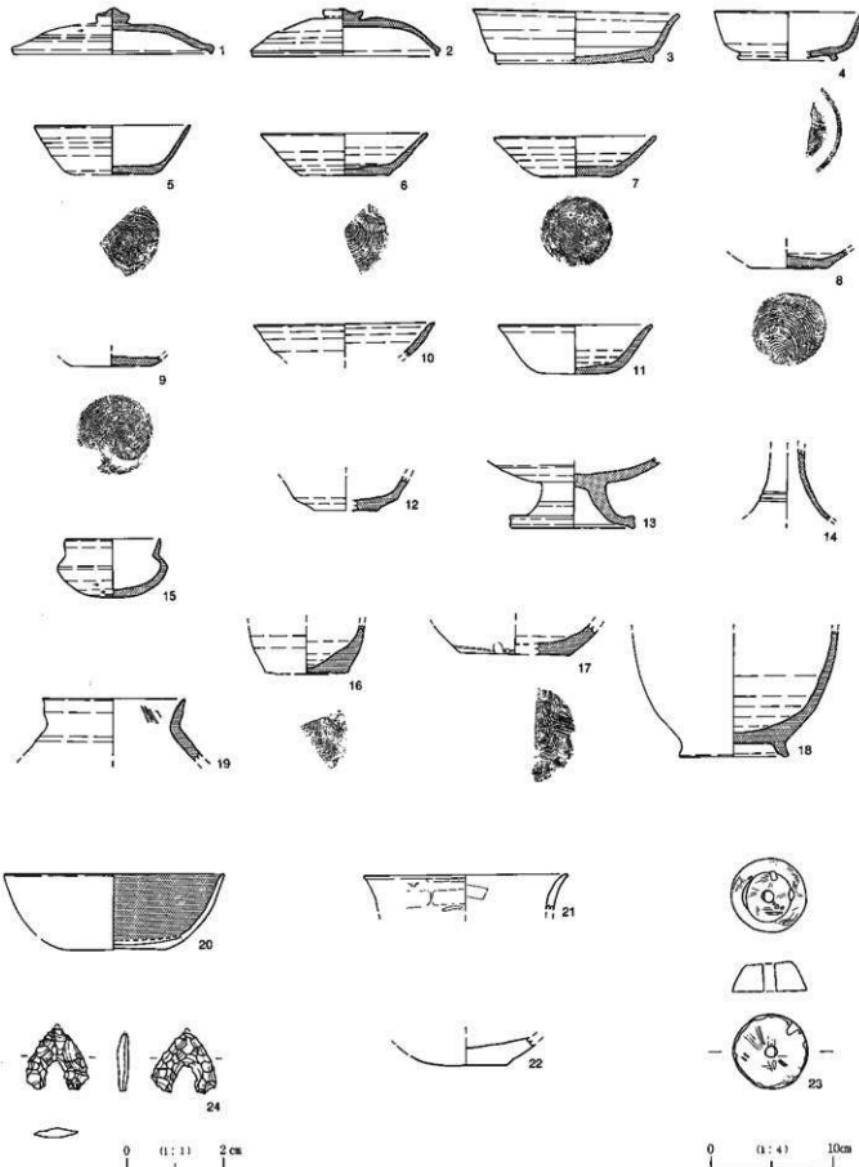
本調査にて出土した遺構外のグリッド遺物や竪穴住居址から出土した混入遺物には、石鐵、弥生土器、土師器、須恵器が存在していた。第119図には図示できた土師器や須恵器などを第119図に掲載した。

1・2は須恵器の蓋で、外削天井部に回転ヘラケズリの調整が見られる。3・4が須恵器の高台付壺である。3は口径が大きく、底部が高台よりも下がる器形を呈し、底部の調整は回転ヘラケズリ未調整である。5～12は須恵器の壺である。5～9の底部の調整は回転糸切り未調整である。13は須恵器高壺である。14は焼成の良い須恵器の高壺の脚部で、裾部が欠損している。2枚の沈線が取れ、2方あるいは3方の透かし窓がつくものと思われる。古墳時代の後期の遺物と思われる。15は須恵器の蓋の完形である、内外面の一部には自然軸の付着が取れられる。底面は丸底を呈している。16は須恵器壺の底部で、底部外面に「×？」のヘラ描きが確認できる。17は須恵器壺の底部と思われ、底部外面にはハケ状工具による調整が見られる。18は須恵器長頸壺の底部から胴部で、高台部分が外側につまみ出されたような形状をしている。19は土師器の壺で、内面に黒色処理が施されている。20は土師器の壺で、内外面にヘラナデ調整が施されている。21は土師器壺の底盤である。23は石製の紡錘車で、石質は蛇紋岩かと思われる。P 229の覆土中からの出土である。24は黒曜石製の石鏃で先端が欠損しているもので、無茎円脚鏃と思われる。H 21号住居址のカマド掘り方からの出土である。

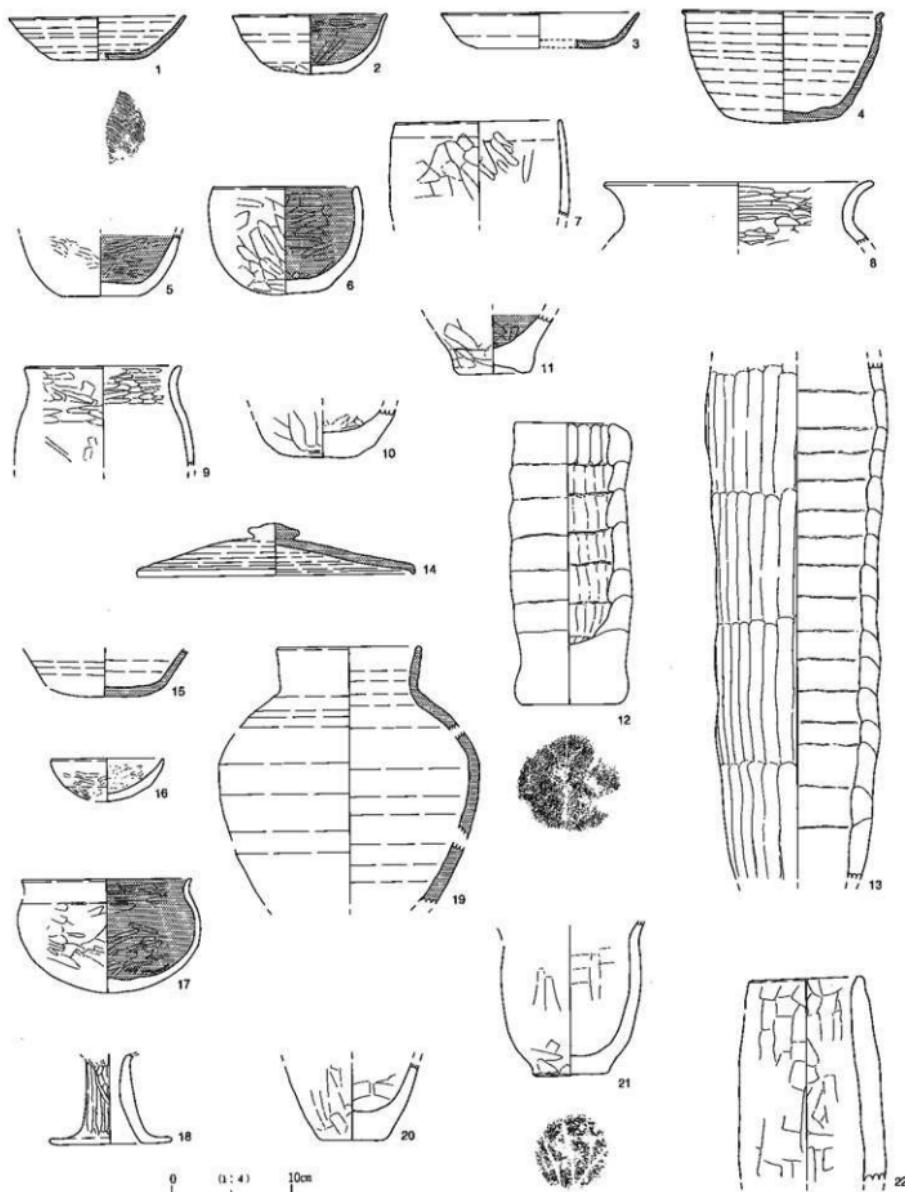
## 第8節 試掘調査出土遺物

ここでは平成3年度、本調査に先立って実施された試掘調査時に、出土した土器を掲載することとしたい。試掘調査では竪穴住居址が2棟と溝状遺構が検出された。試掘調査ではあったが、H 2号住居址から多くの出土遺物があり、これらを第120図に掲載した。

1は須恵器の壺で、底部の調整は回転糸切り未調整である。2は土師器の黒色土器で、底部にヘラケズリ調整が認められる。以上は試掘調査時のH 1号住居址からの出土である。3は須恵器の壺で、底部調整が回転ヘラキリ未調整と思われる。H9号住居址からの出土である。4は須恵器の鉢で、口縁端部が外反する器形を呈する。底部調整は切り離し後ヘラナデ調整が施される。5は土師器の黒色土器で、内外面ヘラミガキが施されている。6は土師器の鉢で、内面黒色処理が施され、内外面にはヘラナデ調整が施されている。以上はグリッド出土土器である。7は土師器の鉢である。内外面はヘラナデ調整が施されている。8は胴部球形を呈する器形と思われる土師器の壺である。9は小型の土師器壺である。内外面にヘラミガキが施されている。10・11は土師器壺の底部である。12・13は土師質の円筒形土製品である。12は当遺跡で多く見られる土製品の中で最も短く、23.5cmしか器高がないものである。底部の器厚は約4.8cmを測るなど、厚いものである。内外面には輪積み痕が観察される。13は外面縦方向にヘラナデが施されている。14は須恵器の蓋で、歪みがある。15は須恵器の壺で、底部が回転ヘラキリによるものと思われる。16は土師器の壺で、内外面ヘラミガキが施されている。17は土師器の鉢で、内面には黒色処理が施されている。18は土師器高壺の脚部で、縦位の雑なヘラミガキが施されている。19は須恵器の短頸壺で頸部から口縁部にかけて、まっすぐに立ち上がる器形である。20・21は土師器の小型の壺である。21の底部には木葉痕が残っている。22は土師質の円筒形土製品で、縦方向のヘラケズリが施される。



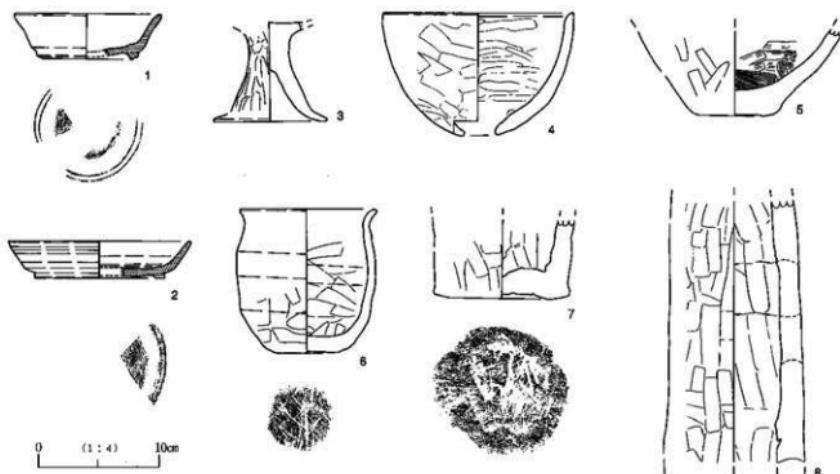
第119図 ピット及び遺構外等の出土遺物実測図



第120図 試掘調査出土遺物 (1)

第121図は本調査によって調査したM1号溝状遺構と同一と思われる溝状遺構の出土遺物を掲載した。図示できたものには須恵器の高台付坏や土師器の高坏、甌、壺、円筒形土製品がある。

1・2は須恵器の高台付坏で、ロクロ横ナデが施されている。3は土師器高坏の脚部で、外面ヘラケズリが施される。4は単孔式の土師器の甌で、内面には横方向のヘラミガキが施されている。5は土師器壺の底部で、内面にはハケ目が残っている。球胴状の甌と思われる。6は小型の壺で、内外面にヘラナデ調整が施されている。7・8は土師質の円筒形土製品である。7は底部が穿孔されていないものである。8は口縁部及び底部が欠損しており、状況がわからない胴部のものである。内面に輪積み痕が観察でき、内外面がヘラナデ調整となっている。



第121図 試掘調査出土遺物（2）

## 第V章 総括

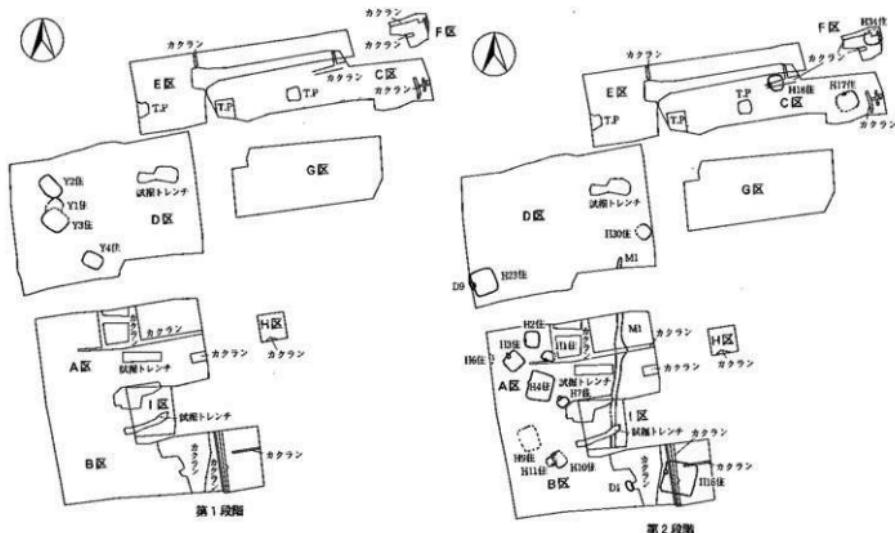
### 第1節 宮上遺跡の出土土器と遺構について

宮上遺跡I・II・III・IVの発掘調査の結果、34棟の竪穴住居址が検出された。これらの住居址は弥生時代～平安時代にかけての出土遺物により、おおよその所属時期が与えられた。ここでは出土した土器及び検出遺構から大きな段階を設定し、各段階について概観していきたい。

#### (1) 第1段階・・・弥生時代中期末～後期後半

宮上遺跡の集落が形成される段階に位置づけられる。弥生時代中期末から後期後半の出土遺物があり、これらの土器群が対象となる。検出遺構ではY1～4号住居址が本段階にあたり、重複関係を見るとY1号住居址がY2・3号住居址に切られている。出土遺物からY1号住居址には中期末の土器群、Y2・3・4号住居址では後期後半の土器群が見られた。今回の段階設定では2段階の細分が可能であったが、あえて段階設定を行わなかった。

検出位置では、D区の中央西側にまとまって住居址の検出が見られ、他の調査区では住居址が検出されなかつた。出土遺物ではD区以外には、A区からの出土が見られることから、A・D区及びその西側に集落が展開している可能性が指摘できよう。また、遺構プランについては、すべての住居址が隅丸長方形のプランを呈しており、炉



第122図 宮上遺跡集落変遷図(1)

についてはY2・4号住居址では地床炉が主柱穴間に位置していた。それ以外の住居址については検出されなかつたものや重複関係によって破壊されてしまったものがあって、不明なところが多い。

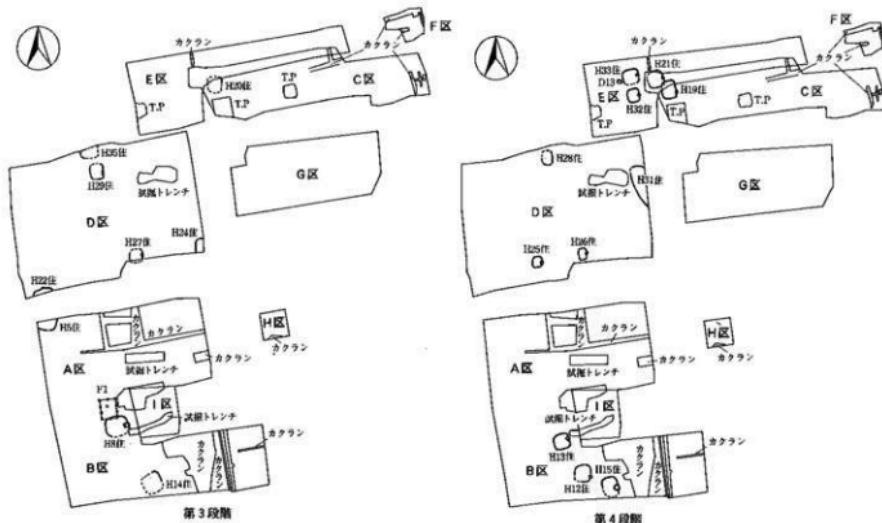
各住居址の時期差については、Y1号住居址のみ長軸方位が異なっている状況も看取でき、土器様相だけでなく遺構プランなどからも差異が指摘できる。

## (2) 第2段階・・・古墳時代後期後半

宮上遺跡の中で、円筒形土製品などの出土から特徴的な遺物をもつ段階にある。対象となる住居址はH1・2・3・4・6・7・9・10・11・16・17・18・23・30・34号住居址であり、実年代的には6世紀末から8世紀初頭の時期にあたる住居址と出土土器群である。その中でもH3・16・17・18・23・30号住居址の段階（本段階の中で、さらに細分が可能ではあるが今回は細分していない。）とH9・10号住居址の段階と細分が可能である。掘立柱建物址ではF1号掘立柱建物址が該当すると思われる。

前半段階の出土遺物では、H30号住居址以外の住居址から土師質の円筒形土製品（註1）が出土している点が最も注意すべき点であろう。また、カマドの構築される位置も北あるいは西側に見られ、出土した円筒形土製品がカマドの大井部あるいは、袖部構築材に使用されていたと見られる点も共通している。また、偶然かもしれないが円筒形土製品が出土したカマドの遺存状況は極めて良いこと、H3号住居址、H23号住居址に見られるように出土した土器量が多いことも今後留意する課題の一つであろう。

本段階の住居址の床面積では、H16号住居址のように60m<sup>2</sup>を越す非常に大型の住居址やH4・23号住居址のような大型の住居址の存在が本段階の特徴である。またこの住居址群は円筒形土製品をカマドの構築材に使用す



第123図 宮上遺跡集落変遷図(2)

る住居址にあたり、円筒形土製品を有する住居址群の特異性の表れかもしれない。

該期の集落の広がりについては、今回の調査区の南に隣接している北浦遺跡からも住居址が検出されているため、南側に同集落が続いていることが指摘できよう。(註2)

第2段階の出土遺物から見られる特徴としては、土師器長胴壺の胎土に非常に多くの雲母粒子が混入しているといったことがあげられる。

### (3) 第3段階・・・奈良時代～平安時代初頭

古墳時代後期以降の集落が継続した段階。住居址ではH5・8・14・20・22・24・27・29・35号住居址が該当すると思われる段階。掘立柱建物址ではF20号掘立柱建物址が本段階にあたると思われる。

本段階の遺物については、明確なセット関係を見出せる住居址が検出されていないため、不明な要素が多い。遺構についても完備された住居址が少なく、不明な部分が多いわけではあるけれども、カマドの構築される位置は、北側あるいは東側となっており、新たに東方向にカマドが造られるようになった段階といえる。カマドの遺存状況については破壊を受けたものが多く、悪い状態であった。住居址の床面積については、H8号住居址の28m<sup>2</sup>を除外すると、約20m<sup>2</sup>の住居址が一般的と見られようか。

### (4) 第4段階・・・平安時代初頭以降

宮上遺跡の最終段階。住居址ではH12・13・15・19・21・26・28・32・33号住居址が本段階にあたると思われる。第3段階同様に明確なセット関係を見出だせる住居址は少ない。カマドは西側に構築されるようになっており、他の位置に造られたカマドは検出されていない。前段階同様にカマドの遺存状況については悪い状況といえる。住居址の面積については第3段階よりもさらに小型化した傾向が見られる。

## 第2節 円筒形土製品から見えること

宮上遺跡を特徴づける遺物として古墳時代後期の土師質の円筒形土製品があげられる。この種の土製品が出土する遺跡では、坂城町内では第124図に見られるように隣接する北浦遺跡(註3)、寺浦遺跡(註4)、寺浦遺跡II(註5)、北川原遺跡II(註6)といった当遺跡を総括する中之条遺跡群内の各遺跡、南条地区の東裏遺跡(註7)、保地遺跡II(註8)からの出土もある。長野県内では長野市田中沖遺跡(註9)、田中沖遺跡II(註10)、松原遺跡(註11)、松原遺跡III(註12)、屋地遺跡(註13)、四ッ屋遺跡保育園地点(註14)、松本市出川南遺跡IV(註15)、小原遺跡II(註16)、宮の上遺跡II(註17)、箕輪町中道遺跡(註18)、南箕輪村北垣外遺跡(註19)があげられる。県外に目を転じてみると山梨県に分布の中心が見られるようで、山梨県御坂町姥塚遺跡(註20)、御坂町郷土遺跡(註21)、御坂町二ノ宮遺跡(註22)、一宮町鞍掛遺跡(註23)、石和町松本塚ノ越遺跡(註24)などに見られる。他県では東京都、栃木県、福島県、青森県でも出土が散見されている。所属時期は6・7世紀に所属するもの、9世紀に所属するものとがあり、形態的には大差ない状況である。6・7世紀代、あるいは9世紀代の円筒形土製品に共通していることは、カマド周辺からの出土例が多いといった点である。最近の研究においても異なる時代に同様の遺物が見されることの意味は依然解明されておらず、今後の研究に委ねられているといった状況である。

坂城町内に見られる円筒形土製品は、古墳時代後期に所属するものとしないものがある。南条地区的東裏遺跡II出土例以外は古墳時代後期に所属するものといえる。それらの円筒形土製品は、底部が残存し木葉痕をとどめ



第124図 中之条遺跡群内の円筒形土製品出土遺跡分布図

るもの、木葉痕の見られないもの、底部を意識的に欠損（穿孔）するものの3タイプがあり、概して器壁が脆く、外面に縦位のハケ調整やヘラケズリがなされ、内面には輪積み痕あるいは巻き上げ痕が観察される。

本遺跡で円筒形土製品の出土した遺構は、H 3・4・16・17・18・23号住居址、D1号土坑址、試掘調査M 1号溝状遺構となる。D1号土坑址、試掘調査時のM 1号溝状遺構は住居址のカマドからの廃棄後のものであると想定し、これを除外した場合、出土状態から住居址のカマドに使用されていたことが確実に指摘できる例が多い。その中でもカマドの袖部構築材としての使用例はH16・17・23号住居址例があげられ、H23号住居址では天井部構築材として使用されたことが明確に捉えられている。H 3・4号住居址ではカマドの燃焼部付近で横位に出土したわけであるが、H23号住居址の出土例から推察して、カマド天井部の構築材として使用されていた円筒形土製品が、落下したのではないかと推察される。

円筒形土製品は長野県内においても出土遺跡が少なく、なじみ少なき土製品といえるわけであるが、本遺跡やその周辺遺跡から多くの出土が見られたことは、宮上遺跡の集落構造を考える上で重要な遺物となってくると考えられる。よって坂城町の円筒形土製品の出土状況の整理を行い、円筒形土製品についてのまとめを行うこととする。

第124図に中之条地区での古墳時代後期に所属する円筒形土製品の出土した遺跡を示した。遺跡名と住居址名で見ると中之条遺跡群内の宮上遺跡 H 3・4・16・17・18・23号住居址、D1号土坑址、試掘調査 M 1号溝状遺構、寺浦遺跡 H 10・20号住居址、寺浦遺跡 II H 5号住居址、北川原遺跡 II H 4号住居址、南条地区の保地遺跡 II H 4号住居址である。これらの出土をもとに円筒形土製品の形態を分類してみると、下記のように分類できる。

- I - ①宮上遺跡 H 2号住居址出土品のように底部が残存し、木葉痕をとどめるもの。
- I - ②宮上遺跡 H 3・16・23号住居址のように底部が残存し、木葉痕の見られないもの。
- II - ①宮上遺跡 H 4号住居址（50-18）、北川原遺跡 II H 4号住居址出土例のように底部を欠損（穿孔）し、木葉痕をとどめるもの。
- II - ②宮上遺跡 H 4号住居址（49-16）、北浦遺跡例のように底部を欠損（穿孔）し、木葉痕をとどめないもの。

以上から I と II の 2 タイプに分類でき、木葉痕が有るのか無いのかの違いで細分すると各タイプを更に細分することも可能となる。しかし、木葉痕の有る無しについてよりも底部を欠損（穿孔）するのか、しないかの違いに注意が必要となってこよう。円筒形土製品のカマドでの熱効率との関係もあわせ、今後検討したい課題である。また、今回は円筒形土製品の長さなど計測をもとにした詳細な検討も実施できず、円筒形土製品のもつ機能などについて更なる考察はできなかった。今後の課題としたい。

円筒形土製品を構築材として使用するカマドの状況について見ると、次の3タイプが見られる。

- ①宮上遺跡 H 16・17号住居址、寺浦遺跡 II のカマドのように袖部構築材として縦位に埋設されるもの。
- ②保地遺跡 II H 4号住居址のように天井部構築材として使用するもの。
- ③宮上遺跡 H 23号住居址のように袖部構築材と天井部構築材の両方に使用されるもの。

宮上遺跡 H 23号住居址のカマドについては、①と②の混合型であるため新たなタイプと見られるが、今後の円筒形土製品を使用したカマド構築方法等について検討する良い例となろう。円筒形土製品を袖部構築材と使用する場合も、左右の袖部に使用するのかあるいは、片側の袖部に埋設するのかによっても細分は可能である。また、袖

部のどの位置に埋設されるのかといったことも今後再整理してみたいと考えている。

今回このような円筒形土製品についてのまとめをするにあたり、円筒形土製品を使用するカマドの遺存状態が極めて良かった結果に負うところが大きい。円筒形土製品を使用したカマドは、住居址の廃棄時での破壊行為による被害が少なかったのではないかといった疑問点も新たに浮かび上がってきた。言い換えれば円筒形土製品をカマドに使用した人々は、カマドの破壊行為を意識的に行わなかった場合が多いのではないかといった推測も可能ではないだろうか。もしそうだと仮定すると、宮上遺跡や隣接する北浦遺跡などを統括する中之条遺跡群の集落構造の解明の最大のヒントとなり得るかもしれない。今後の課題である。

また、円筒形土製品が当初からカマド構築のために製作されたものかどうかといった問題、円筒形土製品に巻き上げ痕や輪積み痕が観察された結果から、円筒形土製品の製作方法なども今後大いに検討されるべきものである。今後の課題としたい。

最後となったが、円筒形土製品の機能については西山克巳氏の論考（註25）があり、円筒形土製品を使用する人々は、派遣されてきた可能性があること、円筒形土製品は長胴甕の出現によって機能が転化され、消滅していくのではないかとする興味深い論考がされている。それらの内容等についても本報告書内では検討することができなかった。今後、詳細な検討を行いたいと思う。

#### 註

- 1 円筒形土製品は一般的には円筒形土器と称されており、「中之条遺跡群宮上遺跡Ⅱ」1993年発行の概報においても「円筒形土器」と使用したが、土器としての機能に疑問があるため「円筒形土器」とはせず、「円筒形土製品」と名称を変更して1996年「中之条遺跡群寺浦遺跡Ⅱ」から使用している。
- 2 森崎稔『坂城町誌』1981 昭和48年の学校給食センター建設工事に伴って、堅穴住居址が2棟検出され、集落址であることが判明している。
- 3 註2に同じ
- 4 坂城町教育委員会 1996 『豊饒意遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡』
- 5 坂城町教育委員会 1996 『中之条遺跡群寺浦遺跡Ⅱ』
- 6 坂城町教育委員会 2001 『中之条遺跡群北川原遺跡Ⅱ』
- 7 坂城町教育委員会 1994 『南条遺跡群東裏遺跡Ⅱ・青木下遺跡』
- 8 平成11年度発掘調査を実施。現在整理中。
- 9 長野市教育委員会 1980 『田中沖遺跡』長野市埋蔵文化財センター飯島氏のご教授による。
- 10 長野市教育委員会 1991 『田中沖遺跡Ⅱ』
- 11 (財)長野県埋蔵文化財センター他 2000 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 6』
- 12 長野市教育委員会 1993 『松原遺跡Ⅲ』
- 13 屋地遺跡 長野市埋蔵文化財センター飯島氏のご教授による。
- 14 屋地遺跡 長野市埋蔵文化財センター飯島氏のご教授による。
- 15 松本市教育委員会の直井氏、竹原氏のご教授による。
- 16 松本市教育委員会 1993 『小原遺跡Ⅱ』
- 17 松本市教育委員会の直井氏、竹原氏のご教授による。
- 18 長野県教育委員会 1974 『長野県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書』上伊那郡箕輪町
- 19 信濃毎日新聞 1992年10月31日付の記事によるとカマド祭祀用遺物としての可能性が指摘されている。

- 20 山梨県教育委員会 1987 「姥塚遺跡 姥塚無名墳」
- 21 御坂町教育委員会 1979 「御坂町の埋蔵文化財」「郷土遺跡」
- 22 山梨県教育委員会 1987 「二之宮遺跡」
- 23 猪股 喜彦 1982 「丘陵」第9号 「一宮町鞍掛遺跡発掘調査報告(1)」
- 24 石和町教育委員会 1990 「松本塚ノ越遺跡」
- 25 西山 克巳 1996 「長野県考古学会誌」「7世紀代に用いられた円筒形土器」

### 第3節 煤の付着した須恵器高台付坏について

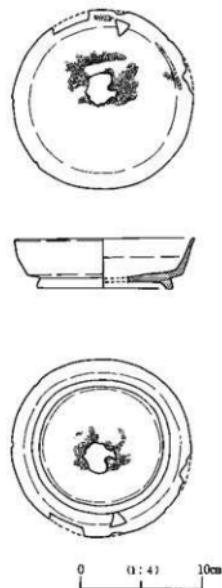
H33号住居址から出土した須恵器には、煤が付着した高台付坏(第93図19)があるため、ここで詳細な説明を加えることとする。第125図に煤の付着状況の実測図を示した。

煤は内外面の中央付近に付着が見られ、土器自体がその影響で欠損している状態である。われ方を観察すると内面底部側から外面底部側にかけて器壁が曲がっている状態である。観察の結果、内面の方が付着範囲は広範囲にわたるようと思える。

更埴条里遺跡・屋代遺跡群の報告書内(註1)で明らかに灯明具とされているのは、口縁部に灯芯状のこびりつきがあるものであるが、灯芯状のこびりつきが見られなくても、特異な煤の付着やこびりつきが認められるものは灯明具として使われた可能性が指摘できるようである。よって本遺物についてもこびりつきが内外面に多く見られる点から、灯明具として使用された可能性を指摘しておきたい。

#### 註

- 1 烏羽英継 1999 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26」「第8章第2節 古代の土器 重要遺物のまとめ」



第125図 H33号住居址出土須恵器の  
煤付着状況

第1表 出土土器観察表

番号	遺構名	種別	器形	法量(a)	残存度	調査	胎土	備考
8-1	Y1号住居址	弥生	高环	<34.3> —	環部1/5	内外面 赤色塗彩	10YR7/4にぶい黄褐色	
8-2	*	*	台付甕	<10.2> —	口縁部～胴部1/4	外面 赤色塗彩 内面 瓷部に墨文	10YR5/6黄褐色土	素母、石英粒含む
8-3	*	*	短頸甕	7.0	頭部～底部	外面 頭部ナデ? 内面 頭部ヨコナデ、胴部赤色塗彩	10YR7/4にぶい黄褐色土	
8-4	*	*	小型甕	<8.2> —	口縁部～胴部	外面 口縁部ヨコナデ、以下ヘラミガキ、ハケ 内面 ハケ、内外面赤色塗彩	10YR7/4にぶい黄褐色土	素母、石英粒わずかに含む
8-5	*	*	甕	<19.2> —	口縁部1/4	外面 陶部ヨコナデ、頭部模様き墨状文等間 隔止め、頭部磨滅 内面 ナデ	口縁部 5YR6/4灰褐色 その他 10YR6/4にぶい黄褐色 上	素母、石英粒等含む
8-6	*	*	甕	4.5	ほぼ完形	外面 瓷部模様き墨状文等間隔止め 内面 ハケ	外周面 10YR5/6明黄褐色土 内面 10YR6/2明黄褐色土	
8-7	*	*	甕	— 8.4	底部	摩耗激しく不明	10YR7/6明黄褐色土	素母、石英粒わずかに含む
8-8	*	*	甕	<14.6> —	口縁部1/5	外面 頭部にわざか波状文痕、その他 消耗著しく不明	外周 7.5YR5/6明黄褐色土 内面 10YR6/4にぶい黄褐色土	
8-9	*	*	甕	<12.6> —	口縁部～胴部	外面 白絞繩部ヨコナデ、以下波状文 内面 ヨコナデ	外周 5YR5/2灰褐色土 内面 5YR3/3灰褐色土	素母、石英、長石 粒含む
8-10	*	*	小型甕	<14.8> 5.9 —	口縁部～底部1/4	外面 口縁部～頭部ヨコナデ、胴部ナデ? 内面とも摩耗のため不明瞭	10YR5/6明黄褐色土、外周胴部 に10YR6/1褐色土が底点に付く	
9-11	*	*	石瓶					重さ1.1g
11-1	Y2号住居址	弥生	甕	— 10.0	底部	外面 極方向へのヘラミガキ 内面 摩耗により不明	外周 頭部SYR4/2にぶい赤褐色 土、底部2.5Y7/6明黄褐色土、 内面5YR2/2暗赤褐色土	素母、石英、長石 粒含む
13-1	Y3号住居址	弥生	高环	<8.8> —	脚部	外面 ナデ?	10YR5/6明黄褐色土	素母、石英粒含む
13-2	*	*	鉢	16.9 —	底部なし3/4	外面 赤色塗彩	10YR5/6明黄褐色土	
13-3	*	*	鉢	22.6 —	底部なし1/3	外面 赤色塗彩	2.5Y6/6明黄褐色土	
13-4	*	*	甕	<19.2> —	口縁部～胴部	外面 瓷部模様き丁字、ハケ 内面 ハケ、口縁部～頭部、赤色塗彩	10YR6/4、にぶい黄褐色土	
13-5	*	*	甕	— —	胴部	外面 壁面のヘラミガキ、赤色塗彩 内面 摩耗により不明	10YR6/2灰褐色土	素母、石英等含む
13-6	*	*	甕	9.3 —	底部	外面 ハク、赤 内面 ハラナデ、底部ユビナデ	外周 10YR7/6明黄褐色土 内面 2.5Y6/4にぶい黄褐色土	
13-7	*	*	甕	— 11.2	底部	外面 頭部ハケ、底部ナデ 内面 ハラナデ	10YR5/4にぶい黄褐色土	
13-8	*	*	甕	<8.6> —	胴下部～底部	外面 ミガキ、一部砂剥離 内面 摩耗により不明	10YR7/4にぶい黄褐色土	素母、石英等含む
13-9	*	*	甕	14.7 —	口縁部～胴部	外面 口縁部ハケ剥離～横方向のミガキ、頭部 模様き墨状文(2連止め) 制縫模様のハ ケ 内面 横方向のミガキ	7.5YR4/3褐色土	
13-10	*	*	甕	<8.1> —	胴部～底部	外面 橫方向のヘラミガキ 内面 磨削～立ちあがりヘラミガキ	外周 10YR7/3にぶい黄褐色土 内面 10YR6/6明黄褐色土	素母、石英、長石 粒含む
13-11	*	*	甕	— 8.8	底部	外面 ヘラケズリ 内面 磨削ユビナデ	外周 10YR5/4にぶい黄褐色土 内面 7.5YR4/3褐色土	石英粒等多く含む
15-1	Y4号住居址	弥生	高环	— 4.6	脚部	外面 ヘラミガキ、赤色塗彩 内面 ヘラミガキ	外周 10YR6/6明黄褐色土 内面 10YR6/4にぶい黄褐色土	
15-2	*	*	甕	20.4 —	口縁部～胴部	外面 頭部ヨコナデ、口縁部模様方向のヘラミガ キ、頭部模様き丁字 内面 山腹部～頭部赤色塗彩、口縁部ヘラミガ キ、脚部ナデ	10YR6/6明黄褐色土	
15-3	*	*	甕	— 10.2	胴部～底部	外面 ハケ 内面 ナデ、ハケ	外周・断面 7.5YR5/3にぶい黃 色土 内面 10YR6/3にぶい黄褐色土	

第2表 出土土器観察表

番号	遺構名	種別	器形	法量(cm)	残存度	調査	胎 土	備 考
15-4	Y4号住居址	甕生	壺	— 5.6	底部	外面 ナデ 内面 ナデ	外面 7.5YR4/2灰褐色土 内面・断面 7.5YR5/4に赤い褐色土	
15-5	*	*	壺	— 8.2	脚部～底部	外面 ハラナデ 内面 ハラナデ	外面・断面 10YR5/4に赤い黄色土 褐色土 内面 10YR4/2褐色土	底部穿孔
15-6	*	*	壺	16.1 —	口縁部	外面 口縁部擦損き波状文、颈部開き縦状文、等級隔止め 内面 ナデ	外面・断面 10YR5/4に赤い黄色土 褐色土 内面 7.5YR4/2灰褐色土	
15-7	*	*	壺	— 6.0	脚部～底部	外面 制作歴方向のハケ、底部へラケズリ 内面 制作歴ハラナデ、底面横方向のハケ	外面 10YR4/4に赤い黄色土 内面 7.5YR5/4に赤い褐色土 断面 10YR5/1褐色土	内面に付着物
16-1	H2号住居址	甕生	高壺	(12.4)	脚部1/2	外面 赤色彫影 内面 ハケ	外面・断面 7.5YR6/4に赤い黄色土 内面 10YR6/4明褐色土	
16-2	H3号住居址	*	高壺	(7.8) (8.3)	脚部	外面 縦方向にヘラミガキ 内面 底部ヨコナデ	外面・内面 10YR6/3に赤い黄色土 褐色土 断面 10YR5/1褐色土	石英等含む
16-3	H3号土坑址	*	高壺	— —	基部～脚部	焼耗により不明	7.5YR5/8明褐色土	中央部に穿孔有
16-4	P7	*	壺	— 10.7	底部	外面 赤色彫影 内面 焼耗により不明	10YR5/8黄褐色土	
18-1	H1号住居址	土器器	高壺	17.4 14.2 18.0	完形	外面 脚部、瓶口方向のミガキ 内面 脚部ハケ、裙部ヨコナデ、环部黒色處理	10YR6/4明褐色土	
18-2	*	*	高壺	— (10.0)	环底部～脚部	外面 制作歴方向のハラケズリ 内面 製作歴方向のハラナデ、环部黒色處理	10YR6/4明褐色土 脚部 N6/6灰土 断面 7.5GG/1绿灰色土	
18-3	*	*	球腹壺	(22.0)	口縁部～脚部1/4	外面 制作歴の横方向のヘラミガキ 内面 山縁部横方向のヘラミガキ、脚部ハケナデ	2.5Y7/4浅黄色土	
18-4	*	*	壺	19.7 8.0 25.5	完形	外面 山縁部ヨコナデ、脚部ヘラミガキ 内面 瓶方向のハケ→ヘラミガキ	外面・内面 10YR6/4に赤い黄色土 内面 10YR5/3に赤い黃褐色土 断面 10GY1/1綠灰色土	
20-1	H2号住居址	土器器	器台	6.4	脚部1/2	外面 ハラケズリ 内面 脚部横方向のヘラミガキ	7.5YR5/4に赤い褐色土	
20-2	*	*	鉢	(10.4) (4.6) (6.5)	口縁部～底部2/3	外面 縦方向のヘラミガキ→ナデ 内面 ヘラミガキ→ナデ	外面・断面 10YR6/3に赤い黄色土 内面 10YR5/2灰褐色土	
20-3	*	*	壺	(17.2)	山縁部～脚部1/4	外面 横方向のヘラケズリ 内面 ナデ	外面 10YR6/3に赤い黄色土 内面 10YR5/2灰褐色土	
20-4	*	*	珠網壺	— (8.9)	脚部～底部1/4	外面 横方向のヘラケズリ 内面 黒色處理ナデ	外面 10YR7/2に赤い黄色土 内面 10YR4/1褐色土	
22-1	H3号住居址	土器器	壺	(13.9) — 4.6	口縁部～底部1/2	外面 ナデ→ケズリ 内面 黑色處理、ナデ	外面・断面 10YR5/4に赤い黄色土	
22-2	*	*	壺	— —	山縁部～底部3/4	外面 ケズリ 内面 黑色處理、ヘラミガキ	外面・断面 10YR6/4に赤い黄色土	
22-3	*	*	壺	13.4 — 4.2	口縁部～底部3/4	外面 ナデ→ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ (崩滅) 内面 脚部品目処理	外面 10YR5/3に赤い黄色土 内面 10YR5/1褐色土	
22-4	*	*	壺	13.2 — 4.1	完形	外面 粗なヘラケズリ 内面 黑色處理	外面・断面 10YR6/3に赤い黄色土	
22-5	*	*	壺	14.0 — 4.1	山縁部～底部4/5	外面 山縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内面 黑色處理、ヨコナデ	10YR5/2、灰褐色土	
22-6	*	*	壺	16.9 —	口縁部～脚部4/5	外面 ヨコナデ→ケズリ 内面 黑色處理、ヨコナデ	外面・断面 10YR5/6明褐色土	
22-7	*	*	高壺	— 17.3 13.0 16.3	完形	外面 脚部、縦方向のヘラミガキ 内面 黑色處理	外面・断面 10YR7/6明褐色土 脚部内面 10YR6/6明褐色土	
22-8	*	*	高壺	— 12.4	脚部1/2	外面 縦方向のヘラミガキ 内面 縦方向のヘラミガキ	10YR7/3に赤い黄色土	白い胎土
22-9	*	*	小型壺	(13.8) 7.9 15.7	口縁部～底部3/4	外面 山縁部ヨコナデ、脚部ハケ、透耗激しい 内面 山縁部ヨコナデ、脚部ハケ	外面 7.5YR6/6明褐色土 内面・断面 7.5YR5/4に赤い褐色土	

第3表 出土土器観察表

番号	遺構名	種別	器形	法量(㎤)	残存度	測定	胎土	備考
22-10	H3号住居址	土鍋器	小型甕	13.4	口縁部~胴部	外側 口縁部クロコヨコナデ、胴部縱方向のハケ 内側 明部、ヨコナデ	外面・底面 10YR4/2灰褐色土 内面 10YR6/3に多い黄褐色土	
22-11	*	*	小型甕	— 5.0 (10.8)	胴部~底部3/4	外側 ナデ 内側 ヨコナデ	10YR4/6褐色土	右美、雲丹粉多く含む
22-12	*	*	小型甕	— 6.5 (12.7)	胴部~底盤1/3	外側 縦方向のナデ、底部ヨコナデ 内側 ヨコナデ	外側・底面 10YR6/4に多い黄褐色土 内面 黄褐色土	底部木漬痕
22-13	*	*	甕	15.5 3.4 12.2	丸形	外側 縦方向のハケ 内側 ハケ	外面 10YR7/3に多い黄褐色土 内面 10YR6/6浅褐色土	雲丹粉含む 半孔あり
22-14	*	*	球胴甕	16.2 5.2 18.5	ほぼ丸形	外側 口縁部ヨコナデ、胴部ケズリ? 内側 ヨコナデ→ハケ	2SY7/4浅黄色土	
22-15	*	*	球胴甕	22.2 — —	口縁部~胴部1/10	外側 ヨコナデ 内側 ヘラミガキ	10YR7/4に多い黄褐色土	
22-16	*	*	鉢	18.5 14.5	丸形	外側 ヘラケズリ 内側 ヘラケズリ	外面・内面 2SY6/4に多い黄褐色土 断面 10YR6/3に多い黄褐色土	
22-17	*	*	鉢	13.0 8.0 12.9	口縁部~底盤3/4	外側 肩部のヘラミガキ 内側 黒色処理、ヨコナデ	外側 浅褐色土 10YR7/4に多い黄褐色土 内面 黄褐色土	
22-18	*	*	球胴甕	21.2 7.2 30.4	口縁部~底盤2/3	外側 口縁部ナデ、胴部ヘラミガキ 内面 口縁部ナデ、胴部方向のナデナダ・ハケ	2SY7/4浅黄色土	
22-19	*	*	球胴甕	— 7.8	口縁部~胴部 胴部~底盤	外側 ヘラミガキ 内面 ヘラケズリ、指痕	2SY6/6褐色土	
23-20	*	*	甕	31.0 — —	口縁部~胴部1/2	外側 ヨコナデ、ハケ 内面 縦方向のハケ	2SY6/5褐色土	北斜系
23-21	*	*	長胴甕	<18.0 — (20.7)	口縁部~胴部2/5	外側 口縁部ヨコナデ、縦方向のナデ 内面 ナデ	10YR5/4に多い黄褐色土	#6mmまでの小石 を多く含む、芯母 粒多く含む
23-22	*	*	長胴甕	20.4 (23.8)	口縁部~胴部	外側 縦方向のハケ、口縁部ナデ 内面 縦方向のハケ、口縁部ナデ	10YR5/4に多い黄褐色土	芯母粒多く含む、 外側焼付着
23-23	*	*	長胴甕	23.3 (23.8)	口縁部~胴部	外側 ヨコナデ、ハケ 内面 縦方向のナデ	10YR5/4に多い黄褐色土	左母、良石粒含む
23-24	*	*	長胴甕	— 8.3 37.1	ほぼ丸形	外側 縦方向のハケ 内面 縦方向のナデ	10YR5/4に多い黄褐色土	雲母粒多く含む、 底部木漬痕
23-25	*	*	長胴甕	<18.2 (27.4)	口縁部~胴部1/3	外側 口縁部ヨコナデ、縦方向のハケ 内面 口縁部ヨコナデ、斜め方向のハケ	外面 5YR4/6赤褐色土 内面 10YR3/3褐色土 断面 10YR4/4褐褐色土	左母、石英粒多く 含む
23-26	*	*	長胴甕	17.3 (8.2) (32.5)	口縁部~底盤3/4	外側 縦方向のハケ 内面 斜め方向のハケ	10YR6/4に多い黄褐色土	底部小窓取 雲母、長英粒含む
23-27	*	*	長胴甕	— 7.0 31.8	胴部~底盤	外側 縦方向のハケ 内面 橫方向のハケ	10YR7/4に多い黄褐色土	底部木漬痕
24-28	*	*	長胴甕	<19.6 7.0 (35.0)	口縁部~底盤3/4	外側 ヨコナデ 内面 底盤ヘラケズリ、胴部ナデ、輪積み灰	7.5YR3/6褐色土	#5mm最後の小石 含む、石英、雲母 粒多く含む
24-29	*	*	長胴甕	22.8 (34.8)	ほぼ丸形	外側 ヘラケズリ 内面 橫方向のケズリ	外面 10YR5/3に多い黄褐色土 内面、底面 10YR5/4に多い黄褐色土	雲母粒含む、地成 やや雜
24-30	*	*	長胴甕	20.0 5.6 34.0	丸形	外側 縦方向のハケ 内面 橫方向のハケ	外側 10YR6/4に多い黄褐色土 内面 10YR5/4に多い黄褐色土	雲母粒多、良石、 石英粒含む
24-31	*	*	長胴甕	<20.1 — (28.5)	口縁部~胴部2/3	外側 縦方向のヘラケズリ、口縁部ヨコナデ 内面 橫方向のヘラナデ、口縁部ヨコナデ	10YR6/4に多い黄褐色土	外側焼付着
24-32	*	*	長胴甕	18.5 5.3 (29.6)	口縁部~胴部3/4	外側 橫方向のヘラケズリ 内面 ナデ	10YR5/4に多い黄褐色土	焼成跡
24-33	*	*	長胴甕	18.5 6.1 27.3	丸形	外側 縦方向のハケ 内面 ヨコナデ、横方向のハケ	10YR6/6明黄褐色土	
24-34	*	七製品	円筒器 土製品	12.1 5.7 52.7	ほぼ丸形	外側 縦方向のハケ 内面 縦方向のハケ、指痕	外側 10YR6/6明黄褐色土 内面、断面 10YR5/4に多い黄褐色土	雲母粒多く含む 燒成跡

第4表 出土土器観察表

番号	遺構名	種別	器形	法寸(m)	残存度	調査	胎土	備考
26-1	II7号住居址	土器器	环	12.4 6.0 5.7	完形	外側 ハラケズリ 内側 ナダ	10YR6/4に近い黄褐色土	石英粒多く含む
26-2	*	土器器	鉢	9.8 —	口縁部～底部1/3	外側 ハラナダ 内側 黒色處理、横方向のミガキ	10YR5/4に近い黄褐色土	41~2mmの石英粒多く含む
26-3	*	土器器	瓶	12.2 2.1 11.9	完形	外側 底部ハケ、口縁部ヨコナダ、脚部ヘナダ 内側 口縁部ヨコナダ	外側・断面 10YR6/6明黄色土 内側 SYR6/3に近い赤褐色土	内外側 タール状の付着物、底部多孔化等多、石英等含む
26-4	*	土器器	小鉢型	13.4 7.0 15.5	ほぼ完形	外側 磨き面らしいがハラケズリか? 内側 ハラケズリ	10YR6/4に近い黄褐色土	内側 上部墨すんでる
26-5	*	土器器	甕	13.8 6.5 23.5	完形	外側 横方向のハラケズリ→ハケ 内側 ハラケズリ	10YR6/4に近い黄褐色土	内外側タール状の付着物
26-6	*	土器器	長颈甕	— 6.4 (29.0)	腹部～底部	外側 ハラケズリ 内側 ハラケズリ	外側 10YR5/3に近い黄褐色土 内側 10YR6/6明黄色土	41~3mmの石英、基母粒含む
26-7	*	土器器	長颈甕	(22.1) (7.5) (32.2)	口縁部～底部3/4	外側 脊方向のハケ 内側 横方向のハケ	外側・断面 10YR7/4に近い黄褐色土 内側 10YR6/6明黄色土	
28-1	II9号住居址	頸部器	环	(11.4) (8.6) (5.1)	口縁部～底部1/3	外側 ロヨヨコナダ 内側 ロクロヨコナダ	7.5GY5/1緑灰土	底部ヘラキリ痕
28-2	*	土器器	环	(14.5) 4.7	口縁部～底部2/3	外側 ハラナダ 内側 黒色處理	10YR5/3に近い黄褐色土	41mm 基母、石英粒多く含む
28-3	*	*	环	(12.3) 5.6 4.7	口縁部～底部2/3	外側 ハラミガキ 内側 黒色處理、ハラミガキ	10YR6/3に近い黄褐色土	基母、石英粒多く含む
28-4	*	*	高环	(11.7) (8.0) 7.0	半完形	外側 ハラケズリ 内側 黒部無色處理	10YR6/4に近い黄褐色土	
28-5	*	*	高环	— (13.8)	脚部	外側 脊方向のハラミガキ 内側 黒色處理	10YR5/4に近い黄褐色土	41~3mm の植物纏含む
28-6	*	*	高环	— — —	脚部1/2	外側 脊方向のハラミガキ 内側 黑部無色處理	10YR7/4に近い黄褐色土	41mm 前後の基母、石英粒含む
28-7	*	*	長颈甕	(23.9) — —	口縁部～脚部	外側 ヨコナダ、ハラミガキ 内側 腹部無色處理	外側 10YR6/4に近い黄褐色土 内側 10YR7/4に近い黄褐色土	
28-8	*	*	小型甕	(12.6) 7.6 (13.5)	口縁部～脚部1/3	外側 ハラケズリ、輪構み張 内側 ロヨヨコナダ	外側 10YR6/4に近い黄褐色土 内側 10YR6/6明黄色土	
28-9	*	*	甕	— 7.2	脚部～底部	外側 ハラナダ 内側 ナダ	外側 10YR4/3Lに近い黄褐色土 内側 10YR6/2K明黄色土	
28-10	*	*	甕	— 6	底部	外側 ハラナダ 内側 ハラナダ	外側 10YR6/3に近い黄褐色土 内側 10YR6/4に近い黄褐色土	
28-11	*	*	甕	(19.7) (10.8) (27.7)	ほぼ完形	外側 ハラミガキ。口縁部ヘナダ 内側 横方向のハラミガキ	外側・断面 10YR7/4に近い黄褐色土 内側 10YR5/4に近い黄褐色土	
29-1	H10号住居址	土器器	环	11.8 — 4.9	一部欠損のはほ完形	外側 ハラミガキ 内側 ハラミガキ	10YR6/6明黄色土	41~3mm 石英、云母等軽石含む
29-2	*	*	高环	— 12.0 —	坏底部～脚部	外側 ハラミガキ 内側 黑色處理、ハラミガキ	10YR6/4に近い黄褐色土	
29-3	*	*	鉢	(20.0) 14.5	口縁部～底部2/3	外側 ハラミガキ 内側 ハラミガキ	10YR7/4に近い黄褐色土	
32-1	III1号住居址	土器器	环	12.2 — 4.9	ほぼ完形	外側 ハラミガキ 内側 黑色處理、ハラミガキ	10YR6/4に近い黄褐色土	41~3mm 石英、長石、雲母等軽石含む
32-2	*	*	高环	— — —	坏底部～脚部	外側 ハラミガキ 内側 黑部無色處理	10YR6/4に近い黄褐色土	基母、石英粒等多く含む
32-3	*	*	小型甕 口壺	(12.4) 7.4 8.4	口縁部～底部1/2	外側 ナダ 内側 ナダ	外側・断面 10YR6/4に近い黄褐色土 内側 10SG5/1暗青灰土	石英粒多、その他の雲母、長石等含む
35-1	III6号住居址	頸部器	甕	(14.4) —	体部～口縁部	外側 伝記ヘラケズリ、口縁部ロヨヨコナダ 内側 ロクロヨコナダ	外側 2.5GY5/1オリーブ灰色土 内側 10SG5/1暗青灰土	

第5表 出土土器観察表

番号	遺跡名	種類	器形	法量(ml)	残存度	調査	断土	備考
35-2	HII6号住居址	土器器	坪	11.8 11.5 4.2	完形	外面・口縁 ロクロヨコナダ、底部ヘラケズリ 内面・口縁 ロクロヨコナダ、底部ヘラケズリ	10YR7/2にぶい黄褐色土	
35-3	*	*	坪	14.3 5.2	2/3	焼耗著しく不明	2.5GY6/1オリーブ灰土	灰白色 燒反覆し
35-4	*	*	坪	13.6	4/5	外面 ケズリ、口縁ヨコナダ 内面 ヨコナダ	10YR6/4にぶい黄褐色土	雲母粒含む
35-5	*	*	坪	(10.9) (3.1)	1/5	外面 口縁ヨコナダ、底部ヘラケズリ 内面 ヨコナダ	外面 10YR5/1褐色土上 内面 10GY4/1暗綠褐色土	燒成度
35-6	*	*	坪	(10.3) (3.3)	1/4	外面 焼耗している。ヘラミガキ? 内面 焼耗している。ヘラミガキ?	2.5Y7/1灰褐色土	燒成度
35-7	*	須恵器	要	(27.4) —	口縁部	外面 ナデ 内面 ナデ	外面・断面 5GY3/1暗青灰色土 内面 5EG4/1暗青灰色土	
35-8	*	土器器	長削甕	19.3 7.3 32.1	完形	外面 ヨコナダ→縱方向のハケ 内面 ヨコナダ→縱方向のハケ	10YR5/4にぶい黄褐色土	外面に粘土付着
35-9	*	*	長削甕	(24.3) 5.9 30.8	はぼ完形	外面 ヨコナダ→縱方向のヘラケズリ 内面 ヨコナダ。巻き上げ痕残る	2.5YR5/6明青褐色土	
35-10	*	*	長削甕	25.6 —	口縁部～胴部	外面 縦方向のヘラケズリ 内面 縦方向のケズリ	7.5YR4/4褐色土	
35-11	*	*	要	7.3 —	胴部～底部	外面 ナデ? 内面 ナデ?	外面・断面 10YR4/3にぶい黄褐色土上 内面 10YR6/6明黄褐色土	外面に堆付着
35-12	*	*	要	7.4 —	胴部～底部	外面 ヘラナデ 内面 ナデ、底部ヘラナデ	7.5YR4/4褐色土	
35-13	*	*	要	— 4.1	胴部～底部	外面 ナデ 内面 ナデ	SYR4/3にぶい赤褐色土	雲母、石英等鉱物 多く含む
35-14	*	*	要	— 7.1	底部	外面 ナデ 内面 ナデ	外面 7.5YR5/4にぶい褐色土 内面 SYR3/3赤褐色土	右夷、長石、雲母 粒含む
35-15	*	上製品	円筒形土製品	— —	胴部のみ	外面 縦方向のヘラケズリ 内面 巻き上げ痕	外面 5YR5/6明赤褐色土 内面・断面 10YR6/5明黄褐色土上	
35-16	*	*	円筒形土製品	(8.0) —	胴部～底部	外面 縦方向のヘラケズリ 内面 巻き上げ痕	10YR5/3にぶい黄褐色土	
35-17	*	*	羽口	— —		外面 ヘラケズリ?	外面 10YR7/4にぶい黄褐色土 内面 10YR6/6明黄褐色土	
38-1	HII7号住居址	土器器	坪	9.2 3.6	完形	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ	5YR5/4にぶい赤褐色土	
38-2	*	*	坪	(8.2) (3.6)	口縁部1/4 底部1/5	外面 焼耗している。ヘラケズリ? 内面 黒色處理。ヘラミガキ	2.5Y7/4にぶい黄褐色土	
38-3	*	*	坪	13.2 4.3	はぼ完形	外面 ヘラケズリ 内面 黑色處理。ヘラミガキ	10YR7/4にぶい黄褐色土 ~2.5Y8/4淡黃褐色土	
38-4	*	*	坪	12.6 4.1	口縁部～底部3/4	外面 ヘラナデ→ヘラケズリ 内面 黑色處理。ヘラミガキ	2.5Y8/4淡黃褐色土 ~10YR7/4にぶい黄褐色土	
38-5	*	*	坪	(15.6) 6.1	口縁部～底部3/4	外面 ヘラミガキ? 内面 ヘラミガキ	外面 10YR6/4にぶい黄褐色土 内面 7.5YR5/3にぶい褐色土	
38-6	*	*	鉢	13.3 (8.7)	口縁部～底部3/4	外面 ヘラケズリ 内面 底部ヘラミガキ	7.5YR4/6褐色土	石英粒多く含む
38-7	*	須恵器	小厚盃	— —	胴部～脚部	外面 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ	外面・断面 5GY/6灰褐色土 内面 10GYS/1緑灰土	自然堆付着
38-8	*	須恵器	要	(20.8) —	口縁部～頭部	外面 平行叩き文 内面 同心円文	7.5YS/1灰褐色土	自然堆付着
38-9	*	土器器	球削甕	(19.8) —	口縁部～副部	外面 ヘラミガキ 内面 口縁部ヘラミガキ、副部ヘラナデ一部ハ ケ	外面 10YR6/6明黄褐色土 内面 10YR7/3にぶい黄褐色土	

第6表 出土土器観察表

番号	遺構名	種類	器形	法量(cm)	残存度	調査	胎土	備考
38-10	H17号住居址	土器	壺	7.0 —	底部	外面 ヘラナデ 内面 ヘラナデ	7.5YR5/4に近い褐色土	石英粒多く含む
38-11	*	土製品	支脚	4.8 4.0 16.4	充形	外面 ヘラケズリ 内面 指痕	10YR5/4に近い黄褐色土	石英粒多く含む
38-12	*	*	支脚	5.2 4.4 15.6	充形	外面 ヘラケズリ 内面 指痕	10YR5/3に近い黄褐色	
38-13	*	*	円筒形 土製品	(11.2) — —	L縁部~胴部	外面 ハケ 内面 卷き上げ痕	外面、内面 10YR5/4に近い黄褐色土	
38-14	*	*	円筒形 土製品	— — —	胴部のみ	外面 ハケ 内面 卷き上げ痕	10YR5/6黄褐色土	
40-1	H18号住居址	頸窓器	壺	(8.4) (5.7) 2.4	口縁部~底部1/3	外面 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ	10YR5/1褐色土	
40-2	*	土器	土製品	(5.4) — —	底部のみ	外面 ヘラナデ 内面 ヘラナデ	外面、内面 10YR4/1褐色土 内面 7.5YR6/6褐色土	底部に穿孔有
40-3	*	土器	小型壺	(7.4) (12.4)	口縁部~底部3/4	外面 ナデ、磨耗度しい 内面 黒色処理。ヘラナデ	外面 5YR5/4に近い赤褐色 内面 5YR5/3に近い赤褐色土	
40-4	*	土器	高环	— — —	脚部	外面 ヘラケズリ 内面 脚部、黒色処理	10YR6/6明黄褐色土	
40-5	*	土器	高环	(19.4) — —	环部1/4	外面 ヘラケズリ 内面 环部黑色処理	10YR7/4に近い黄褐色土	
40-6	*	頸窓器	壺	(20.0) 4.6	1/5	外面 回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナダ	外面 5BG4/1暗青灰色 内面 10YR7/3に近い黄褐色土	石を多く含む、粗い環状のつまみが付く
40-7	*	頸窓器	壺	(26.8) — —	口縁部~胴部	外面 平行巻き目文 内面 内円文	外側 10G4/1暗青灰色土 内側 10G5/1緑灰色土 底面 7.5G6/1緑灰色土	
40-8	*	土器	長脚器	(19.4) — —	L縁部~脚部1/2	外面 ナデ 内面 卷き上げ痕、他は壊耗により不明	10YR8/4浅黄褐色土	
40-9	*	土器	長脚器	(26.6) — —	口縁部~胴部	外面 ナデ 内面 壊耗のため不明	10YR7/4に近い黄褐色土	石英、雲母粒含む
40-10	*	土器	円筒形 土製品	— 8.2	胴部~底部	外面 ナデ 内面 ナデ	10YR7/6明黄褐色土	
43-1	H23号住居址	土器	壺	12.3 — 4.4	L縁部~底部3/4	外面 ヨコナダ、底部ヘラケズリ 内面 ヨコナダ	10YR1/5灰褐色土	
43-2	*	土器	壺	(12.8) — —	口縁部1/3	外面 ナデ 内面 黒色処理、ヘラミガキ	10YR6/2に近い灰褐色土	
43-3	*	土器	壺	14.4 4.7	充形	外面 ヘラケズリ 内面 黒色処理、ヘラミガキ	10YR7/4に近い黄褐色土	
43-4	*	土器	壺	(15.2) 9.2 3.7	口縁部~底部1/2	外面 ヘラケズリ 内面 黑色処理。ヘラミガキ	10YR7/4に近い黄褐色土	
43-5	*	土器	高环	16.4 — —	环部	外面 ヘラミガキ 内面 黑色処理、ヘラミガキ	10YR7/4に近い黄褐色土	
43-6	*	土器	鉢	(17.8) 10.7	口縁部~底部2/3	外面 ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナダ、胴部ヘラミガキ、底部 ナデ	10YR7/4に近い黄褐色土	
43-7	*	土器	鉢	(9.0) 6.0 7.7	ほぼ充形	外面 破壊著しく不明 内面 ヘラケズリ	外側 2.5YR4/6赤褐色土 内側 5YR4/6赤褐色土	
43-8	*	土器	鉢	23.0 8.0 10.2	充形	外側 方向のハケー→L縁部ナデ 内面 橫方向のハケ	外側、内面 5YR5/6明赤褐色土	
43-9	*	土器	短脚器	13.2 14.8 10.9	充形	外面 ヘラミガキ 内面 ナデ	10YR4/7に近い黄褐色土	
43-10	*	土器	短脚器	9.2 (7.7)	L縁部~胴部	外面 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	外側 5YR4/4に近い赤褐色土 内側 5YR5/4に近い赤褐色土	

第7表 出土土器観察表

番号	遺構名	種別	器形	法算(a)	残存度	内 観	胎 土	備 考
43-11	H23号住居址	土師器	短腹壺	(11.2) 9.1	口縁部～底部2/3	外面 口縁部ヨコナデ、側は磨耗のため不明 内面 黒色処理、ナデ?	2.5YR4/4に近い赤褐色土	
43-12	*	土師器	壺	16.8 — 17.4	ほぼ完形	外側 横方向のハケ 内面 ハラミガキ	10YR4/4暗褐色土	底部單孔 穿孔直径3.1cm
43-13	*	土師器	壺	15.6 — 14.0	口縁部～底部2/3	外側 ハケ 内面 ハラミガキ	10YR5/4に近い褐色土	底部单孔
43-14	*	土師器	小型壺	11.0 6.5 12.2	口縁部～底部	外側 ハケ 内面 黒色処理、ヨコナデ	10YR5/6黄褐色土	底部本來痕
43-15	*	土師器	小型壺	(10.9) 5.8 13.1	口縁部～底部3/4	外側 ハケ 内面 ナデ	10YR3/4暗褐色土	底部本來痕
43-16	*	土師器	小鉢甌	15.1 7.6 17.5	ほぼ完形	外部、ヘラケズリ 内面 ナデ	外面 10YR5/4に近い黄褐色土 内面 10YR4/4に近い黄褐色土	底部本來痕
43-17	*	土師器	小容器	(21.0) 19.5	口縁部～底部	外側 橫方向のハケ 内面 ハラナデ	外面 7.5YR5/6暗褐色土 内面・断面 10YR4/3に近い黄褐色土	
43-18	*	土師器	甌	(15.4) — (15.5)	口縁部～胴部	外側 橫方向のハケ 内面 ヨコナデ	10YR4/4暗褐色土	
43-19	*	土師器	甌	17.8 23.0	口縁部～底部2/3	外側 口縁部ナデ、腹部ヘラミガキ 横方向のヘラケズリ	外面・断面 5YR4/6黄褐色土 内面 10YR5/3に近い黄褐色土	
43-20	*	土師器	長脚甌	20.4 —	口縁部～胴部	外側 ハケ 内面 ハケ	10YR4/3に近い黄褐色土	外面に媒付痕
44-21	*	土師器	長脚甌	22.3 —	口縁部～胴部	外側 橫方向のヘラケズリ 内面 橫方向のハケ	外面 10YR5/3に近い黄褐色土 内面・断面 10YR4/3に近い黄褐色土	外面に媒付痕
44-22	*	土師器	長脚甌	(20.8)	口縁部～胴部	外側 橫方向のナデ 内面 ナデ?	10YR4/4に近い黄褐色土	
44-23	*	土師器	長脚甌	20.3 21.1 36.4	ほぼ完形	外側 橫方向のヘラケズリ 内面 ヘラケズリ、巻き上げ痕	10YR5/4に近い黄褐色土	外面に媒付痕
44-24	*	上製品	円筒形土製品	— —	胴部	外側 ハケ 内面 巷き上げ痕	10YR4/4暗褐色土	
44-25	*	上製品	円筒形土製品	7.0 (54.0)	ほぼ完形	外側 ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ、巻き上げ痕	SYR4/8赤褐色土	
44-26	*	土製品	円筒形土製品	10.0 5.5 55.4	ほぼ完形	外側 ヘラケズリ×ハケ 内面 ヘラケズリ×ハケ、巻き上げ痕	10YR6/4に近い黄褐色土	外面に媒付痕
46-1	H30号住居址	土師器	环	(12.0) — 4.2	口縁部～底部	外側 ハラミガキ、口縁端尾ヨコナデ 内面 ヨコナデ	7.5YR5/4に近い褐色土	↓3mm 前後の石英、 石英粒を含む
46-2	*	土師器	环	13.4 8.0 3.7	4/5	外側 ヘラケズリ、口縁端尾ヨコナデ 内面 黒色処理、ヘラミガキ	10YR7/4に近い黄褐色土	
46-3	*	土師器	鉢	11.2 4.3 4.8	完形	外側 ナデ、底部中央にヘラ状工具による刺み 内面 ナデ	10YR7/4に近い黄褐色土	↓3mm 前後の石英、 石英粒等含む
46-4	*	土師器	小型甌	— —	底部	外側 ヘラケズリ 内面 ナデ	10YR5/4に近い黄褐色土	
46-5	*	土師器	甌	— —	底部	磨耗著しく不明	10YR7/4に近い黄褐色土	↓3mm 程度の石を含む
48-1	H34号住居址	須恵器	环	(8.8)	全体～底部1/5	磨耗のため不明 底部切り離し後ナデ?	2.5Y7/1灰白色土	
48-2	*	土師器	甌	14.6 9.4 14.4	口縁部～底部4/5	外側 ナデ 内面 ヘラナデ	外面 SYR3/4暗褐色土 内面 7.5YR5/4に近い褐色土	石英粒多
48-3	*	土師器	甌	— —	頸部～胴部	外側 ハラミガキ 内面 頸部ヘラミガキ、胴部横方向のハケ	外面・内面 10YR6/4に近い黄褐色土 内面 2.5Y6/4に近い黄褐色土	石英粒多
49-1	H4号住居址	土師器	环	(14.8) (4.2)	口縁部～底部1/2	外側 ロクロヨコナデ、底部ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	外面 SY7/4浅黄色土 内面 2.5Y6/4に近い黄褐色土 内面 SY7/4浅黄色土	

第8表 出出土器観察表

番号	遺構名	種別	器形	法量(cm)	既存度	質 紋	施 工	備 考
49-2	114号住居址	土師器	环	(13.5) — (4.9)	口縁部～底部2/3	外面 内面 磨耗激しいため不明 黒色処理	外面 10YR6/4にない黄褐色土 前面 10YR5/1褐色土	右夷粒多
49-3	*	土師器	环	(12.8) — (4.2)	口縁部～底部1/3	外面 内面 黒色処理、ヘラミガキ	外面 10YR7/4にない黄褐色土 前面 10YR4/1褐色土	
49-4	*	土師器	环	12.8 4.4 (8.6)	口縁部～底部2/3	外面 内面 黒色処理、ヘラミガキ	外面 2.5Y6/6明黄褐色土 前面 2.5Y7/3浅黄色土	
49-5	*	土師器	鉢	(9.4) (5.6) (7.4)	口縁部～底部1/4	外面 内面 黒色処理、ナデ	外面・前面 10YR7/3にない黄褐色土	右夷粒多量に含む、 空母粒も多
49-6	*	土師器	鉢	(12.8) — —	口縁部～底部1/3	外面 内面 黒色処理、ヘラミガキ	外面・前面 2.5Y7/3浅黄色土	
49-7	*	灰陶器	椎体	— 10.0	底部のみ	外面 底部に浅い剥離痕多	2.5GY6/1オリーブ灰色土	
49-8	*	土師器	环	8.9 — 3.9	完形	外面 内面 ヨコナデ、捺痕 黒色処理	10YR7/3にない黄褐色土	
49-9	*	土師器	鉢	(15.0) — —	口縁部～腹部	外面 内面 ヘラケズリ ナデ	10YR6/6明黄褐色土	
49-10	*	土師器	甕	(20.5) — —	口縁部～頸部	外面 内面 ヨコナデ	外面・断面 2.5Y7/2浅黄色土 内面 10YR7/2にない黄褐色土	
49-11	*	土師器	甕	(17.5) (7.5) (17.9)	口縁部～底部3/4	外面 内面 横方向のヘラケズリ ヘラケズリ、ハケ	10YR6/4にない黄褐色土	
49-12	*	土師器	甕	(18.1) (7.5) (18.0)	口縁部～底部2/3	外面 内面 横方向のヘラケズリ、ヘラミガキ ヘラミガキ	外面・断面 2.5Y7/4浅黄色土 内面 10YR6/6明黄褐色土	
49-13	*	土師器	長颈甕	(20.6) — —	口縁部～腹部	外面 内面 ハケ ハケ	2.5YR5/4にない褐色土	右夷粒多
49-14	*	土師器	長颈甕	24.2 7.4 (38.0)	口縁部～底部2/3	外面 内面 巻き上げ痕	外面 7.5YR3/4暗褐色土 内面・断面 7.5YR5/1にない褐色土	底部木座痕
49-15	*	土師器	瓶	(19.0) (5.5) (19.5)	口縁部～底部1/2	外面 内面 ヘラナデ ヘラナデ	2.5Y6/6明黄褐色土	底部孔有
49-16	*	土師器	円筒形土製品	9.5 5.7 58.0	完形	外面 内面 ヘラケズリ ヘラナデ	外面・断面 10YR5/4にない黄褐色土 内面 7.5YR5/6明褐色土	底部孔有
50-17	*	土師器	球形甕	(1.0) — —	頸部～底部	外面 内面 横方向のヘラケズリ ハケ?	外面 7.5YR5/4にない褐色土 内面・断面 10YR5/4にない黄褐色土	
50-18	*	土製品	円筒形土製品	— 11.2 (26.0)	頸部～底部	外面 内面 横方向のヘラケズリ 横方向のヘラケズリ	10YR5/4にない黄褐色土	右夷、黄石粒含む、 空母粒多、底部孔有、木座痕
50-19	*	土製品	円筒形土製品	— — (28.0)	副部のみ	外面 内面 横方向のヘラケズリ 横方向のヘラケズリ	10YR5/4にない黄褐色土	
50-20	*	土製品	円筒形土製品	— 5.0 (5.5)	底部	外面 内面 ヘラケズリ? ヘラナデ、巻き上げ痕	外面 10YR4/2暗褐色土 内面・断面 10YR5/6暗褐色土	
50-21	E6号住居址	土師器	小型甕	11.5 13.7	完形	外面 内面 左から右へ前め方向のヘラミガキ 横方向のヘラミガキ	10YR5/3にない黄褐色土	外間に付着物
50-22	*	土師器	小型甕	— 8.0	調節部～底部1/4	外面 内面 ヘラナデ ヘラナデ	外面・内面 10YR5/4にない黄褐色土 前面 10YR4/1褐色土	
50-23	*	土師器	球形甕	25.2 8.4 26.0	口縁部～底部3/4	外面 内面 左から右下へのヘラミガキ ヘラミガキ	外面・内面 2.5Y6/4にない黄褐色土 前面 N4/0灰色土	
52-1	D1号土坑址	土師器	环	12.8 10.4 4.6	2/3	外面 内面 横方向のヘラケズリ 黑色處理、ヘラミガキ	外面・内面 10YR5/3にない黄褐色土	
52-2	*	土師器	高环	17.2 12.8 15.4	ほぼ完形	外面 内面 脚部横方向のヘラミガキ、颈部ヘラケズリ 脚部横方向のヘラケズリ、颈部黑色處理	2.5Y6/4にない黄褐色土	
52-3	*	土師器	高环	— 13.4	脚部	外面 内面 横方向のヘラケズリ 横方向のヘラケズリ	外面 10YR7/4にない黄褐色土 内面・断面 10YR5/2灰黄褐色土	

第9表 出土土器観察表

番号	遺構名	種別	器形	法量(cm)	残存度	測定	胎土	備考
52-4	D1号土坑址	土器器	鉢	16.0 <12.0	口縁部～底部	外側 横方向のヘラミガキ 内面 黒色處理	10YR6/4に近い黄褐色土	
52-5	*	土器器	鉢	— —	縁部～底部1/4	外側 横方向のヘラミガキ 内面 黑色處理、ヘラミガキ	10YR7/4に近い黄褐色土	
52-6	*	土器器	甕	<15.8 —	口縁部～胴部	外側 横方向のヘラミガキ 内面 ハケ	10YR7/3に近い黄褐色土	
52-7	*	土器器	甕	(29.3) —	口縁部～胴部	外側 横方向のヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	2.5Y7/3浅黄色土	
52-8	*	土器器	甕	16.4 (8.0) 18.4	口縁部～底部3/4	外側 ヘラミガキ 内面 ハナダ	外側・内面 10YR7/3に近い黄褐色土 断面 10YR5/1灰褐色土	
52-9	*	土器器	鉢	— 4.4 —	胴部～底部1/2	外側 ヘラミガキ、底部ヘラケズリ 内面 黑色處理ヘラミガキ	10YR6/4に近い黄褐色土	
52-10	*	土器器	甕	14.0 7.0 15.6	3/4	外側 背残している横方向のヘラミガキ 内面 背残により不明	10YR6/6明黄褐色土	
52-11	*	土器器	甕	(22.0) —	口縁部～胴部	外側 ヘラナダ 内面 横方向のヘラナダ	10YR5/4に近い黄褐色土	雲母、石英、長石 粒含む
52-12	*	土器器	甕	(18.4) (6.0) (17.1)	口縁部～底部1/2	外側 底部により不明 内面 ヘラミガキ	外側 10YR7/3に近い黄褐色土 内面 10YR6/4に近い黄褐色土	片岩、長石粒多
52-13	*	土器器	長胴甕	(22.0) —	口縁部～胴部	外側 ヘラケズリ 内面 ヘラナダ	10YR4/6褐色土	岩母粒多
52-14	*	土器器	長胴甕	(20.2) 7.5 33.0	口縁部～底部	外側 横方向のハケ 内面 横方向のハケ	7.5YR4/4褐色土	
52-15	*	土器器	長胴甕	(20.0) —	口縁部～底部	外側 ヘラケズリ 内面 爛蛇により不明	外側・断面 5YR5/4に近い赤褐色土 内面 SYR4/5赤褐色土	
52-16	*	土器器	甕	(25.8) —	口縁部～胴部	外側 ヘラナダ 内面 底部により不明	10YR5/3に近い黄褐色土	雲母、石英、長石 粒多
52-17	*	土製品	円筒形 土器品	7.6 —	口縁部～胴部	外側 ヘラケズリ 内面 軸側み痕	外側 7.5YR5/4に近い褐色土 内面 断面 7.5YR4/2灰褐色土	
54-1	M1号溝状 遺構	須恵器	甕	10.8 — 3.0	ほぼ完形	外側 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ	10Y5/1灰褐色土	宝珠つまみ
54-2	*	須恵器	甕	(22.0) —	3/4	外側 回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナダ	外側 7.5YR4/2灰褐色土 内面 2.5YR4/6赤褐色土	
54-3	*	須恵器	甕	(39.6) —	口縁部1/2	外側 頂部脚錐き波状文 内面 ヨコナダ	外側 SR4/1暗赤褐色土 内面 SYR5/2赤オリーブ色土	
54-4	*	須恵器	甕	— —	口縁部～胴部	外側 ハラカツ工具による施文 内面 ヨコナダ	7.5Y6/1灰褐色土	
54-5	*	須恵器	甕	— —	頭部～胴部1/3	外側 平行叩き目文 内面 同心円文をナテ消し	外側・内面 5Y4/1灰褐色土 断面 5RS/1赤褐色土	
54-6	*	須恵器	甕	(12.5) (26.5)	口縁部～胴部1/3	外側 回転ヘラケズリ、平行叩き目文 内面 ヘラナダ	10Y5/1灰褐色土	内外面に自然釉付 着
54-7	*	須恵器	甕	— —	胴部	外側 平行叩き目文 内面 円心円文	7.5Y5/1灰褐色土	
54-8	*	土器器	甕	13.4 6.0 14.0	ほぼ完形	外側 横方向のヘラミガキ 内面 橫方向のヘラミガキ	SYR6/6褐色土	
54-9	*	土器器	高环	16.7 10.6 11.6	ほぼ完形	外側 壁部ヘラナダ、脚部ヘラケズリ 内面 壁部黑色處理	外側 10YR7/4に近い黄褐色土 内面 NS/0暗褐色土	
54-10	*	土器器	高环	— —	底部～脚部	外側 ヘラケズリ 内面 壁部ヘラミガキ	10YR5/4に近い黄褐色土	
54-11	*	土器器	甕	— 6.6	底部	外側 ヘラナダ 内面 ヘラナダ	7.5YR5/4に近い褐色土	

第10表 出土土器観察表

番号	造形名	種別	器形	法量(oz)	残存度	調査	胎土	備考
56-1	H5号住居址	須恵器	壺	(16.5) —	2/3	外面 内面 回転ヘラケズリ ロクロヨコナデ	10GY6/1縫灰色土	
56-2	*	須恵器	壺	(18.0) —	1/3	外側 内面 回転ヘラケズリ ロクロヨコナデ	外側・内面 5G4/1縫灰色土 新面 7.5Y5/3縫オリーブ色土	
56-3	*	須恵器	壺	(15.0) (8.0) (4.6)	口縁部～底部1/2	外側 内面 底部 ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ ヘラケズリ	2.5GY6/1オリーブ灰色土	火燐有
56-4	*	須恵器	壺	(13.0) (7.6) (4.4)	口縁部～底部4/5	外側 内面 底部 ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ 回転糸切り	10GY5/1縫灰色土	火燐有
56-5	*	須恵器	壺	(14.0) (8.5) (4.7)	口縁部～底部1/3	外側 内面 底部 ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ 回転糸切り→一部ヘラケズリ	2.5GY6/1オリーブ灰色土	把成窓
56-6	*	須恵器	壺	(13.5) (7.7) (4.0)	口縁部～底部1/3	外側 内面 底部 ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ 回転糸切り	5GY5/1オリーブ灰色土	
56-7	*	須恵器	高台付 壺	(14.2) (10.8) (3.9)	口縁部～底部1/4	外側 内面 底部 ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ 回転ヘラキリ	外側 7.5GY5/1縫灰色土 内面・新面 2.5GY6/1オリーブ 灰色土	
56-8	*	須恵器	高台付 壺	(14.2) (10.4) (4.7)	口縁部～底部1/2	外側 内面 底部 ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ 四輪ヘラキリ	10Y7/2灰白色土	
56-9	*	須恵器	高台付 壺	(15.2) (11.0) (3.9)	口縁部～底部2/3	外側 内面 底部 ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ 回転ヘラキリ	外側 10BG4/1断背灰灰色土 内面・新面 10GY5/1縫灰色土	
56-10	*	須恵器	高台付 壺	(15.2) (9.3) (3.8)	口縁部～底部1/2	外側 内面 底部 ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ 回転ヘラキリ	5G4/1縫灰色土	
56-11	*	須恵器	高台付 壺	(15.2) (9.3) (3.8)	口縁部～底部5/6	外側 内面 底部 ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ 回転ヘラキリ	外側 10BG3/1暗青灰灰色土 内面・新面 5GY5/1オリーブ灰 色土	
56-12	*	須恵器	高台付 壺	(16.4) (11.4) (6.5)	口縁部～底部1/2	外側 内面 底部 ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ 回転ヘラキリ	7.5GY6/1縫灰色土	
56-13	*	須恵器	高台付 壺	(16.8) (10.0) (7.5)	口縁部～底部1/3	外側 内面 底部 ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ 回転ヘラキリ後ナデ消し	外側 10Y4/1縫灰色土 内面・新面 7.5YR5/3にぶい黄 色土	
56-14	*	須恵器	高台付 壺	(11.7) (7.0) (3.8)	口縁部～底部1/2	外側 内面 底部 ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ 回転ヘラキリ後ナデ消し	10Y5/1灰黄色土	
56-15	*	須恵器	壺	(18.7) —	口縁部～脚部	外側 内面 ロクロヨコナデ	外側 2.5GY6/1オリーブ灰色 土 内面・新面 10BG4/1暗青灰灰色 土	
56-16	*	須恵器	壺	(16.0) —	底部	外側 内面 平行引き目文 ナデ	外側 10BG4/1暗青灰灰色 土 新面 5GY5/1オリーブ灰色土	
56-17	*	土器	壺	(12.2) (8.8) (2.8)	口縁部～底部1/3	外側 内面 黒色處理ヘラミガキ	2.5Y7/2灰黄色土	
56-18	*	土器	壺	(15.8) (15.1)	口縁部～底部2/3	外側 内面 ヘラミガキ ヘラミガキ	外側・内面 10YR7/2にぶい黄 色土 新面 10YR5/3縫灰色土	
56-19	*	土器	壺	(13.9) —	口縁部～胴部	外側 内面 ヘラケズリ ヘラナデ	7.5YR5/3にぶい黄色土	
56-20	*	土器	壺	(8.6) —	底部1/2	外側 内面 ヘラケズリ ヘラナデ・ハケ	2.5Y6/4にぶい黄色土	
58-1	H8号住居址	須恵器	壺	12.2 24	4/5	外側 内面 四輪ヘラケズリ ロクロヨコナデ	10GY5/1縫灰色土	鑑定跡つまみ
58-2	*	須恵器	壺	14.0 2.8	4/3	外側 内面 回転ヘラケズリ ロクロヨコナデ	5BG4/1縫灰色土	鑑定跡つまみ
58-3	*	須恵器	高台付 壺	(16.2) (12.6) (4.0)	口縁部～底部1/4	外側 内面 ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ 四輪糸切り未調査	5BG5/1青灰色土	
58-4	*	須恵器	壺	(14.2) (8.0) (3.7)	口縁部～底部1/4	外側 内面 ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ 回転糸切り未調査	10YR6/1縫灰色土	火燐有
58-5	*	須恵器	壺	(14.4) (8.4) (3.4)	口縁部～底部1/2	外側 内面 ロクロヨコナデ ロクロヨコナデ 回転糸切り未調査	10Y5/1灰黄色土	

第11表 出土土器觀察表

番号	遺跡名	種別	器形	法鉄(cm)	残存度	調査	胎土	備考
58-6	H8号住居址	須恵器	环	13.4 6.2 4.6	完形	外側 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ 底部 回転糸切り未測定	10YR7/1灰白色土	火拂有
58-7	*	須恵器	环	(13.0) (8.0) 4.9	口縁部~底部1/2	外側 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ 底部 静か糸切り未測定	5Y7/1灰白色土	
58-8	*	須恵器	环	(10.8) —	口縁部1/5	外側 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ	NS/0A色土	
58-9	*	土器	小型環	(4.2) — 4.8	口縁部~底部2/5	外側 ハラケズリ→ヘラミガキ 内面 黒色處理	10YR4/1褐色灰色土	
58-10	*	土器	环	(8.6) — (5.3)	口縁部~底部1/4	外側 ハラケズリ 内面 黑色處理、ヘラミガキ	10YR7/4にぶい黄褐色土	
58-11	*	土器	环	(15.2) (8.0) 5.0	口縁部~底部1/4	外側 ハラケズリ 内面 黑色處理 底部 回転糸切り未測定	7.5YR5/4にぶい褐色土	
58-12	*	土器	环	(14.0) (7.0) 5.0	口縁部~底部1/2	外側 ロクロヨコナダ 内面 黑色處理、ヘラミガキ	10YR7/4にぶい黄褐色土	
58-13	*	須恵器	広口壺	(56.0) —	口縁部~腹部	外側 平行引き目文 内面 ナタケシ	外側 10YR6/4にぶい黄褐色土 内面 10YR6/2K灰褐色土	
58-14	*	須恵器	壺	(14.6)	底部	外側 平行引き目文 内面 ナダ	外側 10Y5/1灰白色土 内面 10Y6/2オーリーブ灰色土	自然釉付茶
58-15	*	土器	壺	(21.8) (5.4) (23.6)	ほぼ完形	外側 横方向のハラケズリ 内面 横方向のハラケズリ	10YR7/4にぶい黄褐色土	武藏型の裏 外側付茶
60-1	H12号住居址	須恵器	壺	(17.8) 4.7	5/6	外側 回転糸切り 内面 ロクロヨコナダ	外側・断面 2.5GY6/1オーリーブ 内面 10GY5/1緑灰色土	鏡宝塚つまみ
60-2	*	須恵器	壺	18.6 5.2	ほぼ完形	外側 回転糸切り 内面 ロクロヨコナダ	外側・断面 5Y6/2Kオーリーブ 内面 7.5Y7/1灰白色土	火拂有 鏡宝塚つまみ
60-3	*	須恵器	环	12.2 5.6 3.6	ほぼ完形	外側 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ 底部 回転糸切り未測定	10GY5/1緑灰色土	内外面付茶物有
60-4	*	須恵器	环	12.8 7.0 3.8	口縁部~底部4/5	外側 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ 底部 回転糸切り未測定	5GY5/1オーリーブ灰色土	内面付茶有
60-5	*	須恵器	环	12.8 6.4 3.5	ほぼ完形	外側 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ 底部 回転糸切り未測定	7.5GY5/1緑灰色土	外側付茶有
60-6	*	須恵器	壺	—	口縁部~腹部	外側 平行引き目文 内面 ナタケシ	外側 504/1焼成灰白色土 内面 505/1M灰白色土 断面 7.5GY5/1緑灰色土	
60-7	*	土器	壺	(20.0) —	口縁部~腹部1/2	外側 ハラケズリ 内面 ヘラナダ	10YR5/4にぶい黄褐色土	武藏型の裏
62-1	H13号住居址	土器	小型壺	(12.0) (6.2) 9.9	口縁部~底部	底膨らしく小明	外側 10YR5/4にぶい黄褐色土 内面 断面 10YR6/3にぶい黄褐色土	
62-2	*	土器	壺	— 7.0	底部	外側 ハラケズリ 内面 ナダ?	外側 10YR6/4にぶい黄褐色土 内面 断面 10YR5/4にぶい黄褐色土	式武藏型の裏
62-3	*	土製品	結縫車	6.0 7.6 4.6	完形	外側 ナダ —	5YR5/3にぶい水褐色土	重さ325g
64-1	H14号住居址	土器	壺	— 8.0	底部	外側 ハラケズリ 内面 ヘラケズリ	外側 10YR5/4にぶい黄褐色土 内面・断面 10YR6/3にぶい黄褐色土	
64-2	*	土製品	結縫車	(2.8) (4.4) 3.2	1/2	外側 ヘラナダ —	10YR7/2にぶい黄褐色土	
67-1	H15号住居址	須恵器	环	13.7 7.1 4.6	完形	外側 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ 底部 静か糸切り未測定	外側 7.5GY6/1緑灰色土 内面 2.5GY6/1オーリーブ灰色土	口縫縫曲
67-2	*	須恵器	环	14.5 6.9 4.4	完形	外側 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ 底部 回転糸切り未測定	2.5GY6/1オーリーブ灰色土	
67-3	*	須恵器	环	12.5 5.7 3.7	完形	外側 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ 底部 回転糸切り未測定	外側 10GY6/1緑灰色土 内面 2.5GY6/1オーリーブ灰色土	

第12表 出出土器観察表

番号	遺構名	種別	器形	法長(cm)	残存度	調査	胎土	備考
67-4	H15号住居址	須恵器	环	(13.6) (7.0) (4.5)	口縁部～底部1/2	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底面 回転糸切り未調査	2.5GY6/1オリーブ灰褐色土	
67-5	*	須恵器	环	14.9 7.0 4.4	口縁部～底部2/3	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底面 回転糸切り未調査	5GY6/1オリーブ灰褐色土	
67-6	*	土師器	环	15.0 — 5.0	ほぼ完形	外面 黒色施釉ヘラミガキ 内面 ヘラナデ	10YR6/4にぶい黄褐色土	
67-7	*	須恵器	高台付环	8.7	底部	外面 — 内面 底部 底面 回転糸切りの後ヘラナデ調査	10BG4/1暗青灰色土	
67-8	*	須恵器	高台付环	9.7	底部	外面 — 内面 底部 底面 回転糸切りの後ヘラナデ調査	外面 2.5GY7/1明オリーブ灰褐色土 内面 7.5GY6/1緑灰色土	
67-9	*	土師器	小型壺	(9.8) (3.8) (12.4)	口縁部～底部1/2	外面 横方向のヘラケズリ 内面 ヘラナデ、縦擦痕有	10VG5/3にぶい黄褐色土	
67-10	*	土師器	壺	(23.0) —	口縁部～胴部	外面 横方向のヘラケズリ 内面 ナデ	10YR6/3にぶい黄褐色土	武藏型の壺
67-11	*	土師器	壺	(6.5) —	底部1/2	外面 横方向のヘラケズリ 内面 ヘラナデ	外面 10YR5/3時褐色土 内面 10YR5/4にぶい黄褐色土	武藏型の壺
67-12	*	須恵器	壺	(28.8) (13.6) (25.6)	口縁部～底部	外面 平行印と日文 内面 同心円文をナデケシ	外面 SY4/1灰白色土 内面 SY5/1灰白色土	圓底狭つまみ 器形に凹み有
69-1	H19号住居址	須恵器	壺	16.4 3.8	完形	外面 四輪ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ	10Y6/2オリーブ灰褐色土	
69-2	*	須恵器	环	(13.6) (6.0) 3.0	口縁部1/4	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底面 回転糸切り未調査	2.5GY6/1オリーブ灰褐色土	
69-3	*	須恵器	环	(12.9) (6.0) 3.2	口縁部～底部1/4	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底面 回転糸切り未調査	7.5Y6/2灰オリーブ色土	
69-4	*	須恵器	环	(12.8) (5.6) 4.9	口縁部～底部1/2	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底面 回転糸切り未調査	5Y7/1灰白色土	
69-5	*	須恵器	环	(15.2) (8.4) 3.5	口縁部～底部1/6	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底面 回転糸切り未調査	10Y7/1灰白色土	
69-6	*	須恵器	环	13.0 7.4 2.9	口縁部～底部3/4	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底面 回転糸切り未調査	7.5Y6/1灰褐色土	
69-7	*	須恵器	环	(12.4) (5.6) 3.4	口縁部～底部1/2	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底面 回転糸切り未調査	5GY6/1オリーブ灰褐色土	
69-8	*	須恵器	环	14.0 8.0 3.6	ほぼ完形	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底面 回転糸切り未調査	2.5GY6/1オリーブ灰褐色土	
69-9	*	須恵器	环	(14.4) (7.6) 4.1	口縁部～底部1/3	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調査	10GY6/1緑灰色土	
69-10	*	土師器	环	(15.0) —	口縁部1/6	外面 ロクロヨコナデ 内面 黒色処理、ヘラミガキ	10YRS/3にぶい黄褐色土	婆母、石英粒含む
69-11	*	須恵器	長颈壺	— 8.0	胴部～底部	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	10GY6/1緑灰色土	一部自然釉付有
69-12	*	土師器	壺	18.1 —	口縁部～胴部1/2	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	10YG5/4にぶい黄褐色土	武藏型の壺 塗付有
69-13	*	土師器	壺	(22.3) —	口縁部～胴部	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	10YRS/4にぶい黄褐色土	武藏型の壺 塗付有
69-14	*	土師器	壺	(14.8) —	口縁部～胴部	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	10YR6/4にぶい黄褐色土	
72-1	H21号住居址	須恵器	环	(10.6) (4.6) 3.6	口縁部～底部1/5	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	外面 7.5Y6/2オリーブ灰褐色土 内面 5GY5/1オリーブ灰褐色土	
72-2	*	須恵器	环	(14.0) —	口縁部	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	2.5GY6/1オリーブ灰褐色土	

第13表 出土土器観察表

番号	遺構名	種別	器形	法量(cm)	残存度	調査	施土	備考
72-3	H21号住居址	須恵器	环	13.0 6.2 4.0	口縁部～底端3/4	外縁 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ 底部 回転糸切り未調査	外面 10Y5/2オリーブ灰褐色土 内面 2.5Y5/4黄褐色土	
72-4	*	須恵器	环	14.0 7.2 3.9	口縁部～底部1/2	外縁 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ 底部 回転糸切り未調査	2.5GY6/1オリーブ灰褐色土	火拂有
72-5	*	須恵器	盃	—	縁部～胴部	外縁 平行叩き目文 内面 指顕痕	外面 5GY5/1オリーブ灰褐色土 内面 10GY5/1緑灰色土	突帯台西耳窓
72-6	*	須恵器	盃	16.0 —	胴部～底部	外縁 平行叩き目文 内面 指顕痕	外面 2.5GY6/1オリーブ灰褐色土 内面 5G5/1緑灰色土	
72-7	*	須恵器	長縁碗	—	縁部	外縁 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ	外面 2.5GY6/1オリーブ灰褐色土 内面 5Y6/1褐色土	一部自然釉付着
72-8	*	土器	甕	18.4 —	口縁部～胴部	外縁 ヘラケズリ 内面 ヘラナダ	5YG5/3にい・か褐色土	武藏型の甕
72-9	*	土器	鍋	31.0 —	口縁部～胴部1/3	外縁 ロクロヨコナダ、一部ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナダ	7.5YN5/6明褐色土	
74-1	H22号住居址	須恵器	高台付 环	— 9.5	底部	外縁 — 内面 — 底部 回転ヘラケズリ	2.5Y4/1灰褐色土	
74-2	*	須恵器	甕	—	縁部	外縁 平行叩き目文 内面 指顕痕	外面・断面 2.5Y6/1黄褐色土 内面 2.5Y6/3にい・か褐色土	
75-1	H24号住居址	須恵器	盃	(13.7) —	1/4	外縁 回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナダ	外縁・内面 10G4/2緑灰色土 断面 10Y5/2オリーブ灰褐色土	
75-2	*	須恵器	甕	(15.8) —	1/4	外縁 回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナダ	外縁・内面 7.5GY5/1緑灰色土 断面 10GY5/1褐色土	
75-3	*	須恵器	盃	(14.8) —	口縁部1/8	外縁 回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナダ	外縁・断面 10G6/1緑灰色土 内面 5BG5/1青褐色土	
75-4	*	須恵器	环	(12.5) (6.4) 4.1	口縁部～底部1/5	外縁 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ 底部 ヘラキリ	5GY6/1オリーブ灰褐色土	
75-5	*	須恵器	环	(12.8) (6.5) 3.9	口縁部～底部1/5	外縁 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ	10GY5/1緑灰色土	
75-6	*	土器	甕	18.0 —	口縁部～胴部	外縁 ヨコナダ 内面 ナダ	外縁 10Y7/4にい・か黄褐色土 内面・断面 10Y6/4にい・か黄褐色土	石英粒多
79-1	H25号住居址	須恵器	盃	(13.6) —	口縁部1/10	外縁 回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナダ	外縁 10Y5/2オリーブ灰褐色土 内面 2.5GY6/1オリーブ灰褐色土	
79-2	*	須恵器	环	(15.3) —	口縁部	外縁 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ	2.5GY6/1オリーブ灰褐色土	
79-3	*	土器	环	(8.6) (9.0) (5.0)	口縁部～底部1/3	外縁 ロクロヨコナダ 内面 黒色無地、ヘラミガキ 底部 ヘラケズリ	10Y5/3にい・か黄褐色土	
79-4	*	土器	鍋	(35.2) —	口縁部～胴部	外縁 縦方向のヘラケズリ～横方向のヘラケズリ 内面 ロクロヨコナダ	5YG5/6明褐色土	
80-5	*	須恵器	甕	(19.2) —	縁部～底部	外縁 平行叩き目文 内面 ナダ	外縁 2.5GY5/1オリーブ灰褐色土 内面 7.5GY5/1オリーブ灰褐色土 断面 10Y5/2オリーブ灰褐色土	
80-6	*	須恵器	甕	(35.6) —	口縁部～胴部	外縁 平行叩き目文、縁部ハケ 内面 指顕痕、縁部ハケ	5Y4/1灰褐色土	
82-1	H26号住居址	須恵器	环	13.9 8.0 3.5	完形	外縁 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ 底部 回転糸切り未調査	5GY5/1オリーブ灰褐色土	火拂有
82-2	*	土器	甕	(5.9) —	縁部～底部	外縁 ヘラケズリ 内面 ヘラナダ	外縁 10YR5/4にい・か黄褐色土 内面 10YR6/4にい・か黄褐色土	武藏型の甕
83-1	H27号住居址	須恵器	盃	(11.6) 6.5 (2.4)	1/3	外縁 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ	外縁 2.5GY6/1オリーブ灰褐色土 内面 断面 5G5/1緑灰色土	疊状のつみ 自然釉付着
83-2	*	土器	甕	— 4.8	底部	外縁 ヘラケズリ 内面 ヘラナダ	外縁・断面 10YR5/3にい・か黄褐色土 内面 10YR5/3灰褐色土	武藏型の甕

第14表 出土土器観察表

番号	遺構名	種別	器形	法量(a)	残存度	測定	施上	備考
83-3	H27号住居址	土鍋器	甕	20.8 —	口縁部～胴部 — —	外側 ヘラケズリ 内側 ヘラナダ	10YR5/3にぶい黄褐色土	式底型の甕
87-1	H12号住居址	須恵器	高台付 环	— (7.4) —	底部1/6	外側 ロクロヨコナダ 内側 ロクロヨコナダ	10YR6/1褐色灰土	
87-2	*	土鍋器	甕	(13.1) 6.1 4.3	口縁部～底部2/3	外側 帽唇しているがヘラケズリか 内側 黒色処理、ヘラミガキ	10YR7/4にぶい黄褐色土	±2mm 前後の石英、 長石粒含む
87-3	*	土鍋器	甕	(12.0) —	口縁部	外側 ヨコナダ 内側 ヨコナダ	外側 5YR4/4にぶい赤褐色土 内側 5YR3/3暗赤褐色土	石英わずかに含む 式底型の甕
87-4	*	土鍋器	甕	(0.8) —	口縁部～胴部	外側 ヘラケズリ 内側 ナダ	7.5YR4/3褐色土	甕身、石英含む 式底型の甕
87-5	*	土鍋器	甕	— —	底部	外側 ヘラケズリ 内側 ハナダ	外側 7.5YR5/4にぶい褐色土 内側 7.5YR5/1褐色灰土	雲母、石英わずかに 含む 式底型の甕
87-6	*	土鍋器	甕	(25.2) 3.8 29.0	口縁部～底部1/2	外側 横方向のヘラケズリ 内側 ハケ	10YR5/2にぶい黄褐色土	外側面に付着有 籠弾型の甕
88-1	H31号住居址	須恵器	环	— 6.5 —	底部	外側 ロクロヨコナダ 内側 ロクロヨコナダ 底部 回転糸切り未調整	5BG5/1青灰土	
88-2	*	須恵器	环	(12.5) (9.4) 4.5	口縁部～底部	外側 ロクロヨコナダ 内側 ロクロヨコナダ 底部 回転糸切り未調整	10YR5/1褐色灰土	
88-3	*	須恵器	高台付 环	(11.0) —	底部	外側 内面 底部 回転ヘラケズリ未調整	10YR6/1褐色灰土	
88-4	*	土鍋器	甕	(12.4) 6.0 4.5	口縁部～底部1/2	外側 ロクロヨコナダ 内側 黒色処理、ヘラミガキ 底部 ヘラケズリ	10YR5/8褐色土	長石等粒粗かい
88-5	*	須恵器	甕	(28.8) — —	口縁部1/4	外側 腹部へラク状工具による波状文 内面 ヨコナダ	10BG6/1青灰土	
91-1	H32号住居址	須恵器	甕	16.0 — 3.5	3/4	外側 ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナダ	10GA/1褐色灰土	擬宝珠つまみ
91-2	*	須恵器	环	13.0 6.5 3.6	口縁部～底部2/3	外側 ロクロヨコナダ 内側 ロクロヨコナダ 底部 回転糸切り未調整	5GY6/1オリーブ灰土	
91-3	*	須恵器	环	(13.0) (7.4) 3.5	口縁部～底部1/2	外側 ロクロヨコナダ 内側 ロクロヨコナダ 底部 回転糸切り未調整	10YR5/1褐色灰土	
91-4	*	須恵器	环	13.0 5.8 3.7	口縁部～底部1/2	外側 ロクロヨコナダ 内側 ロクロヨコナダ 底部 回転糸切り未調整	7.5YR7/1明褐色土	
91-5	*	須恵器	环	(12.8) 8.0 3.8	口縁部～底部2/5	外側 ロクロヨコナダ 内側 ロクロヨコナダ 底部 回転糸切り未調整	10YR6/1褐色灰土	
91-6	*	須恵器	环	(12.2) (7.0) 3.9	口縁部～底部1/3	外側 ロクロヨコナダ 内側 ロクロヨコナダ 底部 回転糸切り未調整	10BG5/1青灰土	火埠有
91-7	*	須恵器	环	(12.8) (7.4) 3.6	口縁部～底部1/2	外側 ロクロヨコナダ 内側 ロクロヨコナダ 底部 回転糸切り未調整	5GB/1褐色灰土	
91-8	*	須恵器	环	(12.5) (6.2) 4.0	口縁部～底部1/3	外側 ロクロヨコナダ 内側 ロクロヨコナダ 底部 回転糸切り未調整	7.5YR6/1褐色灰土	
91-9	*	須恵器	环	— 6.4	底部1/2	外側 — 内面 油脂糸切り未調整	10YR6/1褐色灰土	
91-10	*	須恵器	环	13.7 7.4 3.8	口縁部～底部2/3	外側 ロクロヨコナダ 内側 ロクロヨコナダ 底部 回転糸切り未調整	5GY6/1オリーブ灰土	
91-11	*	須恵器	环	13.0 5.8 3.7	口縁部～底部4/5	外側 ロクロヨコナダ 内側 ロクロヨコナダ 底部 回転糸切り未調整	7.5YR7/1明褐色灰土	
91-12	*	須恵器	环	(14.4) (7.5) 3.9	口縁部～薄厚1/3	外側 ロクロヨコナダ 内側 ロクロヨコナダ 底部 回転糸切り未調整	5BG6/1青灰土	
91-13	*	須恵器	环	(13.6) (7.2) 4.3	口縁部～底部1/3	外側 ロクロヨコナダ 内側 ロクロヨコナダ 底部 回転糸切り未調整	10YR6/1灰褐色土	

第15表 出土土器観察表

番号	遺構名	種別	断形	法量(cm)	残存度	調査	胎土	備考
91-14	H32号住居址	須恵器	环	(12.5) (6.0) 3.7	口縁部～底部2/5	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調整	7.5YR7/1明褐色土	
91-15	*	須恵器	高台付 环	(11.2) (7.6) 3.9	口縁部～底部1/4	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調整	10YR5/1褐色土	火葬壺
91-16	*	須恵器	高台付 环	(11.0) 6.6 4.5	口縁部～底部1/2	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調整	外面 10YR6/1褐色土 内面 7.5Y6/1褐色土	
91-17	*	須恵器	高台付 环	(11.1) 8.8 6.8	口縁部～底部3/5	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調整	10YR5/1褐色土	
91-18	*	須恵器	高台付 环	(14.7) 10.4 6.8	口縁部～底部3/4	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調整	10GY4/1暗緑灰色土	
91-19	*	土器器	环	(14.4) 8.6 4.7	口縁部～底部1/3	外面 ロクロヨコナデ 内面 黒色処理	5YR4/6明褐色土	
91-20	*	土器器	环	14.0 8.2 4.1	口縁部～底部1/5	外面 ロクロヘラケズリ 内面 黒色処理	10YR5/4に赤い黄褐色土	
91-21	*	須恵器	瓶	— (11.4) —	頸部～底部1/4	外面 平行押き片文 内面 ナデ	外面 2.5GY4/1暗オーリーブ灰 色土 内面 10CY4/1暗緑灰色土	
91-22	*	須恵器	鉢	(10.4) — —	口縁部～胴部1/4	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	外面・内面 7.5GY4/1暗緑灰色 土 内面 10Y5/1オーリーブ灰色土	
91-23	*	須恵器	鉢	(18.0) — —	口縁部～副部1/4	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	10G5/1褐色土	
91-24	*	須恵器	鉢	(19.6) 10.7 14.7	口縁部～底部1/2	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	外面 10VG7/3に赤い紫褐色土 内面 10YR5/1褐色土	
91-25	*	土器器	甕	— 6.5 —	底部	外面 ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	外面・内面 10YR4/3に赤い黄 褐色土 内面 10YR5/6黄褐色土	
93-1	H33号住居址	須恵器	甕	(16.8) — —	口縁部1/10	外面 回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ	外面 NS5/6灰土 内面 2.5GY6/1オーリーブ灰 色土	
93-2	*	須恵器	甕	(19.6) — —	口縁部1/4	外面 回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ	10YG5/1褐色土	
93-3	*	須恵器	甕	(18.2) — —	1/3	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	7.5Y6/1褐色土	
93-4	*	須恵器	环	(12.8) 5.6 4.3	口縁部～底部1/2	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調整	5Y6/1褐色土	
93-5	*	須恵器	环	14.0 (7.4) 4.0	口縁部～底部1/2	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調整	10YR7/1灰白色土	
93-6	*	須恵器	环	(13.2) 5.6 3.9	口縁部～底部	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調整	10YR7/1灰白色土	
93-7	*	須恵器	环	(13.8) 7.0 3.8	口縁部～底部1/2	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調整	5YR7/1明褐色土	
93-8	*	須恵器	环	12.6 6.6 3.7	はぼ充形	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調整	2.5Y6/1黄灰色土	
93-9	*	須恵器	环	(12.6) (7.0) 3.7	口縁部～底部2/5	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 静止糸切り未調整	2.5Y6/1黄褐色土	
93-10	*	須恵器	环	(13.0) 7.8 3.8	口縁部～底部1/4	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調整	10Y6/2オーリーブ灰土	
93-11	*	須恵器	环	(12.2) (7.0) 3.3	口縁部～底部1/2	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 静止糸切り未調整	10Y6/1褐色土	
93-12	*	須恵器	环	(14.4) (8.2) 4.2	口縁部～底部1/4	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調整	7.5Y6/1褐色土	
93-13	*	須恵器	环	(15.4) (9.4) 3.4	2/5	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調整	5Y5/1褐色土	

第16表 出土土器観察表

番号	遺構名	種別	器形	法量(cm)	現存度	調査	胎土	備考
93-14	H33号住居址	須恵器	环	14.7 4.2	口縁部～底部1/2	外側 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ 底部 ヘラケズリ未調査	10Y6/1灰色土	
93-15	*	須恵器	环	(12.8) (5.6) (5.0)	口縁部～底部1/5	外側 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ 底部 ヘラケズリ未調査	7.5Y6/2灰褐色土	
93-16	*	須恵器	环	(11.0) (5.5) (4.2)	口縁部～底部1/6	外側 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ 底部 同軸系切り未調査	N4/0灰色土	
93-17	*	須恵器	环	(13.8) (10.4) —	口縁部～底部1/6	外側 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ 底部 ヘラケズリ	10Y6/1灰色土	
93-18	*	須恵器	环	— (7.4)	体部～底部1/3	外側 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ 底部 ヘラケズリ	5Y6/1灰色土	
93-19	*	須恵器	高台付 环	(14.0) (10.0) 3.9	口縁部～底部1/8	外側 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ 底部 同軸系切りヘラケズリ	5Y6/1灰色土	
93-20	*	須恵器	高台付 环	14.8 11.2 4.2	ほぼ丸形	外側 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ 底部 同軸系切りヘラケズリ	10Y6/1灰色土	灯明具?
93-21	*	須恵器	高台付 环	— 7.6	底部4/5	外側 — 内面 — 底部 同軸ヘラケズリ未調査	外側 N4/0灰色土 内面 2.5G6/1オーリーブ灰色土 底部 10Y6/4に近い黄褐色土	底部一部にヘラ 記載残る
93-22	*	土師器	环	(15.4) (3.6) (4.4)	口縁部～底部1/4	外側 ロクロヨコナダ 内面 黒色処理、ヘラミガキ	外側 10Y6/4に近い黄褐色土	
93-23	*	土師器	环	— 7.0	底部1/2	外側 ヘラケズリ 内面 ナデ	10YR7/4に近い黄褐色土	
93-24	*	土師器	壺	— 6.9	底部	外側 ヘラナデ 内面 ハケナデ	外側 5Y4/6赤褐色土 内面 10Y6/6青褐色土	底部木製板
93-25	*	土師器	壺	(23.0) —	口縁部1/4	外側 ヨコナデ、開部ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	10YR5/6青褐色土	武藏型の壺
93-26	*	土師器	壺	(19.4) —	口縁部1/4	外側 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	5YR4/6赤褐色土	武藏型の壺
93-27	*	須恵器	壺	(—) (12.0)	底部1/8	外側 ヘラ? 内面 ヨコナデ	10YR4/1褐色土	
93-28	*	須恵器	壺	(21.4) —	口縁部1/4	外側 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ	10YR6/1褐色土	
93-29	*	須恵器	壺	(16.0) —	底部1/3	外側 平行叩き目文 内面 ナデ一部ハケナデ	外側 2.5Y5/1青灰色土 内面 2.5Y5/2灰褐色土	
115-1	F7号獨立柱 遺物址	須恵器	环	(13.2) (8.0) 4.1	口縁部～底部1/3	外側 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ 底部 ヘラケズリ	2.5Y5/1青灰色土～5YR4/6赤褐色土	
115-2	F19号獨立柱 遺物址	須恵器	环	(—) (7.2)	体部～底部1/4	外側 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ 底部 同軸系切り	7.5YR7/1明褐色土	
115-3	F20号獨立柱 遺物址	須恵器	环	— 5.8	底部	外側 — 内面 — 底面 四輪糸切り	2.5Y6/1青褐色土	
117-1	D13号土坑址	須恵器	环	14.6 7.2 4.2	口縁部～底部3/4	外側 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ 底部 同軸系切り	2.5Y6/1青褐色土	
117-2	*	須恵器	环	14.2 6.8 3.7	口縁部～底部3/4	外側 ヘラヘラケズリ 内面 ロクロヨコナダ	10YR7/6明褐色土	
119-1	X&2G X&4G	須恵器	壺	(16.7) 3.8	1/2	外側 ヘラヘラケズリ 内面 ロクロヨコナダ	7.5YR5/3に近い褐色土	擬宝珠つまみ
119-2	NRM II T.77	須恵器	壺	(15.6) — 4.0	2/3	外側 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ	5YR5/3に近い赤褐色土	擬宝珠つまみ 火棒有
119-3	H9号住居址	須恵器	高台付 环	16.6 4.6	口縁部～底部4/5	外側 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ 底部 ヘラナデ	10BG5/1青褐色土	
119-4	W<10G	須恵器	高台付 环	(12.0) (8.0) 4.0	口縁部～底部1/3	外側 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ 底部 糸切り?	外側 10YR5/1褐色土 内面 5GYS/1オーリーブ灰色土	

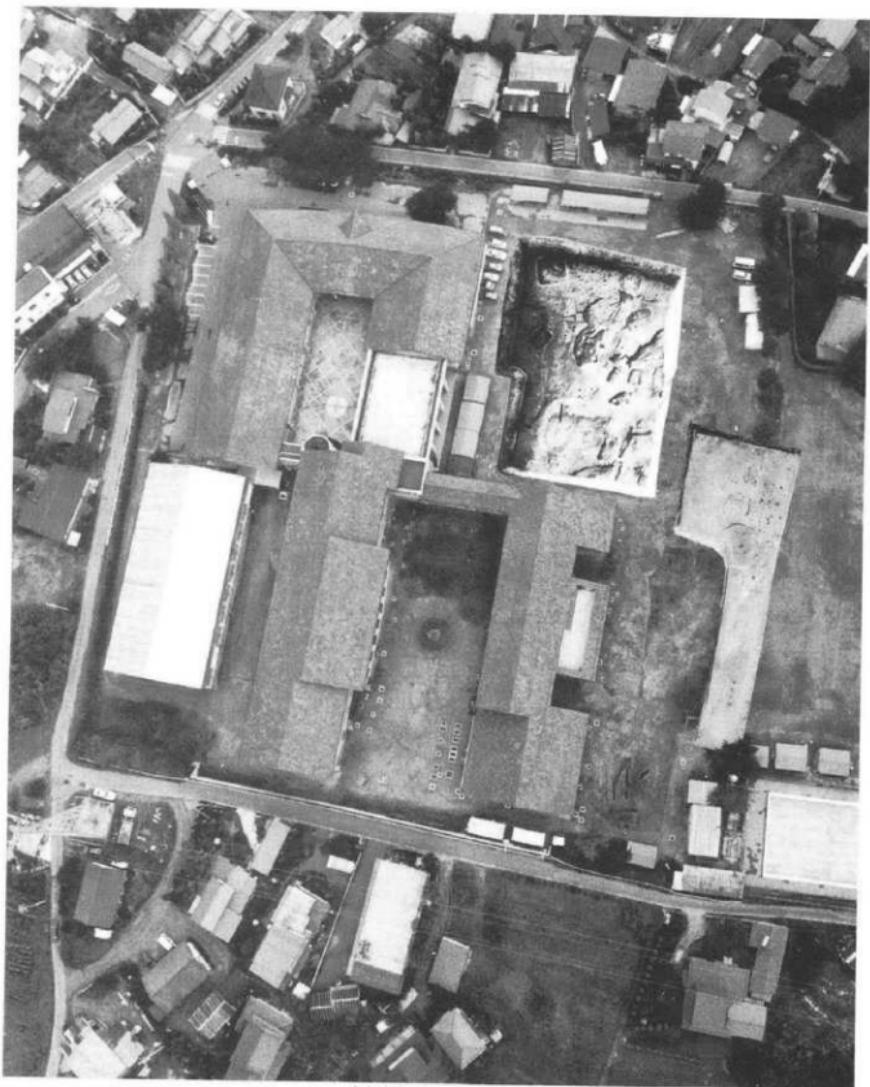
第17表 出土土器観察表

番号	遺構名	種別	器形	法量(cm)	残存度	測定	胎 土	備 考
119-5	W<10G	須恵器	环	(12.8) (6.6) 4.1	口縁部～底部1/4	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調査	外面 10YR6/2赤褐色土 内面 10YR6/1褐色土	
119-6	W<10G	須恵器	环	(13.8) (7.4) 3.5	口縁部～底部1/4	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調査	10YR5/1褐色土	
119-7	H18号住居址	須恵器	环	(13.4) 3.4 6.0	口縁部～底部1/2	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調査	外面 5BG5/1青灰色土 内面 10Y6G/1褐色土	
119-8	Wき10G	須恵器	环	— 6.4	底部	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調査	10YR1/6褐色土	
119-9	NNMNP.11	須恵器	环	— 6.7	底部	外面 — 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調査	7.5YR7/1灰褐色土	
119-10	NNMNP.11	須恵器	环	(15.0) —	口縁部1/4	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	10GY5/1褐色土	
119-11	H23号住居址	須恵器	环	(12.8) (6.0) 4.1	口縁部～底部1/5	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 ヘラ切り？	7.5YR6/1褐色土	
119-12	Wう9G	須恵器	环	(5.4) —	底部1/3	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り？	10YR7/1灰白色土	
119-13	H9号住居址	須恵器	高盤	10.2	环部～脚部	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	5GY6/1オリーブ灰色土	
119-14	Wあ9G	須恵器	高環	— —	脚部	外面 平行鉛錆2本 内面 ロクロヨコナデ	5BG4/1赤褐色土 内面 5BG5/1青灰色土	
119-15	Rき7G	須恵器	板盤	7.9 5.4 4.9	完形	外面 回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ	2.5GY5/1オリーブ灰色土	底部にヘラ記号有 内面に自然縫付有
119-16	W<10G	須恵器	要	— 6.8	底部1/4	外面 回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調査	外側 2.5GY5/1オリーブ灰色土 内面 2.5GY6/1オリーブ灰色土	底部にヘラ記号有
119-17	NNMNP.11	須恵器	要	(8.2) —	底部1/2	外面 — 内面 — 底部 回転糸切り？工具痕	SYR4/1褐色土	
119-18	NNMNP.Q1	須恵器	台付瓶	(9.0) —	脚部～底部1/4	外面 ロクロヘラナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調査	2.5YR4/1赤褐色土	
119-19	W<10GZB-1G	須恵器	短腹盤	(11.8) —	口縁部1/4	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	10YR6/1褐色土	外側に自然縫付有
119-20	Yお7G	土師器	塊	(18.2) 5.3 9.0	口縁部～底部1/2	外面 南乳のためはっきりしないがヨコナデか 内面 黒色燒結	外側 SYR5/6明赤褐色土	
119-21	NNMNP.11	土師器	小型壺	(17.0) —	口縁部1/5	外面 ヨコナデ 内面 はっきりしないがヨコナデか？	10YR6/3に赤褐色土	武藏型の東 晉益、石英粒含む 柱子細かい
119-22	NNMNP.43	土師器	甕	— 7.5	底部	外面 ヘラナデ？ 内面 消耗焼結し不透明	SYR4/3に赤褐色土	石英、長石粒含む
119-23	NNMNP.229	筋輪平	— 4.0 6.0 2.3	完形				穴径0.9cm 重さ129.0g 石質燒結有
119-24	H21号住居址		石盤					重さ0.2g
120-1	試掘H1号 住居址	須恵器	环	(14.7) (7.5) 3.6	口縁部～底部1/5	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り未調査	10YR6/1褐色土	
120-2	*	土師器	环	12.8 6.0 5.0	口縁部1/4欠損 はっきり完形	外面 ヨコナデ 内面 黒色燒結、ヘラミガキ 底部 ヘラケズリ	10YR6/3に赤褐色土	
120-3	試掘H2号 住居址	須恵器	高台付 环	(16.4) (10.5) (2.9)	口縁部～底部1/6	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	10YR6/1褐色土	
120-4	*	須恵器	鉢	15.6 9.0 9.3	口縁部～底部3/4	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ 底部 切り離し後ヘラナデ	5GY6/1オリーブ灰色土	
120-5	*	土師器	环	— 6.4	体部～底部2/3	外面 ハリミガキ 内面 黑色燒結、ヘラミガキ	10YR6/4に赤褐色土	

第18表 出土土器観察表

番号	遺物名	種別	器形	法量(ml)	残存度	調 整	貯 土	備 考
120-6	試掘II号 住居址	土師器	鉢	12.1 8.9	口縁部～底部3/4	外面 ヘラナダ 内面 黒色處理、ヘラミガキ	10YR6/3に近い黄褐色土	
120-7	*	土師器	鉢	<13.8) —	口縁部～側部1/2	外面 ヘラナダ 内面 ヘラミガキ	10YR6/4に近い黄褐色土	
120-8	*	土師器	甕	<22.2) —	口縁部～頸部1/4	外面 ナデ 内面 ヘラミガキ	2.5Y6/4に近い褐色土	
120-9	*	土師器	甕	<13.0) — —	LJ縁部～胸部1/6	外面 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	5YR6/4に近い褐色土	
120-10	*	土師器	甕	6.1 —	底部	外面 ヘラナダ 内面 ヘラナダ	10YR6/3に近い黄褐色土	
120-11	*	土師器	甕	6.4 —	底部	外面 ヘラナダ 内面 黑色處理	10YR6/3に近い黄褐色土	工具痕多く残る
120-12	*	土製品	円筒形 土製品	8.5 23.5	完形	外面 線維混灰 内面 線維混灰	5YR5/6明赤褐色土	底部木炭痕
120-13	*	土製品	円筒形 土製品	— (42)	頸部1/2	外面 横方向のヘラナダ 内面 線維混灰	10YR5/4に近い黄褐色土	
120-14	試掘住居址 周辺	須恵器	甕	23.1 4.3	3/4	外面 回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナダ	外面 7.5Y4/1断絶褐色土 内面 7.5Y6/2Kオーライー色土	歪み有
120-15	*	須恵器	甕	— 7.3	体部～底部1/3	外面 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ 底部 回転ヘラ切り?	10YR6/1褐褐色土	
120-16	*	土師器	甕	<9.4) 3.6	LJ縁部～底部1/2	外面 やや錐なヘラミガキ 内面 やや錐なヘラミガキ	10YR7/4に近い黄褐色土	
120-17	*	土師器	鉢	14.1 9.5	口縁部～底部2/3	外面 ヘラケズリ～ヘラミガキ 内面 黑色處理、ヘラミガキ	2.5Y6/4に近い褐色土	
120-18	*	土師器	高环	— 10.2	脚部	外面 やや錐な短方向のヘラミガキ 内面 ヘラケズリ	外面 2.5Y7/3浅褐色土 内面 NS/0暗灰色土	
120-19	*	須恵器	短縁甕	<12.0) —	口縁部～頸部	外面 ヨコナダ 内面 ヨコナダ	2.5Y7/1灰白色土	
120-20	*	土師器	小型甕	5.4 —	脚部～底部	外面 ヘラナダ→ヘラミガキ 内面 ヘラナダ	外面 5YR3/3断続赤褐色土 内面 10YR7/3に近い黄褐色土	
120-21	*	土師器	小型甕	— 6.5	頸部～底部	外面 ヘラナダ 内面 ヘラナダ	外面 10TR4/1周灰土色土 内面 10YR7/6明褐色土	底部木炭痕
120-22	*	土製品	円筒形 土製品	9.5 —	口縁部～頸部	外面 横方向のヘラケズリ 内面 ヘラケズリ	7.5YR6/4に近い褐色土	
121-1	試掘M1	須恵器	高台付 环	<15.1) (7.5) 3.8	LJ縁部～底部1/2	外面 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ	5G2/1暗黒色土	
121-2	*	須恵器	高台付 环	<15.1) (10.8) 3.1	口縁部～底部1/5	外面 ロクロヨコナダ 内面 ロクロヨコナダ	外面 5B3/1暗青灰色土 内面 NS/0暗色土 裏面 2.5YH5/2灰褐色土	
121-3	*	土師器	高环	<9.6) —	脚部	外面 横方向のナデ 内面 線維黑色處理	5YR6/5褐色土	
121-4	*	土師器	甕	15.7 10.2	ほぼ完形	外面 ヘラナダ? 内面 横方向のヘラミガキ	7.5YR6/4に近い褐色土	単孔
121-5	*	土師器	甕	— 6.8	底部	外面 ヘラナダ 内面 ヘラナダ	5YR6/6褐色土	
121-6	*	土師器	小型甕	11.3 5.0 12.0	口縁部～底部2/3	外面 ヘラナダ 内面 ヘラナダ	5YR6/4に近い褐色土	底部木炭痕
121-7	*	土師器	円筒形 土製品	— 11.3	底部	外面 ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ	7.5YR6/4に近い褐色土	底部木炭痕
121-8	*	土製品	円筒形 土製品	— —	脚部	外面 横方向のヘラナダ 内面 横方向のヘラナダ、線維み板	5YR6/6明赤褐色土	石英粒含む

# 写 真 図 版



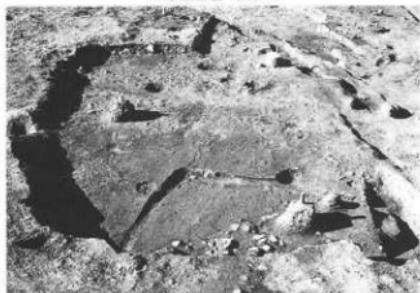
宮上遺跡III、IV 航空写真



Y1号住居址 西より



Y2号住居址 北東より



Y3号住居址 南より



Y4号住居址 東より



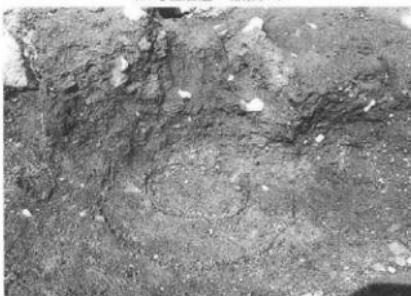
H1号住居址 北東より



H1号住居址 北東より



H2号住居址 東より



H2号住居址 カマド掘り方 東より



H3号住居址遺物出土状況 東より



H3号住居址カマド 東より



H7号住居址 北西より



H7号住居址カマド 南東より



H9号住居址 南より



H10号住居址 南より



H10号住居址カマド 南より

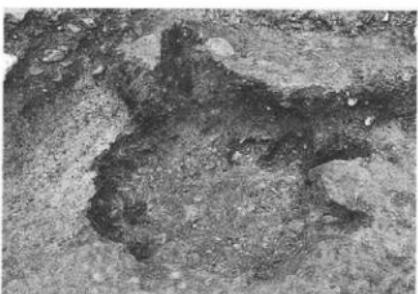


H11号住居址 東より





H23号住居址カマド石組み状況 東より



H23号住居址カマド掘り方 東より



H30号住居址 北東より



H34号住居址 西より



D1号土坑址 東より



D9号土坑址 東より



H8号住居址 北西より



H8号住居址カマド 西より



H12号住居址 西より



H12号住居址 西より



H13号住居址 西より



H14号住居址 西より



H15号住居址 西より



H15号住居址 カマド 西より



H19、20号住居址 西より



H19号住居址 カマド 西より



H21号住居址 西より



H21号住居址カマド 西より



H22号住居址 西より



H24号住居址 南より



H25号住居址 西より



H25号住居址カマド 西より



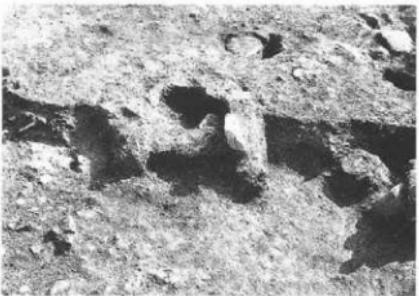
H25号住居址カマド石組み 西より



H25号住居址カマド掘り方 西より



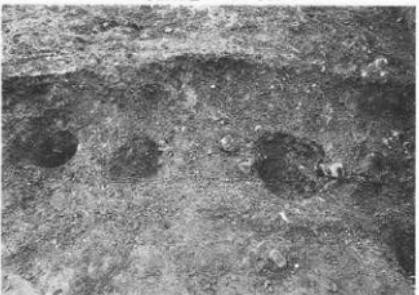
H26号住居址 西より



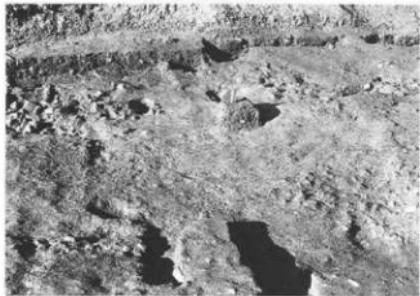
H26号住居址 カマド 西より



H27号住居址 北より



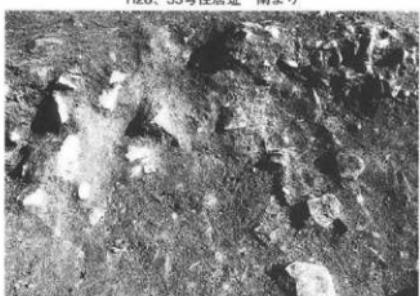
H27号住居址 カマド 西より



H28、35号住居址 南より



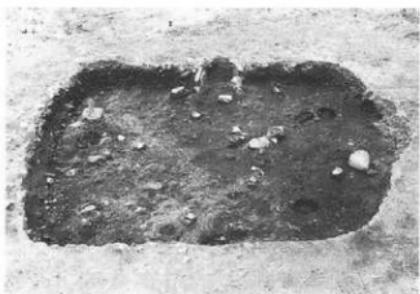
H29号住居址 西より



H29号住居址 カマド 南より



H31号住居址 南より



H32号住居址 西より



H32号住居址カマド 西より



H33号住居址 西より



H33号住居址カマド 西より



F1号据立柱建物址 西より



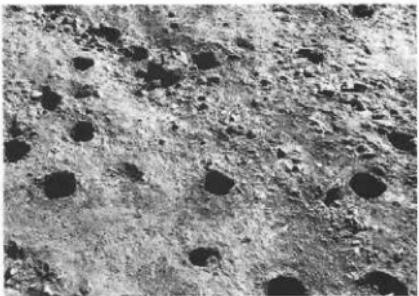
F5号据立柱建物址 北西より



F6号据立柱建物址 北東より

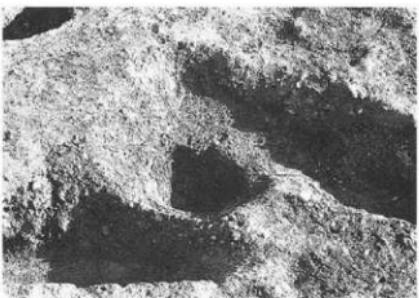


F7号据立柱建物址 南より

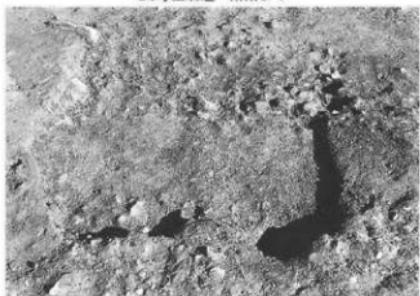




D3号土坑址 南東より



D4号土坑址 北より



D5号土坑址 南より



D7号土坑址 北より



D8号土坑址 北より



D11、12号土坑址 南より



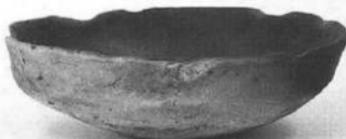
H1住、18-1 (1:3)

Y1住、8-6 (1:2)



H1住、18-4 (1:3)

H3住、22-7 (1:2)



H3住、22-4 (1:2)



H3住、22-13 (1:2)



H3住、22-14 (1:3)



H3住、22-16 (1:3)



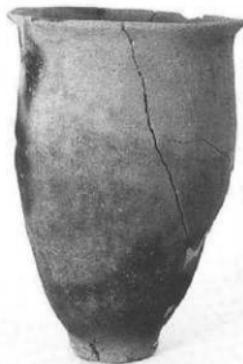
H3住、22-18 (1:4)



H3住、24-29 (1:4)



H3住、24-30 (1:4)



H3住、24-33 (1:4)



H3住、24-34 (1:4)



H7住、26-1 (1:2)



H7住、26-3 (1:2)



H7住、26-4 (1:3)



H7住、26-3 (1:2)



H7住、26-5 (1:3)



H7住、26-7 (1:4)



H9住、28-4 (1:2)



H9住、28-11 (1:3)



H10住、29-2 (1:2)



H10住、29-1 (1:2)



H11住、32-1 (1:2)



H16住、35-2 (1:2)



H16住、35-8 (1:4)



H17住、38-1 (1:2)



H17住、38-3 (1:2)



H17住、38-6 (1:2)



H16住、36-16 (1:3)



H17住、38-11 (1:2)



H17住、38-12 (1:2)



H18住、40-10 (1:3)



H23住、43-1 (1:2)



H23住、43-3 (1:2)



H23住、43-7 (1:2)



H23住、43-8 (1:3)



H23住、43-9 (1:2)



H23住、43-14 (1:2)



H23住、43-12 (1 : 3)



H23住、43-17 (1 : 3)



H23住、43-16 (1 : 3)



H23住、44-25 (1 : 4)



H23住、44-23 (1 : 4)



H23住、44-26 (1 : 4)



H30住、46-3 (1:2)



H4住、49-8 (1:2)



H4住、49-16 (1:4)



H4住、50-18 (1:3)



H4住、50-19 (1:3)



H6住、50-21 (1:3)



M1、54-1 (1:2)



D1、52-2 (1:3)



D1、52-10 (1:3)



M1、54-6 (1:3)



H5住、56-4 (1:2)



M1、54-8 (1:2)



H8住、58-1 (1:2)



M1、54-9 (1:2)



H8住、58-6 (1:2)



H8住、58-9 (1:2)



H12住、60-3 (1:2)



H12住、60-4 (1:2)



H8住、58-15 (1:3)



H12住、60-5 (1:2)



H15住、67-1 (1:2)



H12住、60-1 (1:2)



H15住、67-9 (1:2)



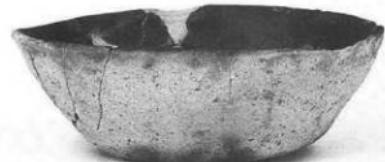
H12住、60-2 (1:2)



H15住、67-2 (1:2)



H15住、67-3 (1:2)



H15住、67-6 (1:2)



H15住、67-12 (1:4)



H19住、69-1 (1:2)



H19住、69-11 (1:3)



H19住、69-8 (1:2)

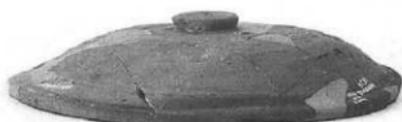


H21住、72-3 (1:2)



H26住、82-1 (1:2)

H25住、79-4 (1:4)



H32住、91-1 (1:2)



H33住、93-20 (1:2)



H32住、91-11 (1:2)



H33住、93-20 (1:2)



H33住、93-8 (1:2)



119-15 (1:2)



H32住、91-24 (1:3)



120-2 (1:2)



119-2 (1:2)



120-4 (1 : 2)



120-6 (1 : 2)



120-14 (1 : 3)



121-6 (1 : 2)



121-4 (1 : 2)



Y1住9-1 (1 : 2)



119-23 (1 : 2)

H13住62-3 (1 : 2)



120-12 (1 : 3)

## あとがき

坂城町発掘調査指導者 塩入 秀敏

坂城町立坂城中学校の全面改築工事に先立ち行われた宮上遺跡の緊急発掘調査は、校舎の建設計画に沿って平成3・4・7・9の4年次にわたり実施された。『坂城町遺跡分布図』では周辺遺跡を含めて「中之条遺跡群」とされていたが、試掘調査によって集落址であると判明した本遺跡地は、その重要性にかんがみ新たに宮上遺跡と命名されるようになったものである。

その宮上遺跡の試掘調査から1次2次の発掘調査を団長として担当・指導された森鷗穂先生は、第2次発掘調査の概要報告書『宮上遺跡II』のあとがきで、坂城広谷に華開いた古代文化の原点は中之条遺跡群、とりわけ宮上遺跡にあったのかもしれない、坂城町の古代遺跡のなかにおける宮上遺跡の重要性を示唆されている。第3次以降の調査で、『宮上遺跡II』段階ではまだ知られていないかった弥生時代中期～後期後半の住居址が検出され、以後、平安時代の初頭以降に及ぶおよそ800年間にわたり、何回かの断絶はあるものの集落が営まれてきたことが判明したことは、その感を一層強くさせる。あえて言うならば、宮上遺跡の南側に展開する北浦遺跡・北川原遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡などの内容が明らかになるに従って、坂城町の古代文化の原点を御堂川扇状地の扇尖部に展開する宮上遺跡から寺浦遺跡に及ぶ広い範囲とした方が良いかもしない。とくに、上町遺跡から奈良二彩（三彩）の薬壺蓋が、寺浦遺跡から綠釉陶器が出土するなど、坂城町の他の地域には見られない特殊な遺物が出土する特別な集落は宮上遺跡より少し南方になりそうな様相である。しかし、いずれにしても、宮上遺跡は坂城町の古代文化の原点を構成する主要遺跡であることは言をまたない。

4次にわたる発掘調査は、前述したように校舎の建設計画に沿って工事の合間をぬって実施され、その整理は他の特に緊急を要する発掘調査の後回しにされながら行われてきた。ここに、多くの成果をまとめて『宮上遺跡I・II・III・IV』として調査報告書を上梓することができた。初めの試掘調査が行われた平成3年から10年以上の年月が経っているので、その都度の発掘調査にかかわってきた者にとって、この刊行は等しく喜びとするものである。森鷗穂先生が、遺跡の上に建設された校舎で学ぶ中学生に対してあつい想いを述べておられることは、本書の序に大橋幸文教育長が紹介されているとおりである。いまや、卒業生の数は1万人を超えたという。それに継ぐ坂城中学校の生徒の皆さんには、坂城町の古代文化の原点を構成する宮上遺跡の上にたつ校舎で学ぶことに自負をもつとともに、遺跡について学ぶことをとおして、自らもまた坂城町の歴史の一員であることを知ってほしいと思う。

最後に、発掘調査の現場での厳しい作業に、また地味で細密な整理作業に従事された皆さんを始め、発掘調査にかかわったすべての皆さんに先ず感謝したい。そして、現場から本書作成の各過程において様々なご指導ご協力ご配意を賜った多くの方々と機関に、深甚なる敬意と感謝を申し上げてあとがきとさせていただく。

平成13年（2001）3月

## 報告書抄録

ふりがな	なかのじょういせきぐん みやうえいせき いち・に・さん・よん
書名	中之条遺跡群 宮上遺跡 I・II・III・IV
副書名	長野県埴科郡坂城町坂城中学校改築事業に係る緊急発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	坂城町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第19集
編集者名	塩入 秀敏・助川 朋広
編集機関	坂城町教育委員会
所在地	〒389-0602 長野県埴科郡坂城町大字中之条2468番地 TEL 0268-82-2069
発行年月日	2001年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° °'	東経 ° °'	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
宮上遺跡 I ・ II・ III・ IV	埴科郡坂城町 大字中之条	1521	—	36° 26' 48"	138° 11' 40"	1991年 8月20日～8月31日 1992年 6月2日～9月4日 1995年 6月19日～12月15日 1997年 4月21日～7月2日 9月25日～10月2日	6,784m <sup>2</sup>	坂城中学校 改築事業に 伴う事前調 査。
	921-1他							

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
宮上遺跡 I ・ II・ III・ IV	集落址	弥生中期 平安時代	堅穴住居址 掘立柱建物址 土坑址 溝状遺構	38棟 20棟 15基 4条	弥生土器 土師器 須恵器	弥生時代中期末～平 安時代の集落址の調 査。

## 坂城町埋蔵文化財調査報告書

『開斂製鉄遺跡—第1次調査報告書』	1977
『開斂製鉄遺跡—第2次調査報告書』	1978
『東裏遺跡』	1983
『中之条遺跡群 宮上遺跡Ⅱ』(概報)	1993
『南条遺跡群 塚田遺跡』	1993
第1集 『南条遺跡群 東裏遺跡Ⅱ・青木下遺跡』	1994
第2集 『町内遺跡発掘調査報告書』	1994
第3集 『町内遺跡発掘調査報告書』	1995
第4集 『南条遺跡群 塚田遺跡Ⅱ』	1995
第5集 『豊饒堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡』	1996
第6集 『中之条遺跡群 寺浦遺跡Ⅱ』	1996
第7集 『中之条遺跡群 上町遺跡Ⅱ』	1996
第8集 『上五明条里水田址』	1996
第9集 『町内遺跡発掘調査報告書1995』	1996
第10集 『坂城町試掘調査・立会い調査報告書』	1996
第11集 『町内遺跡発掘調査報告書1996』	1997
第12集 『戌久保遺跡・町横尾遺跡』	1998
第13集 『込山Bほか 発掘調査報告書1997』	1998
第14集 『町内遺跡発掘調査報告書1998』	1999
第15集 『町内遺跡発掘調査報告書1999』	2000
第16集 『開斂遺跡Ⅲ』	2000
第17集 『中之条遺跡群 北川原遺跡Ⅱ』	2001
第18集 『町内遺跡発掘調査報告書2000』	2001
第19集 『中之条遺跡群 宮上遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』(本書)	2001

---

発行日 2001年3月30日

編集者 坂城町教育委員会

〒389-0602長野県埴科郡坂城町大字中之条2468番地

TEL 0268(82) 2069

印刷者 信毎書籍印刷株式会社

〒381-0037長野県長野市西和田470

TEL 026(243) 2105

---